

凧のあすから おもいのカケラ

柊羽

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

海と陸とで生活する人々

彼らが出会い、交わる時、物語は始まる

シオシシオ、オシオオシとはまた違う舞台で語られる、海と大地と彼らの御伽噺

## 目次

第一話	出会い	1
第二話	混ざり合わない境界線	8
第三話	もどかしい距離	18
第四話	一步近づくと	27
第五話	俺のワガママ	33
第六話	それぞれの休日①	43
第七話	それぞれの休日②	53
第八話	ナンバーワンじゃなくても	64
第九話	見え隠れする気持ち	76
第十話	参加者は今日も話す	84
第十一話	気づき	91
第十二話	深海ほど暗くて見えないものはない	99
第十三話	指摘	105
第十四話	それでも……	115
第十五話	やっと	125
第十六話	引き金	133
第十七話	どうしてなの？	142
第十八話	近づくほど離れていく	151
第十九話	人は誰しも抱え込む気持ちがある	159
第二十話	追想	168
第二十一話	孤独な答え	179
第二十二話	暗闇を照らす小さな光	186
第二十三話	積もる積もる白と不安	195
第二十四話	ぬくみ雪は止まらない	203

第二十五話	小さな可能性	211
第二十六話	小さな賭け	218
第二十七話	やっぱり	226
第二十八話	四苦八苦	233
第二十九話	月の下で	242
第三十話	希望はその拳に	250
第三十一話	惹かれるもの	259
第三十二話	巴日	268
第三十三話	叫ぶ”おもい”	279
第三十四話	見えない力	292
第三十五話	前日の日常	302
第三十六話	待って	314
第三十七話	おふねひき	329
第三十八話	降り積もった時。止まってしまった時。	352
第三十九話	時を刻んでいく故郷	356
第四十話	月夜の囁き	363
第四十一話	世界との差	372
第四十二話	風化	381
第四十三話	拭えぬ苛立ち	391
第四十四話	自分にできること	400
第四十五話	五年後の果那ノ海	409
第四十六話	眠りの町	419
第四十七話	氷の狭間で	430
第四十八話	助けてあげたいけれど	440
第四十九話	助言	448



## 第一話 出会い

一面に広がる青い空。雲は所々に浮き、青空のキャンパスを彩る。このコントラストがとても美しい。

その下に、今度は一面青く染まり、日光が反射して光り輝く海がある。

澄んだ海からは下の世界が良く見える。様々な魚たちが群れをなして泳ぎ、クラゲは優雅に透明の傘のような部分をヒラヒラさせて、漂うように泳ぐ。

そして、建物もある。

『昔、人は海に住んでいた』

元々人は陸にはいなかった。”海神様”という神様のもとで不由なく、大勢が暮らしていた。

しかし、海にしか興味のない人ばかりではない。陸にあこがれた人たちは海神様がくれた、海で生活できる特別な羽衣の胞衣えなを脱ぎ捨て、海から出ていった。

海を捨てたのだ。

だが、陸での生活は苦難の連続だった。

海の生活ではまずない日照り、水不足から起こる争いなど。自分たちの思い描いた生活など全然できない日々が続いた。

あるとき、これらの苦しみは海神様が起こっているからだ！と考えた彼らは、それを沈めるためにある儀式を行った。

それは少女を生け贄とし、船に乗せて海に流す、というもの。

これが”おふねひき”の始まりである。

この儀式は現代でも年に一回行われているが、勿論流すのは少女ではなく米や菓子などだ。

そして、今現在海に住む人間たちは、海神様と生け贄として出された少女の子孫だという。

陸に上がっていった人の方が多く、数多くあつた海村はもう数える位しかない。それに加えて人口減少も懸念されている。

果那かなのうみノ海、これもそのうちの一つだ。

主に白や青で統一された色の家々がなだらかな傾斜に建ち、段々となつて並んでいる。

普通の家はもちろん、少し小さなスーパーなどの店、小学校に中学校などがある。

そこはいつも通り、人こそ多くないものの、互いに支え合いつつ賑やかな毎日を送っている。

——— ”彼ら”もそうだ。

秒針が12を過ぎた瞬間、激しい耳障りな音が鳴り始める。

それを布団から必死に腕を伸ばし、ボタンを押して制止させる。

「……うーん、もう時間、かよ」

気持ちよく寝ていた時に急に起こされ、不機嫌のまま目をこすり、蔵本海遥は起き上がる。

紺桔梗色の髪は少し長くて所々はねている。目つきは朝のせいでもあるが少し睨む様な感じ。彼のアホ毛も朝は萎れている。

寝起きでボーツとしていると、朝食のスープの匂いがうっすらとしてくる。

まもなく起きろと呼ばれるだろう。

はあ、とため息をしつつ隣の居間に向かった。

「お、海遥。おはよう」

「はよー」

今台所で料理を作っているのは父の和洋だ。海遥の同じ髪色、細身で身長は180弱程ある。海の中で使う火、御霊火でスープを温めていた。

「なあ、海遥。最近さ、村の手伝いとかが忙しくてさ。だから……今週も料理当番を」

「やりません。ルールはルールやろ。2週間連続とかダルすぎ」

「ですよねえ」

和洋は果那ノ海にある渦波神社の宮司をしている。そのうち海遥も後を継ぐのだが、今のところ興味がむかないのでどんな仕事をしているのか具体的には知らない。

それ以前に料理当番を代わりにやってあげる気分になれなかったので、和洋が言い終わる前に断る。

その後まもなく朝食ができて、丸いテーブルに置かれる。

卵かけご飯とスープ、とお茶。

2人のいただきますの合図で食べ始める。

『……警報、注意報は特にありません。また、昨日からの影響により午後の塩分濃度が高くなるでしょう。……』



テレビでは海中の予報を女性アナウンサーが解説している。

「今日から陸の学校だろ？用意とか大丈夫か？」

「大丈夫だよ。たかが始業式を別の学校でやるだけさ」

和洋の質問にご飯をかきこみつつ答える。

食べ終え、お茶を一気に飲み干した海遥は、自身の食器を台所に置いて再び自分の部屋に戻る。

壁に掛けられた制服を取り、パジャマを脱いで着る。

見た目は長袖の白ワイシャツで襟から肩、袖にかけて青い1本線がのび、カフスや前立てやポケット部分も青く色づけられている。ズボンは紺色の長ズボンだ。

ちなみに女子のは、上は男子と同じ感じで、下は端に青の線が入った白のスカート。

筆箱を入れたリュック型の鞆をつかんで、部屋を出る。

「言ってらっしゃ…あれ？それって青海中の制服じゃないの？」

一言かけようと振り向く和洋は、少し驚く。海遥が今日から行く陸にある白風中の制服ではなく、廃校になった青海中の制服を着ていたからだ。

「あー、航大が「俺ら青海の魂は消えてねえ！白風の制服は絶対に着るな！」ってうるさいから」

「あはは、彼らしいね」

事情を話すと、苦笑いで理解した。

玄関へ行く前に、居間にある一つの黒い仏壇の前に正座する。

そこには二つの写真が置かれていた。左には濃い赤で、後ろで髪を結った女性。右には同じ髪色で、ショートカットの小学生くらいの少女。

「いってきます。母さん、海花」

海遥は目を閉じ、手を合わせた。

玄関で靴を履き、引き戸を開けて外に出る。

開けた音により、周りにいた魚たちが素早く泳いでいく。

海にまでくる太陽の光は、キラキラ輝く。

町も朝日で生き生きとした感じで、家の周りを掃除したり、小学生たちは笑顔で駆けていく。

知り合いの人たち何人かに挨拶をしつつ、目的の場所に向かう。

「……めんどいな。突っ切るか」

海遥は歩いてきた道の手すり部分をジャンプして超えて、泳ぎ始める。彼の家は町から少し離れたところにあるためだ。

勢いよく踏み切ったところから、泡がブクブクツと出る。

そのまま道行く人を避けつつ、目的地に着く。細いポールの上に時計がついて建っている。そこには4人立っていた。

「ウイッス、海遥」

軽い感じで手を上げて挨拶してきたのは、茶色でツンツンとした髪型の吉成航大。よしなりこうだい

「……おはよ」

こちらを見て短く挨拶した、薄墨色の髪で目が少し隠れている彼は二軒屋洋斗。にけんやひろと

「おはよう、海遥」

こちらの若緑色でボブカットの女子は北島沙月。きたしまさつき

「おっはよー、みはっちゃん！」

元気よく手を上げて挨拶した、藍色のセミロングで右前を三つ編みしている彼女は吉野川澄滯。よしのがわすみれ

「うい、みんなおはよ」

「よっし、んじゃ行くか！陸の学校によ」

全員揃うと、航大を先頭に陸へと向かう。

集合場所のそばには隣町へと続く橋があるが、それは使うはずもなく、その橋からそのまま上へと泳ぎ出す。

「あー、緊張するなあ。陸の学校生活はどんなだろう」

「たいして海と変わらないんじゃない。ただ、どっかの誰かさんみたく遅刻ギリギリになっても泳いでセーフ、なんてのは使えないけど」

「うっ！」

今日から新しい学校だ。ましては今までとは違う環境。誰だつて緊張する。

そんな澄滯に沙月は航大のことを馬鹿にするように言う。

「あれ、別に私は航大のことを言ったわけじゃないケド」

「はあ？いや絶対それオレのことだろ！」

航大は沙月の発言に反応する。沙月は依然として知らんふりを突き通す。それを見ていた澄滯はそのやりとりを笑いながら眺めている。

それを追い越して、海遥と洋斗は泳ぐ。

「……朝から元気だな」

「まあな。航大はむしろ元気じゃないと逆に不安になる」

「確かに」

2人はそんな会話をしつつ、地上へと少しずつ近づく。

「っ！」

5人は海面から顔を出す。

太陽の光がやけに眩しい。

手で日光を防ぎ、あたりを見回すとすぐ近くに埠頭から出っ張っている所を見つける。これは事前に、というか昔からここにあると知っていた。

「……ここを使うのは、久しぶりだな」

春休みあたりに白風中の見学に来たときは、別のところから上がってきたが、こちらの方が近道だ。

全員上がり、歩き出す。

「おお、海風がきもちーね！」

海岸線にそって歩く5人を、海風が優しく撫でるように過ぎていく。

それに合わせて澄滯の髪も綺麗になびく。

「やっぱり新鮮な感じだな。……で、今日他になんかあったっけ？」

「始業式ぐらいじゃね？あとは、俺らの自己紹介ぐらいだろ」

航大の素朴な疑問に海遥は少しめんどくさそうに答える。

海からやってきましたー、なんて言うのかと思うと海遥はなんだか気が引けた。

そんな会話をしていると、目の前の分かれ道から2人の男子が出てくる。おそらく彼らは白風の生徒だろう、制服でわかる。

二つの集団はほぼ同時にお互いの顔を見る。それまで来ていることに気づいていなかったのだ。

何気ないこの世界でも、何気ない光景でも、何気ない瞬間でも、運命は動き出す。

それは誰にもわからなくて、誰にも止められない。

人と人との巡り合わせは、時に様々な変化を起こすのだ。

薄い黒の少し髪の毛の長い少年を、澄濤は見て目を丸くした。

その隣の、焦げ茶色の短髪の毛の少年は、澄濤を見て少し頬を赤らめた。

これが、こんな出会いが、始まりだとは誰も知るよしもない。

ほんのちよつとした静止のあと、2人の方が先に歩いて行った。

## 第二話 混ざり合わない境界線

海岸線沿いの道を歩き、途中で少し山道の方へ進むと見えてくる学校。ここが白風中学校だ。

ここは2階建てで、壁は白一色で屋根などは緑色。校門から入ってすぐに横に伸びた校舎が生徒を出迎える。すぐ裏は木々がギツシリ生え、山がある。

校舎はそれほど横に広くないが、校庭は広い方だ。そこにも木があり、周りに張られた柵ごしに海を眺めることができる。

そんなところに、彼ら5人はいた。

現在体育館で始業式を行っている。校長先生が壇上で恒例のながーい話をしていた。

生徒は2年と3年が2列で並んで、”休め”の姿勢で立っている。都会でもなんでもないので、それぞれ一クラスしかない。故に誰か話したりすると一発で見つかるが、それすらもない。皆、ただただかったるようだ。

体育館の後ろの壁近くに、5人も立って話を聞いている。洋斗はもう寝ているが。

「……やっぱりどこも校長の話は長いな」  
「そうだな」

海遥と航大はそんな話を小声でする。

それも終わり、始業式が終わる。5人は早めに立ち去り、空き教室で待機する。

「つつかれたー」

「澄澤、あんた寝そうだったんだよ。コックコックしてたもん」

「洋斗に関しては寝てたが」

「あれは寝るに限る」

「流石すぎて何も言えねえわ」

たわいもない会話をしばらくしていると、1人の教師が教室に入ってくる。

「お話中すまんな。そろそろ2年のクラスに移動だ。……おっと、自己紹介忘れてたわ」

頭はボサボサ、ひげも中途半端に剃られておらず、黒縁眼鏡をかけた中年男性は5人を移動させようとして、自分が誰かを説明し忘れていたことに気づく。

「俺は大塚祐樹おおつかゆうきっつー名前。2年の担任。だから今日からお前らの担任だ、よろしく」

改めて皆の方に向き、軽く自己紹介をする。

その後、教室を出て廊下を歩き、ガヤガヤしている教室の前まで来る。

ここは二階で、1年と2年の教室があるが、1年は入学式が明日なのでいない。

「すぐに呼ぶからちよつと待ってろ」

そう言うと、先生はドアを開けて中に入っていく。

教卓の前に立ち、生徒たちを静かにさせる。

「ほらほら、口閉じろ。……えー、皆知ってるかもしれないが、今日は転校生を紹介する。果那ノ海の中学が廃校になってな、そこから5人が今日から同じクラスで過ごすことになった。ほら入れ」

先生は一通り言い終わるとドアの方を向き、手で合図する。

5人は1列で教室に入り、生徒側から見て左から海遥、航大、澄滯、沙月、洋斗の順で黒板前に並ぶ。

先生は一人一人の名前を黒板に書いていく。彼の字は雰囲気とは違い、はね、はらい、とめがしっかりしている。誰が見ても綺麗な字だ。

「んじゃ一人ずつ自己紹介な。んーと、二軒屋からいこう」

チョークを置いて先生は一瞬考え、洋斗の方を指さす。

「……二軒屋洋斗。よろしく」

これで終わった。小声ではないがササツと最低限のことを言った。洋斗らしい。

「北島沙月と言います。あまり積極的ではないですが、仲良くしてもらえると嬉しいです。よろしくお願いします」

沙月は洋斗と似たように声が少し小さいが、ハキハキとした口調だ。

「私は吉野川澄滯と言います。趣味は裁縫とか絵を描くことで、陸のみんなと仲良くなりたいたいなと思ってます。よろしくお願いします！」  
澄滯は二人とは違い、大きな声でハツキリ喋った。笑顔で目もキラキラ光っていて、おそらく好印象だろう。

「吉成航大です。運動とか得意です。よろしく」

航大もハツキリと話し出す。最後はニツと笑う。

「蔵本海遥です。どうぞよろしく」

海遥は洋斗と同じような感じだった。だが、彼の三白眼は誰も見ておらず、ただ後ろの壁を見ていた。

自己紹介が終わり、5人は5列それぞれの一番後ろの席に座る。そのままの順番で後ろにスライドした形となった。

海遥が座ったとき、目の前に今朝会った男子が座っていることに気づく。

彼も振り返り、目が合う。

あいずみたいき  
「藍住大生だ。よろしく」

無表情だが、彼からは悪いイメージを感じなかった。

「おう」とだけ海遥は返す。

先生は明日の予定、時間割を黒板に書く。それくらいでクラスの委員長が号令をかけ、あいさつして今日は終わった。

先生がすぐに教室を出て行く。それと同じタイミングで澄滯の前に座っているツンツン黒髪男子が後ろを向く。

「なあ、お前らって本当に海の中で生活してんだよね？」

「ん？うん、そうだけど」

突然話しかけられたので、澄濤はバックを持つとした手を止め、視線をバックからその男子に向ける。

「へー。……じゃあ、常に魚臭いんだな。大変だなあ」

「ふえええ!」

突然のことに澄濤は声が裏返ってしまった。

「魚のいるところにずっといるんだ。しようがないけどさ、ここに来る前に消臭スプレーくらいしてこいよ」

「ハハ、そうそう。他の4人も気をつけろよ?」

航大がいる列の前から2番目の、丸刈り男子も言い出す。

「で、でも、そんなニオイはしらないと思うよ?」

「そりやそれに慣れてるからじゃね? プンプンくるぜ、気をつけろよ女子だろー」

「え……う……」

反論はしたが、男子は鼻をつまむようにして笑い出す。澄濤はどうしようもなくて、項垂れる。

「ちよつとーあんたら何言ってるの!」

この状況に我慢ならなかったのか、先程の委員長の子生徒が半分怒鳴るように会話に割り込む。

「あれ? どうした委員長。突然のことにビックリギョーテンってか? 魚だけに」

「お前下手すぎ」

委員長の発言など端っから真面目に受け取らず、丸刈り男子は独自のギャグをかます。

ツッコむ黒髪男子に、クラスの半分くらいがっられて笑い出す。

「ああ、もう違うってば……!」と委員長はふざけられて苛立ち始める。

「全くサ。海の方たちはわきまえてくれないと」

坊主男子はやれやれと言わんばかりのジェスチャーで席を立ち、こ



ちらに歩いてくる。

「はっ・どういっことだ」

うまく理解出来ず、少し苛立ちのトゲが生えたような声を航大は出す。

「だつてさ、ここは海じゃないんだよ。ここは陸、”人間”の場所なんだから」

これがいけなかった。

「ああ!?!ぎっけんなテメエ!!」

プツン、と切れたような音が航大の頭の中で響く。怒りは頂点に達し、一気に迫って坊主男子の胸ぐらをつかむ。

そのため、坊主男子が軽くバランスを崩し、近くの女子生徒の机に激突する。その生徒はひっ!と声が出て、その場から逃げる。

「それは、まるで俺たちが”人間じゃない”って言ってる様なモンだろ!ああ!!」

完全にキレた航大。その目は怒りそのものだった。それを見た大半が流石にヤバい、とさつきまで笑っていたことへの最悪感が生まれしてきた。

「い、いいいいいや。じよ、冗談だよ冗談」

一番ビツクリしたのは彼だろう。驚きを隠しきれず、声が震え、必死に弁解しようとする。

「はあ!?!冗談って、いくら何でも初対面にそんなこと言うのか!?!お前……」

「やめとけ、航大」

その言葉が逆に航大の怒りを買い、とうとう拳を握ろうとしたとき、海遥の声がそれを静止させた。

「そんな野生動物みたいなバカどもを相手にすんなよ。体力と時間の無駄だ」

「なっ……」

サラツと言われた言葉に少々の苛立ちをツンツン黒髪は覚える。

「ほら、さっさとそんなの置いといて行くぞ」

まるで何も無かったかのように、海遥は平然のままバックを肩にかけ、ドアの方へ歩き出す。

「お、おう」

海遥に促され、坊主男子を乱雑に離す。軽く舌打ちを飛ばし、バックを持って後に続く。

涙目だった澄滯も、それをなだめていた沙月も、ひたすら傍観者だった洋斗も出て行った。

取り残された陸サイドのみんなは、ただただ彼らが出て行ったドアを見ていた。

教室を出てすぐの階段を降り、下駄箱へと向かう。

自身の下履きと靴を履き替える。

そして外に出ようとした時、誰かに呼び止められる。

声が出た方向を見ると、赤茶色のポニーテールの女子生徒がこちらに向かって駆けてくる。委員長、里実だ。

「ふう、間に合った……。あ、あの、さつきは本当にごめんなさい。男子たちが失礼なことを言って」

里実は申し訳なさそうな顔をして、頭を下げて謝った。

「い、いえ……。もう大丈夫だから」

澄滯は両手を胸あたりで振って、気にしてないアピールをする。

「えっと、私は松茂里実まつしげさとみ。もし今後また嫌なことされたら私に言ってね？他のみんなも……」

自身の名前を言い、他の4人にも目を向ける。

沙月はペコリと軽く会釈したが、男子組は只見ているだけだった。

ここで5人は学校を出た。

「はあ……。始業式から疲れたわね」

「ホント、全くだぜ」

帰り道。海岸線沿いの道を歩いているとき、沙月はため息をつく。航大も同じくため息をつく。

「それにしても、私ビツクリしちゃった。こうちゃんがキレるんだもん」

澄濤は航大の顔を覗くようにして言う。

「ブチギレてんの久しぶりに見た」

洋斗も頷く。

「しようがないだろ……。あいつらが俺ら海の人間を侮辱しやがったんだからよ！ぜってー冗談じゃないだろあれ……」

航大は今も怒りは鎮火しておらず、最後は彼らの愚痴をブツブツ言い始める始末。

「お前あとちよつとで殴りかかってただろ。初日から問題ごとになっても困るから止めさせてもらった」

「うぐっ」

海遥に自分の行動が筒抜けだったようで、航大はビツクリして凶星状態である。

「けど、気持ちにはわかるさ……。初対面の人間に煽るような言動。小學生以下の馬鹿どもだな」

海遥は目を細めてため息をつき、それから少し上を向く。

指摘された航大は凶星のようで、ビクツとなる。

「で、でも！里実さんはいい人だよ、ね？」

「そうね、しっかりしてると思う。海と陸の壁も持ってなさそうだし、

あの人なら話せそう」

澄濤は話題を里見に移す。沙月も里実のことは良く思っているようだ。

「そうかあ？ 案外それは表で、裏はアイツらと同じく馬鹿にしてんじやねえの？」

「もう、こうちゃん！ いくらなんでもそれはひどいよ」

里実のことを変な言い方した航大に澄濤はポカポカと叩く。

「まあ、自分がそう思うならそれでいいんじゃない？」

海遥はまるで興味を示さず、右側に広がる海を見る。その目はひたすら遠くを見つめ、どこか寂しさを思わせる。

「俺は、陸のやつらと仲良くなる気はない」

海に向かって、また自分自身に向けて口から出した一言。皆の視線が集まる。

「確かに、な。オレもそんな気は全くねえ！」

「みはっちゃん。こうちゃん……」

航大も同意見だったようだ。彼の表情は少し怒りが混じる。

それをなんだか悲しく、辛く思う澄濤。

「ねえ、洋斗はどう思ってるの？ 仲良くなりたいの、陸と？」

それを見て沙月は後ろで歩く洋斗に問う。

「……別に。どうも思わない」

返答はなんだか予想できるものだった。ブレないそのスタイル。

どこか、ごく小さいズレが5人にはある。海と陸との、関係という近いようで遠い距離。

これはいつの時でも消えない、けれどあるのに全然つかめない、そんな存在。

「さっきのヤバかったね」

「あの2人いつもふざけるしね」

「ただただ聞くしかなかったね」

5人が帰った後、クラスで残った何グループかの生徒たちは、先の出来事のこと話題になっていた。

「なあ、なんで一樹はなんも言わなかったのさ」

「そうそう、てつきりお前ならノって来るかと思っただけ。てか助けてくれよ……」

2人の男子、先程のおふざけの言い出しっぺのツンツン黒髪、むやかんた撫養幹大と、それにのってギャグを言った坊主男子、なるとたかひろ鳴門隆広が近寄る。

その寄った机に座る男子、さとらいつき里浦一樹は少しビクツとなって答える。

「えっ、えーつと……。べ、別に俺は特に興味ないし。それに、そんなことしていると早く帰れないだろ」

「プッ！なんだそれ」

彼なりに怪しまれないよう、咄嗟に出たことを並べる。変だと幹大に笑われるが。

本当は、言えなかった。言えるはずもなかった。寧ろ不快な感じが胸を締め付けた。彼らを止めたかったが、自分には勇気が出なかった。

「まあいいや、帰ろーぜ」

隆広の合図で2人はドアの方へ向かい、一樹も立ち上がる。

そしてドアへ向かおうとしたとき、黒板を見る。

今日任された日直の人が黒板に書かれた彼らの名前を消していた。

ふいにあの子の、今朝会ったあの子の、さっき自己紹介したあの子の名前が目に入る。

黒板消しで白の文字が、うつすらとした後を残して白の粉に変わるその瞬間、あの時の言葉が頭の中をゆっくりと浮かび上がり、流れる。

そして、眩いた。

「よしのがわ、すみれ……さん、か」

### 第三話 もどかしい距離

何のためらいもなく、海に向かって飛び込む。

勢いよく入ったため、目の前が泡で埋め尽くされる。だがそれもすぐに無くなり、目の前に果那ノ海の景色が見えてくる。

また後ろから音を立てて航大、洋斗、澄濤、沙月と海に入る。

魚の群れが5人の横を優雅に泳ぐ。

5人も足を動かして泳ぎ、待ち合わせ場所のところまで来た。

着地し、それぞれの帰路につく。

ここで海遥、航大、澄濤と洋斗、沙月に分かれる。

お互いに手を振り、「また明日」と声をかわす。

「えっと……。明日が一年生の入学式で、あさつてが五時間授業だったけ？」

「確かそうだったな」

「澄濤、初回からいきなり教科書忘れんなよ？」

「大丈夫だよ！ちゃんと確認するし」

「筆箱忘れんなよ？」

「そんなに忘れっぽくないよ！」

あさつてからいよいよ授業が始まる。それにむけて、前から少々忘れ物が多かった澄濤に2人が前もって言うておく。

澄濤は海遥が言ったのは大げさだと頬を膨らませるが、下手したらあり得るのだ、筆箱忘れ。

航大とも別れ、段々となっている町の上の方へ彼女は歩いていく。

そのあと少し歩いて、2人が分かれるところまで来たとき、1人の女性の姿があった。

「あ、お母さん！」

「あら、澄濤。お帰りなさい。海遥君も」

「どうも」

手に立方体で格子状の箱を持っている女性は澄滯の母だ。彼女と同じ髪色で、腰あたりまである長い髪をうなじあたりから一つで結っている。

「あ、そうだ。今から丁度ウロコ様に御霊火もらいに行くところだったの。澄滯、行ってきてくれない？お母さん買い物もあるから」  
「うん、わかった」

御霊火の調達を任された澄滯は海遥と同じ道を歩き始める。

海遥の父は宮司なので、ウロコ様のいる神社は彼の家の近くだ。町から少し離れていき、見えてくる石階段を上っていく。草木が多くなり始める。

そして海遥の家へと続く分かれ道をそのまま過ぎて神社へと向かう。

実は、彼は陸での学校生活のことを報告するよう任されていたのだ。

再び現れた石階段を上ってやっと渦波神社に着く。見た目は古い木製の神社だ。

正面の戸を海遥が両手で開くと、1人の男性が敷物の上で寝っ転がっていた。こちら腰まである銀髪、赤い菱形麻呂眉にキリツとした目つき。彼がウロコ様だ。

遙か昔に亡くなった海神様の”ウロコ”の一部だったらしい。なのでウロコ様。

「よう、ウロコ様。来たよ」

「どうも、こんにちはウロコ様」

「おお、おぬしたちか。よう来たな」

ウロコ様は横になったまんま左腕をヒラヒラとさせる。見た目が若い男性なだけあって口調が年寄りなのは変に思えるが、実年齢がぶっ飛んでいるため問題はない。海神のウロコだし。

「ウロコ様。御霊火が無くなってしまったので貰いに来ました」

澄滯が手に持っていた箱を前に出す。

ウロコ様は無言で頭を支えていない左手を挙げ、人差し指を立て



る。

すると、後ろにある大きな赤い杯に灯っている青い炎から小さな火の玉が出てくる。

ウロコ様の人差し指の近くに来ると、スツと箱の方を指さす。それにつられて火の玉も移動し、箱の中に入って収まる。

「ありがとうございます！」

「うむ。んで、海遥。陸の学校はどうじゃった？」

ウロコ様は自分の近くに置いてあった、菓子が沢山入った皿からせんべいをとって食べ始める。

「ああ、バカばかりだった」

「……ぷっ、ははははは。バカだから学校に行くんじゃないのか？」

「頭がいいか悪いかじゃない。野生のチンパンジーの集まりみたいだった。小学生未満だなありゃ」

海遥の感想に笑いをこらえきれないウロコ様。さらに海遥は自身を感じたことを述べた。

「で、でも！全員がそうじゃなかったよ！」

「お前が思い浮かべているのは1人だけだろ」  
「うぐっ……」

海遥の言ったことを澄澄は否定する。が、彼女が考えるバカじゃない人は1人しかない。故にそれは結局バカばかりだということだ。

「……で、他に聞きたいことは？」

「いいや、十分じゃ。面倒なことは起こすんじゃないぞ？」

「それは航大に言ってくれよ」

先程ので満足したウロコ様。せんべいも二袋食べ、お腹いっぱいと言わんばかりに仰向けで寝っ転がった。

「いや、お前さんも例外ではないぞ？人間、どうなるかわからんからのう」

顔は上を向いたまま、横目で海遥を見つめる。その瞳は海遥を見透

かしているようだった。

「……では、これで」

海遥は一旦目を閉じる。そしてすぐに開け、そのまま神社を立ち去る。

「え、あ、ありがとうございます！」

澄濤は慌ててウロコ様にお辞儀をして外に出て行く。

「……本当に、たった僅かなことでも、人間は変わるもんじゃよ」

そう呟いて、ウロコ様は目を閉じた。

「ね、ねえ、みはつちゃん」

澄濤は一緒に石階段を降りる海遥の顔を見る。

「まださ、初日だしさ。これから過ごす間にお友達が増えるって！あんなこと言ってた人たちもさ、話してみると案外いい人だったり……」

海遥の機嫌を伺うように、語りかける。

「あのさ」

突然、海遥は自分の家への分岐道で立ち止まる。澄濤は少し遅れて一歩前あたりで止まり、海遥の方を見ようと振り返る。

「お前は何がしたい」

「ふぎゆうううう！」

刹那、海遥の両手プレスで澄濤の両ほっぺたを潰すかたちとなった。

「別に俺が陸のやつらと仲良くしないからって、お前に害があるわけじゃないだろ。そもそも嫌がらせされた相手に甘過ぎだろ」

「ふにゆうううー」

今度は両ほつぺたをつかんで横に引つ張る。案外伸びた。

「んんんもうっ!……私はただ、みはっちゃんたちと陸のみんなが仲良くなつてほしいんだよ。楽しい中学生生活を過ごしたい」

耐えきれずに海遥の腕を取りはらう。そのまま怒るかと思いきや、少し俯いて、もどかしい表情で彼女の思いが語られる。

只願うのは、みんなとの楽しい学生生活。なるべくギクシヤクなく笑つて過ごす、そんな生活を望んでいた。

人差し指同士をつけては離したり、スカートを握つたりする。

そんな姿を見た海遥は、視線を左に向ける。そこには果那ノ海の町、上には海と陸の境界線が見えた。

「俺は別に、陸の人間を嫌っている訳じゃない」

ポツリと出たその言葉に澄濤は顔を上げる。

彼の目は、帰り道の時に見たような、寂しそうな目だった。

「俺は、陸が嫌いだ」

それは只の言葉ではない。様々な思いが、彼にしかわからない思いが入り交じっていた。

澄濤は何か言おうと口を開くが、言葉は出ること無く俯く。

「まあいいさ。じゃあまた明日」

澄濤の頭をポンと触れて海遥は家へと向かっていった。その姿を澄濤はしばらく見ていた。

次の日もいつものように集まり、学校へと向かった。今日は入学式だけあって、前日より登校時間は少し遅かった。

二年の教室に入ると、皆の視線が集まる。

女子組は少し戸惑いながら席に着くが、男子組は終始無視だった。

時間が来ると大塚先生は廊下に生徒を1列に並べた。海五人組は固まって最後尾に並ぶ。

先頭から歩き始めて体育館へと向かう。

二年と三年は事前に置かれたパイプ椅子に座り、一年が入場すると拍手をし始める。半数以上がめんどくさそうにするが。

一年生27人はそんな中を歩き、パイプ椅子に座る。後方に座る保護者たちは我が子の写真やビデオを撮るのに必死だ。

それからは校長の話など式が進み、一時間くらいで終わった。

一年が退場して、それから保護者が退場する。

その後は残りのみんなでパイプ椅子を片づける。面倒でフリだけする生徒も少しいた。

片付けも終わり、教室に戻ってホームルームを行う。明日の授業について軽く説明をして、里実の号令で挨拶をして解散となった。

各々席を立ち、下駄箱へ向かう。

靴を履き替え5人が正面玄関を出ると、校門付近から数人の生徒の会話が聞こえてくる。

ホームルームが終了し、一樹は直ぐさま席を立つ。バッグを肩にかけ、ドアへと向かう。

途中、チラリと横目で澄濤の方を見た。隣に座る沙月と会話しつつ帰り支度をしていた。

すぐに目線を前に戻して教室を出る。

廊下を早歩きで通り、階段を降りて下駄箱につく。履き替えていると横から声がかかる。

「よ、帰ろうぜ」

声の主は大生だった。

「いいぜ」

「で、なんでそんなに早足なの……。あ、さては」

「そうだよ。あいつに終わったら早く校門前に来てって言われてさ。待たせるとギャーギャーうるさいし」

一樹は若干早歩きで大生と一緒に玄関を出る。

今日の会う人物に対しての愚痴をこぼしながら、グラウンドの横を通りつつ校門へ向かう。

「あ、来た来た！おーい、一樹！大生！」

目の前から、一樹の名前を呼ぶ声が聞こえる。クリーム色のショートカット、白風中の制服を身につけた女子生徒が手を振っていた。

「おう。今日からお前も中学生か、茉紀」

「へへへ。あとさ、あとさーどうよ、この制服姿。似合ってるかい？」  
笑顔をこぼしながら、おおやままき大山茉紀は初々しい制服を見せびらかす。クルツと一回転して、スカートがフワツと舞う。

「まあまあじゃね」

「ちよ、一樹。絶対適当だろそれ！……あ、もう中学入ったし、里浦先輩って呼んだ方がいいかな？」

制服の評価を適当に流されたことに少し腹を立てるが、あざとい仕

草で一樹への呼び方を変えてみる。

「いやいや、違和感しかないから。今までのがいいわ」

「あれ、茉紀ちゃんだー!」

後ろから茉紀の名前を呼ばれる。振り返ると、里実がこちらへと駆けってくる。

「おお、里実ちゃん!」

「入学おめでとう。制服、似合ってるよ」

「へへ、ありがとう」

里実に褒められ、茉紀は笑顔がこぼれる。

「なんだか、この面子で揃うの懐かしいな」

「だな」

不意に出た大生の言葉。一樹も同感だった。

彼ら4人は昔からの付き合い。幼なじみだ。

いつも4人で遊んでいた。一緒に登校したり、放課後一緒に帰ったり。時には山に行ったり、海ではしゃいだり、など。

茉紀も中学に上がり、こうやって再び共に学生生活を過ごせることに、彼らは自然と安心感を覚えた。

会話が盛りあがっていると、彼らの横を海5人組が通り過ぎる。

それを茉紀の目にとまる。見慣れない制服の生徒が学校から出てきたのだ。それに、海からの転校生と知らないので余計に気になった。

「ねえ、あの人たちは?」

「え、ああ。昨日果那ノ海から転校してきたんだ」

「ええ!そ、それって海の人ってこと?!すごいね」

彼らが海の間人だと知って、茉紀は目を大きくして驚く。

陸の学校に海の間人があることはそうないので、珍しい光景だろう。

「ねえねえ。あの人たちってどんな感じ?なんか話した?」

茉紀が好奇心で一樹たちに問いかける。

が、一樹と里実は無妙な、苦笑いを浮かべたまま答えない。その意図がわからない茉紀に、大生が口を開く。

「初日から撫養たちがからかいはじめてな。なんとかそこは海のやつの一人のおかげでおさまったけど。そのせいで微妙な距離感になってる」

「そうなんだよなあ。……なんで馬鹿にするようなこと言うんだろ。別に、海も陸も同じ人間なのにな」

どんどん小さくなっていく海5人を背中を、一樹は見つめる。

一樹は彼らとの距離を少し悲しく感じる。それが、彼の瞳からも見て取れる。

「ふーん……」

茉紀はあの姿と、一樹の方を交互に見た。

## 第四話 一步近づく

次の日から早速授業が始まった。

五時間授業ではあったが、全科目が1年生のときの復習だったり、2年になってから初めて教わるところをやったぐらいだ。

ちなみに澄滯は全科目の教科書をちゃんと持ってきたはいいが、何かノートを忘れてくるというある意味期待を裏切らない結果となった。仕方が無いので、その日は沙月が自分のノートを数枚切つて渡した。

それから数日で全科目の第1回目が終了した。これからずっと時間割通りにやっていく。勉強面については特に問題なかった、のだが。

クラス内では問題アリだった。

給食の時間。

クラスのメンバー全員は何かしら係をやる。そのうちの給食係が毎回準備、配膳を行う。メンバーは6人。1人か2人で配膳、他はご飯等をよそる。

食するときには特に班で机をくつつける、などはしない。周りの人と喋りながら給食を食べる。少し離れていても、机を動かして食べている人もいる。勿論1人で食べる人もいるが。

案の定、海5人組はクラスの誰とも話さず、黙々と箸を進める。

時折、何人かは横目でチラッと見るが、話しかけること無く自分たちの世界に戻る。一方、澄滯だけは他の人に話かけたいという気持ちがあるが、どうしてもできず彼らと給食に目を行ったり来たりさせる。

結局澄滯はいつも隣の沙月と話して給食の時間をすごす。男子組は無言。海遥はさつさと食べ終え、習慣のように窓から海を眺める。



「最初はグー！じゃんけん……ポン!!」

「よっしやあああー!」

「くそー」

配膳台付近では恒例のおかわりじゃんけん大会が開催されていた。今日は1つ残った蒸しケーキ争奪戦だった。

勝敗がつき、チョコキを掲げて一樹が喜んでいる一方で、パーの手を力なく下げる幹大。

そしてまもなく、里実のごちそうさまの合図によつて給食の時間は終わった。

凧いだ海のように、特に海と陸が交わることも無く日は過ぎていく。だが、動きがあつたのは4月下旬頃のことだった。

放課後。当番制で教室の掃除や廊下の掃除などを行っていた。当番は毎週廊下側の列から窓側の列に向かって進む。今週は澄滯の列が教室の当番だった。

机を前に動かして後ろでゴミを集める。澄滯は教室の角からもキチンとほうきで掃く。

ちりとりを持った生徒たちには後は任せ、澄滯は掃除中に開けておいた窓を閉める。すると、

「ねえ、吉野川さん」

窓のロックを閉めた時に、不意に声をかけられる。

振り返ると、同じ掃除当番の女子生徒2人が立っていた。

「え……と。何か?」

「それ、見せてくれない?」

”それ”とは、いったい何なのだろうか、と澄滯は疑問に思った。

目の前の2人は何故か目を輝かせ、興味津々の顔をして人差し指をこちらに向けていた。

澄滯はその先を確認するが、特に珍しそうなものなど無い。顔は笑ったまま、頭にはてなマークを浮かばせていると、1人がこちらに

近づいて澄滯の腕をとる。

「ね、これがいわゆる”胞衣”ってやつ？さつき光で輝いてるのが見えたの！」

ようやく澄滯は理解した。

2人が指さしていたのは胞衣だった。澄滯にとっては当たり前なので気づかなかつたのだ。

「へー、さわり心地こんななんだー」

「ラップを腕に巻き付けてるみたい」

2人はよりいっそう目を輝かせ、澄滯の腕を指でさすったり、軽く揉む。

「なにになにー？」

「どうしたのー？」

そのうちどこから沸いてきたのか、他の女子生徒も来て澄滯の胞衣を鑑賞し始める。

「ね、ねーちよつと、くすぐりたいよー」

あまりにも触りまくるので澄滯は体をくすぐったさに耐えようと軽くくねり始める。

「なーに百合百合やってんの？」

今度は男子の声。それを聞いて澄滯は一気に体が固まるような感覚に陥る。

幹大と隆広だった。こちらを見てニヤニヤしながら近づいてくる。

「ちがうってばー！今ね、吉野川さんの胞衣見てたんだー」

「ああ、胞衣か」

「む、”えな”ってなんだい？」

「おいタカボー、知らねえのかよ」

無知のタカボー（”ボウ”ズ頭の”タカ”ヒロ）こと隆広に呆れつつ、幹大は数名の女子をどけて澄滯の腕を少し乱暴につかむ。

腕を上げさせると、太陽の光に当たってキラキラと光る。

「海のヤツらが海の中で生きれるのはこれのおかげってさ」

「ほほう、これがエナか。海の中で生きられるし、キラキラ綺麗でえー

な―」

「だから、お前のそれつまんねえよ」

恒例の隆広のギャグを幹大がツツコんで笑いがうまれる。そして幹大は澄滯の腕に視線を移す。

「それにしても、不思議だよな―。どうなってるの、これ」

ふと、胞衣のしくみが気になったのか、おもむろに澄滯の腕をつねった。

「い、痛いよ―！」

澄滯が痛みで発した声が、丁度掃除から戻ってきた海遥と航大の耳に入った。

「おいテメエら、何やってんだよ」

低く、怒りの混じった声が教室に飛び込む。

ズカズカと2人が入ってくる。

あ、やべえ。

そう、彼らは思ったに違いない。

海5人が来た初日からいきなりゴタゴタがあった。その時も航大はキレていた。その感じが今まさに彼らに近づいてくる航大と同じだった。

「澄滯1人を囲んで暴力か？そんなことして楽しいのか？」

「ち、違うって！ただ、吉野川さんの胞衣見てただけ。ホントだから！」

睨み付ける航大に対して軽いトラウマになっている隆広だが、震えながらも事実を話す。

「お前、初日にも俺らに突っかかってきたよな？ハッキリ言えよ、嫌いなら嫌いかさあ！」

一度ならまだしも二度までは許さない、海の人間が嫌いならハツキ

りしろ、と航大の中でそれらが混ざり、怒りをかき立てる。

航大が隆広の肩を掴もうとしたときだった。

「ほ、本当だ！隆広たちは本当に暴力なんてしてない！」

航大と隆広の間に入ってきたのは一樹だった。

「……お前、あの時の」

航大は突然入ってきたことに少し驚いたが、その人物が初日の朝に見かけた人物だと思い出す。

「みんなだよ、吉野川さんの胞衣を見てたんだ。俺も教室掃除だったから見てた。そしたら、幹大が気になって吉野川さんの皮膚をつねっちゃんたんだ。それで痛がらせちゃったんだ」

自分の見た事実を航大にわからせようと、一樹は必死になっていた。

「そ、その……。えっと、ごめん！」

どう言えば自分自身でもわからなくなった一樹はとにかく謝罪の思いで、頭を下げた。

あたりが、教室の中が、シーンと静まる。別の教室や、外から聞こえる人の声がやけに聞こえる。

この一連の流れで航大は怒りが一気に萎んで、口ごもらせていた。そして、

「わ、わかったよ。勝手に怒って、悪かった」

少し申し訳なさそうに、横を向きながらそう言った。

ようやくこの見えない空間から解放されたように、教室掃除班は残りの動かしてない机を戻したりする。

一樹もホツと息をついて片付けをしようとする、後ろから呼び止められた。

振り返るとこちらを見る澄滞の姿があった。

「えつとね。……さつきはありがとーね」

笑顔で、かつ相手が相手なだけあって、突然の感謝の言葉に一樹は  
一気に頬を赤らめる。

「い、いやー。別に、たいしたことじゃないよ。ただ、誤解したまんま  
ゴタゴタになっても困るし、うん。それだけ」

照れをなんとか隠しながらその場をやり過ごし、さりげなく机移動  
をし始める。

澄滯もそれに合わせてほうきを片付ける。

そんなやりとりを、海遥は教室のドアに寄っかかりながら、見てい  
た。

## 第五話 俺のワガママ

あれから、澄滯は陸の女子と少しずつ会話ができるようになった。特筆するべきではない、大したことない会話だが、澄滯にとってはそれだけで嬉しいものがあつた。また、それによつて澄滯といつも話していた沙月にも会話を振られるようにもなった。

その一方、依然男子は両者とも歩み寄ろうとはしていなかった。むしろ距離が開いていつているようにも見えた。

「なんだかなあ」

「ん、どしたの?」

放課後、特にやることも無く下校をする2人、幹大と隆広がいた。

下駄箱で靴に履き替え、玄関を出る。そんなとき、幹大は何かやるせない感じのため息をつく。

「あいつら、海のやつらが来てから、俺の権限が無くなっちゃった的な」

「権限って、おいおい幹大さ。……ま、そう言えなくもないけどね」

幹大はクラスの中心的人物であつた。クラスは学年一クラスずつしかないため、クラス替えなんてものは無い。故に三年間同じメンバ―で過ごす。

中学1年の頃から、幹大はその明るい性格を活かしてクラスの人気者となつていた。またはじめの頃から隆広や一樹とも仲良くなつていた。

冗談を言つて周りを笑わせることもあつたけれど、隆広のボケをツッコむ役としてもいた。このコンビは誰からも人気で、度々この頃から委員長の里実を困らせることもあつた。

だが、2年のはじめの出来事で周りの反応が少し変わった。

確かに初対面の人たちにあんなことを言つたら怒るだろう、と後々

考えれば幹大にでもわかる。航大の怒りの引き金を引いたのは隆広だ。

それでも、航大の怒りもそうだが、海遥に言われたことには少し腹を立てた。上から目線で、まるで使い物にならなくなって捨てられたかのような、自分の存在がちっぽけなものだと決めつけられた感じだった。

後日、それについて他の男子に少し愚痴として言ったが、彼らは「あれは流石に俺らが悪い」、「そう言われて当然だ」などと同感の言葉は返ってこなかった。

それからというもの、去年のように授業中にふざけた言動は極限に減った。

別に幹大は興味を失った訳ではないが、やる気になれない。やれないのだ。

座ってる後ろから彼らが、海の5人が座っていると考えると、なんだかやることに抵抗感が生まれ始めた。

決して海の5人がクラスの上位に立った訳でも、他のクラスメートを仲間にして幹大だけが独りぼっちになった訳でもない。

けれど、どこからともなく沸いてくる劣等感、自分が勝負に負けたという感覚に襲われる。

そして、幹大自身が、”自分はクラスの人気者、中心人物。だから、クラスで一番上”と優越感に浸り、上位にすることが自分そのものだ、と考えていたことに気づいた。

「……そういえばさ、明日長距離のタイム測定あんじゃん！そこで一位取ればいいんじゃない？」

「ああ、そういえばそんなのあったな」

2年になってから初めての体育の授業は長距離走だ。

最初は少し長めの距離を二回ほど走ったくらいだったが、そのうちタイムを計るようになった。明日の体育は長距離走の授業最後なので、タイムは成績にしっかりと反映される。

「一位になれば、それとなく幹大の権限も回復する的な！」

「んー。海のやつらは3人固まってちんたら走ってたから実力は知らないけど、クラスの中ではかなり速いほうだしね、俺」

「そうそう。大生も結構長距離タイプだけど、多分幹大の方が上やろ」  
何故か隆広の方が自慢げに話す。幹大は再び「んー」と曖昧に返事してから

「別に俺の信頼が無くなった訳じゃないんだけどねー」

どこかヘンテコな喋り方をすると、突然走り出す。隆広も追うように走り出す。

「俺はそれよりも長距離の後のサッカーが楽しみだな！」

そう、本音を隠すようにして、本音を言った。走った勢いを付けて、道端にあった石を思いっきり蹴飛ばし、一面に広がる海にポチャンと落とした。

翌日、体育の授業。

大半の生徒がこの日を楽しみにしてこなかったことか。長距離を走りがやるやつなんてそういないだろうと思っていたことだろう。

だが、中にはこの日を待っていた人もいる。その内に、一樹もいた。

——少しでも、自分をアピールしていかないと。現段階では自分の存在は認識されてるはず。あとは俺のイメージを……！

一樹はなんだかんだでスタミナはあるほうだ。彼は運動は出来る



方で、前々から幹大たちと放課後日が暮れるまでサッカーをずっとしていた。

現在は夕方頃に海沿いや山の道をたまにランニングしている。

これで1着にでもなれば、『スタミナがある↓運動できる系男子』という一樹の頭の中で方程式ができあがっていた。

しかもクラスの人数の関係上、男子のタイムを女子が見て、女子のタイムを男子が見ることになっている。これなら確実に速い生徒に注目がいくだろう。

授業の始めの体操が終わり、誰が誰のタイムを見るかのペアが組まれた。

男子が13人、女子が12人なので男子が1人余るのだが、何故か見事にそれが一樹になった。

結局一樹は先生が見ることになり、海は皆バラバラに分かれた。洋斗は里実とペアになり、澄滯は隆広とペアになった。残りの海っ子はそれぞれ陸の生徒と。

隆広は澄滯に「よろしくねー！」と笑顔だったが、彼女の方は一応、うんと答えたが、まだぎこちなさが取れていなかった。

「んじや、男子はスタートラインにつけーい！女子はちゃんとペアの男子の回った回数数えとけよー」

体育の先生、阿波晴雄あべはるおが指示を出す。男子はライン引きで作られたスタートラインに集まる。

長距離走れる組（一樹や幹大たち）は前の方に、と走れない組（隆広や洋斗たち）は後ろの方に集まる。

阿波先生はグラウンドの外に置かれた横長のタイマーのボタンを押した。

「スタートー！」

阿波先生の声と同時に、一斉に走り出す。走り出す音が、靴の底で細かい砂や砂利を蹴る音が何層にも混ざり合う。

ここで割とスピードで差が出てきた。トップ組に出たのは大生、幹大。そして、まさかの航大、少し後に海遥だった。さらにその集団を一樹が追う形となった。

「え、海っ子速くない?!」

「泳ぐだけじゃなくて足も速いんだ」

グラウンドの内側で固まって座っていた陸女子一同が驚く。走っている陸男子もこれには驚いただろう。

やはり、海の間人というところ泳ぐのが得意”というイメージが強いわけで、”速く走れる”というイメージはあまりにも薄い。

けれど今日の前で起こっている光景は、それを覆すものだ。海の間だからって、足が速くない訳ではないのだ。

今回は、勿論足の早さではなく、長距離を走れるスタミナの有無が問われる。が、前回までちんたら走っていた2人がここまでスピードをあげ、尚且つ失速せずに走り続けていたので『足が速い』と言われるもおおかしくは無い。

「でも、二軒屋君はそうでもないね」

「そうだねー。遅い組にいるね」

まあ、無論、個人差はあるわけで。洋斗は運動が苦手である。

——くっそ……!みんなペースが速いな。しかも、海の2人がここまで速いなんて予想外だ。

——思ってたとおり、大生はペース落ちないな。……ていうか、こいつら走れんのかよ。

一樹と幹大はそれぞれ、なかなか追い越せない苦しみと同時に驚きを感じていた。

トラック1週が約200メートル。今日男子が走るのが1500メートルなので、7週半走ることになる。

これも大詰め。残り2週くらいになったところで、航大と海遥が互いにアイコンタクトと取ったかと思えば、ラストスパートのようにさらにペースを上げた。

幹大はさらに驚くが、それどころではなかった。少し前から息が切れ始め、スピードが落ち始めていた。

大生とはかなり差が開いていた。それを少しずつ2人が縮めに行った。

——このままじゃダメだ！まだ巻き返せる！

幹大は苦しい呼吸をなんとかしながら、段々重くなってきている足を懸命に動かす。

——いやー、追い付けねー。無理ゲーやわ。

一方、一樹は諦めていた。半分終わった頃から既に呼吸が苦しくなっていた。足も痛くなってきた、体全体が怠くなっていた。

もうしようがない、とりあえずこのペースを維持して走りきろう、と妥協して緩めたペースにした。

「大生君、あと1周！」

大生のペアの女子が、大生に聞こえるように伝える。

それを聞くと、ここでラストスパートをかける。

続けて航大と、少し遅れて海遥もあと1周コールを受けた。彼らもまた加速を試みる。

「あの2人、あんなに走れたのね」

「……え、あー。そうだね、ビックリ」

沙月も2人に感心していた。それに曖昧に反応する澄濤。彼女も嘘はついていないが、今しつかりと目に映っているのはもう少し先にいる……。

「ねーね、澄濤ちゃん。あの2人ってなんであんなに走れんの？」

1人の女子生徒が疑問を投げかけてくる。いくら海の人間だとはいえ、泳ぐことしかしてない訳ではないと知っているが、基本海で生活しているという概念がある彼女としては気になったのだ。

「んー。こうちゃんとみはつちゃん、小さい頃からずっと一緒だったけど、至って普通だったけどなあ。……でも、たまにナイショで陸に上がって遊んでみたい」

「えー?!」

彼女以外にも、周りの女子何人も驚いて目を大きく見開く。

これもまたイメージだが、海の人間は小さい頃は海の中でのみ遊ぶ、と思われてきた。それは、だけれど間違いではない。

果那ノ海ではルールとして、小学校に入るまでは陸に上がるのは禁止、小学校に入ってから親の許可なしで出るのは禁止。

それを破って2人は陸でも遊んでいたのだ。さりげなく陸の子供と鬼ごっこやらサッカーやら。それ故なのかはなんとも言えないが、もはやそれはどうでもよくなったようだ。

「幹大、ラストー」

ペアの女子の声が聞こえた。幹大も残り1周となった。

もうそのまま寝っ転がりたいが、それは自分自身が許さない。

——大生ならまだしも、あの2人にさえ負けるのは、いやだ！  
歯を食いしばり、足にさらに力を込める。地面を蹴る音のテンポが早くなる。

苦しいけど、どうしても自分のプライドが許さない、その一心で駆

ける。

「……らあああああ！」

速さの違いで何周と差が開いた生徒たちを追い越す。その途中、誰かと接触したが、それどころではなかった。

——追いつける！

手を伸ばせばあの2人に届きそうな距離まできた。ゴールはまもなく。それまでに、と幹大は最後の力を振り絞る。

ここで先頭の大生がゴールした。大生もかなり疲れている様子で、ゴールすると少し歩いたところでグラウンドの内側に入り、その場に座り込む。

最後の直線に入った。2人も全力を出す。幹大も食らいつく。

迫り来る瞬間。

2人と1人が、3人の集団に変わる。

そして、ゴールした。

結果は、航大の次に幹大がゴール。その次に海遥。

「くっはああああ」

一気に力が抜け、その場に倒れる。全身でなんとかやりきったと感じれる。

——吉成には負けたけど、蔵本は抜かせた。

幹大の中では、達成感と謎のうれしさがあつた。

これはきつと、あの日海遥がクラスに、いや幹大たちに言った言葉に対しての仕返しができたのか、と思った。

実に自分勝手に、よく考えるとよくわからない発送だが、彼にとつてはこれで少し満足できたのだろう。

しかし、簡単には吹っ切れることはできなかった。

「おーい、二軒屋！大丈夫か？」

ふと、阿波先生の声が聞こえた。誰かを心配してタイマーから離れ、その生徒のところへ近づいた。

「いえ、大丈夫ですので」

「いやいや、けど結構血出てるぞ。洗って消毒した方が」

「いや、本当に大丈夫です。また後日走るのは勘弁です」

会話の聞こえる方を見ると、スタート時と変わらないペースで走っている洋斗と、それにあわせながら心配そうにする阿波先生。

洋斗の足からは、出血があった。臍から膝までを擦りむいていた。さらに、腕にも擦りむいた後があり、そこからも出血していた。

ダイナミックに転んでいたのか、気づかなかった、と人ごとのように思っていたが、すぐに何か頭のなかで引かった。

それを目の前に突き出すように、その一部始終を見ていた女子生徒から言われた。

「幹大さあ、ラストのとき二軒屋君を突き飛ばしたでしょ。しかも後ろから」

「自分のタイムが気になるのはわかるけど、そういうのは良くないよ」

ああ、とその違和感を思い出した。

あの時、接触したのは洋斗だった。

かなりスピードを出していた幹大が洋斗の後ろからぶつかれば、転倒してしまうはずだ。

また、やっっちゃまった。

疲れと、傷の、2つの辛さに耐えながらも走る洋斗の姿を見て、  
う思った。

## 第六話 それぞれの休日①

4月もあっという間に過ぎていった。

そして最終日。この日を耐えれば明日は祝日で休みで、そのまま5月のゴールデンウィークに突入する。

この際いつそ繋がってくれと思うが、日にちの関係で一日平常授業をやって三日間の連休となっている。

この連休を待ちに待っていた生徒は多くいるだろうが、これにはそれなりの”宿題”が付きものだ。

授業の終了を告げるベルの音が聞こえてきた。

「ほいじゃ、来週の月曜は授業ないから……。教科書28ページの練習問題と、問題集の10ページから17ページまで宿題ね」

「うえええー」

「問題集のページ多いなあ。しかもよりによって問題結構つまってんじゃない」

「もう少し減らせないんですかー？せつかくのゴールデンウィークなのに」

数学担当教師である喜来睦樹きらいとむきが出した宿題に対して、予想通りのブーイングが飛び交う。

「何だかんだ言って、どっかしら時間はあるでしょ？それに今日までやったことの復習がほとんどだから、パパッとできるさ」

喜来先生は終始笑顔で返すが、彼らの何人かはまだぶつくさ言っていた。

「ふいー、終わったー」

一気に脱力し、澄滯は机に突っ伏す。

「澄滯、授業中何回も私に聞いてきたんだからさ、ちゃんと復習しないとダメだよ？」

「はあ、数学やだなー。モフモフプー」

「はっ」



澄澤と沙月の一方的な謎の会話をしている間に、大塚先生が教室に入ってきた。

「ほらほら、席に座れ。ホームルームちゃっちゃと終わらせるぞ」  
手をパンパン叩いて生徒に着席を促す。

「明日から三連休だ。んで、月曜授業でまた三連休。特に時間割変更もなし。充実した休みを。では……」

誰もが「終わり」と先生は言うだろうと思っていた。が、大塚先生はニヤリと口角を上げると、持ってきたカゴから髪の毛の束を取り出す。「終わりとなる前に、今日の国語の時間に配り忘れてた宿題配るぞー」  
「うわあああああああ」

見事に彼らの中で浮かんでいた国語は宿題ない説が、砕け散った。

ピピピッ、ピピピッ……。

一定のリズムで機械音が鳴っているのが聞こえた。  
目を閉じたまま、手で音の出所を探る。

大体いつもの場所にそれはあり、頂点部分のボタンを押した。  
ムクリと起き上がり、目覚まし時計を見る。時刻は午前7時半を示す。

眠い目をこすり、はあ、とため息をついた。まだ膝の傷が少し痛む。  
ベッドから出て、洋斗は自室のドアを開けた。

「あら、おはよう」

「おはよ」

1階に降りてリビングに向かった。そこには母がいて、もう既に朝

食の準備ができていた。

椅子に座り、トーストにバターを塗っていく。

「午前中に学校の宿題終わらせちゃいなよ？昨日も進めたんでしょ」

「うん」

「明日は13時から先生が来るから、それまでにそっちの予習復習もしときなさい。学校の方の勉強でわからないところもちやんと聞くんだよ？」

「学校のは簡単だから大丈夫だよ」

「ま、当然よね。むしろ余裕でないと困るわ」

洋斗の母は笑顔でそう言い、自分の既に食べ終えた皿を片し始める。

洋斗は何処か憂鬱そうに、パンをかじった。

「あー、暇」

そう、自室の天井に向かって呟いてみる。

床に寝転がり、先程まで読んでいた漫画本を置く。

一樹は当然、宿題をさっさと取り組むことなく最初の連休を過ごしていた。彼以外にも大勢いることだろう。

すると1階から母親の声が聞こえた。

「一樹。お母さん今から仕事行ってくるから。昼ご飯は自分でなんとかしてー」

「はい」

そう大きい声で返事をする。それを聞いた母はすぐに玄関を出ていった。

そして、一樹は机の上に掛けられた時計を見る。時刻はまもなく正午だ。

母に昼飯をどうにかして食べという場合、基本一樹は料理なんてしないので冷凍食品などで済みます。

が、今日は偶にある”冷凍食品ストックしてないデー”だった。冷凍庫の引き出しを見て確認した一樹はため息を吐く。

こういう時は、外食しかない。しかし一人で食べるのも何だかな、と思った一樹。

『ああ、いいぜ。丁度俺もこれから昼飯だったし』

「おお、大生センキュー。じゃ、今からそっち行くわ」

『オーケー』

リビングにある小さな棚の上に置かれた固定電話の受話器を置く。

大生の前に幹大と隆広にも電話したが、どちらも今は出かけていた。

自室に駆け戻り、机に置いていた財布と家の鍵を持ち、靴を履く。

ドアの鍵を閉め、大生の家へと向かう。彼の家とは大して距離はない。

家に着き、石壁に付けられたチャイムを鳴らす。するとすぐに大生が出てきた。

「今日はどこ行く?」

「今日はフライな気分。一樹は?」

「俺は何でもいいさ。フライならあそこだね」

満場一致(2人だけだが)で目的地は決まった。少し歩くと、何件

か店がある。そばなど和食の店、今日行く洋食の店、カフェテリアなどだ。

店に入ると、席はまだ全然空いていた。むしろ、人口の関係もあって満席の状態をほぼ見たことがない。

いらつしやいと生きのいい声で出迎えられ、窓際の2人席に座った。すぐに店員が水とおしぼりを2人分持ってくる。2人はメニューを見て少し考えた後、店員に伝えた。

2人とも”フライ盛り合わせ定食”を選んだ。

来るまでの待ち時間、2人は何気ない会話をする。が、唐突に大生が切り込んできた。

「なあ、吉野川についてどう思ってるの？」

「ブツ！」

あまりにイレギュラーなため、一樹は飲んでいた水を吹き出しそうになる。

「ゲホツ、ゲホツ……。い、いきなり何だよ」

「何だよって、只単に聞いてみただけ」

「べ、別に……。まあ、なんて言うか、元気があんなって」

動揺を隠しきれない一樹に対し、淡々と表情を変えずに大生は聞いてくる。それでさらに焦る一樹だったが、なんとかごまかしながら返答した。

「確かに、彼女は元気だね。初日から俺らと仲良くなるうとしてた。今はそれなりに壁も無くなってきてる。そのうち他のやつも打ち解けてくると思うんだけど……」

「けど？」

大生は澄澗をちゃんと評価していた。今現在澄澗が一番陸の人間と仲良くしている。続いて沙月も、澄澗と一緒にいるために話す機会が増えてる。

航大に関しては、まだ陸の人間（特に幹大と隆広）と反発しているところもあるが、彼の言動は海の仲間を思っていることなので、彼は決して悪いやつじゃないと大生は考えていた。しかし……。

「蔵本と二軒屋については、どうもよくわからない」

「ああ、なんとなくわかるかも」

「二軒屋はただボーツとしてるだけかもしれないが、蔵本は“謎の少年”って感じ。初日の時だって、吉成を一言で止めるんだから、あの中でリーダー的なポジションかな。それに、あいつは基本俺らと目を合わさない」

「……そうかも」

思えば、一樹も何回か目撃していた。初日の件もそうだし、普段から窓の外の海を見ているイメージだった。

「あいつが一番本音を隠して傍観者してる。ま、そこら辺はあくまで想像だけだね」

そう大生が言ったところで、定食2人前が運ばれてきた。一旦会話は中止して、目の前の食を堪能し始めた。

「里実ちゃん、注文したももの持ってきたよ」

「はい、ありがとうございます！」

里実はすぐさま声の主へと駆け寄る。

彼のトラックの荷台には様々な野菜などが種類ごとに段ボールの中に入っている。

ここ、『スーパー・マツシゲ』はこの久里ノ上唯一のスーパーである。勿論、大型スーパーなどではなく小規模だが、陸と海両方の人たちがよく使うお店である。

この店主は里実の祖父で、休日などは里実や里実の母がお手伝いな

どをしている。また2人のアルバイトもいる。

品物の調達は隣町から行っていて、その度に頼んでいる会社の方たちがトラックで持ってきてくれる。里実が小学生の頃から彼らとは既に顔見知りだ。

「あ、私も手伝うよ」

「ありがとうございます」

段ボールを下ろしていると、1人の女性がこちらに来る。

彼女は池谷汐帆。いけのたにしほこのアルバイト店員だ。汐帆は海の間で、今年で22歳。牡丹色のセミロングヘアだ。

3人で協力して段ボールを全て下ろし終わり、裏の倉庫に持って行く。

その作業が終わると、会社の方はトラックに乗って帰って行った。

「おお、お二人さんお疲れ様」

奥から一人の老人が出てきた。彼が里実の祖父。白い作業着を身につけている。丁度裏で商品に出す魚をさばいていたのだろう。

「お爺ちゃん、こっちは終わったよ」

「そうかい。こちらも終わりそうだから、梱包が終わったら出してくれ」

そう言つて再び奥の調理場に戻っていった。それとほぼ同時の夕イミングで一人の来客があつた。

「うっす、委員長」

「あ、隆広君。いらっしやい」

茶色の肩掛けバッグを持った坊主頭、隆広が店内に入る。

「今日はレタスにトマト、あとは……」

おそらく親に渡されたメモだろうか、それを手に持って確認しながら買い物かごに商品を入れていく。

「親に頼まれたのかな?」

「ええ、まあ。家でゴロゴロしてんだったら買い物してこーい、つてね」

汐帆に聞かれると、少し恥ずかしそうにして隆広はでこあたりをか

く。彼の昔からの癖でもある。

「ふふ、隆広君らしいね。でも、ちゃんと宿題終わらせないと先生に怒られるよ?」

「う……。そうだけどき、やる気出ないんだよね。俺ってば、最終日にやる気出るマンだし。でも、あの人提出物には厳しいしなあ」

最終日にまとめてやるという典型的なダメパターンである。それを中1の頃にも隆広はやったが、見事に全部終わらなかつた。それに対して大塚先生はまずそれにマイナス点をつけ、宿題をやつて出す日が延びるほどさらにマイナスを付けると言った。

これは誰も嬉しがる人などいないので、早急に次の日に出すのであつた。

「そういえば、幹大君は?」

「ああ、あいつは漁に出てるよ。この三連休は全部手伝いに出るらしい」

「そうなんだ。……大変だね」

いつもあの二人は一緒にいるので、ふと里実は疑問になつた。

幹大の父は漁師をしている。普段は父と今年18の兄が漁をしている。そして休日などは、将来のために幹大に父が指導しているのだそうだ。

里実も幹大も幼い頃から仕事については色々見てきたが、漁師は苦労が自分らよりも遙かに多いということを里実は知っている。

隆広は会計を済ませ、買い物袋を乗ってきた自転車のカゴに入れてペダルをこぎ出す。

彼の後ろ姿が角を曲がって見えなくなるまで、里実は見ていた。

「ね、海っ子五人組はどう?」

「やっと少しはお互い慣れてきたみたいですね。特にすみれいちゃんは陸の女子と仲良く話すようになりましたよ」

同じ海の間人として気になるのか、転校してきたことを話してか

ら、汐帆はよく里実に彼らの様子を聞くようになった。

「そっかー。よかったよかった。最初はどうなるかと思ってたけど、なんとかなりそうね。昔からずっと見てきたから、なんだか親にでもなった気分」

安堵の表情で、お昼休憩に持ってきたおにぎりを頬張る。

彼女は彼ら五人組が小学生の時から付き合いで、汐帆はお姉さんポジションでよく面倒を見ていた。

「昔から航大は変わらないけど、海遥と洋斗もやんちゃだったんだよー。三人してはしやぎ出すからもう大変」

「へー、全然想像つかないです。今の二人はなんていうか、大人しいというか……。でも、何か違うような」

汐帆の話を聞いてその頃を想像して見るが、あの二人が騒いで走り回っているのがむしろ似合わない。

なのでその思考は一旦停止させ、その二人の現在の様子を改めて思い出す。けれど、それはそれで大変なもので、唯々物静かな性格だけとは言いがたいものだった。

「小さい頃の話ですから、成長して性格が真逆になるようなこともあるとは思いますが……。それにしてもあの二人、特に蔵本君。あの人は、なんて言うか、ちゃんと目をこちらに向けてないって言うか」

里実はなんとか言葉に言い表そうと、なんとか絞り出す。それを聞いて、汐帆はおにぎりを口に運ぼうとした手を止めた。

「なんだか、あっちから一方的に壁を作っているみたいで。二軒屋君はただボーツとしてるだけですが、それはそれで関わらないようにしてるにも見えるのですが……。何かあったとかありますか？」

そう投げかけるが、少しの間汐帆は沈黙した。そして急に元のように笑顔で、

「うーん、別になんじんじやない。みんな成長して、考え方とか、色々変わるんだよ」

うん、おいしい、とおにぎりを頬張るが、その姿が変に笑顔を作っているように里実には見えた。



「……ところでさ、あの三人のうち誰がカッコいいとか話にならないの？」

「え、ええええ?!」

急に里実の方を向いた途端、そんな質問を投げかける。いや、里実からしてはぶん投げられたようなものだった。唐突すぎて変な声が出た。

「普通、転校生が来たら、徐々にそんな話出てこない?あの三人だって個々でいいところあるし、あっちもその気なら尽くしてくれるとは思うんだけど……。あ、もう陸の方に好きな人がいるのか」

「ちよ、勝手に話し進めないでくださいよ——!」

ニヤニヤする汐帆に対して、赤くなりながら汐帆の肩を叩く里実。赤くなってるじゃーん、などと汐帆に徹底的にイジられる里実は、先程抱いた疑問をすっかり忘れてしまった。

## 第七話 それぞれの休日②

休日はあつという間に過ぎていくもので。最初の三連休が終わって、月曜の平常授業がやってきた。

今日を乗り越えればまた三連休がやって来るので、さほど生徒の心のダメージは大きくなかった。

「……………ちゃん。さつちゃん！」

「ふえ?!」

すぐ近くから聞こえてきた声に驚き、沙月は変な声が出た。

「さつちゃん大丈夫？朝からブーツとしてるけど」

「え……………うん。大丈夫だよ。何でもないよ」

澄濤を安心させるように、ジエスチャーで大丈夫アピールをする。が、その表情はどこか曇っていて、無理をしているようにも見えた。

「なあ、どうだった？漁業レッスンは」

隆広が興味津々で幹大に問いかける。3人は教室の後ろの黒板のところ寄りに寄りかかっている。

「どうって……………。そりや大変でしたよ。ええ、大変大変。お前らが暢気に休日満喫してるときによ」

「はは、スマンな」

あの三日間のことを思い出し、幹大は苦行で苦しむような顔でジエスチャーをして大変さを表した。それに苦笑いの一樹。

「まったく……………。俺も平凡な家に生まれたかったよ」

「んー、でもさ。漁師ってのもカツコイイと思うけどな。ここらじや漁業がメインみたいなんだしさ、頑張つて久里ノ上ナンバーワン漁師にでもなれば？」

「何だよそれ。まあ、結局は俺と兄貴が継いでいかなくちやいけないし、やるしかないんだけどね」

幹大は腕を頭の後ろにまわる。なんだかんだ言つて彼は漁師の仕事嫌っているわけではないのだ。

それに、ナンバーワンがどうたらこうたらで彼の表情が少し晴れたので、わかりやすいやつだと一樹は思った。負けず嫌いのところは昔からだ。

この日の授業も終わり、生徒は直ぐさま教室を出て行く。

「ね、連休初日にさ、一樹と大生でお昼食べてたでしょ」

茉紀は一樹に少し不機嫌そうに事実確認をする。

「え、そうだけど……。なんで知ってるの？」

「お昼頃、お母さんが買い物から帰ってお昼作るまで暇だったから、外出てたの。その時2人が店に入っていくのが見えたの」

「そうなんだ」

「へー」

2人はそんなことがあったんだな、はい終わりのようなテンションで適当に返す。

「……いやいや、違うでしょ。私も誘ってくればいいのに！」

茉紀は頬を膨らまして腕を組む。自分だけが仲間はずれにされたようで少し怒っているようだ。

「いや、別にお前をハブったわけじゃねえし。それに、里実とか同じクラスの女子とか誘うもんだと思ってた」

「私はお店の当番あったからなあ……。なんかごめんね」

一樹の中では男子は男子で、女子は女子で飯に行くものだと形成されていた。こうやって一緒に帰宅してるが、少し違う。

「いや、里実は謝らなくてもいいんだって……。あ、今思い出したけどさ、その後すぐに転校してきたって言う海村の人、女の子も見つけたよ」

茉紀はふと思いついたようで、話題を変えた。

「見つけたって、俺らが店に入っていくときってこと？」

「そう、確かボブカットの子。急いでたって感じだし」

転校してきた5人の中でボブカットの女子は、沙月しかない。

「方向的に、病院の方だったかな」

この町では唯一の病院だ。それなりに大きく、設備も整っている。

陸の人間は勿論のこと、海の人間も診察や入院もしている。

そういえば、今朝から沙月の様子が変わった。なにか心配しているような、そんな感じだったと里実は思い出す。

「沙月ちゃんの家族かが入院しているのかな」

「そうかもしれないな」

一樹も少し顔を俯かせながら言う。

「病院の方向とはいえ、もしかしたら違うかもしれないしね。誤解したまんま変に優しくするのもあれだし、気になるなら聞いてみた方がいいと思う」

大生はちやんと考えて言葉を言う性格だ。変なことを言っただけで壊すようなことは滅多にしない。というか、少なくともこの3人は見たことがない。

今のも里実と沙月、両者どちらかが不快にならないよう正面から考えて出した言葉だろう。

うん、そうだねと里実は返した。

連休が終わったら聞いてみようかと考えた。いきなり今日電話で聞くのはちよつと抵抗を感じた。

今度は自分から行くんだ。自分から歩み寄って、海のみんなに少しでも慣れていってほしい。そんな願望が里実の中で強くあった。

『どうして？なんでそこにいるの？』『みんな揃ってそこに行くんだ。楽しい？』『陸の人と仲良くなつて、いいね。お母さん嬉しいよ』『いつも通りの生活を過ごしていくんだね。』『お父さんと仲良くやっていくんだね』『羨ましいよ。本当なら私もそこにいるはずだったのに』『でも、もうそこにはいない』『永遠に戻れない。だから』

『私たちを忘れていくんだね』

「……………っああああ!!」

勢いよく起き上がる。息がしづらい。心臓もバクバク音をたてている。大したことはしていない。ただ寝て起きただけなのに、夢の内容でこんなに辛いものになるのかと思う。夢なのに、たかが夢なのに、どうしてだか涙が出そうになる。

少しして呼吸が楽になってきた。つるしていた糸が切れたように再び布団に倒れる。左横を見ると、目覚まし時計が9時を示してい

た。

「起きるか」

海遥は再び眠りに落ちれないと確信して、布団から出た。

父親は朝から出かけているらしい。家にはおらず、代わりに朝作ってくれた目玉焼きとブロッコリーを茹でたものが皿にのせられ、ラップがかけてあった。

ラップを取り、買っておいいたロールパンを袋から出して口に運ぶ。

『いつも通りの生活を過ごしていくんだね』

パンを持った手が止まる。

先程見た夢の言葉が、頭に浮かんでくる。それは波紋のように簡単に消えてくれるものではないようだ。

「また、見ちゃったな」

手を動かして口にパンをつっこむ。

今日で三連休最終日。明日から授業が始まり、夏休みまでこれといった祝日はない。

皿を洗い、歯磨き等も済ませて自室に戻る。広いというわけではないが、布団を敷いてもある程度余裕があるので海遥に不満はない。

小学校に入る前に買ってくれた勉強机。棚には学校の教科書や、小学校の卒業アルバムなんてものももある。そして昨日やっていた宿題のワークと、スケッチブックが机の端に置いてある。

海遥の趣味に風景画がある。

小学校の時にやった授業で、学校にあるうんていやジャングルジム、ブランコなどのスケッチをするというものがあつた。そこで”絵を描く”というものにハマつた、と記憶している。

澄濤も絵を描くことに興味があつたようなので、休日に二人で果那ノ海の様々な建物や木々などを描いていた。そして描いたものを見せ合つていたのが懐かしい思い出だ。

昨日は果那ノ海の町並みを鉛筆で描いていた。渦波神社の近くの場所に、一望できるところがあるのだ。

今日は残つた宿題を片づけなくてはいけない。椅子に座つてワークを開こうとしたとき、家のチャイムが鳴つた。

「いやー、ホント助かるぜ」

「みはっちゃんがいれば百人力だね」

場所は少し移つて茶の間。海遥の目の前には私服姿の航大と澄濤が座つて各々の宿題を出している。いわゆる「宿題終わらないから手伝つてくれ」つてやつだ。

「百人力つて……。洋斗の方が勉強できるだろ」

「いや、最初は洋斗んところ行つただけどき。あいつは午前からカテキョーと勉強してたから無理だった」

「さっちゃんも誘おうつてなつただけど、さっちゃんも朝からお見舞いがあるからつて」

「ああ、そうなんだ……」

結局この2人が行き着いた先がここだつたようだ。別に海遥はそれなりに勉強はできるほうであり、用事はないので一日教師を承諾した。

「……んで、ここでこの公式を使って……」  
「なるほど」

「このときはこの求め方を使うんだ」  
「ほうほう」

「海遥」「みはっちゃん」

「お、おう……」

進まねえ！と叫びたかった。

ただでさえ勉強をなかなかの苦手とする航大と澄濤を、2人を同時に見るのはやはり一筋縄ではいかないようだ。

教えつつ自分の宿題も終わらせようだなんてことを考えた自分を止めたい気持ちになった。

これこそ猫の手も借りたいものだが、この場で教えられるのは自分しかない。海遥は再び教師の仮面を被る。

しばらく進め、2人の宿題もそろそろ終わる頃になった。

「……う？どうしたの、じーっと見て」

シャーペンを止め、視線を感じた澄濤は顔を上げる。海遥は右手で頬杖しながら澄濤を見ていたのだ。自身の宿題はもう終わっていた。

「んー？んー……。そこ、問3間違ってるなーって」

「え？……あー本当だ。ということは問4も違うじゃん」

問いかけられた海遥は何だかボーンとした様子で少し唸り、澄濤のケアレスマスを指摘した。

「ハハハ。さっすが澄濤。いつもどっかしら間違えるよな」

「お前もそこ、スペルミスしてんぞ」

「ぬわんだってえ?!」



2人揃ってミスするので、裏で合わせてんじやねえのかと思うほどだった。普段からこういう抜けているところが、テストで泣く結果を生むのだと実感した瞬間でもあった。

「よし、これで終わりだ」

「やっと終わったよー！みはっちゃんにはホント感謝だよ」

航大はワークを勢いよく閉じ、澄濤は腕を上げて伸びる。

自分のだけなら30分ほど終わるはずだったが……と無意味なことを海遥は考え、机に突っ伏す。

「さてと……。そろそろ時間もアレだし、海遥の手料理でも食ってくか！」

「それさんせーいー！」

「おい、テメエら……」

時刻は正午前。勉強で消費したエネルギーを補えと言わんばかりに航大と澄濤のお腹が鳴った。

「お前らに勉強教えて、さらに昼飯食わせろと？」

「ま、まあその通りだけどさ？ついでだよ、ついで。久しぶりに海遥の手料理食べたいしさ」

「そうそう！みはっちゃん料理美味しいし、また食べたいなって思ってたの。だからお願い！」

去年だかに2人に加えて洋斗と沙月、そして5人の面倒を見てくれた汐帆に手料理をふるまった時があった。その時はオムライスを作ってみたのだが、それはもう大絶賛。

みんな笑顔で食べてくれたので、海遥はこのときばかりは喜んだ。

2人の熱い眼差しに負け、「わかったよ。作ってやんよ」とこれまた了承した。

「やったー！」

小学生さながらの喜び方ではあったが、彼らが笑顔になってくれるのであれば海遥はそれで充分なのだ。

「ちよつと待ってる……。今回は今あるので出来るのは焼きそばだけど、いいか？」

「もちろん！」

「お願いします！」

冷蔵庫や棚でメニューを決定し、お客様からのOKも頂いた。後は、普段からやっている料理テクニクで焼きそばを作るのみだ。

2人は海遥の焼きそばの美味さを新たに覚えたのだった。

「来たよ、おばあちゃん」

沙月は病室のドアを開け、真っ先に自分の祖母のところへ駆け寄った。

「あああら、今日も来てくれたのかい。毎日じゃなくてもいいんだよ？」

「そんなこと言わないでよ。私が来たいから来てるの。着替え、ここに入れとくね」

ベッド近くの収納棚に持ってきた着替えを入れる。

祖母が倒れたのは最初の三連休の始めだった。

北島家総出でいそいで病院に行った。症状は比較的重くは無かったが、検査等のために入院している。

それから毎日欠かさず沙月はこの病院を訪れている。おばあちゃんが心配なのだ。彼女はおばあちゃんが大好きだから。

「まったく……。この頃は体が言うこと聞かなくてねえ。そろそろ限界が来たのかねえ」

「もう、大丈夫だって！医師の人も問題はないって言ってたし。それに、良くなったら今年のお祭り行こうって約束したじゃん」

花瓶の水を替えて、一目散にベッド横の椅子に座って手を握る。祖母が嘆くのを沙月は必死に励ます。

「そうだったねえ。ごめんごめん。……。だけど、人間どうなるかわからんしねえ」

握ってくれた手を握り返す。けれどその力は以前よりも小さくなっていくと、感覚で気づいてしまう。

視線を窓に向け、広々とした青空を眺める。その目には何が映っているのか、何を考えているのか。沙月は寂しそうな、悲しそうな表情をうかべる。

「……ああ、そういえば。おばあちゃん、死ぬ前に沙月の旦那さんくらいは見ておきたいなあ」  
「ええ?!」

視線を沙月に戻し、祖母が全く考えていなかったことを口にする。先程の沙月の表情は何処かへ飛んでいき、一気に顔が赤くなる。

「い、いきなり何言つとんの!」

「だってさあ。いつかは結婚するんじゃない?」

「なっ!いやいや、まだ中学生だし!」

「中学生は関係ないじゃろ。それにここはそんなに男は多くないから、モタモタしてると都会に行つちまったり、他の子に取られちゃうよお」

先程までの様子とは大違いである。孫娘の結婚事情にかなりの興味があるようで、沙月はずっと赤くなった顔で祖母と荒い言葉のキャッチボールを繰り返す。

でも、勿論これは祖母が自分のことが大好きだからこそ、心配しているのだとわかっている。

だから、私もちやんと正直に答えないとね。

「そうそう、最近は陸の学校に通ってるんだらう？そこにいい男はいないのかい？それとも海の方でもう決めてる人がいるのかい？」

「う……。えっと、一応……。いるよ。好きな人」

その途端だった。まるで雲の隙間から太陽の光が一気に差し込んでくるような、そんな表情の変化が祖母にあつた。

「そうかい！そうかい！そりゃ嬉しいねえ。早く連れてきてほしいよ」

「で、でも！まだ告白……。とか、してないし」

「そうなのかい？なら今すぐにもババツとしてこいさ。その人は他に好きな子とか、付き合ってる子はいないんだらう？」

「え、うん。……。いないと思う」

なら大丈夫さ、と祖母は笑顔で答える。先程の憂鬱な雰囲気はどこに行ってしまったのかと本当に思う。

けれど、こんなに笑ってくれる、そんな姿を見ると沙月もなんだか心が安らぐ。

「うん。わかってる。いつか必ず、伝えるよ」

## 第八話 ナンバーワンじゃなくても

あつという間にゴールデンウィークは終わり、いつもの平日が顔を出す。

もう少しだけでいい、あと一日くらい休日を……、なんて思いながら連休明けに登校してくる生徒が大勢いた。顔を見れば一発でわかる。

当然宿題をやつてこなかった生徒もいた。対応は先生で様々だが、国語の宿題を忘れた生徒は、やつてこなかった宿題に加えて追加の問題を出されるという、大塚スペシャルを食らった。

勿論、隆広もその一人だった。

そして、次に待っていることといえば、中間テストである。

期末よりは教科も少なく、範囲も大して広くない。のだが、みんながみんなオール満点をたたき出せるわけではない。

十分理解している生徒が理解していない生徒を教える。自然とこれはクラスの中で形になっていた。

今までほぼ同じメンバーと小学校時代から過ごしてきた。お互いをよく知って理解しているのだ。

けれど、今年はまた違う展開になっている。教えてほしいという生徒の何人かが洋斗のところを集まっていた。

洋斗は勉強ができる。頭がいいのだ。このクラスで頭のいい生徒は里実の他数人だったが、彼らより上の可能性があった。

それが明白となったのは、先日の数学での授業でのこと。

いつも通り内容を進める喜来先生だったが、これまたいつも通り洋斗は夢の中であった。

今までは特に起こしたり注意したりはなかったのだが、その日は先生の気まぐれか、洋斗を起こしたのだ。

「ほらほら、二軒屋君。起きて授業受けないとね」

そんなことされるのは初めてだったので、洋斗自身も若干驚いた顔だった。そして……。

「じゃあ、目覚ましにあれ、解いてみようか」

起きたことを確認した先生は、黒板の方を見て指さした。

そこには、数学の問題が一つ書いてある。それも難問で、みんなわからず項垂れていた。

——うわあ、タイミング悪い……。

周りの生徒は難問をさりげなく回されてしまった洋斗に同情しつつ、彼に当たってくれたことに嬉しさもあった。

起きたばかりの目は少しの間、問題を見つめる。

そして席を立ち、ツカツカと黒板のところまで来る。ここで一旦は悩むけど、白旗を挙げるのだろうと思っていた。

が、白旗ではなく白いチョークを持ったかと思うと、黒板に数式を書き出した。

何の抵抗もなく、スラスラと答を導き出していく。その間、生徒たちは今までに使ったことのある方程式が出て、ここでこう使うんだなと納得はするが、こういう発想は出てこねえよと諦めさえ浮かんできた。

そんなことを考えているうちに、洋斗は解き終えてチョークを置く。そのままツカツカと自席に戻る。

「せ、正解だよ。え、よくわかったね」

まさか正解するなど思っていなかったのだろう。先生の顔はいつものニコニコが消え、まさに驚き一色だった。

「……簡単」

そう言い残して、再び夢の世界にログインしていった。

「はあ、疲れた」

むしろいつ疲れていない姿があろうかとツツコミを入れたいが、それを我慢する一行。

明日から試験だということもあつて、大体の授業が自習だった。その時間ずつと洋斗は慣れない様子で他の生徒に教えていた。

「我が洋斗センサーは凄いなあ。何人も相手して」

「ひろちゃん、大人気だったね」

今日の洋斗の活躍っぷりを見て、自分のことのように嬉しがる航大と澄濤。

「俺はこういうの苦手なんだよ」

「いいじゃん。将来にむけてのコミュ力向上も兼ねてるんだから」

「あ、なるほど。それは大事だね」

海遥のある意味正論のいじりに沙月が乗っかる。

洋斗は終始ムスツとした顔だった。

中間試験は終わり、ひとまず試験という重荷から解放された。

「ねえねえ、どうだった？」

「最後の問題わかんなかったな」

今日最後に行った科目の話をする生徒。

「二年の初っぱなからマズったかもなー」

「おいおい大丈夫かよ」

最初のテストから失敗して嘆く生徒。

「いよつしやあ！次からの体育はサッカーだ！」

「いやー、楽しみだね。幹大は特にこれにこだわってたしね」

最早テストなど無かったかの様に、体育の話になる生徒。  
などなど、である。

幹大たちが待ち望んでいたサッカーは、他の男子たちも楽しみにしていた。

この地で小さい頃から遊んでいたものと言えば大体サッカーが最初に来るほどだった。

ボールと場所があれば、最悪二人でも楽しめる。女子にも小さい頃からやっていた子がいるので、全員一致の低評価ではない。

「サッカーか。久しぶりだな」

先生がホームルームをする中、航大が小さく呟いた。

「いよつしやあ！今日からサッカーだ！」

「昨日も同じようなこと言ってたよな」

この日は快晴。程よい気候となって、彼らが望んでいた絶好のコンディションだ。

「はいはい、落ち着けお前ら。んでだ、まず準備体操してから男女それぞれでチームをわけろ。6人一チームになるように。男子の方は6



と7かな」

阿波先生の指示で体育が始まる。

準備体操が終わって、男女でチーム分けが始まった。ここでは一番サツカーができる者が2人出てきて、一人ずつ選んでいくという方法が使われた。

女子の方では海の2人が打ち解けているので問題なかったのだが、男子の方では未だ壁が完全に取り外されていないので、海3人組が仲良く残った。

「んー、どうするか……」

代表の1人である幹大は頭を掻きながら悩む。

陸のメンバーならどのくらい上手いかなど知っているが、3人に関しては全く知らない。まさに未知数なのだ。

さらに1人余るので、どっちに入れた方がいいのか等考えなくてはいけないので、少々めんどくさかった。

後でまた変えればいいのかと思い、適当に組もうと幹大が指示を出そうとしたとき、

「めんどくさいから、グツパーで分けようぜ。グーなら幹大の方に、パーなら俺の方に」

代表のもう1人、一樹が口を開いた。その案に納得して、3人で握り拳を出す。

結果、幹大の方に洋斗が行き、一樹の方に航大と海遥が行くということになった。

「チームは決まったね？それじゃまずチームごとにパス練習などしよう。少ししたら、10分の試合をやろうか」

先生が倉庫から出てきたサビついたボールケースの蓋が開かれた。全員がそこに集まり、ボールを出して2人一組のペアを作る。男子は一つだけ3人ペアだ。

先生が幹大と一緒に見本を見せた。足のどこでボールを蹴るかなど大きい声で説明し、各チームで練習が始まった。

「……！」

洋斗には幹大がついていた。彼なりに説明通りのキックを試みるが、狙った方向になかなか飛ばないでいた。

「そうそう、そんな感じ。あとはもう少し強くいいよ」

少し変に飛んでも一樹は動いてボールを止め、アドバイスを出していた。そして綺麗なパスを繰り出す。

一樹のチームの、海2人は黙々とパスを続けていた。

「ホント、久しぶりだよな。サッカーやるの」

航大は慣れた感じでパスを出す。

「まあ、そうだったかもね」

海遥は航大の言葉に曖昧な返事を付けて、パスを返した。

航大は笑っているようにも、でもやはりもどかしそうな表情を浮かべた。

「それじゃ、10分間。試合開始！」

セットされたタイマーのボタンを先生が押した。機械音のブザーが鳴り、男女の試合が同時に開始された。

「うおりゃー！」

気合いの入った声と共に、澄濤が思いつきりボールを蹴ろうとするのだが、見事に空振りに終わる。

周りから笑いがこぼれつつ、女子の方はキャツキヤしながら試合と言うよりボールの蹴り合いを楽しんでいた。

男子の方は、どこか緩さがあるがきつちりとした試合をしていた。じゃんけんでボールを獲得した幹大チームからスタートした。

主に上手い人間同士がパスし合い、攻めていく。そして幹大がパスを受け取り、いきなりシュートをしてゴールネットを揺らした。

「よっしや、まず1点」

幹大はガッツポーズをしつつ、自陣に戻る。

「やっぱり上手いなあ、幹大のやつ」

あっぱれという気持ちで一樹は試合再開する。

こちらもパスをつなげていくが、いいところでパスカットされる。そしてそれが幹大にわたり、豪快なミドルシュートを放った。

綺麗な直線で、上のポストギリギリでボールは入った。

「2点目！」

「うわあ、ヤバすぎ」

ここで一樹がキーパーと交代する。他にもサッカーができる生徒がいるので、彼らに攻めを任した。

試合再開。ここでもボールの奪い合いになるが、なんとか一樹チームが突破する。が、ボールをここで取られ、それが洋斗にまわってくる。

他の仲間にくつちにパスだ、と手を上げているのを見つけてパスを出す。うまく蹴れず逆に一樹チームに取られた。そのままキーパーの足下をくぐり抜けてゴールを入れた。

「ドンマイドンマイ」

洋斗にそう声をかけて幹大はボールを中央に持っていく。

本当に、未だどこかで引つかかっている。

長距離走の時、洋斗に後ろからぶつかって倒してしまった。それについてまだちゃんと謝ってもいなかった。

結局自分が求めていた一位になれず、それどころか怪我をさせてしまった。

自分がクラスのナンバーワンになりたい、この気持ちでやってきたのだが、現状はほど遠いと幹大自身は思っていた。

だからその罪滅ぼしのように、洋斗に積極的に話しかけていた。勿論洋斗がどう思っているかなんてわからないが、こうしなくてはなんだか気が済まなかった。

再びボールを蹴り、幹大チームが攻め込む。ここでも幹大中心で攻

め、パスを幹大がもらった。

その時、目の前に海遥が立ちはだかる。

——蔵本か。悪いがここは突破……。

幹大がそのまま避けようとするが、海遥もなんとなく動いて幹大の通り道を塞ぐ。すぐに動いて突破しようとするが、反応してきて出来ない。

それどころが、スキをつかれてボールを取られた。

「マジかよー」

そのまま駆け出し、幹大チームをスイスイ避けていく。ゴール直前来てキーパーが構えるが、ここで蹴るフリをして横にパス。

その先にはさりげなく走り込んできた幹大がいた。そこ勢いでこれた豪快なシュートを繰り出す。

気持ちいくらいの音でボールはキーパーの手をはじいてゴールする。

「おっしやあー！ ナイス海遥」

入った瞬間、幹大は満面の笑み浮かべ、海遥とハイタッチをする。

「え………すげえ」

「あいつらサッカーもできるのかよ」

男子一同驚いていた。

その後も航大&海遥のコンビで攻め、ゴールを決めていた。一樹チームが逆転したのだ。

幹大はまたもや焦り始める。

また、あいつらに負けるのか、と。海遥ならまだしも、長距離でも負けた航大にサッカーでも負けるのはどうしても幹大は避けたかった。

サッカーでは負けたくない、これだけでもナンバーワンを勝ち取りたい。

その気持ちで残り数分を全力で臨んだ。

「！」  
パスをもらった航大のところに幹大が防ぎに行く。他の仲間も  
フォロワーに行き、航大をガードする。

それでも航大は海遥にパスをする。それを見逃さず、海遥に渡る直  
前でカットする。

そのままシュート。ここは惜しくもゴールポストに当たってし  
まった。

「くそっ」

いいシュートだったと思っていたので、外したのが悔しかった。け  
れど、どうしてか幹大自身でもわからないが、そこに嬉しさがあった。  
今まで自分の思うままに進まないと気が済まなかった、気にくわな  
かった。そんなのに……。

ゲーム再開。ボールは一樹チームでパスをまわし、海遥に渡る。

——させるか！

幹大がすぐさま防御に向かうが、その前に隆広にボールを渡した。  
海遥は幹大を抜き、再びそこでボールを受け取る。

「くそ……！」

追いかけるも間に合わず、海遥のシュートは見事にゴールの上の角  
あたりに入っていった。

「ナイス、海遥」

航大が駆け寄り海遥の肩を叩く。海遥は大して嬉しさは顔に表れ  
ていないようだ。

すぐにボールを戻し、再開する。そのまま幹大は敵陣地に攻め込  
む。

今度は航大が目の前に立ちはだかる。

「いやー、やっぱり男子はサッカー好きだね」

「ホントそれな。私たちはもう疲れちゃったよ」

女子の方は、もう既にプレイヤーというより観戦客と言うべきだろう。サッカーコートの中あたりに集まり、座ったり立ったり個人の好きなままにして、男子の試合を見ていた。

「見てるとき、上手い人って本当に上手いよね。ボールさばきって言うか」

「わかる。って、幹大また抜かれてんじゃん。一番得意とか言ってたのに」

幹大が一樹チームに抜かされ、それを追いかける。航大に渡るが、惜しくもシュートはポストに嫌われた。

「あー惜しい。てかさ、あの2人サッカーも上手いんだね」

「相変わらず二軒屋君はコートの端に立ってるだけだけだね」

「ハハハ……、洋斗はしょうがないよ」

改めて彼女らの『海の人間』陸の運動は苦手』説が打ち壊された。先日、海の男子たちは陸でも遊んでいたと知ったので、サッカーも出来ることにはすぐに理解した。

ただ苦手ということもあり、洋斗は案の定の事実上不参加に沙月は苦笑いする。

「でもさ、撫養君楽しそうだね」

不意に、澄滯が言う。男子はほとんど楽しそうにしているので、それを今更言うことに少し疑問を持つ。

「今までみはっちゃんとかうちちゃんと対立してたって言うか、あんまり関わらないようにしてた感じだったけど、今はまさに友達って感じ」

「……ああ」

ひたすらに男子の方に目を向けている澄滯は、笑顔だった。まるで子を見る親の様に。

そうか、楽しいんだ。

俺は、楽しいんだ。俺以上に上手いやつと戦うのが。

幹大はどうとう自分自身に気がついた。

先程から感じる違和感。今までは感じることもさえもしなかった気持ち。それをやつと、南京錠を外して開いたのだ。

ナンバーワンになりたい。これはもしかしたら違うのかもしれない。そんなこと以上に、自分と同等、あるいは上の人と何かを楽しみ、勝負する。

これこそが自分が、心の奥底で必死に叫んでいた自分が求めていた答だった。

いちいち突っかからなくてよかったのだ。自分より上がいてもいいじゃないか。

何でもかんでも、ナンバーワンにならなくてもいいんだ。

結果、一樹チームが勝った。

10分がなんだか長く感じたようにも、短く感じたようにもした。けれど、たった練習試合が幹大を新しくした。

そのうち気づいたものかもしれない。何か考えさせる機会が訪れたのかもしれないが、早く気づけたのなら問題は無い。

水飲み休憩に入り、航大と海遥が揃って向かっていると、後ろから幹大が2人の肩に腕を回してきた。

「いやー、お前らサッカー強いな。ビックリだわ」

彼ら相手にいつもの友達感覚で話しかける。今まで一回も無かったその行動に幹大自身さえ多少の抵抗感があったが、もう行っちゃえという勢いに任せた。

「いや、お前こそ上手いじゃねーか。かわしきれなかったもん」  
海遥は真顔だったが、航大はにぱつと笑顔になった。  
どうやら、もうこの間に壁はなくなったようだ。

「二軒屋、長距離走の時は悪かったな」

同じく水を飲んでいた洋斗に話しかける。

「もう今更気にしてねえよ」

特に不機嫌になることもなく、手で軽くジエスチャーをした。

これで、幹大のモヤモヤは全てとれた。心も、今日の天気も晴れだ。  
気持ちいい他ない。

休憩も終わり、チーム替えをして授業の終わりまでサッカーを楽しんだ。



## 第九話 見え隠れする気持ち

「吉成君、かつこよかったよー!」

「蔵本君も上手かったね」

「幹大も案外口先だけじゃなかったねー」

「おい案外ってなんだよ案外って」

サッカーの初授業で後半に一面使って試合をした。一応先生が男女で混ざってやってみようと提案したが、女子は全員一致の見ていた側にまわり、男子のみで行った。

ここでも航大と海遥の活躍があり、大接戦だった。

それが終わり、軽いストレッチをして授業は終わった。その後、女子たちが男子の方に集まってきたのだ。

「やっぱり陸に出てサッカーしてたの?」

「まあ、そうだな。数年前、まで」

「つてことはさ、この中で会ってたっていう人いないの?」

素朴な疑問。それはそうだ。このあたりは人口が多いわけではない。ましてや、サッカーなど遊ぶ場所も限られてくる。

それならば、一樹や幹大たちと実はもう会っていたかもしれないのだ。けれど……。

「んー、ごめん。わかんねえな」

改めて全員の顔を見るが、どうも航大の記憶に存在する顔はなかったようだ。眉をひそめた顔から、申し訳なさそうな顔に変わる。

「そうなんだ……。でも、よかった」

里実は何かに安堵したような笑みをこぼす。

「何が?」

「だって、今までどこか怖くて怒るイメージがあっただけど、もうなくなってる。それどころか、いつの間にかみんなと打ち解けてるし」

ああ、と航大は理解した。

もう彼のまわりには彼を悪いイメージで見ている人はいないようだ。こうして普通に会話もしている。やっと、航大は受け入れられた

のだ。

「なんだかんだ、スポーツで心を通わせたのね。……で、その姿に里実ちゃんは惚れちゃったのかな？」

「えええ!? な、なんでそうなるのよー!」

一人の女子がニヤニヤしながら里実をイジってきた。突然のことに里実は頬を赤くし、軽くその女子生徒のことを叩く。

「えー、だって試合中ほぼ吉成君見てたんじゃないのー?」

「違うってばー!」

依然として女子生徒のイジりは続き、最早里実はお手上げ状態。頬の赤みはハッキリとして落とせていない。

それに伝染したか、航大の方も何だか照れ始める。

「いやー、まったく吉成くんってば、モテモテやなあ。なあ、幹大サン?」

「せやなあ、隆広サン。って、あれれ? 航大くん、赤くなってるぞお? こーれは、まんざらでもなさそうだ!」

ここでおふぎけがお得意の2人が登場だ。見てると明らかに腹の立つ顔で航大を肘でつつきながらイジる。

「はあ!? う、うるせーよー!」

両側からのアタックで慌てる航大。このどうしようもない恥ずかしさを消そうと2人に対して怒る。

だがそれは全く効かず、それどころか見事なコンビネーションでヒューヒュー、と揃えて航大に向かって言い出す。

それに便乗して何人かも同じ動作をし始める。

「だからうるせーって!」

誰から止めていいのかもわからず、無意味に手をブンブンと振る。こちらもお手上げだ。

こんなありふれた、でもやっと到来したその平凡な会話をしつつ、校舎に入っすぐ側の更衣室を目指す。

イジりはまだ少し続いていたが、特に止めることなくただ笑いながら「ちげーって」なんて言っておく。

更衣室に辿りつき、男女に分かれてドアを開ける。

廊下から更衣室内へと空間が変わる瞬間まで、航大は里実の笑っている横顔を見ていた。

青空に広がる雲。それが徐々に重なり、彼ら自身から近づいてきているように錯覚する。

外へ出ても、もうそこには春のようなやんわりとした感じはなく、少し肌を刺激する暑さが見え始めている。

6月に入った。季節が夏に移り変わるということで、学生服が冬服から夏服に移行した。

白風中では、男子はブレザーから白ワイシャツに夏用のズボン。女子もブレザーは取り、スラックスかワイシャツで薄茶のベストを好みで着て、スカート。

青波中のは、冬服でさえブレザーや学ランではなく少し特徴的なのだが、それが夏服になると、半袖になるだけ。

よりいっそう夏を思わせる姿で学生たちは今日も学生生活を過ごす。

まだ暑さは本格的ではないので、昼休みは外でサッカーなどで遊ぶ者がいる。

その中に、一樹や幹大、隆広たちに加えて航大もいた。

一生懸命ボールを追い、思いつきり蹴る。額から流れる汗を腕で拭って、ゴールを決めて仲間と笑い合う。

これが青春と言うべきものなのだろう。個人によって価値観、考え方は違うと思うが、この姿を見て他にどう形容したらいいものか。

その青春を一観客として、海遥は見ていた。丁度この時間帯に日陰になる、屋根の付いた校舎の出入り口前の階段に座っている。

手を後ろについて、足を前に投げ出す。彼の三白眼は彼らをずっと見つめ、たまに流れてくる風が伸びた髪を揺らす。

聞こえてくるのは外で運動する人物たちが生み出す音、中の教室で喋る人物たちが奏でる音。

だから、こちらに近づいてくる足音には容易に気づく。

「こんなところにいたんだ」

「……澄滯か」

澄滯はかくれんぼで隠れている人を見つけたという感じで海遥に声をかけ、隣に座った。

「ここ最近昼休みになるといなくなってるから、探しちゃったよ」

「俺の席にモロ陽が当たるからな。ここなら涼しくていい」

そうだね、と澄滯は笑う。そのまま海遥の視線の先に目を向け、航大たちがサッカーを楽しんでいるのに気がついた。

「こうちゃんってば、ホント楽しそう」

「ああ、そうだな」

航大の姿を見て、また笑う。またその笑顔から安堵の気持ちがかうか見える。海遥はその様子を見ず、ただ真っ直ぐ向いたまま曖昧な返事をする。

「みはっちゃんもやらないの?」

「やらない」

「授業中は結構やる気だったのに?」

「ちゃんとやればそれなりの成績出せるだろ」

「かつこよかったよ?」

「おだててもやらない」

澄濤の言葉のボールをノールックキャッチ&ノールックパスする海遥。きつと適当に流されているから頬を膨らましてるんだろうな、と思いなながらも海遥はサッカー少年たちを見続ける。

「ねえ、みはっちゃん」

声少し力がいっているようだった。そろそろふてくされてきたか、しようがないと諦めて、海遥は顔を横に向ける。

ムニツ。

視界に澄濤が入った。それと同時に、頬に何かを感じる。少ない面積が頬を押し込んでいる。彼女の指だ。

予想通りに澄濤が伸ばした指が当たり、フフツと笑う。

「引っかかったね。うん、でもさ……意地っ張りにはダメだよ」

指を離して立ち上がる。そろそろ行くねと言い残して澄濤はその場を立ち去った。

遠ざかっていくその後ろ姿を海遥は途中で視界から外す。そして、今度は空を見上げる。

「意地なんか張ってねえよ」

その言葉は丁度きた風に揉みくちやにされて何処かへ飛ばされていった。

けれど、近くの角に寄っかかっていた大生には、聞こえていた。

「あいつ馬鹿だわ」

窓を開け、少しでも感じる風を受けながら外を見る。今日は特に暑いという気候ではないが、涼しくもない。そんな日の昼休みに外で、汚れて汗をかきながらサッカーを楽しむ男子たちを理解出来ない。

その男子生徒たちの一人は知っていた。昔からのつきあいがあからこそ、馬鹿と言えるのだろうか。

「ねえねえ、茉紀ちゃん。どれが里浦先輩なの？」

「ん？一樹は先輩付けるような人じゃないけどさあ……、あ、今ボール蹴った人」

隣で茉紀と一緒に女子生徒がお昼サッカーの観戦をしていた。茉紀が度々話す一樹はどれなのか気になり、教えてもらう。

「おー。サッカー上手いんだね」

「それなりにできるんじゃない？ま、他のクラスの人のの方が上手いみたいだけど」

「フッフ。茉紀ちゃんって里浦先輩に厳しいね」

「厳しいもなにも、あいつは大した才能とか持ってないし」

茉紀の一樹に対する評価が低いことに女子生徒は苦笑いする。当の茉紀はこれが当然の扱いという顔で軽く背伸びをする。

「遠くで良く見えないけど、見た目はどう？かっこいい？」

「んー、顔は別に悪くないけど、性格はダメね。レディーに対する態度が全くなってる。都会に行けばあんなのよりもっといい男に出会えるよ」

ほんの少し自分の記憶を探り、一樹の普段の姿を思い浮かべる。が、すぐに不良品を見るような顔に変わり、今度は両手を握り指を絡ませ、目を閉じて笑顔に変わる。

きつと彼女の中では、都会に住んでいる理想の男性像が微笑みなが

ら手を振っているのだろうか。その姿を見てさらに女子生徒は苦笑いをこぼす。

「つてか、まさか一樹を狙ってんの？」

ここまでの会話から茉紀は一樹を彼女は気に入らなかつたのかと考えた。信じられないと言わんばかりに身を乗り出して問う。

「違うって。茉紀ちゃんが里浦先輩のこと話してるとね、大体愚痴つてばっかだけど何だか嬉しそうでさ。それこそ、茉紀ちゃんは里浦先輩のこと好きなんじゃない？」

手を振ってその問いに否定する。逆に茉紀に問いを投げ返した。

「え、は？いやいや、それはないから。絶対無いから。大体、あいつは普段の……」

予想外のボールに驚く茉紀。だが、冷静にキャッチして、いつも通りの愚痴をボロボロ出し始める。

今日も色々出そうだなと女子生徒は思ったが、今度は苦笑いではなく正真正銘の笑顔が出た。

「つと、ここで授業は終わりだな。明日はこの続きから。んでこのままホームルーム始めるから座ったままで」

終了の時刻を伝えるチャイム。学ぶ生徒の糸をカマイタチのごとく切って、一気に机に伏せたり椅子の背もたれにダラツとさせる。

今日は口頭で用件を言うのではなく、あらかじめ持ってきたと思わ

れるプリントを人数分配り始める。

みんなに渡ったことを確かめて大塚先生は口を開く。

「もう6月になって、あと一ヶ月ちよいで夏休みだ。で、その時に開かれる祭で行う『おふねひき』に使うおじよしさまの制作の助っ人を募集する」

この地域では定年夏祭を開催し、その時におふねひきも行っていた。おじよしさまはその儀式に必要な木製の人形なのだが、近年この地域でそれを制作していた人たちの高齢化が進み、若者は都会に出て夏も帰ってこないなど、人手不足なのだ。

そこで、それを手伝うべくしてこの学校は中学1、2年に声をかけている。高校受験の時に出す書類に書けるぞ！とか言って毎年なんとか人を確保している。

「後々期末とかもあるし、そもそも乗る気しないとは思うが……。是非やってくれる人がいるならとてもありがたいのだが」

先生も先生であんまりやる気が伝わってこないのだが……。それでも地元によく貢献できればいいのだろう。彼なりに呼びかけようとしている。

「とりあえず、今のところやってもいい人は手を挙げてくれ」

そう言うと、すぐに手が上がった。澄滯だった。

それ見ていた一樹も前を振り返って手をビシツと挙げた。

幹大と隆広、里実も興味本位で手を挙げる。

「んーと、現段階では6人か。去年より全然マシだな。じゃあ、期日までにやりたい人、考えてる人は髪を提出してくれ」

6人。澄滯はまわりを見る。

そこには手を挙げようとせず、知らん顔でボーツとしている海遥と洋斗がいた。



## 第十話 参加者は今日も話す

「んーと、なるほどねえ」

椅子の背もたれを引いてドカッと座る。少し、というか周りの人にとってはかなり多く書類やらプリントやらが散乱している机に、今朝集めた『おふねひき 制作参加表』と書かれた紙を置く。

紙といつても、提出用に指定されたところを切って出している。極端な長方形で、形はさながら短冊のよう。

「おお、今年はなかなか集まりましたね」

横から声がかかる。隣の席に座る阿波先生だ。

しつかりとした声からは、体育の先生というイメージが裏付けされていると感じる。

「そうですね。9人。去年なんかは……、確か二年生が3人だけでしたもんね」

横を向き、背もたれに寄りかかりながら苦笑いになる。

去年も大塚は二年の担任をしていたのだが、この制作の手伝いに名乗りを上げたのは3人。そして一年はゼロ。

大体は予想通りだったし、何十人も来られても逆に困るので問題は無かった。けれど、今年は今まででナンバーワンの参加者だった。3人が妥当だった去年、笑えてくる。

「今年は海っ子の影響もあるかもですねえ」

「はっはっは。その通りだな。体育でも最近やっと仲良くなってきたと感じます」

阿波は愉快そうに笑いながら、自分の仕事を進めていく。ボールペンを難なく爽快に動かす。

「そうなんですか。まったく、最初はどうなるかと思いましたが、それなら安心ですわ」

初日に起きたもめ事。後日その時の様子をクラスの女子が伝えにきた。また隆広たちか……、と新学期早々ガツクリきたが、そこら辺は生徒に頑張ってもらおうということにしていた。

それが今となっては仲が良くなっている。それは朗報だ。とりあ

えず悩みの一つが解決して体が少し軽くなった気がした。後は……。

「大塚先生。うちのクラスでも2人参加しますよ」

自分の思考を止め、声がかけられた方向を向く。そこには一年の担任をしている女性の先生が、参加表と思われる紙を2枚ヒラヒラさせながら立っていた。

「おお、本当ですか!」

「こりやたまげましたな」

2人揃って何故かその紙に視線が行った。この学校のレコードがさらに塗り替えられた瞬間であった。

「にしても、一年生から出るのは珍しいですな。大体二年生が出るというイメージでした」

阿波の意見に大塚も頷く。特に人間関係には問題ないが、こういう自主参加の行事は二年がだいたい割合を占めていたのだ。これに関してでは、何年かに1人出るかどうかと言われていたほど。

「とりあえず、今年は安泰だ。実行委員の方たちも喜ぶでしょう」

立ち上がり、手を伸ばして一年の担任から参加表を貰う。11枚の紙を並べ、専用の紙に氏名を書き写していく。

書きながら大塚は自分がこの事に不思議と嬉しきだけではないと気づく。目の前にある紙。一年も二年も授業を受け持っているので、書いてある名前からすぐに生徒の顔が浮かんだ。

そして、この感覚の正体は意外な結果が生むものだ結論づける。

おそらく参加するだろうと思っていた生徒が参加せず、参加するとは思っていなかった生徒が参加していた。

「んで、早速明日からおふねひきの作業が放課後に始まる。参加表を提出した生徒はジャージを持ってくるように。集合場所は玄関前だ」  
大塚が教卓に手をつけて話す。窓を開けても解決しない蒸し暑さ  
で長袖をまくっている。

「時間は記載の通りだ。では、終わり」

決まったフリーズで帰りのホームルームを終える。里実が起立の声をかけて皆が立ち上がる。そして礼の声で皆が合っているように合っていない”さようなら”が教室に広がる。

椅子を机の上に入れて後ろに動かし始める。無論、めんどくささが故に上げずに動かす生徒もいれば、そもそも動かさずに颯爽と教室を立ち去る生徒もいる。

今週の教室清掃当番がしやうがなく引きずって動かす。

「いよいよ明日からかー」

学校からの帰り道なのに、澄濤がまるで遠足気分のようなだ。それを見て沙月は苦笑いをこぼす。

「澄濤ってば、何だか楽しそうね」

「だってさ、前まで見てたものを私たちが手伝えるところと思うと何だか嬉しくて、楽しくて」

おふねひきを彼ら五人は地上に出て見たことがあった。その時に  
見ることができたおじよしさまの木像の精巧さ、船に立つ男たちが歌  
う『おふねひきのうた』の体が痺れるほどの歌声。小さい頃の彼らに  
衝撃を与えるものには充分だった。

それを澄澤は今でも覚えていいるのだ。それに参加できるだけで嬉  
しさが出てくるとなると、実行委員が長年受け継いで行ってきた甲斐  
があるというものだろう。

「それにしてもさ、お前は何で参加しねーんだよ」

航大は眉をひそめて海遥の肩に手をかける。顔が極限まで近づい  
て、海遥は顔を逆に遠ざけようとする。

「別に俺のかつてだろ。義務じゃない」

「けどさー、洋斗も参加したんだぞ」

肩に回してない方の手の親指で後ろにいる洋斗を指さす。  
とりあえず、で参加する人が手を上げたが洋斗は上げていなかっ  
た。

それは親の許可が出ていなかったの、その時判断できなかったの  
だ。彼自身、そう簡単にこういうものに許可を出すような親じゃない  
とわかっていた。

その夜に相談したところ、少し話し合ったが許しを貰った。洋斗も  
少し驚くほどだったが、感謝してはんこを紙に押ししてもらった。

「洋斗が参加するからって、俺もっていうことにはならない」

「で、でもさ。そんなに仲良くしようとしないと、みんなと友達になれ  
ないまま卒業しちゃうよ?」

頑なに拒否する海遥に沙月も心配をしている。誰が見ても孤独の  
方へと逸れていくのを放っておけない。

そろそろ海へと入る場所の手前で航大の腕を振り払う。その様子  
から少し苛立ちがうかがえた。洋斗以外が目を見開き、驚きとほんの  
ちよっぴりの恐怖を感じた。

「だからさ、俺がどうしようって俺の勝手だろ?」

顔だけ後ろを向く。目はいつもより細くなり、声からも苛立ちを讀

み取れる。が、彼の視界に映ったものを見てすぐにハツとする。

「お前らがしたいようにすればいい。俺はいなくてもいいんだよ。

……俺は、お前らが楽しそうなら、それだけでいい」

刹那、視線をそらして申し訳なきように言う。

そのまま歩き出し、海へと飛び込む。

「お、おい」

後を追うように航大と澄濤が続けて海へと飛び込む。

それに続いて洋斗が飛び込もうとしたが、立ったまま動かない沙月に気づいて、止まる。

「……沙月？」

少し俯いたままの状態で、何だか今にも泣きそうな表情な沙月を見て、洋斗は首をかしげる。

「……え、あ、ううん。何でも無い」

パツと表情は変わるが、ぎこちない笑顔だった。洋斗の横を通り抜けて海に入る。

「……」

洋斗は少しだけ波紋を生み出したところを眺めて、自分も海に入った。

「お前もやるとはね」

「一樹だって、面倒だって言ってやらないかと思ってた」

「こちらも帰り道。一樹に大生、里実と茉紀。それに加えて今日は幹

大と隆広もいた。隆広が足で前に進む自転車の後ろに幹大が座っている。

「まったくだぜ。一樹はいつになくやる気だね。……って、もしかして俺はデキる男子をアピールしたいのかい？」

隆広がニヤニヤしながら一樹にいつもの冗談を放り投げる。

だが、その冗談は一樹にとっては自分の心を見透かされた一球のように感じられて、内心驚く。でも、隠しきれておらず、変な声が出た。「ち、違うって。ただ、貢献したっていうか、さ」

「はは、俺と同じだ」

笑いながら幹大が片足のかかとで自転車の後輪あたりをつつく。彼は最近少し雰囲気が変わったと一樹は感じていたが、この笑い方は相変わらずのものだ。

「それこそ隆広がデキる男アピールでしょ？」

大生がさりげなく冗談を投げつける。

「ハハハ、そうだよよくわかったね大生くん。僕の圧倒的活躍にみんなは圧倒的感謝するだろうさ」

「それでさ、気合いを入れるために隆広は体育着じゃなくて、パンツー丁でしょ？」

「ハハハ、そうさ。僕のこの圧倒的ナイスボディを……」

「えー、キモーい」

「キモいです」

特にこれといった感情を出さないまま大生が冗談を投げて、それを”圧倒的”というワードを使いたいのかわからないが、それでボケ返す隆広。そこにキモいを2発投げる2人の女子。

キモいとかやめろよ、と隆広が笑いながらもツッコむ。それで一同も笑う。

彼らは足を進めてそれぞれの家へと向かう。

こんな生活が、笑いの絶えない日々が、あればそれでいい。

でも、それが永遠に続くとはない。それは誰もが気づいている。

だからこそ、この瞬間を楽しみ、噛みしめる。

そう、楽しむのだ。躊躇してはいけないのだ。出し惜しみなんてせず、笑い合うのだ。

だって、そうだろ？ いつこの日々が終わるなんて誰にもわからない。

それが、すぐ先にまで来ていることさえも。

## 第十一話 気づき

今日も天気は晴れ。適度な雲が漂い、生ぬるい風が流れる。

太陽から差し込んでくる光が暖かいから暑いと既に感じ始めてはいるが、だからといって浴びないように外から出ないという訳でもない。

体育の種目は一、二、三年ともに水泳へと変わった。動くとすぐに汗で濡れる体育着から学校指定の水着になり、去年より自分の体が成長したかどうかがなんとなくわかる。

が、夏が近づいているとはいっても毎日が暑いわけでもなく、時には曇って涼しい日もある。それ故、その日に水泳があると生徒は皆入りたがらない。けれども先生は水温をきちつと測って、入るか否かを決める。おまけに授業中は殆どプールに入らないときた。若干の理不尽さを生徒たちは覚えるものだろう。

「よし、帰りのホームルーム終わり。おじよしさま作り参加者はこの後体育着に着替えて、裏口に集合な―」

明日注意すべきことなど口頭で説明し、ホールルームを終わらせる。大塚は手を軽く数回パンパンと叩いて終わりを示し、里実に号令を促す。

当たり障りない号令と共に生徒たちがばらばらのお辞儀をする。そして直ぐさま喋り声が教室内を飛び交い始める。音量を小から急に大に変えたようだ。大塚は無意識に思う。

机を引きずって後ろに下げたため、足の部分と床が擦れる音も重なって、不格好なオーケストラ状態だ。

「おい、海遥」

机を下げてすぐにバッグを肩にしょって、スタスタと教室を立ち去ろうとする海遥に声がかけられた。

「何？」

自分に声をかけた航大に少し疑問を浮かべるような目つきを向け



る。だが航大は航大で何を次に言っているのかわからない様子だった。目線を左右に動かして、手が自然と頭をかく。

「……いや、俺はおじよしさま作りに参加してないから、いてもしょうがないだろ」

「あ、おう。……じゃあな」

参加しないなら帰る。至極正しいことを突きつけられ、航大は大したことは言えず、彼に手を振っただけに終わった。

海遥は無言で手をほんの少しだけ振って教室から出て行った。

大きいため息をこぼし、航大はまた頭をかく。

「なんだろうなあ、どんどん海遥が孤立していくよ。しかも洋斗がやるっていうことは、お前のぼっちがうつったかな」

「おいふざけんな」

彼としては海遥を心配して言ったつもりだったが、洋斗にしてみれば自分に対する悪口にしかな聞こえなかった。眉をよせて鋭い目つきを航大に向ける。

「別にこれは自由参加だろ？強制じゃないし、何も心配いらないだろ。俺は掃除だからお前らはとつとと着替えてこいよ」

教室後ろの掃除ロッカーから逆T字型のほうきを取り出し、三人を先に行かせようと促す。

三人とも軽く頷きながら各々の鞆を持って教室から出て行く。

海遥は淡々と足を進める。いつもとほぼ変わらない時間帯なのだが、一人しかいないからだろうか、どこか変な感覚がする。

一步一步前に進むたびに聞こえる自分の足音。この通りを通学路にする生徒自体ごく少数しかいないので、よりはっきりと聞こえてくる。

その音が無性に耳障りになってくるのには自分でも少し馬鹿馬鹿しいと思つたが、途端に悲しくもなつた。

他の四人は、なんだかんだで陸の人々と馴染んできている。生徒同士話し合つたり、笑い合つたり、時には遊んで。

海の時の学生生活とほぼ大差ない毎日を通がせていることはとても嬉しく感じる。むしろ、海より人の多い陸の方がよりよい生活になるのかもしれない。

それに比べて自分はなあ、と海遥は自分自身を笑いながらため息が出た。

わかっているのだ、陸の人々は悪いやつらじゃない。変にボケてるやつもいるが、それは俺らを信頼しているからこそなのだろう。

みんないいやつらだ。だから澄濤も航大、沙月も洋斗も、受け入れているのだ。それこそ、おじよさま作りに参加している。陸を避けている俺なんか加われるわけがない。

十分伝わっているのだ。ここまでしてわからないほど能なしではない。澄濤や沙月が心配して言ってくれた言葉も、つい苛ついたまま返してしまっている。

申し訳ないと思つている。頭を下げ謝るくらいだ。けど、それでも俺は……。

そう考えているうちに、埠頭まで着く。と、同時にハツと何かを思い出したようで、制服のズボンを探つて財布を出す。

お札を入れるところから一枚の折りたたまれた紙をだす。

「そういや、買い物するんだった」

回れ右をして海遥は目的の店へと向かった。

埠頭から大して距離はなく、数分で着いた。

スーパー・マツシゲ。ここがよく使う店だ。大体の食糧をここで買っている。自分で冷蔵庫を見て、足りないと思ったときや父に言われた時に、学校の帰りがけに寄っている。

そしてここで自分の知っている人が一人アルバイトしているのだが……。

店が見えてきたとき、その知っている人物の後ろ姿が見えた。けれど、その人物のすぐ側で話している男性がいた。二人とも笑いながら話しているようだ。

すぐに話が終わったようだ、男性の方が手を振ってその場から離れていった。知っている人物もその場から店内に戻ろうとしたところで、海遥と目が合った。

「あら、海遥。おかえり」

「どうも、汐帆ちゃん。さっきの人って、知り合い？」

笑顔でこちらに手を振ってくる汐帆にこちらも手を少しだけ振る。そして先程の男性について聞いてみるのだが、なんだかやけに動揺していた。

「え？え、いや、別に、いつもご利用なさってくれるお客様ですけど？何か問題でもありませんでしょうか？」

「お、おう。ないけど」

彼女自身は平然を装っているのだろうが、誰から見ても平然じゃない。いつも海遥に対する話し方から逸脱している。海遥は少し困った顔になる。

「い、いや。そんなことより！みんなとは一緒じゃないの？」

何故か顔が赤くなっていた汐帆だが、両手を振って話題を変えてきた。やはり小さい頃から一緒にいる姿を見ると、一人でいるだけで不思議がられるのかなあ、と海遥は若干の鬱陶しきで目をそらす。

「あいつらは、学校でおじよしさま作ってる」

「……ああ。そういうえばこの人と白風の希望者で作ってたね。私はやらなかったけどさ。で、海遥もやらないの？」

「そうだよ。別に何もおかしくないだろ？自由参加なんだから、あいつらがやりたいならやる。俺はやりたくないからやらない」

ただそれだけのことじゃないか。五人揃って同じことをやらなくてはいけないルールがどこに存在するというのだ。

そうさ、おじよしさま作りに参加しなかっただけで罰せられるわけでも、町が危機にさらされるわけでも、世界が変わるわけでもない。

これ以上何か言われるのを避けるために海遥は店内へ入る。店番は汐帆しかいないようで、汐帆もすぐに入ってきた。

今朝メモに書いてきた食材や菓子を買う物カゴに入れ、会計をする。特に汐帆から言及をする様子はなく、今はこの店員としての姿だった。

買った物が入ったビニール袋を受け取り、店を出る。後ろから「また来てねー」と声があったが、海遥は後ろを振り返って手を振ったりなどはしなかった。

ビニール袋から買った菓子の1つを手を取った。たまに買うココアシガレットだ。箱を開けて一本取り出す。

「……へえ、そうだったんだ」

海遥はぼつりと呟き、シガレットを口にくわえて、折った。

ギーコ、ギーコとそこら中で鳴っている。

ここは学校の裏にある山の中。と言っても学校からすぐの場所にあるので迷うことない。

ここで木々を必要な分だけ測ってノコギリで切っている。勿論何人かで強力して行っているし、大塚や阿波、長年おじよしさまを作ってきた人もいるので安心して作れる。

「ここはこう切るんだ。押すんじゃなくて、引くようにするとうまく切れる」

ノコギリを闇雲に扱って切っている航大に、大生が丁寧に教える。それを領いてちゃんと聞き航大はそれを実践する。

すると今までうまく切れなかったのが嘘のように、あっという間に切れた。航大自身も驚きが顔に出ている。

「おお、本当だ」

「大生くん、よく知ってるね」

航大が切る木を両手で押さえていた澄滯も目をぱちつと開いている。る。

「まあ、色々とこういう作業やってきたし」

大生は大して自慢げにすることなく、変化しない表情のまま後ろを見る。大塚と共に木を切っている男性と目が合う。男性の方は少しだけ口が緩まる。

この男性、おじよしさま作りを長年行ってきているこの方は、大生

の父なのだ。父の作業を手伝ったりしているため、既にノコギリの使い方を会得していた。

「久しぶりに大生。パパ見たよね」

こちら木を押さえる係をしていた茉紀。目の前で木を切る担当をしている一樹にそう言うが、当の本人は何だか必死で聞こえていないようだ。

「……一樹?」

「つしや!こつちの木は全部切り終えたぞ」

最後の木を切り、端つこの部分がコトンと落ちる。一樹はノコギリを持っていない左手を突き上げる。

「お疲れ」

航大たちに教えていた大生が一言。表情はほぼ変化していないが、長年の付き合いであれば少し笑っていると思われる。

「おお。一樹くん、こうちゃんより全然切るの早いね」

こちらを向いて澄滞がこれまた驚いた様子で言う。この発言は航大をさりげなく「切るのが遅い」と言っているようなもので、航大は一樹の作業の早さの驚きとその発言に対するダメージで顔の表情がコロコロ変わる。

「一樹ってどこか不器用な感じだと思ってたんだけどな」

「へへん。案外こういう作業は好きだよ」

「とか言っちゃってさ、細いのばかり切ってたんじゃないの?」

「幹大たちはサボってないでさっさと切れ」

横で茶化してくる幹大と隆広は木の幹に寄っかかりながら笑っていた。一樹はその姿を見てがくつと肩を下ろして呆れた視線を向けた。

あらかた切り終わり、木々を長さごとに整理していた。単純作業

だったが、時間は意外と経っていて陽が赤くなり始めていた。

「よし、この辺で今日は終わりにしようか。仕分けとかは先生立ちでやっておくから、お前らは帰っていいぞ」

大塚たちの許可の元、おじよしさま作り1日目は終わった。

道具等を片付けて、一行は着替えるために更衣室へと戻り、着替えを済ませて下校する。

海の四人組は今日も固まって帰宅をしようとする。沙月が下駄箱から靴を出そうとしたとき、自分の名前が呼ばれた。

「どうしたの、里実ちゃん」

その人物は里実だった。沙月自身からは特に彼女から聞かれる様なことは思いつかなかったので、首をかしげた。

「えっと、ね。前にうちの後輩から聞いたんだけど……沙月ちゃんって、誰か入院してる？」

突然言われたその発言に沙月は驚いて目を見開く。当然、クラスにそのことは伝えていなかったからだ。

「いや、病院に向かっているのを見たっただけで……」

「……ああ、うん。そうだよ。おばあちゃんが」

ただの憶測だが、自分を心配して言ってくれているのだとすぐに察した沙月はホツとし、少し笑う。

「そう、だったんだ。なんか不安そうな顔してた時会ったし、心配になっちゃって」

「大丈夫だよ。里実ちゃんが心配することないって。それに、そんなに症状重くないし」

リラックスした状態で説明する沙月の様子を見て、里実も安心した。これで自分の中にあるモヤモヤは晴れた気がした。

靴を履き変えて、里実と手を振ってわかれる。校門には三人の姿が見えた。

少し待たせたな、と思って沙月は少し早歩きで向かった。

## 第十二話 深海ほど暗くて見えないものはない

次の日はどんよりと曇っていた。一面うつすら灰色が混じった白が空を覆う。じんわりとした太陽の光はどこにも見えない。

今日の塩分濃度は大したことなくいつも通りだと天気予報は言っていた。支度を済ませて玄関を出たときに舐めて確認をした。

航大は右肩にのみバッグをしょって歩く。もう慣れたこの道から様々な人の生活がうかがえる。たまに遅れそうになって見ている余裕がない日もあるが、彼らもほとんど変わらない日々を送っているのだとわかる。

少し歩いていくと目的地が見えた。今日は珍しく早く着いたようだが、先客がいるようだ。付近にある石壁に寄っかかって何かを考えている風に見える。

「ウィッス、海遥」

「……おう、おはよ」

航大のあいさつに海遥は少しだけ遅れて、航大をチラツと見て返事を返す。どうやら深く考え込んでいたようだ。

「どうした、何か悩み事か？相談相手になってやんよ」

「いや、別にそういうことじゃない」

航大はそう言いながら海遥の隣に寄っかかる。海遥は視線を足下に向けたままだ。

「何だよ、昔からの仲の俺にも言えないってことは……恋か！とうとう海遥も」

「ちげーよ」

どうやら航大の頭の中で勝手な想像が走り出してしまったようだ。流石に予想外だったようで、呆れた顔で航大を見る。

航大が何か続けて言おうとしたところで洋斗が来た。少し遅れて澄濤と沙月が到着し、学校へと向かった。

航大は海遥の悩んでいることについては特に触れなかった。学校に着いてからも、授業中や休み時間なども朝と変わらず考えているようだったが、海遥が素直に言わなかったことは追求してもしょうが無



いという結論に至った。

本日の授業も終わり、放課後になるとすぐにおじよしさま作りが始まった。

1日目であらかた材料となる木は切り終えたので、今日からは美術室での作業になる。昨日切った木々をさらに切って調整していく。それらは男子たちが行い、女子たちはおじよしさまの衣服を作り始めた。

この日は大生の父や先生たちはいなかったが、歴代ナンバーワンの人数で作業はなかなかの進み具合だった。

「いやー、俺ってば才能あるね」

「俺だって負けてねーぞ」

幹大と一樹は木をどれだけうまく、且つ早く切れるかの勝負をしていた。同時にスタートしてノコギリを両者ともに引いて押してを繰り返す。

「おおーっと、両者譲れない戦いを繰り広げているうー！」

隆広に関しては、切った時にできた木の切れ端をマイクに見立てて実況していた。実に彼らしい。

そんな男子の方を見ていた女子は布にチャコペンシルを使って線を書いていく。

「あはは、にぎやかだね」

「まったく、指切っても知らねーぞっての」

里実は苦笑いをしながら、茉紀は呆れた様子で作業を進める。そんな時、澄濤はフフッと笑った。

「どうしたの?」

「フフフ。だってね、みんな楽しそうなんだもん。みんな笑ってて、そしてこうやってみんなと協力しておじよしさま作ってる。とつても幸せそうだなって」

男子たちがふぎけあっているこの状況を、澄濤は彼女らと違う捉え方をしていたようだ。ぽかーんと口を開けて固まってしまった。

「……?あれ、どうしたの?」

「……いや、あんたはただの天然だけではなかったようね」

沙月はまじまじと澄澗を見る。

「こういうところも澄澗ちゃんって可愛い」

里実はニツコリと笑いながら澄澗を見る。当の澄澗は自分が何か特別なことを言ったのだろうかと思問そうに首をかしげた。

「それはそうと、澄澗先輩が通ってた海の学校の方はどんな感じだったんですか?」

茉紀の隣で作業をしていた女子生徒、山瀬砂奈やませさなが澄澗に聞く。

今までで何回か海での生活についてを質問されたことがあった。自分らでは呼吸すらできない未知の世界の中で生きる澄澗たちが、陸の人間にとっては気になるのだ。

「んーと、特に陸とは変わらないと思うけどなー」

「そうね、海独特のカリキュラムみたいのは無かったと思うけど。でも、人数は圧倒的にここが多いわよね」

「え、そうなんですか!」

少し上を向いて記憶をかき分け始める澄澗。横にいる沙月も考えてみたが、そのくらいしか思い浮かばなかった。

”そのくらい”のものに、澄澗はそういえばそうだったねと軽く頷いたが、陸女子たちは目を丸くして驚く。

ここから少し遠くへ行った街には何校もあり、クラスも何クラスが存在していることは知っていたからこそ、自分たちの学校は人が少ないと思っていたのだ。

「小学校の頃はまだいた方だった気がするんだけどね」

「そうそう。確か隣にもクラスが1つあったし、一クラス25人……くらいはいたよね」

再び澄澗が自身の頭をフル回転させ、過去の記憶を遡る。目をつむって頭の両側を人差し指でクリクリ回しながら出した記憶はどうやら間違いないようだ。沙月が頷いている。

「え、そんなにいたのなら他の人たちはどこの中学に行ってるんですか?」

茉紀がさらに素朴な疑問を投げかける。それは当然のものだった。

20人以上のクラスが2つあったといわれる果那ノ海から、何故ここに来たのは4人だけなのか。久里ノ上には中学校は1つしかない。この白風中学校だ。

しかし、その回答がすぐには返ってこなかった。澄滯は口を開くが、困った顔をして口を閉じてしまった。

「……出て行っちゃったんだよ」

そう、言ったのは沙月だった。その様子はどこか寂しさを感じる。チャコペンシルを机において、膝あたりで両手を握った。

「勿論、全員が海を捨てたとか、そういうわけじゃないけどね。……あの事故の影響が強いとは思うけど、家庭の事情とかで陸に出たり、中には他の海村に入った子もいるって話だし」

沙月は慌てて笑顔を作って、手で誤解を招かないでと言わんばかりにジェスチャーをする。果那ノ海を嫌う人ばかりいたと思わせたくなかったし、変に空気を重くしたくなかった。

そう思っただけで弁解した沙月の言葉は彼女の予想とはかけ離れた反応、3人揃って余計に疑問そうな顔をしていた。

「ちよ、ちよっと待って」

掌を突き出して話を止めたのは里実だった。

「えっと、なんか色々わけわかんなくなっちゃったけど……。出て行った、ってその言い方とか、あの事故って……」

「土砂崩れだよ。2年前にあっただろ？」

丁度里実の左横から質問の回答が来た。

振り向くと、航大が机の上に座って腕を組んでいた。視線は彼女らと合わせずに窓の外を見ていた。

「久里ノ上駅と魚喰駅の区間で起きた土砂崩れ事故。その時丁度通っていた列車も巻き込まれて死傷者が出てる。その時落ちてきた土砂は果那ノ海にまで落ちてきた、って聞いた」

大生も作業を止めて椅子に座っていた。この時でも変わらない表情で自分の記憶から事件の大まかな内容を話す。

航大は黙って首を縦に振る。

「大生が言ったとおり、土砂が果那ノ海に入ってきた。デケー石とか色々落ちてきたが、幸いその時は死者はいなかった。住居はそんなに多くなかったし、みんな出かけてたんだ。」

まあ、それで終わればよかったんだがな。原因はわからないけど、前々から地震とかが多くなっていた。その時から土砂崩れの心配をする人もいたけど、大丈夫だって宮司さんとかが言い聞かせてた。でも、いざここのうことになったらどうしようもなかった。次いつ土砂崩れが起こるかわからない、今回は運良く人のいないところに落ちたけど、密集地にでも落ちてきたらどうするんだ、とかね」

2年前に起きた土砂崩れのことは、この場にいた全員が記憶にある出来事だった。だが、それが果那ノ海にどういう影響を及ぼしていたかなんて、陸の彼らのほとんどは考えもしていなかっただろう。

「それで『こんなところで突然死ぬより、別にどこかに言った方がマシだ』と誰かが言い始めて、それにかき立てられてそろそろ出て行くことを決定していった。それらの中心は、子供を持った家族だった。子供を安全な場所で生活させてやりたいってのは最もな意見だ。だがその結果は、果那ノ海の人口減少だ。小学校卒業ぐらいはみんないたけど、中学を上がったときには俺らしかいなかった」

知らぬ間に起きていた衝撃の真実。果那ノ海の人口減少についてはなんとなく聞いたことのあるような感じだったが、原因が土砂崩れにあったのだ。陸の彼らは、ただただ聞くことしかできなかった。そして小学生とはいえ、海の彼らは友達が次々と離れていった中で普通に生活していたと考えると、陸の彼らはなんとも言えない胸の苦しさを覚えた。

「中学一年はそれで過ごしたけど、5人だけよりもっと大人数でのふれ合いとかが大切だ、つてなつて俺らはここに来たつてことかな。そもそも学校側としてもやっていける状態でもなかったしな。金とか」この教室にだけ、少しだけ重力が増したかのような感覚だった。それが航大にはとても苦しかったようで、声を大きくして両手を頭の後ろで組んだ。

その時、学校のチャイムが午後5時を告げた。

「あーあー、もうこの話終わり！俺らは残ったから今ここにいる。それだけだ。さて、片付けようぜ」

航大は手をパンパンと叩くと、みんなで片付けを始める。彼らにもとりあえずいつも通りに戻る。作業とまっちゃんやったなー、とか色々言いつつも片付けを終え、美術室の部屋を閉じた。

「あ、私おばあちゃんのお見舞い行ってくるから。先帰ってていいよ」

まもなく埠頭にたどり着くあたりで沙月が3人に言う。

「さっちゃんのそばあちゃん、明日退院なんですよ？」

「うん。医師の人も問題は無いでしょうって言ってたし」

「おお、良かったじゃん。んじゃ、よろしく言っといてくれ」

「うん、じゃあね」

3人と手を振って分かれる。そのまま海とは反対方向に足を進める。入院してから何回も通った道を重ね塗りのように歩く。

退院ということは、明日でこの道とは最後。それは彼女のおばあちゃんが健康になったということだ。それだけで嬉しいことはない。

少し早歩きで目的の病院に着き、カウンターで見舞い者名簿に名前を記入して用紙などをもらう。

カウンターの近くの階段から昇って三階へ。右に曲がって行くとナースステーションが見える。そこをまた右に曲がると病室が並んでいる。そのうちの一部屋を目指す。

もう慣れたその部屋の前で止まる。ドアは開いていて、そのまま入る。奥のベッドにおばあちゃんが寝ているのだが……。

「あ、あれ？どうしたの？」

そこにはおばあちゃんと、壁にもたれ掛かって立っている海遥。それに椅子に座っている海遥の父の和洋の姿があった。

## 第十三話 指摘

「あ、あれ?どうしたの?」

沙月は予想外の先客に目を丸くした。事前に知らされていなかったし、それよりも来ていた人物に驚いていた。

いつもはおじよしさまの準備に不参加のために一足先に帰っていた海遥がいったい何をやっていったのかなんてわからなかったが、こうも突然目の前に現れると思いの外ビックリするものだ。

でもその場に海遥だけではなく彼の父親もいることを考えれば、案外その理由がわかった。

「明日退院なんですよ?僕は宮司でもあり果那ノ海の村長的なポジションだから、様子を見に来てるんだよ」

和洋はこちらに顔を向けて優しく笑った。昔からのなじみだから父親も昔から見てきたが、この普段感じる優しさは相変わらずのものだった。

寄つかかっていた海遥がこちらに歩いてきた。病室なので大した距離はなく、あつという間に近づいた海遥は沙月に手を伸ばす。

「!?」

「いや、その持ってるやつに入れるから」

自然とドキツとしてしまった。海遥の視線の先には今日のためにと持ってきた着替えを入れる袋。看護師さんかもう既に家に持ち帰る分を、一回り小さい袋にまとめてくれていたようだ。それを海遥が沙月から受け取った袋に入れた。

「え、なんでこれに入れるって知ってるの?」

「さっきまでいた看護師さんが言ってた。今日持って帰るからって」  
そうだったのか。まるで海遥が何でも知っているようで少し驚いたが、それなら納得いった。なおさらビクついた自分が恥ずかしくなってきた。

「今日までお見舞いありがとうね、沙月」

「ううん、当然だよ」

沙月は首を横に振る。入院したときは心配でどうにかなっていました

いそうだったけれど、今はもう安心だ。明日退院できる。またおばあちゃんと家で生活できるのだ。

「おばあちゃんが元気になってくれるなら、私は嬉しい」

沙月の笑顔を見て、おばあちゃんも笑う。

「そうかい、そう言ってくれるとおばあちゃんも嬉しいよ。今日も色々お話したいところだけど、明日の楽しみにでもしとくよ。日が暮れるし、今日はお帰り」

窓から窺える空はもう茜色に染まっていた。どこか心が落ち着くような光は病室にまで届いている。

「うん、わかった。明日は家族みんなで来るからね」

そう言っ手て手を振りながら沙月は荷物を持って病室を後にする。海遥と和洋も退出した。

陸と海の境界線をくぐる。なんてことないことだけれど、今日は何だか違う感覚を肌が覚えた。夕日で染められた海の中もそれは美しい。

和洋は用事があるとのことと途中で分かれる。残った2人でいつも使っている集合場所のところを目指して泳ぐ。そういえば、この2人で帰ることなんて初めてかもしれない。

体勢を変えて、地面に着地する。いつもはここで方向が分かれる。

「んじゃ、また明日」

海遥はこちらを振り返って手を振る。それに答えて手を振り返すのが常だろう。

けれど。

「ねえ、海遥」

返したのは、言葉だった。勿論腕の振り方を忘れたとかそんなトンチンカンな理由じゃない。無意識というか、そう自分が勝手に声を出したのかもしれない。

「ん、どうした？」

手を下ろして海遥はこちらの用件を待つ。下ろした反対側の手を七分丈のズボンのポケットに入れてある。上は黒のポロシャツ。なんだか海遥の私服姿を見るのは久しぶりな気がする。

「……ううん。何でもない」

今はその時じゃない気がしてきた。わかっている。わかっているからこそ、今は違うんだ。

「んだよ。今日は何か変だぞ。変なモンでも食ったか？」

「もう、違うってばー」

海遥は期待外れの回答に少し呆れながらも、笑って沙月に冗談をふっかける。そのニヤツとした表情さえも久しぶりだ。陸では決して見たことがない。変に懐かしさが浮き出る。

海遥はまた手を振って帰って行く。沙月も手を振って自分の家へと目指そうとしたときだった。

「なあ」

海遥は立ち止まっていて首だけこちらを見ていた。

「何か迷ってんだったらさ、誰かを頼ってもいいんだぜ」

「……ご心配なく」

ここはあえて振り返らずに海遥に聞こえる位の声で返した。持ってきた袋を後ろに回して両手で持つ。気持ち少し早歩きで立ち去った。

さっきのでまたもや少しドキッとしてしまった。やはり何もかも知っているように感じた。

昔から海遥はみんなを見てきて、私でも気づかないことにも気づいていた。何か心配事があっても、解決出来るようなアドバイスももらった記憶がある。

いつでも頼れる。頼ってしまっていた。そしてそれは時に甘えに



もなっていたんだ。自分を、少しでも見てほしいなんて思ってたりにいた。あの時のような、笑顔で。

小さい頃はただ頼れる凄い存在だったのが、いつしかそれは違うのだと気づいた。自分がどうもしていないのにそれは膨らむばかりだった。

今ではもう確信している。そうであるほかに、いったい何が当てはまるだろうか。

私は、海遥が好きだ。幼なじみとしての好きよりも。

それから、順調におじよしさまの制作が進んでいった。あの時は変な方向に話が行ったが、特にみんなは気にしている風でもなくいつもの賑やかなムードだった。

主に男子組がふざけていたが、そのうち彼らも集中して取り組んでいた。みんな協力して何かを作り上げるその様は誰が見ても清々しいことだろう。

その頑張りのおかげで、6月の第4週にはおじよしさまの形がもう見えていた。

「サマになってきたな」

「だな」

と、一樹と航大は腕を組みながらまじまじと見る。まだ完成ではないものの、今まで頑張って作り上げてきたのが目に見えるとなんだか嬉しくなってくる。

「よし、今日は片付けて撤収するぞー」

パンパンと手を叩いて大塚が指示を出す。みんなそれぞれ使った道具等を片付けたり、掃除ロッカーからほうきとちりとりを出す。

この一体感でできぱき掃除をこなす姿を見て、普段の教室掃除とかの方も頑張ってもらえないかなあと思う大塚がいた。

掃除も終わり、1カ所の机に置いておいた各自の荷物を持って退出する。誰もいないことを確認して美術室の部屋をしめる。

帰って行く生徒に「気をつけて帰れよー」と声をかけて職員室に戻る。鍵を指で回しながら歩いていると、フフツと笑った。

「でも、こういう風にみんな頑張ってる姿を見るのもいいねえ」

今日の大塚は変に上機嫌だったとか、何かいいことでもあったとか、もしかしたら女でもできたか、などなど職員室で噂になったのはまた別の話。

「6月終わる頃には完成できそうだな」

帰り道でもこの話題は尽きない。航大は腕を頭の後ろで組みながら歩く。

「そうだね。塗装も明後日くらいには入れそうだし」

澄濤ももう既にワクワクしていた。頭の中では祭でおじよしさまが船の上で堂々と立っている姿を想像しているようだ。

「ホントね。でもここままでスピーディーに来れたのは大生君のおかげかもね。ノコギリの使い方もそうだし、おじよしさまの組み立てとか服装とか色々率先して教えてくれたし」

沙月の発言に納得と言わんばかりに皆頷いた。大生の父も仕事の都合であまり来られていないが、大生自身が代わりに指導側にたって作業をしていた。これには大塚や阿波も頼りになると評価していたほどだ。

「大生君って、凄いね。本当に」

澄濤は半分呟きのように言って笑う。そして若干顔を隠すように下を向く様子を洋斗は見ていた。

「なあ、マツシゲ寄ってかね？何だか腹減ってさ」

「こうちゃんってば、あんなに給食おかわりしてたのにな？」

航大の提案に澄濤は先程とは違う風に笑いながらも、彼女は賛成のようだ。2人も言わずもがな。

4人は途中の道を曲がって町の方へと歩いて行く。

時間は大してかからず、角を曲がるとスーパー・マツシゲの店が見えてくる。まだこの時間帯はやっているはずだ。

「今週くらいは汐帆ちゃん、いるって言ってた気がするんだよなあ」

徐々に見えてくる入り口を見ながら航大は頭を軽くかく。店内を入り口から見てみるが、探している人物の姿を確認することはできない。

「てか誰もいなくね」

「いないね」

「裏にでもいるのかな？」

沙月は一回外に出て、店の横とブロック塀の間を見てみる。そこに

は一見して大した物はないが、突き当たりから人の気配がした。

壁から頭だけ出して覗いている風に見える沙月。それから察したのか、航大もゆっくりとを見ながら抑えめの声で喋る。

「誰かいるのか」

「わからないけど、話し声は聞こえる」

2人の様子に気づいて残りの2人も覗いてみる。まわりには通行人もなく、車も通らない。ドンチャカ音を立てているような店などもっとないので、静かだ。それ故に奥で誰かが話しているのがわかった。

「行ってみる」

航大は忍者さながらの忍び足で奥へと進む。それに澄滞たちも続く。途中にあるビール瓶ケースを蹴飛ばさないように注意を払う。

突き当たり亜まで来た。航大が見る前に、後ろから来る3人に掌を出してストップの合図を出す。

それを読み取って3人はその場に立ち止まる。

航大は慎重に角から顔を出してみる。そこにいた者は……。

「ねえ、汐帆。明後日は空いてるよね？」

「もちろんだよ」

「じゃあお店終わったらさ、近くの駐車場に来てよ。あの場所に車止めて待ってるから」

1人はこの4人が知っている人物。汐帆で間違いない。そして汐帆と話している相手が問題だった。後ろ姿で顔は確認できないが、男性なのはわかる。身長は汐帆より少し高い位で、髪はさらさらしていて少し短い。

角を曲がったらある程度広い場所になっていた。ブロック塀は途中で切れ、裏の道がそこから見える。そこにその男性のものらしき車が止めてある。4人乗りの白色である。

話が終わったようで、男性は汐帆に手を振りながら車に乗る。その時に見えた男性の顔は、いわば草食系のようで細目だった。

汐帆が手を振りながら見送る。その姿を航大の後ろから皆が見つ

める。その目線は驚き一色だった。昔の頃から世話になった汐帆が陸で男とデキていたとは……。

「何してんの」

「うわああああ!!」

目の前の出来事に気を取られていたため、不意に後ろから声をかけられてビックリしてしまった。洋斗を除く3人から裏返った声で悲鳴がでた。

声の主は一樹だった。彼も学校の帰りに寄ったのだろうか、制服姿のまままだ。ということは帰りがけに食材を買ってこいと親に頼まれて……。

待て待て、今はそれについて考える場合ではない。今さっきまで汐帆が男と秘密の会話をしていた。そのあと男は車で帰って、汐帆が見送っていた。今その真っ最中。その一部始終を隠れて見ていた。

つまり今ので叫んでしまったということは……。

一同が改めて店裏を方へ視線を向けると、汐帆が顔を真っ赤に染めて大きく目を見開いていた。

「……あ、ははは。ごめんなさい、見えました」

もうこうなったら観念するしかない。こんな顔をされてしまったはどう言ってもいいかわからず、謝りながら航大たちがゾロゾロと出てくる。

「な、なんかワリイな」

一樹は4人とは別のことで謝る。奥の方でジッと固まって何かを見ていたら、それが何なのか気になるのが人間なのだ。だが、それが彼らの努力を水の泡にしてしまうなんてわかるわけもなく。4人は特に一樹を咎めなかった。

「ど、どこから……見てたの?」

汐帆は自分自身を抱きしめるように腕をまわしていた。頬は未だ赤く、目線はチラチラと向くが基本逸らしていた。

「えつと……さっきの男の人と会う約束……してたところ、かな?」

澄濤が申し訳なさそうに答える。なんとか笑顔を作ろうとしてい

るが、罪悪感でうまくいっていない。

そう聞くや否や、汐帆はこちらに近づいてきた。目線はしつかりと彼らに向いていた。

盗み聞きしていたことに対するお叱りを受けるのかと思い、航大は目をギュツと閉じた。

しかし、汐帆が近づいてくる足音が止まっても何も起こらない。不思議に思っ目を開けると、そこには頭を下げている汐帆の姿があった。ぶたれるのかと思っていた航大たちにはまた違う衝撃を受けた。

どう声をかけていいかわからず、戸惑っているところにやっと汐帆が口を開く。

「……どうか、お願いだからこのことは黙っていてください。お願いします！」

これまた衝撃を受けた。全くもってどういう訳なのかわからずに余計戸惑った。

「このことって……汐帆ちゃんがさっきの人と付き合ってること、ですか？」

やっとの事で沙月が絞り出すように言う。その確認に汐帆はゆっくり顔を上げて頷く。表情は頬の赤さはまだあるものの、恥ずかしさの様なものから真剣さに変わっていた。

「どうして……」  
「どうしても！お願いだから、とにかく……」

航大の疑問を強引に押し込むように汐帆が声のボリュームを上げた。ここまでムキになる姿を4人は見たことがなかった。余計に疑問が残る。

きつと、どこかで彼女は高をくくっていた。この状況においても、彼らをまだ小学生の時のような、無邪気な頃のままだと。だからお願いすれば通せると思っていた。

けれど、もう違う。彼らは成長している。少しずつだけれど、一歩前へと進んでいる。身体も、知識も。あのことを知っていることだってあるのだ。

「いつまでもお願いすれば守るって思ってるの？」

皆の視線が集まる。口を開いたのは洋斗だった。

「今会っていたのは、陸の人間だよね」

洋斗の確認の言葉に航大たちには理解が出来なかったが、汐帆の表情がみるみる驚きへと変わっていった。

「洋斗、何言ってる……」

「お前ら、知らないのか」

困惑のままの航大たちに洋斗は少しため息をつく。汐帆はいつの間にかまた視線を逸らしていた。一樹は、少なくとも洋斗が知っていることは汐帆の他に、この場にはいないと瞬時に悟った。

目を合わせない汐帆を洋斗は一回深呼吸してから見る。その目は明らかに敵視。隠そうとしていた罪を目の前に突き出すかのようだった。

「海の人間が陸の人間と結ばれると、果那ノ海から追放されるんだ」  
「えっ」

航大と一樹の声が重なる。澄滯は目を大きく見開き、口を手で押さえていた。

衝撃だった。海の3人と一樹は知らなかった。知る機会すらなかったのだ。汐帆は手をギュツと握っている。

「汐帆ちゃんは、このことを知ってるよね。まさかそうならないと思ってる、付き合ってるの？」

洋斗の言葉はいつもとはかけ離れた、一種の怒りにさえ聞こえた。

## 第十四話　それでも……

「ねえ、何か言つてよ」

洋斗はまるで取調室で被疑者から情報を聞き出す検察官のようだった。汐帆は未だ口を閉ざしたまま俯いている。洋斗の追及から逃れるような、怯えている様子だった。

「もしあの人と結婚したいなんて思ってたらさ、いやでも明かさなきゃいけないんだよ、このことは。それに、途中でバレる可能性だつてある」

洋斗は続ける。目線はそのまま、汐帆に向けたまま動かさない。航大たちは2人を見たまま、どうすることも出来ずにただ聞いていた。

洋斗のいうことは何も間違っていない。陸の人と付き合っていることを隠し続けても、結婚するとなればどうやっても双方の家族が対面する。その前でも、その時でも自己紹介でもすれば浮き上がってくるだろう。そうなれば特に海側の家族が大反対だろう。

また、陸で仕事をしているのは何も汐帆だけではないのだ。果那ノ海の中だけで村人全員が働けるわけではない。だから陸に上がって久里ノ上で仕事をする。そして終わったら果那ノ海に戻る。その時に汐帆が陸の男性と変に親しくしている姿でも見られたら、それこそ疑われるだけだ。

「思いを寄せる人物が陸の人間で、それが家族や村の人に知られて、それでも男の方を取るのか？あんたは二度とこの海に帰れなくてもいいのか!？」

「わかってるよ!!」

洋斗の言葉はより力強く放たれた。普段は何を見ているのかわからないような、ボーツとしている目からさえも警告を思わせる。彼から発する最大の警告。それは汐帆のためを思つてのものだとはわかってる。しかし、いつもとはかけ離れた様子に一樹は驚くばかりだが、相手のため以外にも何か奥底に淀めく感情が感じられた。

ちらりと横を見てみる。航大たちもあつけにとられているが、きつと自分と同じような2つの違和感を感じているのだろうと勝手に思



う。そして明らかに航大は狼狽しているようにさえ見えた。

だが汐帆も黙ってはいなかった。洋斗の警告をさらに上回るように声を張り上げる。今にも潰れてしまいそうな状態を必死に耐えながら。

「わかってる、わかってるよ……。洋斗の言うとおり、いつかはわかってしまう。村の掟も勿論知ってた。絶対うちの家族は全力で私を止めるだろうね。そう考える度に聡太郎君と離れなくちゃいけないんだとか、もう二度と会えなくなるんじゃないかって……。怖いんだ」

徐々に声が震えてきていた。聡太郎というのは先程の男性の名前だろう。拳も一段強く握りしめながら自分の思いを叫ぶ。

「でも、私は聡太郎君のことが好き。聡太郎君といる瞬間瞬間がとっても楽しい。ずっと話していたい。ずっと見ていたい！掟があつたとしても、誰が反対しようとも、私のこの気持ちは変わらない！変わるはずがない！」

瞳が潤み、すうっと涙が零れる。汐帆の叫びがこの場を圧倒した。一樹たちは汐帆を見ていた。いや、見ざるを得なかった。

普段は優しく元気な彼女が、ここまで本音を露わにしたのを初めて見た。それに対する衝撃も凄まじかったが、何より汐帆が発した言葉にも一樹は衝撃を感じた。心に刺さった。

海と陸とでの大きな壁。それが目の前にあつたとしても、それでも自分の思いは変わらない。1人の人間を好きになる。

今まで何となくで保っていたものとは全然比べものにならなかつたのだ。それで十分ハッキリしたものだなんて勝手に思っていた。けれどそれは半端なものだった。

今日初めて知った海の掟。海と陸とでは決して交わらないボーダーライン。遙か上まで伸びる壁を見上げて、僕は後ろに数歩下がってしまった。ずっと俺は禁忌を犯していたのだ、と。

だが彼女は違った。下がらなかつた。ただ上を見つめて、何も迷うことなく登り始めた。それが明るい未来を映しているわけでも、誰かが整備した確かな道なわけでもないのに。

汐帆のその姿に驚き、尊敬し、そして戸惑った。その揺るぎない思

いは、自分にもあるのだろうか、と。一樹はすぐ近くに立って汐帆を見つめる澄濤を横目で見る。

僕は、彼女を……。

その時、澄濤は何かを決心したように僅かに頷いた。

「……そうだよ」

小さな呟きと共に澄濤は動きだし、汐帆の前に来てから振り返った。

「汐帆ちゃんは間違っていない！人を好きになる気持ちの方が、なんて、意地悪だ」

澄濤のしつかりと見開いた目は洋斗に向いていた。洋斗は澄濤の発言に驚きの表情を見せるも、すぐに戻す。

「俺は、汐帆ちゃんが海から追放されなかったためにも……」

「ひろちゃんは、汐帆ちゃんは分かれた方が良いつて言いたいのか？」

ここで洋斗は黙ってしまった。きつと、彼だって汐帆のためを思っただけで簡単に2人の仲を切れるわけではない。ただ彼女の行動に不安を覚えたからなのだろう。

「私は、絶対に秘密にする。誰にも喋らない！」

振り返って、澄濤は汐帆の両手をそっと優しく握った。汐帆はまた1つ、1つ、と涙を流す。

「汐帆ちゃんは私にとっても、きつとみんなにとっても大切だから。汐帆ちゃんの好きも大切な。だから、絶対に守るから」

「澄濤……ちゃん」

一樹からはほとんど澄濤の後ろ姿しか見えないが、その表情は笑っているんだらうなとわかる。それくらいに彼女の声はしつかりとしながらも、優しくかった。

「まあ、澄濤の言ったとおりだ。汐帆ちゃんは男のことを好きのまんまでいい。俺らはそれをバラさない。口は堅い方だからな」

航大はいつも通りの感じでそう宣言する。腕を頭の後ろで組みながら自慢げに話す様子は、ほんの少しいつも通りを演じているようにも感じた。けれど、その時はまだ一樹は特に気にもしなかった。

沙月の方というと、まだ心配そうな様子ではあったが彼女も汐帆の

見方のようだ。

「……まあ、何というか巻き込んだ形になったんだけど」

今度は申し訳なさそうに航大がこちらに視線を移す。確かにこの話は海の間での問題。陸の間からすると追放も何もないのだが、一樹にとつてはまた違う。

彼の抱える気持ち。これの最善の回答にたどり着くための何かを得られそうな、自分でもよくわからない感覚がしていた。きっとこれは、俺の問題でもあるんだ。

「勿論言う気はないよ。ベラベラ話すようなことはしねえよ」

航大の表情に笑顔が戻る。澄濤たちで互いに頷きあい、最後の一人に皆の視線が向く。

洋斗は皆をチラチラ見る。表情が徐々に困ったものへと崩れていく。

「……まったく、後々めんどいことになっても知らねーぞ」

どうにもできず、呆れた様子で洋斗はため息をついた。彼以外が汐帆側にまわってしまつては折れるしかないのだろう。僕は自然と苦笑いが出てきた。

「みんな……ありがとう」

「おいおい、まだ店番あるんだろ？こんなんじやお客さん入つてこねーぞ」

「そもそも私たちがお客さんだけどね」

皆の彼女に対する思い。自分自身がいかに大切に思われていたかを改めて知った。それだけで彼女の心も少しは負荷が取れたことだろう。

止めどなく流れる涙が地面に落ちて染み込んでいく。航大が少々茶化しながらも場を和ませる。その光景はとてもあつたかいものだと、一樹はそう思った。

今日は簡単に眠ることができないだろうと、そう直感した。

一樹はベッドに寝そべりながら天井を見つめる。自分の部屋を持ってからずっと変わらない光景。木目が変則的に刻まれた天井はいつ見ても同じものだ。

今日は色々なことがあった。印象と言うよりやはり衝撃的と言った方が正しいだろうその出来事を振り返ってみる。

海の人間が陸の人間と結ばれると、海から追放される。結婚というとめでたいイメージがあるが、どうやらこのパターンだと喜ばれないようだ。その理由はわからない。洋斗はその理由には触れていなかったなのでわかる手立てもない。

ともかくこれは嘘ではない、正真正銘の掟だ。破ってはいけない。となると、汐帆さんはあの聡太郎という人物と結婚したら海ではなく陸で生活する……のは普通か。なら、今後もう二度と家族とは海で会えない。陸では会えるのだろうか。会えないのだとしたら、孫の見せられないと言うことになる。何だか悲しい気持ちに襲われて一樹は目を閉じる。

そして、頭は勝手に連想し始める。

もし、俺が吉野川さんと付き合えて、行く行くは結婚して……。その時は家族の反対を押し切っても陸に来てくれたら……。

「って、何考えてんだよー!!」

自分の勝手なる想像に途中で恥ずかしくなっただけは一樹はゴロゴロとベッドを転がる。縁から落ちそうになっただけでやっとならぬと止まる。

けれど、可能性は無くはないのだ。人間が生きている限り、ゼロ

パーセントではないのだ。

「でも、もし仮に海を離れてまで結婚する、いや、そもそも陸の俺と付き合うって言ってくれたなら……」

やはり嬉しいに決まっている。それに関しては海も陸も関係ないのだが、やはり今の自分が好きって思っている人からそう言われたら嬉しい他ない。

……好き、か。そう暗い部屋の中にポツリと呟いてみる。

『でも、私は聡太郎君のことが好き』

『私のこの気持ちは変わらない！変わるはずがない！』

汐帆の叫びが頭の中に浮かび上がる。空洞内にいるみたいで、何度も響く。

汐帆の思いの強さに改めて凄いと思う。彼女の強さがあってこそ、掟を知りながらも今を保っているのだ。

けれど自分はどうかだろうか。経験の差、人生の差。今まで生きてきて一度も聞きもしなかった海の掟。これが、今の自分に掛かって外せない重りとなっていた。

見えていなかった以前の自分にあつた素直な気持ちだが、今現在も1ミリも変わらずにあるだろうか。澄濤が汐帆の様に海と陸とでの境目で悩んで苦しむ姿を想像してしまった一樹自身には、既に縮小が始まっているようだ。

俺は、吉野川さんが好きだ。けれど、この”好きは”本当の”好き”なのだろうか……。

そして、何故洋斗だけが掟のことを知り、あそこまで真剣に、且つ怒りさえも滲ませていたのか。その理由を考える前に、一樹は眠りに落ちていった。

内心、焦っていたんだ。今日のことがあまりにもイレギュラーすぎて、自分でもなんとかいつも感じを装わなくてはいけなかった。むしろ、そうしていいないと自分が保てなくなっていたのかもしれない。

「な、なあ親父」

「ん、なんだ？」

母親は夕食の片付けをしていた。皿を一通り台所に持って行ってあって、スポンジに洗剤を付けて洗い始めている。父親は今日の夕刊を見ていた。スポーツ面を見ていて、最近の野球チームについての記事のようだ。

航大の父親はいわば漁師をやっている。果那ノ海から離れた場所で漁業をして、年々漁獲量が減っている種に関しては稚魚から育ててもいるようだ。

そんな父に航大は恐る恐る聞いてみた。

「海の人と陸の人が結婚したらさ、ここから追い出されるの？」

「ああ、そうだが。……どうしてそれを？」

「え?! い、いや……今日洋斗がこれ知ってるみたいな感じで話してたからさ」

おそらく航大の父もこれについては話したことがないのだろう。教えたことのない知識の出所を知りたくなるのは当然だ。

航大はしまったとばかりに焦るが、なんとかそれっぽい出来事でも

の場を過ごした。まあ、あながち間違っではないので良いだろう。「ほう、洋斗君は頭がいいし物知りだからなあ。……そうだ、そういう決まりになってる」

新聞を置き、右手をあごに付けながら父親は言った。いつもとはちよつと違う雰囲気には航大はこの掟の重要さを違う角度から知る。

「俺のダチの一人も、陸の女とデキて陸に行っちまったな。もうあいっしかいねえんだ、とかなんとか言ってさ。もうあれ以来会ってねえけど、また飲みてえなあ」

航大の父にもそういう人物がいたのは初めて知った。その友人について少しモノマネみたく説明したが、やはり大切な友人だったのだろうと感じ取れた。

「結婚だから盛大に祝ってやりたかったんだけどさ、まわりは反対だの無理矢理にでも分かれさせようだのしてたよ。まだ俺も若かったからまわりに逆らえなかつたけど、本当は守ってやりたかった……。結局は押し切って行つたよ」

コップに入っていた残りの茶を飲み干した。父の話を実剣に聞いていた航大は、先程よりも益々心に引っかけかりを覚える。

「まあ、結婚以外にも果那ノ海を離れた連中もいたよ。ただ単に陸で生活したいとか言うやつもいたし、……あの土砂崩れから逃げるやつらもいた」

「……やめろよ、その話」

徐々に声が小さくなっていったが、航大は後半のワードを聞いた瞬間に内側にまた違ったものがザワツとしたのを感じた。不快感だ。

すまんと父は頭をかいた。

「ま、まあ別にこんなことはいつとも気にする必要は無い。お前は海の女と結ばれて、元氣な孫を見せてくれたら俺は大満足だ」

「おいおい、話飛躍しすぎだよ。そこまで何も考えられてねーし。……風呂入ってくる」

そう言い残して居間から退出する。出てすぐ近くにある階段を上って二階へ上がり、左にある自室に入る。

ドアノブを握ってドアを閉めた。しんとした室内には月明かりが

ユラユラと照らしている。数歩歩いて勉強机の前に来て、思いつき握り拳で叩いた。

今日は、少し期待していた。というか、それはいつもだろうとすぐに訂正した。

『今日は用事があるから早めにあがらせてもらうね』

そう言い残して彼女は立ち去った。その用事とは概ねそうだろうなど思っていた。

あるときから、知らないうちに目で追っていた。自分でもわからなかった。生まれて初めての感覚に戸惑った。そのうちに話すだけで少し嬉しく感じた。やっと陸のみんなど打ち解けていたので、話す機会も最初の頃よりもぐーんと増えた。それに、これに気づいてからだったので少ないが、下の名前で呼ぶこともあった。全くもって訳のわからない位に口がモゴモゴしたのを覚えている。

改めて自分が元気なイメージを持っていて良かったと思っている。でなきや、雰囲気的に呼べなかった気がするから。

それから、あの店に寄ることもなんだかんだで増えた。もしかしたら、なんて思っただ。親にお使いを頼まれても断らずに行くようになった。母は大人になったねえなどと関心していたので、それはそれで良かった。

おじよしさま作りが始まってからはより一緒に行動するようになった。澄漕たちと一緒に笑いながら話している姿をチラチラ見ていた。できたら、あんな風に楽しく話せたら……なんて俺に似合わないことを思ってもみたり。

今日の出来事は衝撃的だった。掟があつたなんて考えたこともなかった。海と陸では、胞衣があるかないかとか、そんなことしか頭になかったのだ。そんな自分に苛立ちさえ覚えた。

海の人と陸の人が結ばれたら、海から追放される。なんとも物騒なワードだ。



もし俺が、決心したら……あの人は受け入れてくれるだろうか。その時俺は苦しまなくて良いとか、心配しなくて良いとか、安心させる何かを口にできるだろうか。

確かに、今日は給食をおかわりしたが、それでも何か買って家で食べば何の問題もなかった。だから行った。もしかしたら、今日も働いている姿が見れるかもしれないって。

汐帆ちゃんは今日もいる、なんて適当なことを言っただけ。きっと他の三人は知らないはずなのに、目的がわかってしまわないようにカモフラージュした。

結局いなかったが、その代わりにあんな話を聞かされてしまった。でも、ここで色々と考え直してみたら、なんだかんだ汐帆ちゃんみたいにきつとこれは変わらないんだと思う。だってそうさ。どういう感じの服着たら好印象を持ってくれるとか、どういう接し方の方が好まれるとか、さらにはどう言ったら親を説得できるかなんてことも考え始めていた。

俺は、里実が好きだ。たとえ、掟のことを知っても、今の気持ちは変わっていないのだから。

## 第十五話 やつと

階段を登りきり、道を曲がって自分の自宅へと到着する。ポケットで遊ばせていた鍵を取り出して玄関のドアの鍵穴に刺す。ロック解除して中に入る。遅れて親父が帰ってくることを考えて鍵は開けておくことにする。

しんとしていて誰もいない居間に入ると真つ先に仏壇の前に座る。一週間に1回のペースで拭き掃除をしているため埃はさほど付いていない。海遥は黒く艶が出ている仏壇に置かれている2つの写真を見つめる。

俺はずつと考えていた。きつとこれは実に大したことなのではないのかもしれないけれど、どうあがいても簡単に決定ボタンを押せるような気楽な判断はできないのだ。

これが俺の決断なんだ。みんなは多分これの正反対に動くんだろうなっと思う。それでも、俺はもう決めたんだ。

正しいとか、正しくないとかを勝手に決めるものではない。俺がこうするべきなんだと、この意志が大切なんだ。あの人のためにも早急に手を打つべきなんだ。そう、それだけなんだ……。

目を閉じて自分に言い聞かせる。1回深呼吸をしてから立ち上がり、目的のものを探し始める。それはもう1年以上使っていないものだから、どこに置いたかは全くもって記憶から抜け落ちていた。

「ふああああああ」

ベッドから起き上がったときに大きなあくびが出た。気づいたら寝ていたようだ。眠れないほど頭の中で混乱しながらも色々考えていたはずだったが、体は正直。眠いときは眠る。

一樹は自室から出て1階のリビングへと降りる。いつものような眠さからくる体の怠さはあまり感じられなかった。かなり珍しい朝を迎えて変な違和感を感じながらリビングの椅子に座る。

「おはよう。もうちよつとで作り終わるから」

母はすぐ隣のキッチンで朝ご飯の支度をしていた。フライパンで何かを調理している音が聞こえてくる。はたしてそれは炒め物ではなく目玉焼きだった。一樹は目玉焼きにはソースはなのだが、両親は醤油派。醤油と醤油との間にソース派が生まれてくるのだから、人間は不思議である。

朝ご飯を待つ間にテーブルに置いてある新聞等に目が行った。四つ折りになった朝刊にチラシなどが数枚挟まっている。その下に見慣れない紙があったのでちよいとした興味でそれを手に取る。

そこに書かれていた内容に一樹は目を見開いた。目覚めの良い朝にさらに驚きのニュースをぶち込んでくるのだから、今日は相当目覚める日だ。

「あ、復旧完了したんだ」

そこにはこのあたりを走る電車が長い間の復旧工事が終わり、明後日の朝から下記にあるスケジュールではあるが運行再開するようだ。

「そうらしいね」

背後からそれをのぞき込むように母が朝ご飯を持ってくる。2人分の目玉焼きが並べられ、冷蔵庫から持ってきたソースを一樹の近くにセツティング。

「あれ以来ずっと使えなかったから大助かりだな。バスしか他に使える移動手段なかったし」

「これで隣町に行くのも手間が省けるわねー」

バスでの移動となると電車よりもかなり時間が掛かる。それ故に隣町へ行くことの回数が減ったり億劫になって行かなくなったのは事実だ。一樹の母は前者である。

自分用の茶碗にご飯が盛られて出てくる。ほのかに揺れる湯気がおいしさを際立たせる。テーブルに置かれている箸たてから自分の箸を取り出す。

母も野菜類の品を置いて椅子に座る。手を合わせお互いそろえて、いただきますの儀を済ませてから一樹はまず目玉焼きにソースをかける。かけ終えてキャップを閉めると箸を持って野菜を取り皿にのせる。それから、何故かふと思いつく。

『土砂崩れだよ。2年前にあっただろ?』

『その結果は、果那ノ海の人口減少だ』

先日の作業の日に航大が言っていた言葉。あの時までただの”土砂崩れ”で終わっていたあの出来事は、海の中では続きがあったのだ。聞かなければ多分一生知ることはなかった出来事。それになんだけ寂しさというか、孤独感を一樹は感じていた。

不運にも巻き込まれた電車に乗っていた何人かは亡くなっている。それ以降地盤を安定させてレールを引き直して運行再開、とスムーズにはいかなかった。もしまた落石が起きたらどうするんだ、亡くなった人のことも考えろ、などなど。陸でも不満の言葉が前後左右あらゆるところから飛んできた。確かに遺族の方々はその難なく通過できるかと言われたら簡単には答えられない。けれど、だからといって

復興させないとなると久里ノ上の交通網が一気に狭まる。誰もが使える電車がなくなるとそれはそれで不満の声が出るのは目に見えている。

結局はこの通り再開だ。嬉しい限りである。けれど、当然筋の通った発言もあつたが、自分勝手な発言を勝手に投げつける大人たちに一樹は小6にしてうんざりしていた。

ここの地方のテレビでは連日報道していた。何回も何回も場違いな発言が流れてた。時には海の人間のせいだ、なんて冗談でも言つてはいけないようなものまであつた。

なんでそんなことを平気で言えるのだろうか。僕には理解出来ない。そもそも、あんな土砂崩れなんて起きなければ……。

起きなければ……吉野川さんたちとは、今でも出会えていない。

あの事故で海の人たちが出て行つた。それによつて人口減少が発生して、子供の人数が減つた。それは吉野川さんたちの学年ももれなく減り、結果的に海の学校は閉校せざるを得なくなつた。だから、陸に來た。

何にも起きなければ、いつも通りの平凡な日だったのなら、僕は今でも吉野川さんとは出会っていないのだ。永遠にとまでは行かないにしろ、僕は名前すら知っていない。

海で中学生生活をしていたら、もしかしたら僕の知らない海の男子のことを……。

いや、今更考えることじゃない。今は今だ。ifの世界じゃない。もう土砂崩れは起きた。終わっても遺族の辛さは決して消えないけれど、電車は開通した。そして、僕は彼女と出会えた。そして彼女は陸の生活を楽しんでいるようだ。だから、だからいいんだ。

けれど、あの話を航大がしているとき、彼女は俯いていた。決して何も感じていない表情ではなかった。それを見て僕はどう思った？そして昨日の出来事も。それを聞いて、今の気持ちはどうなんだ？僕

は、吉野川さんのことを好きとちやんと思っ……

「大丈夫？ずっと固まってるけど」

母の声で我に返る。僕は箸を持ったままずっと考え込んでいたようだ。それは不思議がるのも無理はない。なんでもないと言つて一樹は野菜から口に運ぶ。

学校に着いても霧がかかったように頭の中がスッキリしない。自分には珍しい寝起きがあつたがやはりダメなようだ。

昨日から考えてみているが、そうすればするほど自分の半端さが浮き出てくる。どうしたいのかもわからず、逆に自分に腹が立つてくる。でもそれはすぐに鎮火して再び沈む。

こんな状態で授業を受けられるはずもなく、今日はブーツとした一日を一樹は過ごした。

曖昧な状態は放課後のおじよしさま製作の時間も続いた。あとは小物作りなど細かな作業を終わらせれば完成だろう。皆一生懸命に取りかかっている。

俺はカッターで発泡スチロールを削っていた。何でもこれはおふねひきを見る場所へと案内する看板に使うらしい。らしい、というのは言うまでも無くこんな状態のためなんとなく聞いていたからだ。けれどどんな文字を作るかはメモを貰っているし、油性ペンで下書きしてあるものもあるのであたふたすることはない。

作業している席のすぐ横には何個か発泡スチロールが重ねて置いてある。まもなくおじよしさまの方は完成ということであろう。大生と航大などは良いコンビネーションで作業を進める。女子たちもこれまた初回と変わら

楽しくやってる。

視線を手元に移して一樹はまた靄の中に身を入れる。好きで入っているわけではないのだが、そうせざるを得ない。

ここまでずつとズルズル引きずるのも良いとは言えない。けれど、簡単に忘れて普段通りに行こうともなれない。自分で忘れよう、気にしないようにしようと思ってもできない。そうすればするほど気にしてしまうのだから。

誰か教えてくれないのだろうか。この気持ちは、俺の中でモヤモヤするこの気持ちは、何なのだろうか。本当の、正真正銘の、純粹な”好き”という気持ちなのだろうか……。

グサツ

「つてー」

靄から顔を出す。痛みで我に返った。カッターを放り投げて痛みの出所を右手でグツと押さえる。左手の親指の第1関節と第2関節の間あたりに、ジワツと赤い水が這い出てくる。

席を立って窓際に設けられている水道の蛇口をひねって水を出す。それと混ざり合うどころか、水道の勢いに負けて血は一気に流れていく。何だかそのあっけない姿は自分に似ているなと思えた。

「おーい、大丈夫か？」

皆が自分の方を見ていた。

「いや、ただ切っただけだよ。気にすんな」

そう軽い感じに返して一樹は蛇口をひねって閉門する。なんてこと無い不注意だけなのに皆の手を止めてしまったことに申し訳ない思いに駆られた。

ポケットからハンカチを出して水気を拭いたが、まだじんわりと血が滲み出る。これは保健室あたりから絆創膏を貰ってくるか、それかそのまま放っておくか。そう考えていたら、

「切ったところを見せて」

目の前には澄濤が立っていた。手には小さい白のポーチがあった。表面に水色の魚がデフォルメ姿で付いている。

「あ、いや、大丈夫だって」

「見てみないと大丈夫か大丈夫じゃないかわかんないもん」

澄濤は一樹の左手をつかんで引き寄せる。指からは血が膨らんだ餅のように少し出ている。

「まだ血が出てるじゃん。ちゃんと処置しないとダメだよ。バイ菌が入っちゃう」

澄濤は蛇口をひねって一樹の傷口を再び洗わせる。その後ティッシュを出して傷口のところを押さえるようにと言った。

「……ありがとう」

「どういたしまして。あっちの作業終わったから手伝うよ」

一樹は自分が赤くなっているのだろうと恥ずかしく思いながらも感謝の言葉を口にする。それに澄濤は笑顔で答え、一樹が座っていた席の反対側に座る。

「私もね、小さい頃はよく怪我してたんだ」

作業の準備をしながら、そう澄濤が言う。

「一樹君みたいに指切ったり、転んで足擦りむいたり。その度に泣いてたけど、いつもみはつちゃんか怪我の手当してくれたの」

やはりそうだろうなとは思った。どこか抜けた天然さは前々から感じていたけれど、この場にはいない人物の存在が出ただけで変にドキツとしてしまった自分がいた。

「俺も遊んでいたら怪我するから絆創膏とかは持つてるんだーって。その時ぐらいから私も一応携帯しはじめたんだよね」

澄濤のちよつとした昔の話を聞けたが、一樹は海遙がそんな怪我するほどの活発さがあったことに驚いていた。

「まあ、だからっていうのもあれだけどさ……みはつちゃんは別にみんなが嫌いとかじゃないんだよ。ただ色々あって打ち解けづらいついとか、そういうのだから。だから、嫌いにならないでほしいなって」

彼女の表情からは一種の悲しみを感じた。見た感じは笑っているのだが、ただニコニコしているのとはわけが違うものだった。だが、



一樹はそれについては特に気にもしなかった。何せ、「大丈夫だよ。別に悪いやつだなんて思っただけだ。ただあまり話さないからわからないだけだ」

一樹は右手で頭をかきながらそつと視線を下に向けた。左手の指の傷はある程度血が止まっている。先程貰った絆創膏を貼らなくても良さそうだ。

なんだかんだ言っただけで、実際自分ばかりやすすいのかもしれない。咄嗟に捕まれた手。その時の彼女の手は、見ていたよりも小さく感じた。そして、さりげなく呼ばれる名前。君付けなんて親しい仲がほとんどが故に久しい感覚だった。吉野川さんや北島さんぐらいにしか君付けで呼ばれることはないだろうから。それだけでさえ、俺は嬉しく感じた。

仲間思いでみんなに壁を作ることなく優しく接する。お決まりのような柔らかい笑顔。たったそれだけで惹かれることを恋と呼ぶのかは専門家でも何でも無いので断言は出来ないが、少なくともこの気持ちは嘘偽りのないものだとはハッキリとわかった。

## 第十六話 引き金

次の日。放課後というのに休み時間と同じくらい騒がしい。流石に蟬の五月蠅さには敵わないが。

「よし、これで全て完成だ」

「よっしゃあ!!」

美術室では生徒11人と教師2人が互いに喜びを分かち合っていた。ついにおじよしさまの製作が完了したのだ。他の道具等も彼らが準備する範囲のものも終わった。校庭が見える窓を背にして、木製のおじよしさまが固まって見ている人たちを見据える。

「いや、今年も無事完成したな。しかも歴代最最多人数での製作だからか、かなり完成度は高いな」

大塚は腕を組みながら目の前のおじよしさまのじっくりと見る。

おじよしさまの顔の部分は大生の父が手がけたのだが、それ以外は生徒たちが作った。大生が指揮してほとんどトラブルもなく進められた。作業をしていくうちに男子組はノコギリの使い方は勿論のこと、ヤスリを使った仕上げ作業などもつたなさはどこかに行ってしまう、皆美術の技術点は満点と言っても過言ではないほどになった。

「じゃあ頑張ったってことで、大塚先生のおごりで何か食おうぜ」

「あ、それいいね」

いつものごとく幹大と隆広が調子に乗る。

「いやいや、そうしたいのも山々なんだが……金無いわ」

「嘘つけ!そこそ稼いでるから大丈夫だろ」

「別に女がいるわけじゃないだろ」

この人数に何か奢るとなると大塚も気が引けた。それを構わず幹大たちは言いたい放題である。教師という職に就いてはいるが、かなり稼ぎのいいものではないのだ。

「こうなったら何が何でも海遥を参加させたいな、おふねひきに」

唐突に航大が口を開く。その目はおじよしさまを見つめて腕を組んでいる。おちやらけた意見ではなく、本気のようなだ。

「人によつては単なる年に一回やる行事に過ぎないかもしれないけど、俺たちにとつてはそうじゃない。陸と、海とで手を取り合つて協力して。俺らはみんな同じ人間なんだ。だから……俺らにとつては大切なことなんだ」

みんなの視線を集めながらおじよしさまの前に出てくる。自分の中ではわかつている。ちゃんとそこにある気持ちをいざ口に出してみようとするの難しい。なんとか絞りだそうと、そうもがくようにしている航大を見て一樹は笑った。

「だからこそ、海遥だけ外れてつと何かスッキリしねえ。これじゃあいつだけが悪いやつになつちまつてる。それをまずみんなにはわかつてほしいし……えつと」

「わかつてるよ」

一樹は航大に声をかけて前に出る。わかつているんだ。彼ら4人から十分に伝わった。”仲間を思う優しさ”を、彼らの思いや行動から。だから航大がうまく口に出せなくてもいい。もう知っているから。

「おふねひきには全員参加する。勿論、海遥も。それでやつと俺ら陸と、航大たち海が本当の仲間になる」

きつと、これは皆が思っていることなのだろう。どこかでまだあと1ピースが欠けていた。それがなくてもそれなりに完成されていた。

それでも未完成なのだ。少しずつ忘れてしまっている最後のピースを埋めるときが来たのだ。海遥を、こちらに引き入れるのだ。

「あいつは俺らで何とかして参加させる」

「わかった。……別におじよしさま製作に参加しなかつたからつて、おふねひきに参加できないわけじゃないだろ？」

「そこは問題ない」

あくまで確認という体での質問は大塚が答えた。彼も海遥が参加することに賛成していた。果那ノ海の宮司の息子である海遥は、当初は参加するだろうと思つていたからだ。

おふねひきには自主参加できる。これは白風中の生徒の特権なの

だが、例年のおじよしさま製作人数の少なさからほとんど大人がやっていた。だが今年はどうやら多くの生徒が参加し、それはまるで若い者へと引き継ぐ世代交代の場にもなると、大塚は確信していた。

「後はお前らの頑張り次第だ。海遥をどうやって連れてくるか、だ」  
本人は海の5人の中で唯一参加しなかった。自分の意志を持って、どこか陸の人間との関わりを避けている。それをそう説得できるか、なかなか難しいものだが、航大たちの目にはそれを可能にしてみせるという気持ちが映っていた。

「よう、海遥」

今日は何だか一段と声が大きい。海遥がいつものように集合場所に到着すると、航大が腕を組んで仁王立ちしていた。視線は迷うことなく海遥に向けられている。

何かしたかな、と思い当たることはないか脳内整理したが、見当が付かない。まさか、あのことに気づかれたのかと思ったが、その可能性も薄いだろう。

「お、おう。みんなおはよう」

「突然なんだがな海遥。昨日でおじよしさまの製作は終わった」

「へえ、そうなんだ」

「俺たちが頑張った甲斐があつてな、良いできあがりだ」

「それは良かったな」

「……で、だ」

まさに言葉通りの突然の話。自分自身からみたら心底どうでもいい話だ。参加してもないおじよしさま製作の近況を話されてもどうしようもない。けれど、航大が何かしら俺に言いたいことがあるから、こんな回りくどい仕方をしているのだろう。

「今日はおじよしさまを別の場所に移動させるから、それを手伝ってほしい」

「……俺が？」

勿論そうだと、という風に航大は首を縦に振る。

「他に手伝える人はいないのか」

「いない。だからお前に頼んでるんだよ」

まあ、そう言われればそうなるのか。けれどあの人数で運ぶのに大変な量なのか。そんなに多いならどつかでトラックでも持ってきて積んだ方がはやいのでは……。

「……学校から遠いのか」

「うーん、別に遠くは無いと思うけど、近くはないかな」

どうにも曖昧な回答だな、と直感で思った。自分としては、やはり気が引ける。そんなにめんどくさそうなことはしたくはないが……。

「とにかく！みはっちゃん1人でも増えたらそれで助かるの。お願い」

「い、移動するだけだから。ね？」

「そう、だから、やってくんねえか？」

澄濤と沙月からもお願いされてしまった。3人揃って俺の前で頭を下げられてしまったのは断るのも悪い。答に少し迷っていると、洋斗は違つて壁に寄つかかっていた。こちらの視線に気がつくつと、一瞬複雑そうな表情になつて顔を背けてしまった。

「……わかったよ」

その言葉に反応して3人は同時に頭を上げた。表情からは純粋な嬉しさが窺えた。いったい、そんなに嬉しいことなのだろうか。

今日は俺も放課後に残ることになって、白風中へと向かった。

今日最後の授業の終わりをベルが告げる。挨拶が終わってホームルームが行われた後、作業開始となった。

俺は初めて放課後の美術室に入った。航大たちに連れられて入った先には、彼らの渾身の作品が迎え入れてくれた。

これをみんなでこの期間で仕上げたと思うと、驚きを隠せない。ここに来る途中で航大が自慢話のように話していたが、こういう作業に慣れている藍住や、それ以前みんなの頑張りの運だ結果だろう。

俺らよりも早く来ていた里浦たちと目が合った。俺の姿を見るや全員一致の驚きの表情。まあ、ろくに接してこなかった人物が来たのだ、無理もない。

「よっしゃ、早速始めるぞ。おじよしさまは流石に危ないから、この後来るトラックに乗せるからなー」

俺らが入ってきたドアから大塚先生が登場する。手には今日の予定等が書き込まれているのだろうか、A4サイズの紙を持っている。「他の作った置物とかはリアカーに乗つけて運ぶぞ。今隆広と幹大が何台か持ってくるから、他のみんなは乗せて紐で止めてくれ」

ひとまずの指示を出した大塚は美術室を後にする。彼も鳴門たちを手伝うのだろう。

「とりあえず出入り口の近くによせとこうぜ」

航大がすぐに動き、今後の作業をしやすいようにおじよしさまを動かそうとする。それに何人かが加わっておじよしさまを外へと出られるドア付近まで押す。どうやら下に平台車を入れているようだ。

その他のものもそのドア付近まで持つてくる。俺はとりあえず澄澤たちと一緒に行動した。言うまでも無く、こうすれば楽だからだ。

皆の作業はてきぱきとこなされていた。流石と言える手際の良さで荷物を外に出して乗せる。おじよしさまはうまいこと傾ければドアから出すとこができた。他のものもリアカーに乗つける。そして落ちないようにと紐で固定した。

「よし、乗せ終わつたな。それじゃ漁協近くの倉庫に持つてくぞ。昨日渡した地図を参考にしてくれ」

一通り乗せ終わつた後は、これを指定された場所に持つて行くようだ。何人かがポケットから折りたたまれた紙を出して見ている。

大塚先生はおじよしさまを乗せたトラックに乗り込み、一足先に学校を出る。俺らも3、4人くらいでリアカーを引いていくことになる。

美術室から外に出ると案外校門から距離はそんなにない。鳴門、撫養、松茂、それと名前の知らない1年女子が一番先に出る。その次に里浦、藍住、これまた知らない1年女子が続ぎ、俺ら5人が最後に出る。さすがに5人という人数だからリアカーの重さはたいしたことには無い。

校門を出てから坂を下り、俺らが登下校する道へと出る。海風を受けながらリアカーを進める。少し前にはリアカーを引く白風の生徒。彼らと共に行動する俺ら。

どうにも、言い表せない気持ちだが、心の中を泳ぐ。最初は仲良くなることができるはずないって思っていたのに。俺は勿論、こいつらだって……けれど。そんなことはなかった。

ただ、彼らは楽しそうだった。自分らが作ったものが祭で使われる。それについて笑いながら話していた。息の合った協力でものごとをこなす姿を、俺は呆然と見るこゝろしかできなかつた。そんな姿を

見てしまったら、俺だって……。

「なあ、海遥」

前でリアカーの持ち手を握っている航大が話しかけてきた。目線はそのまま前を見ている。

「みんな、良いやつなんだ。みんな個性があつてさ、話してるだけで楽しい」

わかつてるよ。そう、叫びたかった。

「俺も、お前も、澄滯も沙月も洋斗も。一樹や大生たちと同じ人間なんだ。胞衣があるかないかだけで、みんな同じ。みんな仲間」

自然と俺はリアカーの荷台部分をより強く握っている。

「だから、協力しあつておじよしさまを完成することができた。……だけどな、俺たちはまだ100%じゃないんだ。やつぱり、お前がないとダメだよ。海遥がいてこそ、今の俺らなんだ」

俺らが陸に上がってくるポイントを通過してさらに歩く。そんなときに聞いた航大の台詞は、ハッキリ言つて似合わないと思つた。

「海遥はみんなを避けるよな、絡みにくい、うーんと……そんなやつだなんて思われたくない。海遥は俺らが口をそろえて断言できる、良いやつなんだつて。だからさ……」

やはり、か。そんな気はしていた。結局のところ、今日の移動作業は元々のメンバー11人で十分足りている。それなのに何故俺を助つ人として呼んだか。

それはきつと俺は彼らを避けているから、その何らかの誤解を解くために俺を呼んだ。そして航大たちも彼らと仲良い姿を見せることで、俺をこの輪の中に入れよとしているのだ。航大たちがいるんだから、俺も心配せずに入れるんだ、と。

「おふねひき、お前も参加してくれないか？海の間人として、陸の間人と手を取り合つて、おふねひきを成功させようぜ」

海と陸が手を取り合つて、か。本当に航大らしくない言葉だ。ただ単にフィーリングなんて言葉を使うのかと思つていた。それだけ、真剣なんだろう。

俺は、航大の背中から視線を他の3人に移す。洋斗は相変わらずの



無愛想だったが、澄滯と沙月は笑顔で頷く。

とつても、嬉しかった。俺を、こんな俺を、ここまでして心配してくれる。必要としてくれていて。仲間として受け入れてくれる。涙もろい性格だったのならここで号泣ものだろう。

もう俺はこの問いに、はい、と言いたい。けれど、それでも、俺は頷けない。俺は、陸にいたくないんだ……。

すると、どこからか音が聞こえてきた。それはリアカーの生み出す音でも、車を通る音でもない。ガタンゴトン、ガタンゴトン、と。リズムカルな音が微かに聞こえる。そして、それは近づいてくる。

「お、ひっさびさに見るなー」

先頭を歩く鳴門が懐かしむように言う。俺らが歩くのは横は海が広がっているが、反対は作が張られている。その先には土で一段上に盛られてある。それには砂利がまかれ、細長いブロックが等間隔に置かれている。その上に、鉄のレールが敷かれている。そこを通るのは勿論ひとつしかない。

列車だ。

海遙たちの横を過ぎていく。だが、その時海遙の耳には何も入ってこない。突然音量をありつたけ下げて無音状態にしたような。その代わりに、彼の目には、あの日が蘇った。

『これ好きなんだもん！』

『これからが楽しみだわ』

『それでねー、私は――』

『三十代女性、意識レベル低下――』

『大丈夫ですか？聞こえますか？』

『ああ、あああ』

『海……………遥』

「うええええええー！」

過去を呼び覚ますように、それらが溢れ出るように感じる、吐き気。思わず膝から崩れ落ち、すぐ近くの手すりにつかまる。何も胃の中のものが出てこない嘔吐。体が震えて、立ち上がることもすらできない。

それに加えて、今度は騒音の激しいところに放り投げられたかのような感覚。激しい耳鳴りがする。近くに航大たちが駆け寄ってきているのはわかるが、何を言っているかは聞こえない。

いやな汗が出てくる。目からも涙がこぼれ落ち、ただ必死に手で口を覆う。

どうにもできなくて、無我夢中になんとか体に力を入れて、手すりをつかんで立ち上がる。

そして彼らをおいて、俺はそのまま海に飛び込んだ。

## 第十七話 どうしてなの？

「海遥っ！どうした!？」

航大は慌てて自分の幼なじみの元に駆け寄る。突然様子がおかしくなり、ついには崩れ落ちて嘔吐し始めた。吐瀉物は無く、何回か嗚咽だけ出る。体は震えているようで、駆け寄ったはいいがどうすれば良いかわからないかった。こちらもパニックである。

澄濤は小さく悲鳴を上げ、沙月は駆け寄って背中をさすっている。が、彼女の表情からも驚きと困惑が見て取れる。

こちらの騒ぎに気づき、前方を歩いていた一樹たちが気づいてこちらに近づいてきたとき、海遥は震えながらも立ち上がった。

そして、海へと飛び込んだ。

「おい、海遥！」

航大が手を伸ばしたが、指先が服に掠った程度だった。すぐに続こうとして航大は手すりを掴んだが、

「航大は先にこれを片づけてろ！俺が見に行く」

それよりも早く身を乗り出したのは洋斗だった。こういう状況だからか、あの洋斗がやけに頼もしく感じた。

航大が何か言おうとして口を開けようとしたが、それを待たずに洋斗は海へ飛び込む。

その部分が揺れ、幾重にも波紋が重なり、泡が小さく出では消える。そんな海を呆然と眺めている航大たちのところに一樹たちが集まる。

「お。おい。いったいどうしたんだ？」

その場にいた3人は皆、海の方を見て固まっていた。澄濤は口を押さえたまま、航大と沙月は口を開けたままの状態。

「なあ、海遥が飛び込んで、その後に洋斗が続いて行ったけど……何があつたんだ？」

大生が一樹の言葉に重ねるように彼らに問いかける。そして航大がやっとこちらを振り返った。

「え、いや……何か急に気分悪くなったんだってさ」

そう言う航大だったが、表情がどこか無理に作ったようなものに感

じる。

「そ、そうなのか？」

「そうそう。で、洋斗と一緒にって行つたんだ」

目には見えない違和感を持つ一樹だったが、航大は依然としてそのまま気にしないでくれと言わんばかりの態度を示す。

「大丈夫、これ持つて行つたら俺らも様子を見に行くからさ。みんなは気にしないでくれ」

その言葉に若干の疑問は出ていたものの、皆はそれぞれのリアカーに戻つて再出発する。それに航大たちも参加する。

「こうちゃん……」

一気に3人に減つてしまった。けれどモノは大した重さではないので3人でも問題なかった。リアカーの左横について押す澄滯が不安そうな声で航大を呼ぶ。

「大丈夫……だ」

最早それは自分に言い聞かせてもいるようだった。

引き金は、アレしか考えられない……。

倉庫はここからもう見えていた。全体的にさび付いたような赤茶色の壁に、同じ色の平べったい屋根。昔ここで漁船の乗り場だったと聞いたことがある。

彼らが到着する頃には倉庫の前に大塚の乗っていたトラックが止められていた。荷台にはおじよしさまが無くなっていたので、もう中に入れていなのだろう。

「おい、来たな。こつちだ」

案の定、倉庫の大きな入り口から大塚が顔を出す。それを確認すると、生徒たちはリアカーからそれぞれの荷物をおろして運ぶ。倉庫の中は電気が無いため薄暗い。入つて奥のあたりに置かれたおじよしさまが不気味に見えてくる。

「あれ、蔵本と二軒屋は？」

「え、あ、海遥が体調不良で。洋斗が付き添つて行きました」

「え、大丈夫なのか？」

学校から出発したときにいた人物2人が消えていたのだから、大塚でも気づいた。その理由を航大は先程と同じように説明する。その姿を一樹はやはり何か変だと感じながら見ていた。

「……やっぱ気になるか？」

大生が話しかけてくる。彼の表情は相変わらずだが、でもやはりただの体調不良なのだとは思っていない様子だ。

「まあ、何か引つかかるな、とは感じるけど。でも体調不良のかなって」

「この季節だし、感染症も考えにくいし。それに出発前までそんな気分悪そうには見えなかった」

それを無理して我慢していた、と言いかけるが止める。それならそもそもこれに参加する必要は無い。家に帰って安静にするのが適当だ。それに、自分は気分が悪いからこれに参加できないんだと言えるような仲ではないのか？それも違う。そんなわけがない。

そこまで考えていたが、茉紀に手伝えと軽く蹴られてしまったので作業を再開した。その間は考えていたことは一旦頭の隅に置いておくことにした。

全て倉庫に移し終わった。これでひとまず祭前までの作業は今日で終了となった。やってみてみると案外あっという間ではあったが、こういう共同作業は楽しかったと皆口をそろえて言えるだろう。

「よし、あとは学校に戻るだけだ。俺はこれから倉庫の鍵返したりとか色々あるから、みんなでリアカーを戻しておいてくれ。場所は幹大と隆広が知ってるから」

そういうと大塚はトラックに乗って1人先に倉庫を後にした。

「航大たちは先行つていいよ。リアカーは俺らで片付けとくからさ」

幹大が3人に言う。親指を自分に向けて、俺に任せとけと言わんばかりに胸を張る。

その気遣いに感謝して、3人はその場を離れた。自然と全員が走り

出す。

やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめろ。

今ある全力で進む。足をこれでもかど上下に動かして。

どうやっても、目を閉じて念じてても、あの光景が何回も再生される。もうフラッシュバックはうんざりなのに。

視界がぼやけている。少し遠くの方に果那ノ海の町並みが見えるはずなのに、ゆがんで何かわからないものに見える。目を擦ってもすぐに涙が出てくる。

歯を食いしばって一段強く足を動かそうとすると、

「海遥！」

突然自分の名前を呼ばれ、咄嗟に振り向いた。するとそこにはこちらへ向かってくる洋斗の姿があった。こちらもゆがんでくつきりとは見えないが、声で誰だがはハッキリとしている。

だが、俺は止まらなかつた。止まりたくなかつた。前を見てただただ進む。けれど、洋斗との差は大したものではなく、あつという間に追いつかれてしまった。

洋斗に腕を捕まれる。振り放そうとしたが、どうにも離してはくれないようだ。その時に洋斗の方を向いていたのだが、間もなく地面までの距離が縮んでいたことを忘れていた。

2人が重なるようにして地面に転がりながら着地した。

街から少し離れているこの場所周辺で稚魚を人工的に育成したりする建物や墓地などがある。2人が着いた場所はそれらもない、ただの道だった。

双方滅多に出さない本気で泳いだため、息が乱れている。上に被さった状態の洋斗が目を細めながら俺を見る。

「……海遥」

その言葉には、様々な感情が入り交じったものだと感じた。彼の表情からも同等のものに見える。

「お前……やっぱり」

「やめろよ。……大丈夫だから」

「大丈夫って、アレがか？そんなわけないだろ」

洋斗にしては珍しく声を荒らげて俺に反論する。

「やっぱりダメだったんだ。移動はあの場所を通るからって航大たちには言ったけど、海遥なら多分多分大丈夫だろうって。でも俺らは何にもわかってなかった。お前は」

「だから、もう大丈夫だって」

洋斗の発言を遮るように俺は制して、彼を手で退かした。俺は立ち上がって今度は俺が洋斗を見下ろす。洋斗の表情からは俺への心配が窺える。でも、そんな必要はないさ。

「俺のことは気にするな。お前らだけでおふねひきをやって、成功させてくれ。それに、今日はこれから用事があるから」

そう言い残して俺は進行方向へと向き直る。洋斗の視線を背中受けるながら斜め上へと泳ぎ出す。ここからなら学校の近くあたりに出られるだろうから。

「俺はこっから潜るから、2人は学校に向かって俺らの荷物を持ってから来てくれ。もしかしたらあいつ学校に行った可能性もなくはないし」

手短に、且つ早口で航大は澄濤と沙月に指示すると、いつも果那ノ海から出てくるあたりに飛び込む。その姿を横目で見ながら2人はなおも走り続ける。

学校へ着いたときには流石に息が切れていたが、それでもなんとか美術室のドアを開ける。手前に見える机の上に皆の荷物が置かれている。

「あ、あれ?」

澄濤はすぐに異変に気づいた。

「さっちゃん。みはっちゃんの荷物が無いよ」

「うそ!?まさか、もう来てたってこと?」

沙月は自分らの予想よりも早く海遥が来ていたことに驚くが、そのまま立ち尽くしているわけにもいかなかった。

沙月が航大の、澄濤が洋斗の鞆をもって玄関へと走る。幸い、今日は教科書類を多く使わない科目が多かったので鞆は重くはなかった。それに、恒例の”置き勉”でさらに容量が少なかった。

校門を出て坂を下り、海を片側から見つつ歩道を走る。とは言え、2人は女子だ。ここまでよく走ってきたものだ。走るといっても早歩きほどになっている。

「どうしよう……私のせいでみはっちゃんが」

「澄濤だけのせいじゃないよ。私も……ううん。誰のせいでもないのかもしれない」

振り返らずに澄濤を励ます。いや、それは励ましなのではないかもしれないが、今現在の沙月のやれるだけの台詞だった。



やっと航大が入っていった地点に着くと、2人は一斉に飛び込む。走って火照った肌をすつと一気に水が撫でる。腕がしびれてきて、度々靴を持つ手を変える。

程なくしていつも朝集合する場所に降り立つと、そこには航大と洋斗が座っていた。

「どうだったの?」

「洋斗が追いついたらしいけど、大丈夫の一点張りだ。止められず学校に向かったようだけど」

「うん。海遥の荷物だけ無くなってた」

それを聞いて航大はため息をつきながら手を額にやる。

「一応あたりを探したけどさ、見つかんねえわ。家にもいなかったし」「すまん」

「洋斗が謝ることじゃないよ」

4人に沈黙が訪れた。澄濤は俯いたまま。航大も腕を組んで黙ったまま。

海遥のあんな状態を見てしまったら、どうしようにも心配になってしまうのは当然だ。幼い頃から共に育ってきたのだから。一緒に遊んで、時にはケンカもしたけれど、それを納める役割を海遥が行うことは多々あった。

頼れる存在だからこそ、今まで慕ってきたからこそ、心配になる。

「……でもまさかねえ、汐帆ちゃんが」

「そうよね。でも陸に上がったから、そうなっちゃうのかもねえ」

ふと、近くで話す2人の主婦らしき女性が彼らの目にとまった。その話の中のワード、”汐帆”に皆の注目がいった。

「汐帆ちゃんに、何かあったんですか!？」

駆け寄って澄濤が2人に話しかける。突然だったので少し驚いていたが、相手が澄濤だとわかると表情はだいぶ緩まる。

「それがね、さっき聞いた話なんだけど、汐帆ちゃんが陸の男性とお付き合っていたみたいなの」

「えっ!？」

澄滯は口を手で覆う。3人も驚きを隠せなかった。陸の男性と付き合っていたことではなく、その事実がバレてしまったことに。

「それでね、今さっきあたりかしら。大人たちに連れられてウロコ様のところに行ったらしいわよ」

澄滯はさらに目を見開いた。その後すぐにその場から駆け出す。沙月が2人に礼を言っつて3人も走り出す。その姿を不思議そうに2人は見ていた。

道を駆ける。何人かがこちらを見ていたが、気にせず進む。階段を上つて、また道を進んで。そうして見えてきたウロコ様のいる神社へと続く階段。その上からだろうか、誰か女性の声が聞こえてくる。

「この声、汐帆ちゃん！」

澄滯たちは階段を駆け上がる。先程からずっと走ってきたせいか、足全体に痛みがじんわり伝わってくる。が、それどころではない状況で痛みを気にせず進む。

階段を登りきると、神社前でまさに汐帆が大人2人に腕をがっちり挟まれている。そのまわりにも数人大人がいて汐帆を黙らせようと怒鳴っていた。

「汐帆ちゃん！」

「おい、あんたら何やってんだよ！」

走つて彼らの前に入る。澄滯は両手を広げて通せんぼをしている。

「お前らには関係ない。どいてろ」

「いや、こいつらにもそろそろ教えといてやらなきゃならないだろう」

大人の一人が手で制して航大たちの前に出てくる。

「いいか、俺ら海の人間は陸のやつらと結ばれる、つまり結婚するとな、ここから追放されるっていう掟がある。だから」

「だから何だつてんだよ！そんなの知つてんだよ。でも、だからこそ……」

そう言いかけたとき、航大は先程まで項垂れていた汐帆と目が合った。そして、首を左右にふつた。

「……ごめんね。黙つててなんて言つてごめんね。でも、いいの」

それを聞いて航大は言葉を詰まらせた。沙月も、澄滯も、洋斗も。

苦虫を噛むように表情をゆがませる。

大人たちも、汐帆に移っていた視線を航大たちに戻す。そこをどけ、というのだろう。

「でも、誰がこれを……」

「俺だよ」

苦し紛れに言った航大の言葉にあらぬ方向から返答が来た。それは、航大たちの後ろからだった。神社の戸が開かれ、その人物は出てきた。

そこには、海遥が立っていた。先程の苦しむ様子はどこかへ行ってしまうている、いつもと変わらない姿の海遥だった。

## 第十八話 近づくほど離れていく

「俺だよ」

海遥の声は普段と変わらない様子で、この事態を冷静に受け止めているように見える。神社から出て航大たちを避けて汐帆と大人たちの前まで歩いて止まった。

「な、なんで」

「なんでってお前、これは掟だ。海の人間が陸の人間と恋に落ちてはならないんだ。もしそうなってしまったのなら、果那ノ海から追放される。知っているんだろ？なら、止めさせるだけだ」

困惑を隠しきれない航大に海遥は当然のことを教えるように返す。その言葉は、しかし航大たちを振り返って発してはいない。

「汐帆ちゃんを説得させて、その男との関係を絶つ。そうすればここから追放されない。一件落着だ」

「何が一件落着だ！」

航大が前へ飛び出し、海遥をこちらに向かせて両襟をつかむ。

「勝手に二人を離して、それでいいのか!? 汐帆ちゃんの気持ちなんてどうでもいいのか!？」

「どうでもいいとかじゃない。仮に汐帆ちゃんが陸で生きていくとなったら、両親はどういう思いをする。これは相談もなしに、汐帆ちゃんが隠していた。それを、航大たちには教えていたようだけど。別に隠蔽罪とかはないから安心しろ」

航大の手をどけ、服を正す。改めて航大に向けられた目はいつもの海遥の目だ。けれど、そこから感じられる雰囲気には、見覚えがなかった。一種の恐怖さえ感じた。

「……あとは大人たちに任せるんだ。子供は引っ込むのがいい」

海遥は手で道を空けるとジエスチャーする。それを見て大人たちは汐帆を連れてウロコ様が待つ神社の中へと入っていく。その中には汐帆の両親もいた。

その一方で海遥は神社の鳥居をくぐって立ち去る。その後ろ姿と神社とを交互に見ることしか、彼らにはできなかった。

それからは、まるで時が止まったかのようだった。

朝、海遥と学校には行かなくなってしまった。4人が集合しても海遥は現れなかった。時間も無限には無いので学校へ向かうと、もう既に海遥は登校していた。

かといっけいきなり航大が殴りに掛かることもない。むしろ逆に話しかけづらい状態にあった。そうなることやはり、とあきらめを付けて大生たちに海遥の参加を断念すると告げた。

その理由を問われたが正確に答えることもできず、曖昧に返すのが精一杯だった。だが、それが浮き彫りにならざるを得ない事態になったのは、その一週間後のこと。

「ねえ、ちよつといい？」

沙月が帰り支度をしていると、前方から声をかけられる。その声の主の方へ顔を上げると、そこには里実がいた。その不安そうな表情から、聞きたいことがなんとなくわかってしまった。

「うん、いいよ」

「ありがとう。あのね、ここ一週間汐帆さん急にお休みしてるの。しばらく休むって言ったきりで、理由も教えてくれないんだけど……何かあったりしてないかなって」

「……」

やはりそうなるか、と沙月は思う。何せあれから汐帆ちゃんは自宅謹慎となっているようで、久里ノ上どころか果那ノ海を歩いていると

ころを見ていない。そうになると、マツシゲに出勤しているはずがない。

これをどういったものかと曖昧にしていると、

「多分、下手したらもう陸には上がって来れないかもね」

横で机を下げながら洋斗が言った。目を丸くして里実が洋斗の方を向く。

「洋斗！」

「どうせここで隠す必要も無いだろ。曖昧に逃げても松茂は納得しないだろうし」

掃除をする関係で一行は廊下に出て、階段とは逆方向へ行く。丁度この階の端のあたりで汐帆の現在置かれている状況を大まかに話した。そこには海4人と里実、加えて一樹と大生がいる。

「そんな……」

終始里実は手で口を押さえながらいた。自分の知らないことの連続で驚くしかなかった。

「まさか、海遥まで知っていたとはな。きつと俺らが放課後おじよしさま作ってたときだろう」

一樹も腕を組んだまま少し俯く。彼も当然リークするようなことはしなかったが、どうしようも無いとは言え若干の申し訳なさを感じた。

「そもそも掟があることすら知らなかったけど、なんで海の人と陸の人が結ばれちゃダメなんだろう」

里実の口から本音が漏れる。ただ掟を出されても、それが何故ダメなのかは提示されていない。疑問になるのは当然だ。

「それは簡単だよ」

それに答えたのは、以外にも大生だった。

「え、知ってるのか?」

「ああ。その答は、それだよ」

航大が目を見開いて大生の方を見る。すると大生は航大を指さす。刺された本人は首をかしげて頭にはてなマークが浮かんだ。

「胞衣」だよ。本来人間は、母体から出てくるときに胞衣を破って出てくる。けれど、航大たち海の間人は、それが体に張り付いた状態で出てくる。そこが海と陸との根本的な違い。だけど、ここで海の間と陸の間とが子供を作ったならどうなるか。答えは、胞衣を突き破って出てくる。つまり、胞衣を持たない子供になる」

大生がゆっくりと説明を始める。皆の視線が大生に注がれる。話  
が問題の核心を突いたとき、一樹があっ、と閃いた様子で手を叩く。  
「胞衣がないから海に入れない。だから、子孫が残せない」

「その通りだ、一樹。胞衣がない子供が生まれれば、当然海になんか暮らせない。そうして、胞衣を持たない人間が増え、胞衣を持つ人間が減る。これが海村の人口減少の主な原因でもある。それを防ぐために、こういった掟があるんだろうね」

場が、しんと静まりかえった。教室の方で生徒たちの声は聞こえるが、数はそんなに多くないようで小さい。また新たな事実を知ったが、頭が着いていけないようで皆が口を開こうとしない。

「……えっと、てか、これは洋斗も知ってたの、か？あの時掟があるってお前言ってたよな」

どうしたら良いのかわからなくなってしまつて、航大はふと思ひ浮かんだ疑問を投げかける。

「え？あ、まあ、うん。そうだけど。俺は、たまたま」

「そ、そうなのか」

すぐに解決してしまつた後、また静まりかえつてしまふのかと思ひきや、澄滯が両手をギュツと握つた。

「でも、それでも、いきなり2人を引き裂いちやうなんて、ひどいよ」唇を噛んでただ、下を俯く。その気持ちはみんなもハッキリとわかるものだ。ましてや、汐帆だからこそ、その気持ちをわかっているからこそ。

「俺は、とりあえず会つてみたい。汐帆ちゃんが好きになつたヤツに」「こうちゃん……」

「私も。会つて、その人がどれだけ汐帆ちゃんが好きなのかを聞くの。それで、汐帆ちゃんも同じくらいその人が好きなら……もしかした

ら」

海3人がそれぞれ顔を上げ始める。彼らの、汐帆に対する気持ちの表れだろう。あくまで突飛な考えで、もしかしたらという不確実なものだけれど、それでもなお彼女の気持ちをこの耳で聞いたからこそその思いを通させてあげたいのだ。

「その人の名前ってわかる？」

「えっと、たしか……ソウタロウ、だっけかな」

「ああ、なるほどね」

大生は手を握って顎に付けたまま頷く。どうやら自分の中での疑問が解決されたようだ。しかしまわりの人間はわかるはずもなく、

「おい、どうしたんだ」

「あ、いや。先日からなんか親父たちが少し落ち着かない様子だったから何だと思ってたんだけどさ。多分その人、漁協の人だよ」

彼ら7人は下校した後、そのまま漁協へと向かう。いきなりなので少々無理があるだろうが、大生の父も漁協の人間だけあってもしかしたら聡太郎と話をさせてくれるかもしれない。その不確かではあるが全員一致した意志の元、足を進める。

漁協にたどり着くと、まず最初に大生だけが中へと入っていく。建物は2階建てで、1階には専用のトラックが三台ほど駐められていたり倉庫になっている。そして2階に事務所が設けてある。そこに設



置かれた階段を上っていった大生は、すぐには戻ってこない。

交渉に難航するのかと思っていたが、5分ほどでドアが開かれた。階段を降りてくる大生の後ろには、この場で里実以外が一度は見たであろう人物が続いて降りてくる。

「ど、どうもはじめまして。上板聡太郎かみいたそうたろうです」

彼にとつては初めての、こちらからすると改めての自己紹介をした後、場所を移動した。倉庫近くの屋根のある場所にパイプ椅子がいくつか置かれている。

どう大生が説明したら彼を引つ張り出せて来れたのか、また大生の父がここまで気の利く人物だったのか、それは今となっては関係なく、座るや否や航大が口を開く。

「単刀直入に聞く。あなたは汐帆ちゃんのことを好きか？」

「え!? あ、当たり前だよ。好きだからこそ、お付き合いをしてたんだ。でも、そんな掟があるなんて、汐帆は教えてくれなかったよ。ここ一週間連絡が通じないし、どうして……」

「テメエに教えたなら心配かけちゃうから言わなかったんだろ?!」

叩きつけるように航大は言葉を聡太郎にかける。立ち上がるようにしたので横にいた沙月と洋斗が抑える。

「そんだけあなたのことを思ってるから、大好きだからこそだよ。で、そういうあんたは、それと同等に……いやそれ以上に汐帆ちゃんが好きなのか? 結婚して幸せにしてやりたいとか思ってるのか?」

その問いに、聡太郎は言葉に詰まってしまった。何かを言おうとしたが、開いた口を閉じて視線を航大から逸らしてしまった。

「……!」

その行動は、今彼らからすれば、好きだが結婚するかどうかと聞かれたらわからない、つまり生半可な付き合いをしているのだと示しているようにしか見えなかった。

目を見開き、怒りの表情を表した航大は立ち上がる。

「何でだよー!」

その言葉は、聡太郎の間近から放たれた。それは航大ではなく、一樹だった。

「なんでそこで答えられない。なんで好きだと言えないんだ。お前はそんな半端な気持ちでいたのか？ 汐帆さんはお前のことが好きだから、心配かけないようにひとり隠しながらお前といたんだ。それに俺たちに言ったんだ、お前といるのが楽しいって！ 誰かが反対しようともこの気持ちは変わらないって！ そんなことまで言ってくれる汐帆さんにお前は何も答えられないのか?!」

一樹は、自分がどうしてこんな行動を取っているのか自分自身で驚いている。でも、こうせずにはいらなかったのだろうと、すぐにかかった。

目の前にいるのはあくまで他人。以前に1回、あの時に見ただけの赤の他人。けれど、彼が置かれている状況は自分と重なっている。自分が、好きになっていいる人が海の人間だからと知ってしまい、急にたじろいでいる。進んでいた足が、急に止まってしまった。

きっと彼だって、いや自分だって半端な思いではなく、正真正銘の真意であることはわかっていいる。それでも、止まってしまったのだ。自分の行いが間違っていると、相手に迷惑をかけてしまうのだと、そう思っている。

自分に関してはまだ思いすら告げていないけれど、それでも、ムカつくのだ。彼が、そして自分が。だからこそ、これは自分自身にも喝を入れるかのように、聡太郎にぶつける。

聡太郎の両襟をつかんでいる一樹を、大生と航大、洋斗が懸命に引き離そうとしているところに一人の足音が聞こえてきた。

「おいおい、証言者を出したとはいえ、暴力は無しだろう」

その声で一樹もやっと止まり、そちらに視線が集まる。そこには大生の父がいた。

「父さん」

「まあ、お取り込み中すまないがな……明日は休みだし、お前も特に予定はないだろう?」

大生の父の視線は聡太郎に向けられている。彼の予定の確認を聞くこと、聡太郎はゆっくりながら首を縦に振る。

「よし、ならいい。丁度お前らが一番気にしていることについてなん

だがな」

一番気にしていること。それはつまり聡太郎と汐帆についてのことだろうとは皆が思った。

「明日の正午、池谷さんと御家族がこちらに来るとのことだ。勿論、お前と話がしたいそうだ」

聡太郎の萎んでいた目が、見開かれる。こちらからまったく連絡が取れなかった相手から、明日会おうとききたのだ。

そして、それと同時に彼らの関係をどうしていくのかがわかると、誰もが感じ取った。

## 第十九話 人は誰しも抱え込む気持ちがある

海へと潜った4人はある考えを持っていた。それは聡太郎がどう言えば良いとかそういうことではなく、彼ら自身がその話し合いに加できないか、というまたもや無謀なことだった。

これは極論、2人の話である。それをしてはいけなさと定めたものを破ってしまった2人の、今度どうすべきかを確認する場である。親族でもなんでもない者が立ち会うことなどできるのだろうか。仮にまず汐帆側が許可したとしても聡太郎側はわからない。とはいってもこの件は大生たちも聞いていたし、聡太郎自身もその場にいた。彼にも一応頼んで掃いた。

『俺たちはさ、別にどうこう口を挟む義理なんてないのはわかってる。でも、汐帆ちゃんがこのまま離れるってのが本心なのが知りたい。これで本当にいいのかって、ずっと考えてた。それはお前も同じだ。今日ちゃんと考え直して、お前の本心はどうなのか決めてこい。それを俺らは見届けたい。親御さんに言っとけ』

航大は腕を組んだまま聡太郎を睨め付けたまま言う。彼も明日のことを聞かされ、より慎重な面持ちになっていた。首を縦に振ってわかったと意思表示するのを見届けると、航大は振り向いて漁協を去っていった。他3人も続いて出て行った。

「本当に私たち、いけるのかな」

「大丈夫だ、きつとなんとかなる」

「そうだよ。こうちゃんの言ったとおり、ちゃんと説明すればわかってくれるよ」

「そうはいつでもさ……」

まずは汐帆のところに行ってこのことに了承してくれるかを聞か

なければならぬ。明日陸に向かうとだけあつてせめて両親のどちらかだけでも話せないかと、不確かな可能性にかけていた。

だがそれはいらなかつたようだ。

前方に3人の人影があつた。それはこの4人の誰もが知っていた。

「汐帆ちゃん、それにお父さんとお母さんまで」

「あれ、みんなどうしたの」

汐帆はこの時間まで制服の格好でいるのに不思議がつた。もうおじよしさまの製作は終わっているのです、この時間まで学校にいることはなかつたのだから。

「じつは……えつと」

「あ、明日の話し合いに私たちも行ってもいいですか!？」

「ちよ、澄滯ストレートすぎ!」

航大がまず最初にどう言っているか迷っていたところになさき澄滯が頭を下げた。突然の行動に3人は啞然としていた。目を大きく開けた汐帆が何かを言おうとして口をパクパクしているときに、航大もこの場でたたみかけた。

「ごめんなさい!今日は、その、聡太郎さんのところに行つてたんです。その人が、いったいどういう人なの、とか。色々知りたくて行つたんです。それで明日話し合いをするって聞いて、汐帆ちゃんと聡太郎さんが、互いにどう思っているのかが知りたいんだ。俺らは、汐帆ちゃんが心配なんだ。本当に、本当にあれでよかつたのか。そして聡太郎さんの方も、本当の気持ちはどんなのか知りたいんだ。俺らにとって、汐帆ちゃんが実の姉のように思つてきたから、ずっといってくれたから。大切だから……」

航大も頭を下げながら思いの丈をぶちまける。自分自身でも何を言っているのかわからなくなり、途中途中つかえながらも、口を休ませない。握った手から手汗を凄く感じる。なんだか息苦しく感じた。

「ん、ん、ん」

意外なことに、口を開いたのは汐帆の父の方だった。少し肉がついてはいるがしつかりとした体。表情からはほんわかとした優しさを

感じる。

「みんなとはずっと昔から一緒だったしね、航大君の言うとおり、家族みたいなものだ。それに、明日は2人の本音を言い合う機会だし、見届け人も来るから」

「見届け人って」

「今日の午前中にね、汐帆の願いで1回だけ相手方と話がしたいとウロコ様に言ったんだ。すると案外許してくれてね、それで明日のことが決定したんだ。それには条件が合って、その話し合いの結果を誰かに見届けさせなければならぬんだ。それは宮司である和洋さんがいいと思ったんだけど、用事で顔を出せないから代わりに海遥君が来ることになった。他数名大人も来るみたい」

「海遥……」

「またもやここで関わってくる海遥に、一同はどこか辛い思いを感じた。一緒に同じ時を過ごした汐帆を巡って、まさか対立関係のようになってしまうなど思っていなかったからだ。」

「じゃあ明日の12時に時計のある広場に来てくれ」

「そう言っただけで汐帆たちとわかれた。その後は航大が遅刻しないようにと念を押して、その場で解散した。」

「じゃあ行くのか」

「果那ノ海唯一のスーパーの店長をしているがたいのいいおっさん、河内さんを先頭に一行は地上へと向かう。他2人の男性が無駄に汐帆を監視するように横についた。その後ろに海遥がついて、さらにその後ろから航大たち4人がいた。海遥たちが来たときに4人が何故

いることについては特に指摘しなかった。何か言われるのではと身構えていただけあつて少し安心したが、変なまねはするなど釘を打たれた。

地上へと顔を出し、近くの埠頭から上がる。今日は日が出ているが厳しい暑さほどではなかった。とはいえども季節は夏なので汗がじとつと体全体から出てくる。服が肌にひつついた感覚をもどかしながらも我慢して歩く。しばらく歩いて漁協につく。この場の人にとっては大事な話が行われるとわかっているせいも、昨日来たときはまた違う雰囲気だと4人は感じていた。

「失礼します」

ノックをしてからドアノブを回す。金属音を立てて開かれたドアの先には少し広い空間があつた。長テーブルが2つ置かれ、椅子が並べられている。その奥側には既に先客がいた。聡太郎とその母と思われる人物がいる。その人は足が悪いのか、車いすに座っていた。その他に父と思われる人物は見当たらず、その代わりに大生の父が座っていた。

海側の人間が全員入室し、汐帆と両親が長テーブルのところに置かれた椅子に座る。海遥と大人3人は2つのテーブルが交互に見られる位置に置かれた椅子に座つた。丁度部屋に取り付けられている窓を背にしている。航大たちは汐帆たちの後ろに立つ。

「えっと、じゃあ早速始めましょう」

その言葉を大人たちの一人、果那ノ海の青年会のリーダーを務めている皆川さんが発した。それによつて視線が皆川さんの方へと向く。だが4人は、その皆川さんの向こうにある窓に視線を移した。そこには一樹たちが航大たちにはギリギリ見える位置から顔を覗かせていたからだ。

それは前日の夜に遡る。

「一樹―、電話よ」

母が下の階から一樹を呼んだ。リビングに置かれた受話器を母からもらい、耳に当てる。

「もしもし」

「もしもし一樹？航大だけど」

「おお。どうしたんだ急に」

「漁協行ったときさ、聡太郎さんが明日汐帆ちゃんと話し合うことになったじゃん？それが明日の午後一時から漁協でやるんだってさ。それに俺らは同行を許可してもらったんだ」

一樹は目を丸くして驚いた。親族でも何でもない人たちの話し合いに同行なんて聞いたら大抵は驚くであろう。一樹は受話器を少し強く握った。

「で、お前とかはどうする？」

「どうするってたって……、でも、俺も気になるし、里実なんかも聞きたいと言うかもしれない。んー、でも、俺とかには許可されてないし」

「まあ、そうだよな」

「いや、その話し合う部屋の外からならバレずに聞けるかもしれない」

「おいおい、それ大丈夫なのかよ」

「前に大生と一緒に案内してくれたときがあつてさ。その時に会議室みたいなのもあつて、話し合うならそこしかないんだ。その外にベランダみたいなのがあるから、俺らはそこからバレないように聞くよ」

「わかった」

そこで互いに電話を切った。

「それにしても、こんな盗聴に便利なところがあつたなんて」

「別に盗聴するためのものじゃないけどね」



当日、ベランダには一樹と大生、里実と茉紀が座っていた。皆ギリギリまで近くのカフェで時間を潰していた。そうで無ければ、聞く以前に熱中症でぶっ倒れてしまう。

「あ、来たよ」

茉紀の声で全員が窓からほんの少しだけ顔を出す。幸いカーテンがある程度かかっているため内からは見つかれにくいだろう。誰だか知らない男性によって話し合いが始まった。

「まあ始めるとはいってもですね、そう長々とした会議ではなくて、両者の言い分を聞かせてください」

皆川さんがそう提示した後、両者を交互に見てどちらが先かを決めた。その手は陸を指した。

「……僕は、最初に汐帆……さんと出会ったのはあのスーパーで。それから何回も行っては汐帆さんと話して、なんとか交際することになって、それから出かけたなりして。笑っている汐帆さんにより惹かれていきました。でも、こんな掟があるなんて知らなくて。きっと僕に心配かけないようにと気遣ってくれたんだと思う。だから最近までずっと楽しい時間を過ごせたんだ。でも、その時までずっと我慢してたんだ。それに気づいて、汐帆さんの気持ちを考えたら、辛かった。下手したら生まれ育った故郷を捨てることになるんだって」

ここで聡太郎は一旦呼吸を整える。途中から目線は汐帆から若干下に落ちて、テーブルと床のあたりにあった。

「そんな、そんなことをしてまで僕と付き合ってくれていたのかって。そんなことをする価値が僕にあるのかって、ずっと考えてた。グズグズ引きずってた。でも、気づいたんだ。昨日、僕よりも年の低い子に言われて気づいたんだ、馬鹿だったよ。こんな自問自答する必要なん

て無かったんだ。僕は、汐帆が好きなんだ。喋り方も、笑顔も、時に怒った顔も、好みも。彼女が好きだから、今の僕がある。ただそれだけなんだ。そんな簡単に迷っちゃうものじゃないんだ。たとえば、汐帆が僕の方を選んでくれたなら、それをちゃんと受け止める。それでもって、海から離れた辛さを忘れてしまうくらいに、幸せにする。その覚悟が今の僕にはあるんだ」

その言葉から伝わってくる思いは、航大たちにはちゃんと伝わっていた。目線は戻り、汐帆をただ見つめる。汐帆は、依然として聡太郎の方に向いたままで、なんの動きもない。

場に静寂が一時訪れる。外から聞こえる蝉の声が、内からはクローラーの稼働音がじんわり聞こえるくらいだ。皆川の視線は汐帆に移った。彼女の番だと促した。

その催促には少しの間、反応を示さなかった。膝の上に置かれた手は強く握られ、口を噤んだままだった。両親が汐帆の表情を伺い、皆川が何か言おうとしたときにその間は終わった。

「……私は、この話し合いは、聡太郎さんにしつかりと縁を切るために機会をいただきました」

開口一番に放たれた言葉は、聡太郎や航大たちに強烈な打撃を与えるようなものだった。

「これは、私の身勝手に、且つ海の掟を破るような行為でした。自分の思いだけでここまで来て、両親には何の相談もしませんでした。どうせ反対されるだろうと思っていた自分がいたことは事実ですし、最悪私が隠れて聡太郎さんのところへ移れば、なんて考えていました」

汐帆の声が、徐々に小さくなっていく。肩も震えだし、一層拳に力が入った。

「でも、それは間違っていた。私も、ある意味言われて気づいたの。自分分は良くても、まわりがどう思うのかって。一番辛いのは両親なんじゃないかって。陸の人に恋して、何の連絡もなく陸に上がって帰ってこなくなった時、どれだけ悲しいかって。それにまわりの人だって、親しくしてくれた人を裏切るような行為なんだ。それにこのことで両親が何を言われるかって考え出したら……もう」

ついには両手で顔を覆ってしまった。彼女の口からは変わってすすり泣きが聞こえてくる。聡太郎はその姿を見て苦い顔をし、どうしたらいいのか途方に暮れた様子である。

「それでも……」

涙を何とか堪え、したたり落ちるのを腕で拭いながら汐帆は言葉を出し続けようとする。

「それでも、今の聡太郎さんの言葉で出てきちゃうよ。抑えきれないよ、やっぱり。私だって聡太郎さんが好きだもん。一緒にいるだけで楽しくて、嬉しくて。全部が全部パーフェクトじゃないけど、ちよつとドジツちゃうのも聡太郎さんなんだよ。それに、この思いは大切だって、この思いは私の大切なんだって行ってくれる人もいる。それが今になって背中を押してくれたの。この思いだけは変わらない。変わっちゃいけない。変わりがたくない。この好きという思いは、聡太郎さんが好きだっていう思いは、絶対に！」

汐帆の思いが、この空間に広がるようだった。そして、それが聡太郎の思いと混じり、溶け合うように。誰がどう見ても、両者一致。澄澤や沙月は涙を流さないようにと必死に堪えていた。瞳が潤んでいる。外で見ている4人も、釘付けになっていた。里実はもう涙がしたり落ちている。

「私は、汐帆を止めません」

ここで口を開いたのは汐帆の母だった。一旦閉じられた目を開けて、優しい表情を汐帆に向けた。

「私は汐帆の母だもん。やっぱり掟があっても、子供の応援をしたいもの。海から離れていくのは確かに惜しいけれど、それでも汐帆に好きな人ができたのならその人と一緒になるのがいいと思うわ」

「ああ、僕も同意見だ」

汐帆の父も首を縦に振った。普段よりも、より優しく感じられた。「私は、勿論聡太郎の意見を尊重します。それに池谷さんたちが賛同するなら、もうわかりきったことです」

聡太郎の母もニツコリと笑いながら皆を見る。

皆川たちもこの場に圧倒されていたが、我に返って一同を見回す。

驚いた表情はそのまま、ゆつくりと頷いた。

「……いいのかよ」

ただ一人納得していない様子で海遥が立ち上がった。こちらにも困惑が顔に張り付いたままだ。

「2人はいいのかよ。娘が出て行って、もう孫は果那ノ海に来ることは無くなるんだぞ?」

「そうだね、それは出来なくなる。けれど、そのために汐帆を縛り付けたくないんだ」

「果那ノ海で生活する方が安心して生活できる。平和な日々を送れるんだ。陸に上がったら危険が一気に増える。災害や事故と……!」

海遥は自分の言ったことに驚いているのか、急に固まった。普段の海遥とはかけ離れた、焦っている様子だった。言葉も出てきたものをそのまま出している感じで、いささか航大は違和感に襲われる。

「海遥」

パニック状態の海遥に、汐帆は優しく声をかけた。立ち上がって近づく。汐帆が手を伸ばすと、海遥はビクツとなる。目は泳ぎ、何かを指摘されるのを恐れているように見えた。

海遥の肩に、そっと優しく手を置いた。

「やっぱり、無理してたんだね。ごめんね」

その言葉に皆が困惑を見せる中、次の汐帆の発言で、今度はほとんどの人が自分自身の耳を疑うことにある。

「ずっと怖かったんだね。私が陸に行ってしまうのを。2年前の事故で、お母さんと海花ちゃんが亡くなったから」

## 第二十話 追想

「……えっ？」

汐帆から出た発言が、一室を静寂へと誘った。言葉を失った皆はただ汐帆と海遥の方を見つめるしかなかった。やつと出たといえど、ひねり出したような聡太郎の唾然とした声だけだった。

海遥は顔色が悪くなり、汐帆と目を合わせようとしない。手は強く握られて震えている。呼吸も少し荒く見えた。

「お前さん、まさか……」

目を見開き、海遥に視線を合わせたまま大生の父が立ち上がった。

「あの、2号車に乗ってたのか」

海遥に対してというより独り言のように言った大生の父は、今度は聡太郎たちの方を見た。航大と洋斗は何も言わずに下を向いている。沙月は口を手で覆い、澄滯は今にも泣きそうな目で海遥を見つめる。

「……」

部屋の外の4人も、固まっていた。窓枠に手を置いたまま、目を離すことも出来ずに立ち膝のまま室内を見ていた。ひとり大生は振り返って自身が持ってきた鞆を開ける。

「やっぱり、そうだったんだ」

「え、どういうこと？」

その眩きが解除の呪文のように、3人は大生を見る。彼の手には透明のA4ファイルがあった。そこには何かコピーした記事が数枚挟まれている。

「これは？」

「おじよしさまとか倉庫に移動させた日、帰る途中でみんなと別れたでしょ？そのあと図書館に行ってたんだ。ここらで配られている新聞は1種類だけだし、5年分くらいは置いてあったと知ってたから」

「でも、どうして」

「前々から気になってたんだ。何故海遥が他の4人と同じように行動しないのか。と言っても行き帰りは一緒だったけれど、ただそれだけ

の関係じゃないって航大たちの話からもわかる。それなら今回のおじよしさま制作だつて参加すると思うんだ。けれど、参加はしなかった。それに普段あいつは海を見ている。休み時間とか、気づいたらそうしてるんだ。

もつとも、決定的なのは海遥がおじよしさまを移動させている途中で体調不良で帰ったこと。その時に電車が通ったんだ。もし、あいつが意図的に陸を避けているのであれば今までの行動もわかる。その原因となったのが陸で起きたのだとすれば、これしかないと思った」

ファイルから一枚取り出す。新聞をコピーした紙には見るからにして一面の記事だ。記事の上あたりには発行された日付があり、今から2年前のものだとわかる。

「見てみたら早速みつけたよ。僕は果那ノ海の住人じゃないからわからないけど、名字被りじゃなければ、そういうことだろうねつて。ま、今の汐帆さんの発言で確定だ」

3人は大生の手握られた記事を見る。目的の記事だけが大きくコピーされていて、多少荒くても読むことは容易かった。だから、その部分も簡単に見つかった。

”……。この土砂崩れによってすぐ近くを走っていた電車が巻き込まれた。それに乗車していた、この区の海村である果那ノ海に住む蔵本南波さん(35)とその長女の海花ちゃん(12)が死亡、……”

海遥は底なしの闇に落ちていくような不快な浮遊感を覚える。目は開いているのにもかかわらず、目の前にいる汐帆さえ見えなくなつた。これはきつと追想なのだと思つた。あの日々の、あの時の。

「海遙ー！ほら行くよー」

「待ってって海花！」

家のドアを勢いよく開けて飛び出していった。俺の言うことも聞こえていないのだろう。俺も必死に後を追う。

今日も天気は申し分なくらいだ。海の流れでゆがみながらも青空が遙か彼方まで広がり、雲が所々に点在している。前を走る俺の双子の姉である海花は階段を駆け下りて町へ向かう。いつものメンバーで集まる約束をしているのだ。

「おっはよー」

濃い赤のショートカットの髪を揺らしながら着いた先には4人が既に集まっていた。

「おっす」

「おはよー。みっちゃん、みはっちゃん」

「はあっ、はあっ……」

少し遅れて俺は集合場所に辿りつく。朝から全力疾走とはさすがに疲れる。

「海遙。もう疲れたの？はやくない？」

「お前が朝から寝坊するの服がないない言って探させたので体力持たせてかれてんだよー！」

海花は自分の思った通りに行動したいタイプなのだが、色々抜けているところもある。寝ぼすけなのは航大と、いや、航大以上かもしれない。

「えへへ、ごめんごめん」

「それよか、早速探検を始めようぜ」

航大は一回り大きな声でみんなを仕切始める。最近見つけた海藻の大群の奥にちよつとした洞窟を発見していた。今日はその奥に

行ってみようとなつて居るのだ。

「今日は俺が最初に来たから隊長な！次に沙月が来たから副隊長を任命する。後はただの隊員な」

「えー、私が隊長やりたい」

「副隊長つて何すればいいのよー」

恒例の隊長の取り合いが始まった。大体航大か海花がやるのだが、最近航大が先に来たからという理由で隊長をやるといふ強引な方法で独占していた。

「いいじゃねえかよ。今度は俺より早く来ればいいじゃんか」

「そういうので決めないでよつて言つてんの」

「ねえ海花。副隊長譲つてあげるからさー」

「ダメなの！隊長がいい！」

こうなつてしまつたらきりが無い。2人の間で澄濤は交互に顔を伺つては困つた顔をしている。洋斗は呆れた様子で傍観している。俺はため息をついた。

「あー、もういい加減にしろ。これじゃ探検なんてできないで日が暮れちまう。決まらないならジャンケンで決めろ」

「でもさあ、こい……」

「ジャンケン、な？」

俺が航大の言葉にかぶせるように強く促す。渋々2人は向き合つて手を握る。今度はそのジャンケンに全てをかけるような面持ちで最初の合図で手を振るつた。

海藻をかき分ける。ここらはビッシリと生えていて下手するとはぐれるほどだ。そこを抜けると以前と変わらない様子の洞窟が見えた。人が二人並んでギリギリ通れるほどの入り口から少し先は既に闇が満ちている。だからこそその備えで家から懐中電灯2本を持参した。

「よーし、これから我らミカミカ探検隊はこの洞窟の奥底に眠る宝を



探しに行くぞ！」

「ダッセエ名前」

「センスないなあ、海花は」

結局ジャンケンの勝敗は言わずもがな。とびっきりの笑顔で俺ら5人を仕切始める。懐中電灯の1本を握りしめながら航大に向ける。これまたいつも通り航大はふてくされた顔をしている。

「ほらそこーミカミカ探検隊の悪口しなーい！」

「みっちゃん隊長！わたくしは早く宝を探したいであります」

澄濤がどのテレビ番組を見たかわからないが、右手で敬礼をしながら隊員っぽい発言をする。それに海花は頷きながら早速入り口に向かつて歩き始めた。もう一つの懐中電灯は光が持ち、途中途中で壁などを照らしていた。先頭の海花は正面の闇を指すように光を当てる。地面がゴツゴツとしているのが陰でわかった。

「つてー」

わかっていながらも、それに俺は蹴躓いてしまった。両手をついたものの膝を擦りむいてしまった。ジリジリと痛みがやってきて、血も出てくる。

「海遙、大丈夫？」

「ほら、ちよいと見せてみ」

心配して沙月が声をかける。所詮ただの切り傷なので大丈夫だと手を出してアピールしたが、海花が懐中電灯を膝に当てながら近寄る。洋斗に懐中電灯を持たせると、肩から提げている小さいバッグに手をつ込む。取り出したのは絆創膏だ。

「ここに水道があれば洗えたんだけどね。絆創膏で我慢して」

手際よく俺の膝に張っていく。その姿はどこか母さんを思わせる。やっぱり、こういう時は自分の姉なんだなと感じた。

「これでよし」

「あ、ありがとう、海花」

海花はにこりと笑うと再び探検を始めた。次は気をつけて歩く。それから数十分くらいだろうか。大きく曲がった先から外の光が見えた。それに興奮して海花が真っ先に走り出す。それにおいて行か

れないように続くと、一瞬で視界が開ける。出口からは果那ノ海を一望でき、俺らは少しの間その場から動けなかった。

そしてすぐに気づいたが、すぐ近くに渦波神社が見えた。案外知っているところに出てきてしまつて若干の残念さはあつたが、みんなで笑い合つた。

俺と海花はいつも一緒だつた。航大たちとこういう風に遊んだりもしたし、家族4人で出かけることもよくあつた。それはほとんどが陸だつた。

陸へと上がつて少し歩くと見えてくる古びた壁、所々塗装がはがれ落ちた赤い屋根。いつも使う唯一の駅である久里ノ上駅である。父さんが切符を人数分買つてくれて一人一人に手渡す。ホームへ立つと俺らはいつも揃つて電車が見えなにか確認していた。母さんは笑いながら危ないよ、と声をかける。

電車に乗ると決まつて俺らは窓際に座る。二席が向かい合つた座席が並ぶ車内には、自然と家族の会話が聞こえてくる。俺と海花はあつという間に流れてく景色を見ながら今日は何をするのだろうかとか、何を食べるのとかを話していた。それを微笑みながら母さんと父さんは見つめる。そんな、平凡であつて、幸せな家族。

隣町に着くとショッピングやレストランでの食事、時にはさらに都会に出て遊園地などにも足を運んだ。はしやぎすぎて胞衣が乾ききつてしまひそうにもなつた。有名な旅館に泊まつて温泉や豪華な料理を堪能もした。備え付けられた卓球台やゲームセンターで海花とひたすら勝負したのは楽しかつたな。疲れてすぐに寝てしまつた。

こんな生活が、笑いの絶えない日々が、あればそれでいい。

でも、それが永遠に続くことはない。それは、このときの俺は気づかなかつた。

いつこの日々が終わるなんて誰にもわからないって。

それが、すぐ先にまで来ていることさえも。

それが、今から二年前。この日もいつものように家族4人で陸に上がっていた。といつてもシヨツピングしてランチをするという、至って普通な外出だった。

「あー、おいしかった!」

「ねー! やっぱり私の目に狂いはなかったぜい」

大型シヨツピングセンターの近くにあったレストランで食事をした。4人がけの席に来てメニューを見るやいなや海花がオムライスをチョイスした。写真には見るからにふんわりとしたオムライスにケチャップがかかり、さらにサラダとコンソメスープが付いている。俺もそれを注文した。少ししてウェイターさんが持ってきたオムライスは、メニューと何ら変わらず、とても美味しそうだった。食べてみてもほつぺたが落ちそうだった。卵もふんわりしていて、終始俺と海花はそのおいしさに唸りながらスプーンを動かした。

「あ、ネギとほうれん草買い忘れちゃったわ」

「じゃああそのスーパーで買っていこうか」

母さんはたまに買い忘れる癖があった。父さんは笑いながら近くのスーパーを指さす。中に入ってみると様々な食材が並んでいて、気を抜くと母さんが無駄に買ってしまっそうになった。

「お母さん。これ買っていい?」

「いいわよ。ふふ、海花はこれ好きね」

父さんが持っている買い物かごに海花はそれを入れた。この時間帯は空いているようで待たずしてレジを済ませられた。俺はレジ袋に買った物を入れるのを手伝い、スーパーを後にする。程なくして海花が先程ねだつて買った物を取り出す。パツケージから引つ張り出して口に入れ、噛む。ポキツと気持ちよく折れて鳴った音。いつも海花が食べている駄菓子だ。

「海花、いつも食べてて飽きないの?」

「これ好きなんだもん! シガレットはナンバーワンだよ」

さらに噛んでシガレットを折る。音を鳴らして食べるのが上手いようだ。

歩いて行くうちにこの町の駅である魚喰駅に着く。ここらは町と

同じよに整備されいて、コンクリートでできた頑丈な壁に平べったい灰色の屋根。階段の横に車いすの人のための坂もある。

また父さんに切符を買ってもらい、少しして来た電車に乗り込む。帰りの電車も空いていて、他に何組かがここより前の駅から乗っているようだった。

「あ、そうだ」

俺は思い出したかのように声を上げると、今日のショッピングで買った物を袋から出した。ショッピングセンターで見つけて珍しくねだつて買ったもの。デザインは白くて毛がふわふわして、三角耳が2つ並んでついている。まん丸の黒いポッチが2つ、そして黒い大きな逆三角形への字の口。いわゆるシロクマを思わせるかぶり物だった。しつかりとした作りで被ると頭をふわふわの毛で守られている感覚だ。高そうに見えるが、驚くほどにお安い値段だったので家族4人分買った。

「これ被るから海花、写真撮つてよ。なんか面白い写真になりそうだから」

「ははは、確かに面白そう。待つてねー」

海花は母さんに向かって手を出す。それを笑って了解すると、バッグに手を入れてカメラを取り出す。母さんは主に俺と海花のだが、写真を撮るのが好きだった。だからいつもバッグの中にカメラを入れてる。そのカメラを受け取って海花は反対側の席に移動した。そこにはだれも座っていなかったので堂々と海花は席に寄つかかる。

「よーし、お父さんも被るか」

父さんもノつてきて、袋から取り出してシロクマになる。それを母さんがクスクス笑ってみていた。俺と父さんはどういうシチュエーションにするか色々悩んで動いていたが、なかなか海花がシャッターを押さない。

「……あれ、どうした？」

「んーとね、これどうすればいいんだっけ」

「ああ、それはね」

単に海花がカメラの使い方がわからなくて困っていたようだ。い

つも母さんが撮るのでやり方を忘れてしまったのだろうか。まったく、少しは覚えてくれよと内心ツツコミを入れる。

……すると。電車が突然ぐらぐら揺れ始めた。初めてのことなので俺はビククリして変な声が出た。父さんもきよろきよろ辺りを見回す。この車両に乗っている人も驚いている様子で、母さんは海花が倒れないように両肩をつかんだ。

電車はすぐに止まった。車掌さんもこれにはビククリするだろう。すぐに無線かなにかで連絡を取るだろう。そう思って俺らは待機しようとした。

その時、海花と母さんがいた方の窓が曇った。現在時刻からしてまだ日が暮れるに早いし、そもそも一瞬のことだ。そしてカメラの使い方がわかったのか、海花がシャッターを押した。カシャツと音が鳴ったのが合図のように、2人の背後の窓から何か大きな焦げ茶色のものが見えた。能がそれを俺らが驚くほどの早さで処理し、とてつもなく危険なものだと認識した。

「危な」

もう、そこからは記憶が無い。強い衝撃を受けたのはなんとなく覚えていたが、ハッキリとしていない。

どこが上なのか下なのかすらわからない、果てしない闇の中を彷徨っていた。声が出ることは無く、ただ歩き続ける。でもなぜか感じたんだ。心の底から家族を心配する気持ちを。

籠もっておぼろげな音が徐々に近づいてくる。それが人の声だとわかるのにはほんの少しだけ時間を有した。意識はぼんやりとはし

ていたが、体全体に激痛が走った。それに顔をしかめると、目の前の男性が大きな声で話しかけてくる。

「大丈夫ですか？聞こえますか？」

それにどう反応していいのかわからなかった。手を挙げることはできなかったし、声も非常に出しにくい状況だった。

「う……あ」

やっとの思いで出たのがこんな乏しい声だった。その人がこれを聞き取り、俺が生きていることを他の人に伝えているようだった。そして精一杯痛みを堪えて首をまわしてみる。

絶句だった。至る所に岩が転がり、その奥にはボコボコになって折れ曲がっている電車が見えた。そのまわりに多くの人が声を掛け合いながら作業している。みんなは救助隊なのだろう。

「三十代女性、意識レベル低下！」

反対方向から女性の救助隊員の声が聞こえた。もう首が動かせず、それが誰なのかが確認できなかった。けれど、俺の頭の中には最悪のビジョンしか映っていなかった。母さんは今年で35歳だからだ。

どうやら俺は担架の上にいるようで、救助隊員が一人加わって持ち上げた。きつとこれから病院へ行くのだ。これが初救急車だ。前は救急車に1回乗ってみたいなあ、なんて言っていたけれど、いざそうになるとそんな笑っている状況ではない。

横になった状態で周りの様子を見ていたとき、同じく担架に乗せられていた人がいた。その姿を見て、俺は目を見開いた。ボロボロで血だらけだったが、その服、髪色。海花だった。

それは奇跡なのか、はたまた残酷だったのか。今考えても、どちらにもはつきりと分けられないだろう。海花と目が合ったのだ。俺は精一杯手を伸ばした。痛くて、ギシギシきしむ音がする右手を、届くはずもない海花の方に。

「ああ、あああ」

やはり、声は出なかった。でも、言葉にならない俺の声が聞こえたのか、海花も精一杯の力をだして口を動かした。ハッキリと聞こえなかった。まわりの音に加えて、海花自身も声を出せる状況ではなかつ

たのだろう。

けれど、いつも一緒に暮らしてきた。沢山会話してきた。だからこそ、勝手なる俺の思い込みなのかもしれないけれど、そう言ったのだとわかった。

「海……………遥」

担架に乗せられ、首を固定するための器具が俺に付けられた。もう天井しか見ることができない。痛みが激しく、再び意識が落ちそうになる。俺は、泣きたかった。

この日の、あの瞬間が、生きている海花を見る最期の姿だった。

## 第二十一話 孤独な答え

それから俺が目を覚ましたのは2日後のことだったようだ。頭は冴えているわけでもないの、ここがどこだかわからなかった。近くから定期的に聞こえてくる電子音。微かに感じる消毒液のにおい。白いタイルを張り巡らせたような天井。そのあたりで病院にいるのだとわかった。

首ですら動かせない状況で、俺は思い出した。あの時見た光景を、地獄絵図のような、あの災害現場を。そして聞いてしまった、母さんかもしれない人物の危機を。海花の、変わり果てた姿を。

そのうち、医者たちが来た。大体は予想がつく。俺の現状を言いに来るのだろう。そしてここでわかったが、すぐ隣の部屋に父さんがいることだった。父さんは生きていた。けれど、母さんと海花については触れなかった。

あの日、土砂が丁度俺らが乗っていた電車の2号車に激突。それによつて車両は押し出されて横に転がった。俺と父さんは中に入ってきた土砂がさらに窓を破り、奇跡的にそこから放り出されたようだ。ある程度の遠心力をついていたし、車両内でかき回されたので即死の可能性だつてあつた。というかその方が大だった。けれど、俺と父さんはシロクマのかぶり物を頭に付けていた。柔らかく、それでいてしっかりと頭を覆っていた。あれがクッションとなつて頭へのダメージを軽減できたのだという。そして、そうなるのであればもう言うまでも無い。最初に土砂がなだれこんだ場所に一番近いところにいる、なにも被つてもいない2人が、何事もないわけがなかったのである。

数日がたったある日、俺は聞いた。定期的に来る医者顔をしっかりと見た。きつとまだ俺は幼いからもう少し黙っておくべきだろうと思つているのだ。ふざけるなよ。あれを見て、なおかつ今2人はどこにいるのか言わない時点で、わかりきったことじゃないか。

「……残念ながら、亡くなつたよ。遺体の方はこちらで管理している。君らの状況を見計らつて、葬儀を行う予定だと君のお父さんと相談さ



せてもらった」

俺は暴れたかった。裂いて、握りつぶして、放り投げて。何もかも壊してやりたかった。でも、できない。大けがでまともに動けない身体に、俺は苛立ちを覚えた。

でも、毎晩のこと、あの光景がフラッシュバックした。いやに響く隊員たちの声。巻き込まれた人たちのうめき声。そして、海花の姿。聞こえない最期の声。目を閉じてでも無駄だった。誰かが俺を狂わせるように映像を流す。苦しかった。辛かった。あの時の痛みさえも思い出してくる。俺はただ、歯を食いしばって泣くことしかできなかった。

そうして一ヶ月を過ぎた頃に、俺らは退院をした。まだリハビリが残ってはいるが、なんとか歩けるようにはなっていた。事故以来帰れていなかった家に到着する。ここまで留守にすることはなかった。鍵を入れ、ドアを開けた。けれど、そこには俺と父さんを出迎えてくれる母も、海花も、誰もいなかった。静寂が、俺らを出迎えた。

後日、葬儀が執り行われた。母さんと海花の遺体が今日の前にある。人が何十人も入れる位の貝殻の上で、2人は永遠の眠りにについている。貝殻の中には多くの珊瑚礁が2人を包み、まわりを囲むように置かれた御霊火が明るく照らす。光り輝くそれは、この場で言うのはおかしいと思うのだけれど、とても美しかった。まわりからすすり泣くのが聞こえた。中には抑えきれず、泣き崩れている人もいた。澄澗たちもいた。皆一様に泣いている。それなのに、俺は……。正直不思議な気持ちだった。あれだけうなされて涙を流していた俺だけど、このときは涙が流れなかった。まるで2人が本当にただ寝ているだけで、きつとすぐに起き出すのかと思っていたのだろうか。

いや、違う。でも俺にもわからない。悲しいはずなんだ。辛いはずなんだ。今だって胸の奥が締め付けられる。ふと横にいる父の顔を見た。父さんも、泣いていなかった。ただ、その目には光がなかった。「慈悲深き海よ、たゆたう波よ、さざめく光よ。あらゆる命を育む海よ……」

ウロコ様の声が聞こえる。葬式で唱える言葉だろうか。その一定したテンポの言葉が、妙に腹立たしかった。コイツはどう思っているのか。2人が死んで、悲しいと思っっているのか。下手したら、何も思っていないのだろう。結局は、海神のウロコだ。

そのとき、2人が眠る貝殻の側の壁に自分の顔が映っていた。そして、わかった気がした。

ひどい顔をしていた。やせ細ったその顔に、黒く淀んだ自分の三白眼がこちらを見つめている。まったく、ひどい顔だ。父さんとそっくりじゃないか。そう、そういうことだ。俺も、父さんも、涙は枯れ果てた。精神が削られボロボロになった身体。外面の傷は治っても、内側のそれは治らない。もう、最低まで来てしまっているのだ。これ以上下がれない。そして、なかなか上がらない。

葬儀も終わり、帰ることとなった。父さんはまだやることがあるように、今回手伝ってくれている役所の方たちと話している。独りで歩き出す。すると俺の視界にはあの4人がいた。こちらをただ見つめる。澄滯と沙月はまだ泣いていた。航大も、洋斗も、俺を心配してくれているようだが、どう声をかけていいのかわからない様子だった。

「海遥」

皆とは反対の方から声をかけられる。微かに震えた声。汐帆ちゃんがいた。彼女は無理矢理に笑顔を作っている。既にぎこちない。

「海遥、ごめんね。辛いよね……悲しいよね」

「……なんで汐帆ちゃんが、謝るのさ」

「ごめんね……何もしてあげられなくて、ごめんね」

汐帆ちゃんは俺を抱きしめた。それは強く、しっかりと俺を包み込む。まだ治っていない傷が痛かった。いや、それは心の傷だったのかも。しれない。汐帆ちゃんは俺を抱きしめたまま泣いた。その涙は俺の喪服に染みていく。

父さんから渡されていた鍵を使って家へ入る。電気をつけると、確認したポストの中に入っていた封筒を見る。こちらの住所、父さんの名前が達筆で書かれている。裏返すと、そこには果那ノ海のカメラ屋の店主の名があった。主に撮った写真の現像をやってくれる。そこ

からのものとなると、この封筒の中身は想像がついた。

十数枚の写真があった。先日、母さんが持っていたカメラが現場から見つかった。もう使えないが、なかのフィルムは全てではないが現像できるかもしれないと頼んでいたのだ。それが、この十数枚。俺と海花が一緒にアイスを食べている写真。誰かに撮ってもらった4人の写真。俺と海花が2人揃って図工で描いた絵を広げている写真。父さんがテーブルに突っ伏して寝ているところを映した写真。母さんと海花が一面花畑のところ立っている写真。いろんな、けれど時期が飛び飛びになった写真たちをゆっくりと見ては後ろにまわす。

そして、最後の2枚。俺と父さんが映っていた。頭には白いものが乗っかっている。しっかりと構えてシャッターを切らなかつたせい、少しブレている。父さんは列車の後方を見ている。動揺でこわばった横顔だ。そして、正面を向いた俺。窓ガラスに土砂が見えたまさにその瞬間だろう。もう1枚は、はっきり言ってわからない。動いたものを撮ったためブレブレで、カメラ屋さんも渡すか否か迷ったことだろう。でも、送った。日付は事故当日。だから、という理由だろう。その1枚には、俺は母が映っているのだと感じた。当時の服の色に似ているし、これを持った海花を庇おうとした。その時に海花がまたシャッターを切ってしまったのだろう、と。

俺は写真を持ったまま立ち尽くす。目線を写真に落としたまま、動かなかつた。母の最期の写真。海花のはもつと前のものになってしまふ。けれど、俺の脳にあの惨劇がしっかりと焼き付いている。レンズを覗いてシャッターを切ったように。俺は、写真を封筒に戻した。

俺は、決めた。俺なりにみんなをまとめる役をやっているつもりだった。でもそれは海花がいたからこそだったんだ。さりげない、でも確かな自分の姉としての存在がいたからこそ、俺はいる。笑って、楽しんで、無邪気にみんなと遊べた。今はもう、いない。母さんもない。残された父さんは、これからも変わりなく宮司を続ける。辛い思いを必死に押さえながらも。その父さんを俺は支えることができるのか。きつと、自分の思いを支えるのが精一杯で、父さんの思いまでは無理だろう。そう思っている時点でダメだ。なら、どうする。母

さんがいなくても、海花がいなくても、俺はひとりで充分やっていけるところを見せつけられたい。俺は大丈夫だから、父さんは自分のことだけを心配してくれ、と。それが、俺の答えだ。

それからは徹底した。何日ぶりかにみんなと会ったときはきつと、驚いただろう。海花にたまに振り回されながらも、にこにこしていた俺は、もうどこにもいなかった。事故後だから、ということと思っただろうけれど、今現在まで俺はあの頃の無邪気さを出したことはない。代わりに、今まで以上にみんなをサポートした。困っていることを解決に導き、時には果那ノ海に貢献などもした。

そして、あの土砂崩れの影響による人工減少で、久里ノ上の学校に通わざるを得なくなつた。正直胸が張り裂けそうだった。あの悲劇が起きた場所に俺は上がりたくなかつた。ずっと海の中にいたかつた。それでも、義務教育と言うことで渋々従つた。それに、みんなが楽しみにしていたのだ。澄滯なんか、ピョンピョン跳びはねて嬉しがつていた。そんな姿を見て、反対なんかできなかつた。

俺は、この4人を守る。傷つけさせない。悲しい思いをさせない。俺は大切な存在を2人も失つた。この悲しみ、辛さを超えるものはないだろう。だからみんなに同じ思いをさせたくなかつた。みんなも俺には大切な存在だから、そして海花がいらない今、俺しか守るやつはいないのだ。

あの日から、俺にとって陸は忌避たる場所になつた。だから、俺は、久里ノ上を避けた。みんなからもできるだけ避けさせた。そして、汐帆ちゃんからも、避けさせようとしている。

「……全部、俺のワガママなんだ」

俯き、未だ視線を合わさない海遥から語られた言葉で、汐帆は口を閉じた。まわりのみんなも言葉に詰まった。彼の本音には確かなる思いやりがあった。辛い現実から這い上がるように生きてきた彼だからこそ、この問題に強く反発してきた。けれど、これは久里ノ上で災害が起こるのが前提なはずがないのだ。掟を破つてでも汐帆は聡太郎と結婚するのかどうかの話であって、海遥の私情を考慮して判断する場ではない。

「どう頑張つても、思い出しちまう。久里ノ上での学校生活が始まってからも、この場に海花がいたら、もっと楽しめるのになつて。もつと陸のやつらと仲良くやっていけるのかなつて！いつもちらつくんだ。もういないのはわかってても、俺には忘れられないんだ。その度に、辛くなつた」

海遥の拳は強く握られる。

「そんな状態で、おじよしさま制作なんてやれるわけなかった。ただでさえ苦しい陸に、長くいたくなかった。そこでも海花のことを考えちまう。でも、澄滯たちが楽しそうに嬉しかった。この4人が笑っていられることに、俺は安心した。それこそ、俺をおふねひきに誘ってくれたときも、凄く嬉しかった。俺を必要としてくれている、俺をちゃんと仲間だと思ってくれている、それだけで十分に」

少しではあるが、海遥の表情が和らいだ。仲間の温かい思いを知ったからこそ顔だった。

「……でも、俺はダメなやつだ。こうなつてみないとわからなかった。俺は、こうまでしてくれる仲間に大きな迷惑をかけていた。気づかず、自分のことばかりで。何も守れていなかった。汐帆ちゃんのことだって、すべては果那ノ海のためとか言つてさ、何も話さなかった。リークすることをずっと悩んだあげく、ただ突き放したただけだった。

あの時俺を抱きしめて、泣いてくれた汐帆ちゃんに、俺は何もしなかった」

強く握った拳はついに小刻みに震えだした。徐々に言葉も震えて、彼の瞳から一粒の涙がこぼれ落ちる。それを見た汐帆からも、涙がすうつと落ちる。

「たまに夢だつて見る。母さんと、海花が立ってるんだ。でも、笑つてない。生きている俺を憎み、恨んでる。当然だよ。こんな俺が、どうしようもない俺が、生きていることに腹を立てるのはあたりまえだ。自己人間だ。裏切り者だ。……つたくさ、もうどうすればいいかわかんねえよ」

消えるような、寂しくて、弱い声。静寂に溶けてしまうような状態の海遥に、ある人が話しかける。

「そんなことないよ」

ふと、顔を上げる。汐帆も振り向く。全員の視線の先には、聡太郎の母がいた。

「海遥くん。そんなに自分を責めないで。私はね、君の辛さには遠く及ばないけれど、少しならわかるのよ」

「……え？」

聡太郎の母の、ゆったりとした優しい声に、海遥は戸惑った。

「私ね、見たとおり足が動かないの」

聡太郎の母はゆっくりと自分の両足をさする。微笑しているが、目からは寂しさが窺えた。そして、視線を海遥に戻し、こう告げた。

「いたのよ、あの時。2年前の、あの電車の2号車に」

## 第二十二話 暗闇を照らす小さな光

「母さん……」

「いいのよ、大丈夫」

心配そうに母の肩に手を置く聡太郎に微笑み、改めて海遙に顔を向ける。

「そうね、あの時は学生時代の友人たちとお食事に行った帰りだった。他県に行つちやつた子もいたから、みんなで会おうつてなつたら割と遠出になつちやうのよね。それが終わって、乗ったのがあの電車。魚喰駅で一組の家族が乗ってきたのはなんとなく覚えてる。男の子と女の子が楽しく話してたから。きつとそれがあなたたち。そして、あの災害が起こった」

ここで区切り、聡太郎の母は自分の足下を見た。先程のように優しく触る。この次に話すことは、概ね全員が察した。

「目が覚めたときは病院のベッドに寝てた。なんだか久しぶりに熟睡したような、そんな感じだったわ。側には聡太郎がいて、とつても安心したような顔で手を握ってくれた。先生を呼んでくるつて部屋を出てつた後、話しやすいように起き上がるうとしたの。でも、起き上がれなかった。勿論色々骨折とかもしてた。それでも、何か変だった。どんくさいのかしらね、すぐに気づかなかった。それが理解出来たのは先生が来たあと。高いところから突き落とされたようだった。絶望だった。もう、どこにも行けないのかつて、友人たちと出かけられないのかつて、悲観した。

でも、聡太郎は私を元気づけてくれた。毎日来ては今日の出来事はつて話してくれた。命ある限り笑えるから、母さんも笑つてつて。俺がちやんと稼ぐから心配しないでつて。とつても嬉しかった。そして気づかされた。たとえ足が動かなくなつても、私は生きている。だからなんだつてできるつて。車いすがあれば多少手間や友人に手伝つてもらうけれど、いつものようにお食事に行ける。働いてたパートは無理だけど、家も聡太郎の稼ぎのおかげでリフォームして普段通りの家事もこなせる。今日だつて、聡太郎が愛している人と会えた

し、あの電車にいたあなたともまた会えた」

突然災害に巻き込まれ、目覚めたら下半身不随。そんな状況となつたら誰もが悲しみに打ちひしがれるだろう。でも、彼女は前へ進んだ。下を向いて立ち止まりそうになつても、そこには大切な家族がいた。友人も側にいた。彼らがいたからこそ、今の彼女がある。母の言葉に聡太郎は少し頬を赤くする。

「人間は一人で生きてはいけないっていうけれど、こういう身になつたからこそ実感したわ。ひとりぼっちだったら、立ち直れなかった。……だから、あなたもそう。あなたは母親と姉を失つた。とても辛いだろうし、陸を避けるようになるのも仕方が無い。でも、あなたには父親がいる。そして、あそこにも4人も大切な友達がいる。今通つている学校にだって友達になれる人はいるはず。こんなに仲間がいる。ひとりで抱え込まないで、頼つて、話してごらん。彼らがきつとあなたを助けてくれる」

「みんなを……頼る」

「そう。みんなを頼る。あなたはあの4人が大切だから守りたかつた。でも、あなたも、彼らと同じ。何も変わらない、同じ年の子たちなのよ。あなただけ大人ぶらずに、彼らに頼るの。助け助けられる、それがいいと思うの。……それに、あなたとあなたの家族はよく陸に上がつていたのよね。なら、少なからず陸での”いい思い出”もあると思うの」

「いい、思い出」

海遥は聡太郎の母の言葉を反芻する。それは彼女にとって考えてもみないものだった。視線を逸らし、少し俯く形となる。

深い闇の中に墜ちている海遥。そこで流れていた彼の過去が巻き戻つていく。高速で映画のフィルムを巻き取るように、カラカラと戻つていく過去がある地点で止まった。それは家に届いた数十枚の写真を見る場面だった。あれは後に箱に入れて押し入れに入れてしまった。その写真を、微かな記憶の写真を見る。俺と海花が一緒にアイスを食べている写真。誰かに撮ってもらつた4人の写真。俺と海花が2人揃つて図工で描いた絵を広げている写真。父さんがテーブ



ルに突っ伏しているところを映した写真。母さんと海花が一面花畑のところ立っている写真。どれもこれも、あの時は絶望の中の俺にとつて余計に心を引っかけ回すものになしか見えなかった。けれど、今は……。

『おおお、うんめえ!』

『ねー海遥。そっちのイチゴ味一口くれ!こっちのチョコあげるからさあ』

『すごい景色だねえ』

『南波、海遥、海花。写真撮るからこっち来て』

『もしよかつたら撮りますよ』

『え、いいんですか?ありがとうございます』

『いえいえ。こういうのは家族全員で撮るものですよ。では、いきま  
すよー』

『どうだ海花!俺の方が上手いやろ』

『何言ってるのさ。私の方が才能あるね!』

『ほらほら、2人とも。見えるように胸のあたりまで上げて。撮るよ  
ー?』

『……あれ?お父さん寝ちやってる』

『最近忙しそうにしてたしね』

『よし、じゃあ撮ってあげよう』

『いやなんでや』

『わああ!!ゼーんぶお花だ!!』

『見て見て海花、海遥。こっちにもあるわよ』

『母さん、カメラ貸してよ。海花と撮ってあげるから。女性は花に囲まれているとより美しくなるってね』

『ふふふ、何それ。どこで習ったのかしら』

現像した写真から記憶が溢れ出してくる。それはどこか温かくなるような光を帯びる。海遥がいる闇の中にいくつもそれが光りだし、灯籠のように見える。

写真をめくっていく。最後の2枚が来る手前の写真。これだけ誰も映っていない。そのかわりに、一面に照らす広大な夕日があった。それを撮ったのは事故が起こる何週間か前だったと海遥は記憶している。それもまた、彼の目の前で開かれた。

『ねえ、お母さん。どこに向かっているの？』

『んー、お母さんのお気に入りの場所だよ』

いつものショッピングの帰り道。電車から降りた一行はそのまま海に戻らずにある場所へと向かっていた。南波は海花の質問に笑顔で答えながら手を引いて歩く。すぐ横に海遥と和洋がいる。

『そこはね、お父さんがお母さんに教えてくれたのよ。一度来ただけでどつても気に入ったの』

『へえ、そうなんだ』

『まあね。お父さんが子供の頃だったかなあ。たまたま見つけてさ、何か悩んだときとか、疲れちゃったときとかに来てみるんだよ』

一行は山道を登り、途中で獣道となったところに曲がる。それぞれ手を握って転ばないように進んだ。そして。

『よし、着いたぞ』

『おおお……』

『綺麗……』

ある箇所で木々がなくなっている。そこからは赤い夕日を一望できた。木々で見えなかったが案外高い場所まで登ってきていた。端から端まで広がる夕日。そしてそれとの曖昧な境界線から下は風いだ海がいつもの青では無く、夕日に照らされた赤となっていた。そこに夕日の姿が映り込み、海の中からでは見ることのできない絶景となつて彼らを迎える。そんな光景に海花と海遥は釘付けになっていた。

『ここでこんな景色の時だったわね。お父さんにプロポーズされたのも、この場所よ』

『うお、マジか?! ねね、父さんはなんて言ったの?』

『ええ、急にどうしたんだよ』

『ほらほら。教えてよお父さん!』

『べ、別に凝った言葉は言ってないよ。ただ、結婚してくださいってね』

2人の子に挟まれながらの期待を恥ずかしそうに答えた。それを聞いた2人はニヤニヤしながら歓声をあげる。南波の方も少し恥ずかしがって頬を赤らめる。

『でも、お父さんの言ってたこと、わかるかも』

一歩前へ出て海花が呟くように言った。

『何か悩んでもさ、こんなにすごい景色見たら、そんなこと忘れそうだよ。見とれて、何かスッキリした気分になりそうだよ』

『……そうだね』

海遥も海花の後ろ姿を見て、そう呟く。彼女の後ろ姿は、このときやけに大人に見えた。

『私も、何か悩んだらここに来る! そしたらきつとりフレッシュできるし、勉強もはかどるかも』

『海花は俺より成績低いからな。そうなったら凄いや』

『勉強は今後のためになるからね。これからが楽しみだわ』

『もう、絶対海遥を抜かしてやるんだからね! それでねー、私はもっと勉強して、将来は教師になりたいの』

『おー、海花の将来の夢は教師なのか』

『うん。みんなにいろんなこと教えるのやってみたいなって。先頭に立ってみんなを引っ張る存在に憧れてるし、楽しそうだもん。将来は、ここの小学校か中学校で先生になってたいな』

海花はその場で一回転しながら自分の夢を語った。彼女の目はとても輝いていて、とても輝かしい未来が映っているようだった。この景色によく似合うと海遥は感じた。

『陸の学校か』

『うん。果那ノ海もいいんだけどさ、陸にはここだけじゃなくて  
いっぱい学校があるもん。そこで沢山の人たちとお話して、仲良  
になりたい。それが私の将来の夢』

『そうか、海花ならきつと叶えられそうだ。となると、海遥に僕の仕事を  
継いでもらうことになるね』

海花の将来像が自然と浮かんできた。親として嬉しい和洋は海遥  
の肩に手を置く。

『おっし、そうだな。海花が陸に出るなら俺が海から見守ってやんよ』

『頼むよー？あ、校外学習みたいなので果那ノ海紹介したいな』

『陸の生徒は行けねーだろ』

普段は見せない自らの夢を語った海花。その様子から知らぬ間に  
大人になったものだど3人は感心したが、やはりまだ子供だった。普  
段通りのどこか抜けた一面を皆で笑い合った。

『じゃ、約束ね。私は先生になって陸に出る。海遥はお父さんから宮  
司を継ぐ。陸のみんなは果那ノ海来れないから、逆に海遥が学校に  
来て果那ノ海のことを教えてね』

『おう、約束するぜ。頑張れよ、海花』

2人はお互いの小指を出した。手を近づけて小指同士を絡める。  
いつからか覚えていた、約束の時に行くこと。水色さえもほほ赤で染  
められた空の下、海花と海遥は強く約束した。

いつからだろうか、これまでの記憶を奥の奥に押し込んでいた。思  
い出すだけで海花や母さんが出てくるから、そんな理由でちゃんと面  
と向かって見てこなかった。

俺は馬鹿だ。正真正銘の馬鹿だ。

確かにあった。しつかりと存在していた。母さんと海花は陸の事故に巻き込まれた。こんな悲劇はない。けれど、それを理由にして忘れてしまう、無かったことにしてはいけないのだ。みんなで楽しんだ多くの思い出が。笑い合ったあの日を、いつか訪れる将来を見据えて約束したあの日を。写真を撮ったのはほぼ陸だ。陸に出たからこそ、写真を撮って思い出にした。家族の大切なもの。家族という大きな大きな結晶のカケラたち。それらはすべて、俺には大切なものだった。

「……あった。あったよ。俺の……大切な、大切な思い出」

再び溢れ出す涙。海遥の頬を伝うその涙は、輝いているように見えた。

「なんで忘れてたんだろう……！俺は、大切な思い出がたくさんあった。俺は、海じゃ見られない景色を見れる陸が……大好きだったんだ」

「うん」

聡太郎の母は満足そうにして頷く。

「海花と母さんと父さんで出かけるのはとっても楽しかった。……だから、うん。そうだ。俺は、もう目を逸らさない。みんなで見えてきたこの陸を」

「ああ、そうだな。お前は笑ってやれ。そうすりゃ、海花ちゃんも南波さんも、安心だ」

皆川さんが海遥に近づいて頭を優しく撫でる。他の2人も自然と笑みを浮かべる。彼らも当然海遥の過去を知っている。だからこそ彼が悩んだり苦しんでいることも薄々わかっていた。それが解決した今、胸をなで下ろした。

「と、いうわけで、だ。だいぶ趣旨からそれてしまったのだが……。両者意見一致で、上板聡太郎と池谷汐帆の結婚を認める」

皆川さんが双方に目を向けて、宣言した。それによって緊張の糸がついに切れたようで場が一気に和む。聡太郎と汐帆は互いに見つめ

合う。そしてお互い前へと歩み寄って、手を握る。

「改めて、よろしくね。汐帆」

「うん、聡太郎さん」

微笑ましい2人を皆が温かい目で見守る。これで、1つ境界線での問題が解決された。2人のところに海遥が近寄る。

「汐帆ちゃん。ごめんなさい、そしてありがとう」

「ううん。こっちこそ、ありがとう。海遥がいなかったら、ちゃんと自分にケジメつけられなかったよ」

「……やっと、前みたいな海遥、見れたな」

「うん！」

航大は腕を組み、疲れがドツと来たようで壁に寄っかかっている。海遥が見せる自然な、柔らかい笑顔を見て、澄濤たちも嬉しかったようだ。

「さて、これでお開きだな」

「藍住さん、今日はありがとうございました」

「なになに、どうってことねえよ。ウチの職員なんだから当然だろ」

聡太郎が大生の父に今日のために時間や場所といった協力に対する感謝の意を述べた。大生の父はそれに聡太郎の背中を若干強く叩いて答えた。

「いやー、まったくき。俺の無様な有様をお前たちにもみせるとは思ってたなかったよ。なあ、一樹たち？」

「!!」

頭をかきながら突然海遥は窓の方に向く。さらに名指しまでされてしまった。あまりにも急だったので変な声が出てしまった。おとなしくここは降伏だと言わんばかりに、4人が顔を出す。

「あれ、里実ちゃんたち」

「おい、大生。こそこそ何やってたんだよ」

「バレバレでしたか……」

「え、あはは。俺らも、汐帆さんのことが気になってて」

「……まあ、わからなくもねえけどよ」

大生の父は今回は見逃すと言うことで済んだ。里実はまた泣きそ

うになりながら汐帆と言葉を交わす。一方的に祝福の言葉をかける里実を、汐帆は優しく里実を抱きしめる。

部屋に並べられた長テーブルや椅子は大生の父が片付けとくとうことで、それ以外は漁協を出ることとなった。聡太郎は母の車いすを押しエレベーターの方へ歩いて行く。

外に出ると、一気にムツとした風が来ると思っていたのだが、何故かそうでもなかった。暑くないのだが、寒くはない、そんな微妙な気温。そんな不思議な現象の意味が、間もなくわかることとなる。

「……え？」

海遥が足を止める。右手がそろりと自分の頬を触っている。

「どうしたの？」

沙月が海遥の方を振り向いて問う。だが、海遥はそれに答えず、ただ上を向いていた。彼の視線の先に皆も惹かれて上を向く。そこには、一面薄いグレーが広がった雲から、白い小さな何かが落ちてくる。

「ええ、雪？」

目線にまで落ちてくるとその正体がわかった。日中だけれども少し光りながら落ちてくるそれは、雪だったのだ。しかも……。

「これ、ぬくみ雪……なのか」

「うそ……。今って、7月じゃ」

海遥の手に落ちたそれは、一瞬にして消えた。その雪は、果那ノ海に住んでいたからこそ、ぬくみ雪だと見分けられた。でも、そこに単なる喜びはなかった。

海の中に降るはずのぬくみ雪。しかも地上で降るにしても季節が違いすぎる。この現象に、一行はただただ、立ち尽くすことしかできなかった。

## 第二十三話 積もる積もる白と不安

次の日にはぬくみ雪は止んでいた。空はそれでも薄灰色の雲が一面に広がっていて、夏の日差しがどこにも見当たらない。その代わりに家々から見える景色といえば、まさに冬景色そのものだった。屋根にはぬくみ雪が積もり、庭や道路などそこら中に塗りたくったように白くなっている。朝早くから大人たちが出番が来るとは思っていない。朝早くから倉庫から取り出して雪かき作業に追われている。子供たちは家から飛び出して雪だるま作りや雪合戦に夢中だ。足跡があちらこちらに残っている道の上に、一樹は立っていた。

「……なんじゃこりゃ」

昨日から降ったぬくみ雪について今日のニュースは持ちきりだった。なにせ久里ノ上だけでなく、日本全土で降ったのだから注目はこちらに注がれるだろう。一週間前までの気象予報によると、今年は例年よりも気温が低い傾向と言われていたのだが、特に目立った乱れも無く晴れるそうだったようだ。だがしかし、午前中は晴れていたが午後から曇り始め、ぬくみ雪が降り注がれた。結果、気象予報士総出で今後の予報を見直さなければならなかった。また予想だにしない積雪によって電車の運休や遅延等も発生し、都会などはバタバタしている。幸い今日は日曜のため、通勤ラッシュなどと重ならなかった。

この異常気象をみた一部の人間が人類の滅亡だのなんだの言い始めた。それは状況が状況だけに案外そうなのかもしれないという不安定ながらも広まり始めている。無論、そんなのは事実無根だと国から発せられていたが、海村ではそうではなかった。

「おいおい、地上にぬくみ雪が降ったってよお」

「俺らはさあ、何も海神様を怒らせるようなことはやってないぞ?」

「今年はやけに気温が上がらないし、もしかしたら……」

「ま、まさか、あの言い伝えみたいに……」

朝から青年会の小ホールに大人たちが集まって話をしている。宮司である和洋から連絡が入ったため、ここに集合しているのだ。普段ゴツイからだで働く者も、負けん気の強い者も、今日に限っては小さ



な声で縮こまっていた。

「やあ、遅くなりました」

入り口の方から大きな杯を持った和洋がゆっくりと入ってくる。その杯には青白く燃え上がる御霊火がある。

「宮司様！」

「地上にぬくみ雪が降ったって……原因はわかったのですか？」

一目散に和洋の前に集まってくる。両手で杯を持つ彼のことはお構いなしに質問をふっかけてくる。彼らをなんとか落ち着かせようとしていると、

「ほらほら、騒がしいぞ。静まれ」

ウロコ様がのそのそと入ってくる。頭をかきながら小ホールの中へと進む。

「ウロコ様！」

「落ち着け言うとするじゃろ。説明するから席に着けい」

ウロコ様が床に座ると彼らもそちらに集まり、ウロコ様と向かい合うようにして正座する。和洋は杯をウロコ様の横に置いてから正座する。

「では、ウロコ様。お願いします」

「うむ。今日お主らに集まってもろうたのは他でもない。この先訪れる、禍事についてじゃ」

表情は一切変えず、部屋の奥にある掛け軸を見つめるようにして、ウロコ様は口を開いた。淡々と語る様子を大人たちは一切聞きもらさんと集中する。ウロコ様の話の意味が大体わかってくる頃には大人たち全員が恐ろしいものを見ているかのように引きつっていた。

「ほ、本当にそうなってしまふのか」

「信じられねえ……」

「とにかく、これは必ず訪れる。直に体に変化を感じるじゃろう。色々準備もせにやならんし、子供たちにもこれを知ってもらふことになる」

サクツ、サクツ、と音を鳴らしながら歩いてみる。一樹は家で特にすることはないので気分転換に散歩に出かけた。ぬくみ雪が降った影響なのか、今日は肌寒い。しようがなくタンスから長袖長ズボンを引っ張り出して着た。

時刻は午前11時頃。あちらこちらで子供たちが遊んでいる。今日は元気な子たちは雪で遊び尽くすことだろう。中には半袖短パン小僧がちらほら窺えたので、流石だなど変に関心した。目的を決めずに出てきたのでなんとなくて道を曲がったりしてみよう。すると偶然にも茉紀と会う。

「おっす、一樹」

「よお」

茉紀も気ままに散歩なのだろう。そう思う理由は容易い。彼女の首に自慢のカメラがかけられていた。

「流石カメラマン。こういうのは逃さないねえ」

「あたりまえじゃん。こーんなに雪が降るなんてここじゃありえないし。それに雪景色も綺麗だしね」

茉紀は無邪気な笑顔を浮かべる。カメラを持ったときはいつもそうだった。普段は一樹に対してはやけにキツイというか、負けん気が強くなるというか。そんな彼女の趣味が、これである。父親がカメラマンをやっている関係で興味を持ったらしい。父親の撮ってきた写真を見て、自分もこんな綺麗な写真を撮りたいと幼き茉紀は思った。「んで、いいの撮れたか？」

「勿論」

茉紀は一樹の隣に来て撮った写真を見せてくれた。茉紀が撮った写真一枚一枚興奮しながらポイントを語っていく。若干早口になっているため一樹は苦笑いしたが、どの写真も綺麗だった。ぬくみ雪が乗った木の枝や花などは、どこか生命の力を感じる。とある住宅地の

道にある自転車もいい味が出ている。また高台に登って撮った久里ノ上全体の写真は、パンフレットとかそういうったものに載せられているような、そんな綺麗なものだった。

「へえ、いいの撮れてんじゃない」

一樹は感心しながらもつとよく見ようと茉紀の方に近づいた。それが近すぎたのか茉紀は咄嗟に少しだけ離れる。

「ま、まあなー昔っから色々撮ってるし、パパに教わってるし」

照れているのか、茉紀の頬が赤い。特にそれは気にせず一樹は相づちをうちつつ、空を仰ぐ。

「……にしてもさ、変だよなあ」

「あー、この天気でしょ？夏に雪ってビックリだよ。テレビでも世界滅亡とか言ってたし」

「まあ流石にいきなりそれはないだろうけどさ……。でも、なんか怖いな」

「あ……えっと、蔵本先輩、だっけ？」

一樹は小さく頷く。一面に覆われた雲。昨日、漁協を出たときに見た空と同じだ。そこから無数の小さな粒が落ちていた。その様子を見て、皆が驚いた。きつと無邪気な子供だったのなら、興奮してそこから中駆け回るのだろう。

『そんな……馬鹿な』

前代未聞の事態に一番困惑していたのは海遥だと一樹は思った。そのこわばった表情が印象に残っている。それは、まるで起こってほしくない事態が来てしまった時のような、絶望。

「胸騒ぎがするんだ。こんなの普通じゃないし、これから何かが起こるんじゃないかって」

「んー、それはわかるけどさ。考えすぎかもよ？」

「でも、でもさ……。それにあいつ、海村の宮司の息子だし、もしかしたら何か知ってたのかも」

「いやいや、ほんと一樹どうした？頭打ったか？そんなに気にするなって」

茉紀は相変わらずの調子で一樹の肩を少し強めに叩く。一樹の方

はまだしつくりきてないものの、考えすぎだとは自覚している。

「……そうだな、すまん」

「いいってことサ」

まだ写真を撮っていくようで、茉紀は住宅街の奥へと向かった。その後ろ姿を見届けた後、一樹は元来た道を引き返した。そうだ、変に考えすぎだと頭の中で反芻しながら歩く。来たときの自分の足跡を潰すようにしてみる。それでも、引つかかるものは消えなかった。

それは当然だった。いや、当然というのも何かおかしいと一樹は思ったが、この状況を見てそう思わざるを得なかった。

次の日、朝のチャイムが鳴ってホームルームが始まる。先生が入ってくると手に持った日誌を教卓に無造作に置くと、あることに気づいた。

「あれ？海つ子揃って休みか。何も連絡来てねえんだけどな」

一樹の他多数がパツと後ろを向いた。海遥たちが座っている一番後ろの席全部が空席となっていた。今まで皆が皆勤賞だった。一昨日だって、誰か具合が悪かった者はいない。でも、もしかしたら昨日隊長を崩したのだろう、と一樹は結論づけた。一向に胸騒ぎは治らないが、そう自分に言い聞かせた。

だがそれは悪性腫瘍のように、放っておけば自然と無くなるものは無く、日に日に少しずつ大きくなっていく。次の日も来なかったのだ。5人のうち、1人も。2日連続で無断欠席には流石に大塚も疑問や不安を抱き、ホームルーム後に連絡を入れた。が、5人とも応答がなかったのである。

「……マジかよ。いったいどうしちゃったんだ？」

一足先に幹大と隆広が先生に連絡した結果を聞きに行っていた。その残念で、さらに不可解な結果を一樹たちに伝えた。

「明らかに何かあったよな、これ」

「今更5人揃ってサボリとか……期末が嫌になったか？」

「それは隆広、お前だろ」

昼休みの中、席の後ろにあるスペースに集まって話し合う。とは

いっても原因がなんなのかさえわからない状態で、進展するはずも無く。

と、ここで一樹は先日見た海遥の狼狽について思い出した。少しでも何かあるのではないかと引っかかっていたそれは、まさに手がかりになるのではないかと一樹は思い、皆に話した。

「ほう……。確かあれだろ、海遥って宮司の息子なんだろ？なら事情くらいは知ってそうかもな」

「でも、私たち誰も海に潜れないんだよ。海遥くんに聞こうとしてもあつちから来てもらわないと……」

「まあ、そうなっちゃうよなあ。誰かさ、海にいた人いねえかなあ」  
「……あ」

海遥が何か知っていたとしても、そもそもあの5人が揃って学校に来ないところから始まっているので、結局はスタートに戻ることになる。頭を抱え、隆広が何気なしに言った言葉のほんの数秒後、大生が何かを閃いたようだ。

「どうした、大生」

「いや、思っただけだよ。汐帆さんってもうこっち上がってきてるのかなーって」

「それだ！」

幹大と隆広が同時に食いつく。一樹もそれには一応気づいていた。先日のあの話し合いに出ていればいやでも記憶に残っているはずだからだ。しかし……。

「まだ、ダメかな」

2人の興奮した様子と対になるような、控えめな声で里実が呟く。

「……と、言いますと」

「まさか委員長……」

「うん。まだ上がってきてないの。上板さんから聞いている。でもね、果那ノ海で手続きがあるとかがどうとかがって連絡をくれたの。それに、やっと上板さんと結ばれるんだもん。絶対に来るもん」

汐帆と聡太郎の話し合いに幹大と隆広は来ていなかったが、一樹と大生と里実はその場にいた。彼らの固い約束があるからこそ信じら

れる。

「そうだね。絶対に、だ。そして上がってきたら、今海の中で何が起こっているのかを聞こう」

大生の言葉と共に締めくくられる。彼らには共通した思い、信じる気持ちが表情から窺える。必ず現れるその存在を待つことにした。

帰り道。ここでは至ってありきたりな会話をする。茉紀も加わって一層盛り上がり、ある程度雪かきを済ました道に声が反射するよう。

一行はスーパー・マツシゲへと向かっていた。今日は里実が店当番を行うわけではない。彼女もお客としてマツシゲに入る。

「あら、おかえりなさい」

彼らに声をかけてきたのは里実の母である。肩まで伸ばした髪に、里実と似た笑顔が特徴的だ。商品の陳列作業中をしながら里実の帰宅をその笑顔で迎える。

「ただいま、お母さん」

「よっしや、これを夜につまむわ」

「隆広、これもオススメだぜ」

隆広と一樹が菓子コーナーに行く。いつもの夜食として隆広はポテチを買うのだ。一樹は最近ハマったというものを勧めている。

「あ、里実。さつき汐帆ちゃんから連絡があったの。明日の午前中にながってこれるって」

「ホントに?！」

それは里実だけじゃなく、皆が喜んだ。と同時に引つかかる謎がいよいよ解かれる期待感もこみ上げてきた。

「これで海の状況がわかるぜ」

「あいつらもどうしてるかわかるな。本当にすっぱかしてるってだけのオチは止めてほしいけどね」

「……でも、そこところは教えてくれないかもね」

彼らが盛り上がる中、里実の母が口を開く。その意味をはかりかねる一行は、里実の母を見る。

「え、どういうことですか」

「えっとね、汐帆ちゃんが上がってきたとしても、果那ノ海の状況については教えてくれないと思う。口止めされてそうだから」

先程と同じことしか言っていないため、余計に理解が追いつかない。皆が首をかしげている、里実ただ一人を除いて。

「……え。でも、お母さん。だって、もう」

里実はどうやら何かに気づいたようだ。それがしかし、彼女自身でも完全に納得は出来てない様子だった。1つの可能性が出てきても、それが完璧にハマらない、そんなもどかしさ。

「ううん。今となつてはこうなつてもね、一応通知は来るみたい。何せかなり大ごとだから……かな。あ、でもこれは言う必要は無いね。汐帆ちゃんと同じ口止めだ」

その最後の言葉で皆がやっと理解した。そして里実がなぜ困惑していたのかも繋がる。まさか、こんなところにもいたとは、と一樹はそう感じた。

「みんなには言っただけだね、私は海から来たの。そして陸の男性と結婚したから、里実は陸と海のハーフなの」

## 第二十四話　ぬくみ雪は止まらない

「どういうことだよ!？」

「何回も言わせるな。とにかくお前は明日からもう地上の学校に行かなくていいんだ。俺は俺で色々やらなきゃいけないことが山ほどあるんだ。後でまた説明するから、家で待ってろ」

「そう言い残して玄関で下駄を履くと早々にドアを開けて出て行った。その姿を航大は不満げに目を細めて睨んだ。

「あー、ったく。意味わからねえ」

「そういう風に決まったんだって。今朝、ウロコ様から直々に話があるからって宮司さんから連絡があつて」

航大の母は台所で皿を洗っている。苛立ちながら居間に座る航大を宥めるように言う。今日は休みと言うこともあつて航大は遅く起きた。自然に目を覚まして気持ちよく伸びをし、居間へと向かった途端にこのことを父親から告げられた。

「ははあ、なら海遥のやつ、何か知ってるな」

勢いよく立ち上がり、居間の入り口付近に置いてある電話をつかむ。慣れた手つきで番号を押し、受話器を耳に当てた。呼び出し音が決まったりズムで聞こえてくる。

「……つながらねえ!!」

一向に呼び出し音が鳴り止まず、切る。

「地上でもぬくみ雪が降ったって言うしね。それが原因しているのかしら」

皿洗いを終えて布巾で手を拭く。航大の母はそう言いながら窓を眺める。

「そういえばあんたさ、ぬくみ雪見たんでしょ?地上で」

「ああ、まあな」

「どんな感じだったの?」

「どんなって言われても……いや、そうだな。」 気持ち悪かった」

母親の質問にどう答えていいかわからず首をひねったが、昨日の光景を思い出してみた。そして出た答えが、それだった。



「気持ち……悪い？」

「ああ。海ん中で降るのがぬくみ雪だろ。それが地上に降つてるとさ、やつぱり違和感しかねえ。何か一部分が違うっていうか、その何かもわからねえ。気持ちが悪いんだ」

自分の中で湧き出る違和感。その時感じたものを思い出して、航大は顔をしかめる。家の窓から見える光景はいつもと変わらない果那ノ海。でも、ここも何かが違う、そう感じた。

今朝、果那ノ海に言い渡されたことは、地上へ出ることを禁ずる”  
というものだった。

通達はウロコ様のお言葉によって決まり、今朝に集まった大人の男性たちによって村人全員に伝えられた。それによって陸に上がって職場に行っている人、学校へ行く海遥たち5人はひとまず自宅待機という形になる。ただし今後の動きとして大事になってくる食料調達のためだけに、今日か明日で数名が陸に上がることになる。

この命令のために当番制でまわりの警備を行うこともまもなく決められた。主に子供たちが退屈しのぎにふらつと陸に上がることを防ぐという目的がある。こういったことが突如決められていくのを子供たちはただただ見ていることしかできないが、大人たちだって半分疑問に感じながら事を進めていた。誰もが同情できる。あんなことを言われても実感なんてできないのだから。

ここで最初突つかかるものといえば、汐帆のことである。だがしかし、これはこのことが起きる前に決定されたことなので強制的に海から出さない、ということにはならないようだ。

そうこうしているうちに日付が月曜に変わる。とはいっても海遥たちは学校には行かない。いつものように早く起きなくていいし、学校に連絡もしなくていい。もう何も気にしなくていい、そう言われたとしても違和感と不満が溜まるに違いなかった。

書類や荷物の整理等も終わり、海を出る前日の夜に小規模ではあるが送別会が行われた。決して喜ばれてこなかった陸の人間との結婚に、今回は反対をずるずると長引かせることもなく平和だった。海遥

たちも参加して少しの寂しさも含め、非常に盛り上がった。

そして出発当日。大きな荷物はおおかた運ばれているため、汐帆は少し大きめのバッグ二つを持つ。5人が普段学校へと向かうために集まる場所とは少し違う場所——ここが正式な果那ノ海の入り口である——に見送りのために汐帆の両親と海遥たち、汐帆の友人たちが来た。

「じゃあ、ここで」

「うん」

「体に気をつけるんだよ」

「わかってるよ。そうでなきゃ、聡太郎さんを支えられないよ」

両親の言葉をしっかりと聞き、笑顔で返した。

「みんなも、元気でね」

「ううー、汐帆お」

友人たちは感極まって涙を流す。汐帆は彼女らを優しく抱きしめる。ゆっくりと頭を撫でる様は、まるで親とこのように、汐帆がさらに大人びた印象である。

「汐帆ちゃん」

航大がまず歩み寄る。汐帆は航大に目を向け、その後ろにいる4人に視線を移す。

「みんなには色々助けてもらったね。ありがとう」

優しい声で塞き止めていたものが崩れていくようだった。航大は泣かないように我慢していたが、唇を噛みしめるだけで涙は止められないようだ。澄滯は滝のように泣いている。その横で澄滯を慰めようとしている沙月も涙が止まらないようだ。

「はは、ヘンな顔になってんぞ」

「うるせーよ」

航大の両脇に海遥と洋斗が立つ。海遥は航大の顔をのぞき込み、堪えきれずに笑っている。洋斗は相変わらずの無表情の中に少しだけ口元が緩んでいる。

そんな航大から改めて海遥は汐帆を見る。その凜とした姿から、これから“妻”になるというだけあつてか、知らぬ間にさらに大人びた

なと感じた。

「汐帆ちゃん。僕らは、さよならなんて言わない。またね」  
「うん」

汐帆は笑顔だった。綺麗な笑顔だった。

最後に両親と長く、抱き合った。母親のすすり泣くのが聞こえた。そして名残惜しそうに腕を離す。数回言葉を交わし、汐帆は入り口へと足を進めた。間もなく力を入れて浮く。足を動かしてみるうちに地上へと近づいていく。海から遠ざかっていく。もう自ら戻ることはない故郷を、汐帆は振り返ることはなかった。その姿を、彼らは見えなくなるまでじっと見続けた。

今現在、彼らは海から出られない。そして、汐帆も海を出て陸の間と暮らし始める。先も述べたように、自らもどつては来られない。それはつまり、出されている命令が解かれない限り、汐帆とは会えなくなるのだ。それ故に、皆は悲しんだ。行き先もわからない状況の中で、いつ会えるのかもわからない。もしかしたらこのまま永遠に……。もし仮にそうだとしても、いや、彼らの中には必ずまた会えるという思いが、そこにはあった。

「また1人、いなくなってしまうたのう」

汐帆の姿が見えなくなるまで上を見上げた後、彼らは各々別れた。海遥たち5人の目の前にはウロコ様が現れた。

「どうしたんですか、ウロコ様」

「ああ、お主らにも伝えておかなければならんでな」

「え、何を？」

「何を、とはなあ。それは当然、今起こっている現象についてじゃよ」

一行は場所を移し、渦波神社へと来た。中に入るなりウロコ様は特等席と言わんばかりに奥にドカツと座り込む。5人は手前で腰を下ろす。静けさで満たされた中は、想像以上にひんやりしている。各々異常気象で服装には気をつけていたが、それでも肌をさすってしまうほどだった。

「さてとじゃ。お主らにはあくまで”陸に出ることを禁ずる”としか言われておらんじやろう。その理由、知りたいじやろ」

「ああ、そうだよ」

航大は腕を組みながら答える。

「いくら何でだつて親父に言つても直にウロコ様が教えてくれるつて言つてたからな」

「うん、私のところもそうだった」

沙月も同じ対応だったと頷いている。同様に澄滯と洋斗も首を縦に振る。しかし海遥だけは腕を組んで俯いたままだった。

「やっぱりお前はもう知つてんだな。先行特典かよ」

「は？いや、そういう風に先に聞かされたとかじゃない」

「なら、どうなんだ」

有耶無耶に返す海遥に洋斗はさらに質問を投げかける。すると海遥はおもむろに右手で髪の毛をクルクルともてあそばせながら、

「結構前とかにだけど、ここにある書物とかを父さんに呼んでもらつた記憶があるんだ。だから、なんとなくだけど察しがついているんだ」

彼は宮司の息子であるが故に、4人はそれで納得した。

「まあ、ホントに小さい頃だから、おおざっぱにしか覚えてないからなあ。だからウロコ様、頼みます」

「なに、そのために呼んだんじゃ。当たり前じゃよ」

ウロコ様は1回咳払いをして、背筋を伸ばした。普段だらけた様子が印象だったので彼らも姿勢を改める。

「今から話すのはちよいとしたり昔話じゃ。まあ、お主らにはかなり昔の、じゃがな。」

お主らはなぜ海と陸にそれぞれ生活している人間がいるかは、もう知つてるな。その後の話じゃ。あるとき、海神様は海を捨てて地上に上がった人間たちのことを悲しんで、海の奥底にお隠れになつてしまった。すると、海にも地上にもぬくみ雪が降り積もり、世界はどんどん灰色に、冷たく、凍えていった。そこで地上にいた娘が一人、海に潜つて海神様に会いに行ったそうじゃ。地上にいる人間たちを助

けてほしい。その言葉に心を動かされて、海神様は人の側にお戻りになった。そして寒冷化は治ったという。……そして今、海神様が再び人から遠ざかったのではない。人が海神様を忘れて離れていつているのだ。人間の祈りがなければ海神様も力を失う。海神様の力がかつてとは比べようもなく弱っているんじゃない。それはお主らも見てわかるとおり、御霊火じゃ」

自らの背後を親指で指す。後ろにあるのは大きな杯。赤を基調とした杯には金で鮮やかな装飾がされている。そこに御霊火が燃えさかる。だがそれは以前見たときよりも小さくなっていた。

「この話の通り、先日地上にぬくみ雪が降った。勿論、果那ノ海にも。それどころか、全国各地で同じようにぬくみ雪が降った。これが意味するものはつまり、寒冷化じゃ。完全なる寒冷化になるのは50年後か、100年後。あるいはそれよりも先、もしくは案外早くにも……。どっちにしろいつかは訪れてしまう、いわば滅亡じゃ。人類のな。さて、これらをどうにか防ぎたい。人という種族が生きながらえるには、凍える世界から眠りによって逃れる方法しかない」

彼らに言い渡された、この状況を打破できる唯一の方法。それは、「眠る」ことだった。

「え……ちよ、マジで？それって冬眠ってことか!？」

「そうじゃ。これから先もぬくみ雪はますます降り積もる。世界は冷たく凍えていく。人はやがて来る寒さには耐えられん。そこで長い眠りにつくことで時間を稼ぎ、いつかまた海神様の力が蘇るのを待つ」

「そん……な」

あまりに衝撃的な内容に、澄濤は両手で口を塞いだまま固まってしまふ。洋斗は難しい顔をしながら頭をかく。

「これは避けられない事実。直に冬眠に入る準備が始まる。きっとお主らも感じ始めるじゃろう」

「ちよ、ちよっとタンマ」

航大は右手を突き出してウロコ様を制止させた。航大も目を閉じて必死に考えているようだったが、ことがことなだけに飲み込めてい

ないようだ。

「冬眠って、俺らは熊か？そんなことできるのか」

「それはさっきウロコ様が言ってただろ。俺らにも直に感じ始めるだろうって。多分、このエナに何かしらの変化があるんだろう」

航大の質問を海遥が代わりに答えた。だがそれでも納得出来ないことだらけのようで、もがき苦しむように唸る。

「あの、でも、それなら地上の人たちは？白風中のみんなとかは」

「地上のやつらは関係ない。エナがないからなあ。だが、そもそもお主らは海から出ないことになっておるから、関係ないじゃろ」

納得できていないのは澄濤も同じようだ。彼女が心配していたのはもちろん一樹たち白風中のクラスメイトたちだった。だが返ってきたのはあまりにも他人事だった。

「じゃあ、あいつらをこのまま見殺しにするってのかよ！」

「殺すもなにも、すぐに凍るとは決まっておらん。第一、たかが数ヶ月知り合っただけの人間たちじゃろ。それに、特に航大は嫌っておったんじゃないのか」

航大が立ち上がって食い下がるが、相変わらずの淡々としたウロコ様の言葉に怯む。が、すぐに反撃する。

「それは最初の頃だけだ。今は違う。大切な仲間なんだ！それを見捨てることなんかできない」

「私も！やっとなんとせつかく仲良くなれたのに、もうお別れだなんて。それに何も言えてない。そんなのは嫌だよ！」

続いて澄濤も立ち上がる。この中で彼女が一番陸の人間たちと接して、仲良くなりたいと思っていたのだから、当然である。

「ほう……大切な、ねえ」

「何だよ」

「いやいや。この短い期間でそんなにも食い下がるほど大切と思えるまでになった。なら、その中で愛する人でも出来たのか、とか」

「んな!!？」

不適な笑みを浮かべるウロコ様のこの発言は予想外だったようだ。立ち上がった二人は謎に頬を赤らませ、口を噤んで視線を逸らしてし

まった。その様子を海遥は見逃さなかった。

「本当に、他に方法は……」

「ない。これは逃れられないんじゃない。すぐにでも眠った方がいいのだがな、それはそれで準備が間に合わん。かといって先延ばしにしても意味が無い」

沙月が両手を重ねて握っている。力が入るくらいに今に状況に驚き、困惑している。絞り出すように出た言葉もぼつさりと切られてしまう。

「話は終わりじゃ。これ以上粘っても無駄なモンは無駄なんじゃ。お前ら5人がそれぞれ大切なんじゃ。それを失いたいのか？嫌なら、覚悟を決めろ。人は多くのものを守れるほど、強くはない」

## 第二十五話 小さな可能性

「どうなるんだよ、結局」

航大の苛立ちの混ざった言葉に誰も反応しない。静けさに包まれたのは教室の中。そこはもう廃校になってしまった青海中。立ち入り禁止の看板は立つものの外から鍵はかけられていない。5人は青海中の中の自分らが使っていた教室を訪れていた。

中学一年の三学期修了式の日を描いた黒板の文字、”ありがとう、青海中!”さえ残っていた。ほとんど掃除などされていないのだろう、部屋中にぬくみ雪が溜まっていた。ドアを開ける度、歩く度にぬくみ雪が舞った。椅子や机にたまったそれも手で払って各々の使っていた席に着く。この光景はいつぶりだろうか、と振り返ってしまった。青海中から白風中に移ってからまだ四ヶ月弱しか経っていないのだ。たったこれだけの期間しか空いてないのに、何年ぶりにも思えてきた。それほど彼らにとつて濃い経験をしたということだろうか。

「……みんなと会えないまま、なのかな」

消えてしまいそうな声で澄滯は言う。ウロコ様の話の後、澄滯はずっと下を向いたままだった。今だって膝の上に手を組ませながらそれだけを見ていた。

「そんなことはねえだろ。ぜってー会える」

「どうやって?」

「え……それは。……なんとかして地上に出る」

航大の元気ある声は澄滯の言葉によって一気に萎んでしまう。なんとか振り絞って出した案も全員のため息で突っぱねられた。

「私たちが頑張って作ってきたおじよしさまも、無意味だったのかな」  
机に両腕を重ねて顎をのっけている沙月が、そんなことを言う。海遙はほぼ不参加だったが、4人は確かに加わっていた。一樹たちと協力して完成させたおじよしさま。完成像を見たとき、どれだけ感動したことか。ゼロから作り上げたそれは、きつと彼らの青春を飾る大役者に間違いない。それが堂々と船に乗って海を渡るその姿を見ること無く、眠りについてしまう。頑張ってきた彼らがこれで納得出来る



はずがなかった。

「無意味……」

「そんなの、ダメだ。俺らはただ作るためだけにタダ働きしてたんじゃねえのに……」

澄例の嘆きのような声、航大の悔しさから出る怒りの声。航大は右手を握って机を一発叩く。ドン、という音さえもあつという間に空間に吸収されていった。取り囲むのは静寂。廃校と化したここには果たして陽気な気分になれるだろうか。

「方法なら一個あんだろ」

唐突に発言したのは洋斗だった。今日に至っては下手したらこれが第一声かもしれないほどに喋っていないかった。それ故航大はあたかもいない人間が突然現れたようにビツクリする。

「俺は幽霊じゃねえぞ」

「んな、別にそう言うわけじゃ……。じゃなくて！方法って何なんだよ。この状況を打破できる、画期的な……」

「俺のはあくまで冬眠を回避する、つてーのじゃないぞ。どうやって白風中のやつらと会うか、だ。さっきのウロコ様の会話を思い出ししてみろ」

手を頭の後ろで組む。背もたれに寄っかかりながら皆の方を向く洋斗は、あの頃のままだった。

「あいつはこう言った、いつか訪れる寒冷化を回避するために俺らは直に冬眠する。そうならわざわざ陸に上がらなくていい、冬眠の準備をして時期が来るのを待ってればいい。こうも言った、すぐにも眠った方がいいが、それでは準備が間に合わん、と。そう、眠るまでに時間があつて、それまでは別に俺らは何をしていても大丈夫じゃないかってこと。俺らは中学生だから義務教育がどうたらこうたらとか言ったら、冬眠につくまで学校に行けるんじゃないのか」

洋斗が言い終わると僅かな間が空いてから航大が詰め寄る。

「それやー！それやで洋斗ー！」

「お、おう」

「確かに。学校行けないんじゃ冬眠するまでずっとここにいることに

なるし。それじゃ暇すぎよね」

「なるほどねえ。そう言われればそうだな。じゃ、善は急げってことでウロコ様に話しつけてくるか」

海遥は立って椅子をしまう。そのままドアの方に行こうとしたときに航大に話しかけられた。

「待て海遥。ここは俺らも行くぞ。ほら、立てよ洋斗」

「え。俺もかよ」

「発案者はお前だろ？なら来いよ」

航大は洋斗の腕をつかんで半ば無理矢理立たせる。あまり気乗りしない表情を浮かべる洋斗だが渋々といったところだ。

「2人は待ってるよ。必ずいい報告してやつからよ」

洋斗の発言ですつかり元気を取り戻したようで、航大が先頭にたつて走り出した。それを追いかけるように海遥と洋斗も走る。彼らの足音が廊下に木霊する。徐々に遠くなって行くにつれて音は小さくなり、ついには聞こえなくなった。嵐が通り過ぎた後のような静けさが残った。先程の静寂さとは、また違うように感じた。

「やったねさっちゃん。またみんなに会えるんだよ」

「まだ確定じゃないけどね。でもきつとウロコ様もわかってくれるよ」

こちらにも元気を取り戻したようだ。咲いた花のように笑う澄濤を見て、沙月も笑う。だがすぐに真剣な顔になった。今はここに2人しかいない。2人の他に誰もこちらに耳を傾ける者はいない。2人だけの、秘密の会話だ。

「ねえ、澄濤」

沙月は意を決して、だが表には出さないように自然に言った。

「澄濤はさ、大生君のことが好きなの？」

「……え？」

思った通りの反応を示した。顔がどんどん赤くなっていく様は、夕コを煮ているところを早送りしたかのようだった。

「当たってるんだ」

「え、いや、そうじゃなくて！別にそんな、私は違うし！」

両手を思いつき振り回してアピールする様は幼い子供を見てい  
るようで、沙月はまた笑う。澄濤はちゃんと文になってない言葉を叫  
んでいたが、シュンと止んだ。

「……わからないの」

「え？」

「大生君が嫌いじゃないんだよ。白風中のみんな友達だから、大切だ  
から好き。でも、大生君は色々知ってるし、私にできないことといっ  
びいできるし。それを見て凄いなあって思うし、それに……。何か、大  
生君だけは何か違う気がするの」

俯き、両手を重ねて胸におく。澄濤の心の奥で何か引つかかること  
がある。それはいったい何なのか、口に出そうとしてもうまく出てく  
れない。彼女は中学二年であり、まだまだ成長しているんな知識を得  
ていくだろう。けれど、それによってやっと言葉に出来るような、そ  
んな経験的なものではないと感じた。そのもどかしさに、澄濤は悩ん  
でいるのだ。

「うん」

その姿を見て沙月はただ頷いた。沙月自身もそれは○○だ、と断定  
的にいうことはできない。その正体は沙月にもわからない。それ  
がはつきりとわかることができるのは澄濤自身しかない。澄濤が  
悩んで、探して、その繰り返しをして、やっとその正体が彼女の目  
に現れる。その様子を見て、ほんの小さな助言でしか沙月自身は関わ  
れないと思っていた。

「じゃあさ、さっちゃん」

「なに？」

「さっちゃんには、いるの？好きな人」

「え!？」

悩んでいる姿から一転、澄濤が予想外の反撃を繰り出した。沙月は  
驚いて変な声が出てしまった。そんな質問が飛んでくるとは思っ  
ていなかった。

「あれ……もしかして」

「え、いや……その」

いつの間にか立場が逆転していた。みるみる澄滯の顔が不敵な笑みが変わってく。ねずみを追い詰めた猫のように澄滯が沙月に近づく。

「ふっふーん。その反応は、いるんだねさっちゃん」

「べ、別にそんな」

「嘘はだめだぞー!」

澄滯は沙月に飛びつく。瞬間的に沙月の脇腹に手を滑り込ませ、細い指を細かく動かす。

「ちよつと、やめてよ澄滯!」

「へへへ。昔っからこちよこちよ弱いよね」

脇腹から伝わるくすぐったさに沙月は身をよじる。沙月を逃さないうように腕を使ってホールドする澄滯。とうとう椅子から転げ落ちる。すぐに立ち上がって沙月と澄滯の鬼ごっこが始まった。無邪気に笑って、騒いで、走り回る彼女らはどう見えるだろうか。何も聞こえてこない学校の中で少女たちの声が響く。あふれんばかりの笑顔の彼女らから、これから冬眠に入ってしまうなどと、誰が分かるだろうか。

走り回って2人はすっかり疲れてしまった。教室の床に座り込む。右肩に寄り添ってくる澄滯を見て、沙月は仄かに笑うが、それもすぐに消えた。

沙月は悲しく感じた。もし澄滯が大生のことが好きだったのなら、冬眠前まで学校に通えることになったのなら、彼女は思いを伝えるのだろうか。その思いを伝えたとして、大生は何を考え、どう返すのだろうか。眠りにつき、いつ目覚めるのかもわからない相手から告白を受けて、何を思うのか。それは、同様に澄滯にも言える。沙月は、そんなもどかしさに悲しさを感じた。

「汐帆ちゃん！」

陸に上がったからすぐに誰かから呼ばれた。顔を上げて声がした方を向くと、そこには聡太郎の姿があった。こちらに駆け寄ってくる。

「よかった。来れたんだね」

「当たり前じゃん。何のためにあんなだけ話し合ったのよ」

若干呆れるように汐帆は言い、聡太郎に抱きつく。しっかりと抱きしめられた聡太郎は、笑って汐帆を抱きしめる。

「ねえ、今海の中で何が起こってるの？冬眠って何なの？里実ちゃんやみんなが心配してるんだ」

腕をほどいた後、聡太郎が心配そうな顔で聞いてくる。汐帆は驚いていた。今日も含めて3日連続で海遥たちは学校に来ていないのだ。唯一海から出てきた汐帆に現状を聞いてくるだろうとは思っていた。しかし、

「……なんで、その話を」

目を見開いたままの汐帆が尋ねようとしたとき、汐帆は少し遠くからこちらに近寄ってくる人物を見つけた。里実の母だった。

「汐帆ちゃん。それについてはもうみんな知ってるの」

「でも、これは海の人しか……」

「そうよ、海の人しか知らないのよ」

里実の母は当たり前前のごとのように返す。微笑む彼女の頬が、ほんの少し虹色に光る。

ああ、と汐帆の口から漏れた。汐帆はすっかり忘れてしまっていた。

「もう、海から離れた人にも、情報は伝わるんですね」

「そうなのよね。追放とか言ってるけれど、こういうことになったら

仲間意識が出るのかしら。変よね」

手で口を押さえながら里実の母は笑った。そして振り返って2人を手で招く。

「ちようど漁協に来说って言われてるのよ。2人とも、来て」

2人はお互いを見て頷き、里実の母について行く。

## 第二十六話 小さな賭け

通路を歩き、とある部屋の前で里実の母は止まった。ノックをして声をかけるとすぐに声が返ってくる。男性の声だ。そして、聞いたことがある声だ。

「おお、よく来たね」

ドアノブを回して部屋に入るとそこは以前に聡太郎たちと話し合った部屋だった。だが違うとすれば座っている人数が多いことだ。見ると同じような格好の人たちが多く見受けられた。その格好も聡太郎のものと同じであるからして、漁協の人たちだろう。

「とりあえず座ってくれや」

「はい」

漁協の人が脇に置いてあったパイプ椅子を広げて持ってきてきた。それに汐帆は座る。この空間に来たことがあるのに、まったく別の世界に感じる。それほど彼らが抱えている問題が深刻であると示している。それは汐帆も承知だ。

「マツシゲさんとのから聞いた話って、やっぱり本当なのか」

「ええ、果那ノ海どころか、全ての海村で冬眠が始まることは確実にす」

まわりが少しどよめいた。元海村出身の里実の母に来た通知は勿論本物であるが、先程まで海の中にいた人間からその事実を突きつけられたとなれば、宙ぶらりんで曖昧だった“冬眠”ということが急に現実味を帯びる。

「冬眠、するの。か。で、あいつらはいつまで寝ることになってんだ？」  
「近いうちに冬眠は始まりますが、いつ目覚めるのかはわかりません。これは異例の事態なんです。私の両親や祖父母でさえ経験したことのない状況です。たった数ヶ月で起きるのか、それとも1年、5年、10年……。もしかしたら、皆さんが生きている間に起きてこないこともありえます」

あまりに衝撃過ぎて彼らは絶句した。突然のぬくみ雪。突然の海との連絡断絶。そして、冬眠。ここ数日の中で劇的に状況が悪化して

いくのを驚くことしかできない。

「マジかよ……。たまに上がってきたては酒を飲む仲だったけど、もしかしたらもうあいつらとは飲めねえってことかよ」

「それもそうだけども、俺らはどうなるんだ？」

別の職員が前のめりになって汐帆に言う。世界が寒冷化していくとなると、海の中では暮らせない彼らはどうすればいいのか。おそらく里実の母は特に何も言っていないだろう。それに彼女自身だつてこの先どうなるかなんてわかるわけがない。

「わかりません。海村の人たちが冬眠に入ってからすぐに世界は凍えるほどの寒さになるとは思えません。徐々に冷えていって、私たちが死んだ、いくつか後の世代に……」

人類は消える。そう言いたくはなかったがこの中の全員がそう察しただろう。部屋がしんと静まりかえる。お互い顔を見合つて首をかしげ、難しい顔をしている。この間を破つたのは聡太郎だった。

「ね、ねえ。何か解決策はないの」

「それは……」

「松茂さんが教えてくれた昔話、あれは何かヒントとかにならないのかな」

その昔話はここに来る前にウロコ様から教えてもらっていた。今起きている現象とまったく同じ状況の時に1人の女性が海に潜った。陸にいる人間たちの思いを聞いて再び人の側に戻った。気候も元通りになった。多分それを話しているのだろう。

「ああ、あれか。じゃあ誰かが海に潜るのか？」

「潜るつたつて、結局何処に行くんだよ。潜つたつて果那ノ海しかねえぞ」

「なら、おふねひきしかない」

まわりで様々な意見が飛び交う中、大生の父が口を開く。

「え、でもそれは毎回やってるじゃないですか」

その通りである。今年だつて一生懸命になっておじよしさまを作った。それは倉庫で出番待機している。

「そうじゃない。今までののはあくまで祭の中の行事として、と思つて



いるヤツが多いと思う。実際俺もそうだ。もしそれが少しでも原因になっているのであれば今年のはちゃんとしたおふねひきをしなくてはならない」

「ちちゃんとした……って言うのは」

「つまりだ。今までの木製のおじよしさまだけ立てて船を出すのではなく、実際に誰かがおじよしさまとして立っておふねひきを行う」

「まさに、昔話の通りにやるって訳か」

胞衣を捨てて陸に上がってきた人々が、数々の苦難を海神様の怒りだと思つて生け贄を一人流し、怒りを静めようとした。その昔話そのままを再現してみようということだ。

「なら、その生け贄役として誰が立つんだ」

「ああ。そうなるよ、だな」

「なら、私が」

まわりの職員が腕を組み、考え始める。するとすぐに一人が手を上げる。里実の母だ。

「松茂さん」

「私は元々海の間人ですし、胞衣もあります。何の問題もありません」

「いえ、私がやります！」

右手を胸に添えて里実の母が言う。この中で胞衣を持つ人物であり、流れからしては確かに問題はなかった。ここで待ったをかけるように汐帆が立ち上がる。

「私が、いえ、私にやらせていただけませんか？」

「でも、汐帆ちゃん……」

「昔話が確かなら、生け贄となったのは一人の少女。もう、私は少女なんて言われる年じゃないけど、この中で最年少は私だから。少しでも昔話に近づけた方がいいんじゃないかと思うの」

汐帆の主張は的を射るものだと感じられた。ゆっくりとではあるが皆が頷き出す。

「で、でも」

「大丈夫だよ、聡太郎さん」

その主張がたとえいい物に聞こえたのだとしても、彼にとってはな

かなか領きがたいものだろう。自分の妻がいきなり生け贄役に名乗り出たとなれば、不安でしかない。汐帆は聡太郎を安心させようと笑って彼の肩に手を置く。

「何がどうなってるのか、みんなわからない。そしてこれから先どうなるのかも。でも何もせずその時を迎えるより、少しでも自分らで動かなきゃダメだと思う。それにさ、別に私は海神様に身を捧げるんじゃないよ。私たちは決して海神様を忘れたわけじゃない。海を忘れたわけじゃない。この思いを伝えに行くんだよ。私を捧げられるのは聡太郎さんだけだもん」

「……うん、そうだね」

彼にとつては女神に見えただろう。頬を赤らめるが、すぐに強く頷いた。

「ははっ、まったくよお。強い女房を持ったもんだ」

「でも、このままじゃすぐに尻に敷かれてそうだけ」

漁協職員の言葉で一氣に場が和んだ。

「ふふふ、そうね。それに私たちも頑張らなくちゃ。若くない者たちだってできることはあるしね」

「……え。あ、いや、そういうことを言ったんじゃないよ！」

里実の母の言葉によりさらに場が和む。漁協職員の笑い声は大きくなり、汐帆は一転して焦り顔と化した。まだまだ年上には勝てそうにないようだ。

この話し合いがあった次の週の始め、海遥たち5人は白風中に登校してきた。案外洋斗が言った案が通ったのだ。たいした言い合いにもならずサラッと受け入れた様子から、こう言い出すのを待ってたか

のようにさえ感じた。とにかく、彼らは期限付きで登校できる。それだけでも十分な収穫であった。

彼らが揃って教室に入ってきたときはもうクラス中がスポーツ観戦なみの騒ぎであった。彼らにも既に海村の冬眠、これから訪れる寒冷化についてはなんとなく知っていた。だからこそその驚きであった。「冬眠の日がウロコ様の判断で決まったんだ。だからそれまでは地上に出てこられるんだぜ」

航大がまるで自分の功績のように胸を張って言う。だが陸の彼らにとつてはあくまで冬眠の日までしか会えないというのが強く、次第に場が静かになっていった。

「おいおい、シラけさせてどうすんだよ」

海遥が呆れるように手を振る。

「別に俺らが会えるのはその日で最後じゃない。いつかきつと起きてきて、またみんなといられるさ」

海遥のその口調にはクラスの皆が驚く他なかった。例の一件まで相容れようとはしなかった海遥が今日になって急に皆に向かって話す。改心した現場にいた一樹たちでさえ目を見開いたが、すぐに口元が緩む。もう、何も隔てる必要はない、と。

「で、だ。ついでに聞いときたいんだが、冬眠の日はいつだ」

「実は、夏祭り当日なんです」

大塚の問いに答えたのは澄滯だった。これをウロコ様から聞いたとき、奇跡とはこういうことなのかと実感した。

「なるほどな……。ギリギリおふねひきに出られるかくらいだな」

「その日ならぶつちやけいつでもいいんだろ？ならやってから寝ちまえばいいじゃん」

隆広は右手の人差し指を立てて指さす。彼も一週間ぶりではあるがこういった状況になつていても相変わらずである。

「それに、5人がいてくれないと困るんだよね。今年のおふねひきに関しては」

ここで一樹が発言する。その意味がわからず5人が一斉に一樹の方へ向く。

「困るって……？まさか人数の問題じゃないわよね」

「勿論。実はみんなが上がってくる前にもう冬眠については知らされていたんだ。元海村の人たちに通達があったらしく、それを明かしてくれた」

「え、そんなモンがあつたのかよ」

一樹は黙って頷き、話を続ける。

「みんなもこの異常気象には不安がってたみたいだったんだ。それでこの海村の全てが冬眠に入るって知らされた。そしていつか地上は凍り付いていくなんて言われたら、みんなどうすればいいか話し合っただ。そんなときに汐帆さんも来て、それで話が決まったんだ」

「何が、決まったんだ？」

「おふねひきで俺らが作つたおじよしさまと汐帆さんが出ることになった。つまりおじよしさまが2人になるのかな」

「ええ!？」

恐る恐るといった様子で航大が聞くと一樹が答える。それは5人が声を上げて驚くのも無理はないものだった。

「ど、どういう……」

「話の全容は大人たちが知ってたんだ。まあお前らには説明したいのも山々だが、とりあえず授業が間もなく始まる。おふねひきについては後日打ち合わせを行うから、その時にだ」

ここで大塚の発言によって彼らは日常に戻った。数分で間もなく一時限のチャイムが鳴る。その前には生徒全員が席に着くようにしている。渋々といった様子で座るが、そんなことを聞かされたら気になってしまうのが正しい。疑問が脳の大半を占めた。

おふねひきの打ち合わせは次の日の放課後に行われた。これまた

場所は漁協だった。とある一室に白風中12人と大塚、漁協メンバー、そして汐帆がいた。

海つ子5人と汐帆が顔を合わせたとき、何だかお互いに恥ずかしかつていた。一週間前までいつかきつと会えるなんて行ってしまった手前、こんなあつさりと再開したとなるとなんとあつけないことだろう。それはともかく、話はすぐに始まった。

「とりあえず話の主要部分はみんな知っているとおり、今年のおふねひきにおじよしさま役として白風中の彼らが作ってくれたものと、池谷さんが行うことになった」

ホワイトボードの前に大生の父が立つ。他は1つに4人ほど並んで座れる長さのテーブルを数個置いて大生の父の話を聞いている。

「それで、何故そういうことになったんですか」

海遥が質問する。

「ああ、そこはみんなには言っていなかった。俺ら漁協メンバーと松茂さん、池谷さんたちと色々話し合った。海村が冬眠に入る、そして地上の異常気象で世界は凍っていく。そんなぶつ飛んだ現実を今後どうしていくか……。無論決定的な解決策なんて出やしなかった。だけど、海の昔話みたいに、こういった状況になったときに1人の少女が海に潜って、人々の思いを伝えたと言われている。知ってるよな」  
海つ子が皆頷く。

「そして池谷さんから聞いた、ウロコ様からの話にもあったように、人々が海神様を忘れていつている。祈りがない故に海神様は力を失っている。このことを考えた結果、池谷さんにこの昔話の少女役として、そして俺ら陸の人間と君ら海の人間が揃って立つ。海神様を忘れてはいない、海と陸とで分かち合って生きている、そういった思いを伝えるというイメージだ」

「なるほど。昔話をリバイバルするということですか」

手を膝に乗せたまま沙月が頷く。一度起きたことをもう一度試す。それが彼らが出した答えだった。

「希望論だね」

洋斗だった。右肘をテーブルにつき、右手で口当たりを覆う。

「でもやれることはやってみるべき、ですね」

「うん」

大生の父は強く頷く。

「というわけで、大して難しい内容じゃない。これが最善なのかわからない。それでも未来のために、少しでも行動を起こしたい。当日で海っ子たちは眠ってしまう。もし君らが起きてきたときに、ビックリするくらいに元通りの世界になっていることを臨むよ」

「よっしゃ、いっちょやりますか!」

「お前は調子に乗って1人だけ凍えてろ」

彼らの中に芽生える僅かな希望。それは決して確かなものではない。けれどそれがちゃんと成長して、立派な花を咲かせられるか。きつと彼らは咲かせられると信じている。その希望の笑顔が拡散していく。

相変わらずのお調子者の隆広は一樹のすかさずのツツコミを食らった。この後もおふねひきの打ち合わせは続く。順調に進んでいく話し合いだが、彼らの中にある、純粹な波打つ心はどうやら順調にいくかは怪しかった。

## 第二十七話 やつぱり

何気ない日常。日が昇り、鳥たちのさえずりが聞こえる。朝とともに人たちは動き出す。身支度を済ませ、仕事や学校へ向かう。今日も雲は厚く覆っているせいでなんとなく暗い。

校門を通る生徒たちは友達と喋っていたり、また1人だったり。元気な顔もあれば毎日の学校生活で眠そうにしていたり様々だ。それらではない、また別の表情を浮かべるのはきつと彼らしかない。けれど皆に見られ、心配させないようにと作った表情を上塗りする。心の全てがポジティブで埋まるはずがない。

「あ、おはよう」

教室に入って最初に声をかけてきたのは里実だった。海遥たちは各々挨拶を返す。それに続いて一樹たちとも挨拶を交わした。

「いよいよ俺らが地球救っちゃいますかってときにさ。期末試験とか、空気読めよ」

「しよーがねーだろ。お前は英雄以前にただの中学生なんだよ」

呆れるように手を広げる隆広をさらに呆れた目で見える一樹。

「まあ、わかるわ。勉強めんどくさいもんな。やんなっちゃうよ」

「流石、平均点以下しかとれないやつは言うことが違うねえ」

「うっせー！」

航大は隆広に同意するように何度も頷く。その横でニヤニヤしながら皮肉めいたことを言う海遥を睨んだ。

「大丈夫だよ、洋斗にたたき込んでもらおうから」

「え、俺かよ」

「いやいやいや、俺も頼むぜ」

長年欲しかった物を手に入れるように這い寄ってくる航大と隆広。歪ませた顔をする洋斗が後ずさると、後ろにもう1人いて洋斗の肩に手を置く。

「俺も、よろしくな」

幹大の満面の笑みを洋斗は死んだ目で見つめる。そんな光景を見て女子たちも笑う。

「じゃあ、私は里実ちゃんにお願いしようかな」

「あ、じゃあ私も」

「うん、いいよ」

澄滯と沙月の頼みの綱は里実しかいなかった。彼女はいやがることなく笑つて了承する。その傍らでついに3人が洋斗をつかんで、誰が最初に教えてもらうかというくだらない戦争が始まっていた。今にも死にそうな顔をしている洋斗を海遥たちは笑ってみている。3人にしてはある意味真剣なのだから、余計に面白い。

その様子を見てなぜだか、少し表情が曇る沙月。不思議そうに澄滯は顔をかしげた。

期末テストがあるのは来週の月曜日から三日間行われる。そして祭があるのは7月の最終終の土曜日だ。いつものごとく生徒たちの大半は一週間前から徐々に焦り始めて課題を進め、本番を向かえることとなる。この場合、大抵放課後は帰らずに友達同士で教え合ったりするので。塾がそもそも久里ノ上になく、電車で隣町に行かなければならない。そのためのお金があればいいのだが、実際は皆放課後勉強で事済んでいる。

チャイムが鳴り、一斉に体の力を抜く。机に突つ伏す生徒が多い中、教室前で待つていた大塚が入ってきて数学担当の喜来と軽く会釈して教卓に立つ。

「ほらほら、きつさとホームルーム終わらせるぞ」

手をパンパン叩いて皆をなんとか動かそうとする。皆一様に体を起こしてホームルームを始める。といっても特別行事もなくあつという間に終わる。里実の挨拶で放課後へと変わった。当たり前だが、テスト一週間前でも掃除は普通に行われる。いや、なしにしてくれよという皆の声は大塚の耳には入っていないぞ。

掃除といっても教室以外にも各々の教室のドアから奥の突き当たりまでの廊下、学年ごとに別々の場所のそうじがある。2年はすぐ側にある階段とこの階にある空き教室、1階の美術室が担当である。列で班を作っているのだが、こういうのをめんどくさがる生徒はつるん



でいる人物の班にさりげなく加わったり、そもそもサボることがあるのだ。

その例のごとく、隆広は幹大と教室の隅で喋っていた。

「おーい、タカボー。サボるなー」

「サボってねーよ。何なら、さつき隅をほうきで掃いといたぜ」

教室の班にイジられる隆広だったが、貢献したからいいだろうとドヤ顔をかます。そしてこの後やった貢献と言えば、机をひとつ元の場所に戻したぐらいだろう。

そんな中でも隅滯はせつせとほうきで埃やゴミを掃いて集めていく。そんな姿は男子にも女子にも好印象を与えるには十分だった。

「ほら、幹大。あんたも掃除しろし。澄滯ちゃんを見習いなさいよ」

「いや、ここまでやってくれるなら俺の出番はないさ」

「そう、ならゴミ捨てっていう出番を与えよう」

「よっしゃやるかー」

途端にこれである。しかしこれにも領ける部分がある。掃除が終わったあとゴミ箱のゴミは焼却所まで持って行くのだが、その場所が学校の裏からでて少しばかり歩かないと着かないのだ。誰も好き好んで行くようなところではない。普通はジャンケンで負けた人が行く、というのが主流になっている。

後ろに下げた机を前に動かして後ろの部分を掃く。使い込まれてボロボロになった座敷ほうきや丁字のほうきを使って中心にゴミを集める。女子生徒がちりとりを持ってきて一樹が手早くゴミを移す。

「さて、ゴミ捨てだ」

「幹大いけよ」

「嫌だし。それに俺だってちゃんとやったじゃん」

両手を腰に当てて女子生徒は皆を見回す。すぐさま一樹が笑って幹大を指名する。

「ジャンケンでいいじゃん」

「ま、そうだね」

5人が自身の手を握って出す。誰が合わせるといふ会話もなく、昔からやってきた故に自然とかけ声が掛かって始まる。

「じゃーんけーん、ぽい」

正面玄関の裏口から出て少し歩く。近くにある倉庫を横切っていくと上へと登る階段が見えてくる。そこを登っていくと焼却炉がある。細長い石が積まれた階段は綺麗に並んでいるが角度はすごく緩やか、というわけではないので登ると少し疲れる。加えて降ったり降らなかったりだがぬくみ雪もあつて若干滑りやすい。先生たちが急速で作った”滑りやすいので注意”とかかれた看板が階段近くに設置されている。

「よつと」

先に辿り着いた一樹が持つてきたゴミ箱をひっくり返して焼却炉にゴミを放り込む。こちらは燃えるゴミだからからかいらなくなったプリントや掃除で出た埃が多い。バラバラと音をたてて中に落ちていく。

「ほら、もらうよ」

「ん、ありがとう」

燃えないゴミが入った袋を持つた澄滯からもらい受けて、焼却炉の奥にある置き場所に放り投げる。

「ここまで来るのめんどくさいよね。もっと近くに作ればいいのに」  
「はは、それな」

澄滯の本音、それはおそらくこの生徒全員が持っているのではないかと思われるそれを聞いて一樹が笑う。でもそれはどこかぎこちなさが残る。

澄滯と二人きりというだけで、たかだかゴミを捨てに行くだけで緊張してしまうとは……と自らに呆れる一樹。そして笑いつつ自然と逸らしてしまっていた視線を澄滯に戻すと、

「あ」

「え?」

固まった一樹の視線の先を澄滯も追った。見ると、白い雲で覆われた空の先に僅かな光が差していた。そこから微かに見える青い空を

2人はしばらく見ていた。

「なんか久しぶりに見たな、青空」

「確かにね」。ずっと曇ったり、ぬくみ雪降ってたし」

「こう、改めてみるとやっぱり綺麗だよな」

「うん」

澄濤の横に並んで見ていた一樹は、ずっと空へと向いていた視線を澄濤に向ける。彼女も雲の隙間を眺めている。優しく見守るようなその目は、しかしスツと細くなる。微笑していた口元も、気持ち僅かに小さくなったようだった。それを見て一樹は下を向く。

きつと、今も苦しんでいるんだろう。冬眠まで残り一ヶ月もない中、楽しんでみんなと学校生活を送りたい、そう願っているはずなんだ。そのたわいもない日常、度々見かける青い空だつて、彼女にとつては大事なんだ。今見ている景色を、空を僕らと同じ時に見ている。そんな当たり前が当たり前じゃなくなるなんて、実感はまだない。そんなことに鳴ってしまったときに、きつと感じたくもない気持ちになるのだろうか。でも、

「大丈夫だよ」

「……え？」

「みんな不安だし、わかんないし、どうにもできないけど。それでも、僕らは必ず会えるさ。吉野川さんたちが起きてきたら、みんな笑つて出迎えてあげる。絶対だ。それに、僕らの言葉を海神様に届けられたら、世界が凍えることにならないかもしれないでしょ。なら、今はそれにかけるしかない。信じよう。大丈夫さ」

と、今心の中で浮かんできたのをそのまま言葉にして出してしまった。ゆっくりと横を見ると、澄濤は目を丸くしてこちらを見ていた。そして右手を口元にあてるとじわじわときたように笑い始めた。

「あ、あれ？なんか、変なこと言つたかな」

一樹も焦つて頭の後ろをかく。変と言つても、笑う原因となるのは今の発言に他ならない。

「ううん、違うの。……やっぱり」

かぶりを振つて改めて一樹を見る。その表情は先程の悲しむよう

な雰囲気は全くなく、代わりに少し意地悪そうな笑顔を浮かべていた。

「やっぱりさ、一樹君って……」

その時、一樹の心臓は和太鼓を思いつきり打つような音が鳴った。息が止まり、目は意図せずして見開いている。手は一瞬で硬直して下に下ろしたまま動かせない。足もまたしかり。

やっぱり、とは。そういうのであれば、もう前々から何かしら自分のことについて澄澹は何かを感じていたこととなる。その何かは一樹自身が知りたいことのように、もう知っていることなのかもしれない。次の言葉が言う間隔は一秒もない。なのに、それが何分も空いている風を感じた。息をのんだ。

「すつごく優しいよね」

「……ふんふん」

あまりに予想外で変な声が出てしまった。しかし、第一に一樹が変に思い上がったのか、期待してしまっていたのか。彼女には結果的に一樹の秘めたる想いは感づかれていなかったようだ。

「ここに来てからさ、1回私のエナをみんなが見てたら、こうちゃんが勘違いしたときあったでしょ。その時も出てきてくれて、誤解を解いてくれたよね。それにおじよしさま作りで指切っちゃったときも、みんなに迷惑かけないように隠してたもんね」

ああ、やっぱり。ある意味気づかれていたのかもしれない。そう、一樹は思った。

「優しく男の子ならモテるんじゃない？ 茉紀ちゃんとか里実ちゃんはどうかなの？」

「えっ！ い、いや、2人は幼なじみだし」

急に振り下ろされる第二撃。無邪気な笑顔で指さされたときは一樹の心臓が止まってしまそうだった。すぐに手を振って弁解する。

「ふふふ、冗談冗談。さ、早くいこ」

手招きした澄澹は階段を降りていく。一樹も地面に置いたゴミ箱を持って後を追う。

彼女の背中が見える。三つ編みにした髪が揺れている。そんな姿

を一樹はどう思ったか、言うまでも無い。

## 第二十八話 四苦八苦

一樹と澄濤が見た、あの僅かな青空も再び隠されてしまっていた。いまだ天気が良い方向へ向かわないまま日にちが進んでいく。今日も薄い灰色が空一面を覆った下で通常通りの生活をこなす。一日の授業の終了を知らせるベルが鳴り、放課後へと移行する。掃除も終わって机を元に戻すと皆が自然と何グループかに固まる。誰かが自席に座るとすぐ近くの席に他の生徒たちが座りだす。

「なあ、これってどうするんだっけ」

「洋斗、ここってどの方程式使うんだっけ」

「な、洋斗せんせえ。これ、教えとくれ〜」

「……俺は阿修羅じゃねえ」

今日は金曜日。期末試験まで3日となった今日はみんながたたまかけ始める。この土日も当然勉強なのだが、全員が全員会って勉強できるわけではない。そのため聞いておきたいことはとことん聞いておくのがセオリーとなっている。ここで教師役となってしまう洋斗にとってこれはさながら地獄である。教えても教えても、まるでところてんのように入れたらその分出て行っているようにしか感じられない。それが3人もとなると頭が痛くなってくる。

「なあ海遥。お前も手が空いてたら……」

「オレカダイガオワラネー。オシエルノムリダワー」

「……しばくぞ〜」

3人は手に負えないと思った洋斗は近くにいた海遥にヘルプを求めた。しかし海遥から棒読みのお断りメールが届き、洋斗は舌打ちした。海遥も自身で味わった教えることのしんどさはゴールデンウィークで体験済みなので尚更したくなかった。そもそも、本当に課題が終わらない。

「んー、わからないよお」

「ほら、だからさ……」

こちら澄濤を教えるのに必死な沙月。澄濤の数学の知識は壊滅

級だが、それを補おうとする沙月もまた数学は得意ではない。頼みの綱である里実は別の子を教えている。残された選択は自分自身で解説するしかなかったのだが、得意ではない教科を教えていて相手がなかなか納得してくれないと、こちらも逆に不安になってくる。そうになると、やはりよりわかる人の手助けが欲しくなる。

沙月は澄滞に少し待っててと言うと席を立つ。数歩進んだ先にいた人物に話しかける。

「ね、ねえ、海遥」

「ん？」

動かしていたシャーペンを置いて海遥は沙月の方へ体を向ける。

「こ、ここの部分。なんかよくわかんなくなっちゃって。教えてくれる？」

「ああ、いいよ」

海遥は何の躊躇もなく頷いた。彼の真後ろの席に沙月はテキストを置いた。海遥はテキストをのぞき込んで少しの間考える。そして解き方がわかったよう顔を上げた。

「なるほどね、なるほどなるほど。ちよいと貸して」

海遥がおもむろに沙月が持っていたシャーペンをつかんだ。その瞬間、海遥の手と沙月の手が触れた。お互いの手はやはり自分のものと違って感触や温度も違う。そして、意識している相手だからこそ、沙月は余計にドキツとしてしまった。咄嗟に手を引つ込めてしまったことに海遥は大して気にしていないようだった。沙月は海遥の説明を聞き漏らしてしまいそうだったが、丁寧な字で書かれたメモのおかげでなんとか理解することが出来た。その後返されたシャーペンが、ほんの少しだけ大切に扱おうと思わせる物に変わっていた。

「うーん……」

シャーペンの動きが完全に止まる。目の前にある問題が他国の言語で書かれている様に思えてくる。航大は左腕の上に顎を乗つけて、シャーペンを持った右手で頭をかくが当然何か閃くこともなく。先程嫌々な顔の洋斗に教えてもらった問題が片付いた途端、新たな壁に

よって足止めを食らってしまった。こんな難しいものを出してくれ  
るなよと愚痴を出す一方で、いちいちわからなくなつて人助けが必要  
になる自分に呆れてため息が出る。洋斗の方を見るが幹大と隆広の  
ツートップに苦戦を強いられている。ついさつき航大に教えても  
らつたため、また彼に……とは流石に申し訳なく思う。これだけ理解  
していれば今回の期末試験も大丈夫だろうと勝手に判断するが、人に  
教えるというのは大変だろう。

ここで無駄に悩んでいてもしょうがないと思い、他に誰かいないか  
とあたりを見回した。

あ、と見つけて自然と声が漏れてしまった。誰にも気づかれない  
ないようだったが咄嗟に口を押さえてしまった。沙月と澄濤、そして  
里実が視界に入った。沙月は澄濤を必死に教えているようで、里実の  
方はさつきまで他の女子を教えていたようだったのだが今は自信の  
課題を進めていた。今は洋斗の力を借りられない。それに……。

『どっちにしろいつかは訪れてしまう、いわば滅亡じゃ。人類のな』

航大の中で今もウロコ様の言った言葉がぐるぐると巡る。もう今  
月で海村は冬眠に入る。こうやって同じ時間を過ごせるのはもう限  
りなく少ない。起きて二度と会えない可能性だつてあるのだとも。  
そうなれば、もしこのままずっと何も言わなければ、自分は後悔する  
のだろうかと自問自答してきた。その答えは、勿論わかつていた。

「なあ、ちよつといいか」

「ん、いいよ」

里実は課題を止めて閉じる。ここにテキストを置いていいよとい  
うことなのだろうと思い、航大はテキストをそこに置く。さりげない  
心遣いに航大はいちいち感動しそうになる。近くの空いている椅子  
を引っ張ってくる。座ってどぎまぎしつつ里実の方を見る。里実も  
航大を見てから解説を始めた。まずはいきなり問題の解き方ではな  
く、こここの問題で使う公式を覚えているか、そしてその使い方などを  
確認してくれた。優しく、ゆっくり丁寧に教えてくれる姿は航大の目  
に、より輝かしく見えた。

「将来、教師になれそう」



「え？そうかな、ありがとう」

心の声のはずが口から漏れ出ていた。里実は顔を上げてにっこりと笑う。航大の顔が一気に赤くなるがなんとかごまかして残りの解説を漏らさぬよう耳に押し込む。そして終わると里実に感謝の意を伝えて席を立とうとしたときだった。

「あ、やべえ。悪いけど俺もう帰るわ」

「うえええ！マジかよ」

「ここわからないと次進まねえよ」

洋斗は慌ただしく自分の机に広げていた教科書や筆記用具を鞆に詰め始める。幹大たちの嘆き声が重なって洋斗に降り注がれる。

「用事があるんだよ。スマンけど他の人に教えてもらってくれ。じゃあな」

椅子を入れてそそくさと教室を後にする。その姿を里実が目で見追っていた。

「ねえ、前々から思ってたけど、洋斗君の用事ってなにがあるの？おじよしさま作りの時も何回かあったし」

「……え？あ、ああ、あれは家にカテキョー来るんだとさ」

「カテキョー……家庭教師。流石洋斗君だね、意識高い」

「……うん」

やはり自分よりも成績が上に行く存在として気になるのだろうか。あえて、なのかは航大にはわからないが普段通り笑って里実は聞く。彼女の言葉に、逆に航大は曖昧に頷いた。こうなったのはやはり、自分が想っている相手が別の男子について気になっていると、自然とムキになったり話を急に終わらせたりする感覚だろうか。でもそれは既に付き合っている男女がそう思うものなのでは……。いいやしかしそういった前提などなかったはずだ、などと自分の中で考え始める。もしくは、洋斗の立場を考えてか……。

「どうしたの？」

里実が首をかしげて航大の顔をのぞき込む。少しの間だけぼうっとしていたようだ。突然里実の顔が近くに来たため、焦って変に声が大きくなりながらも大丈夫と言った。その後改めてありがとうと

言って自席に戻った。

「んじゃ、きりのいいところで終わりにしろよー」

教室の後ろのドアからひよこつと大塚が顔を出した。時刻はもう間もなく5時をむかえようとしていた。窓からは赤橙に薄く染められた雲が空を覆う。生徒たちは皆背伸びをしたり帰りの支度を始める。

「いやー、委員長助かりましたわ」

「ははは、隆広君は本当に助かってるのかわからなくなるよ……」

「ほんまおおきにな、海遥。なんとかこのユニットの文法理解出来たぜ」

「なんでだろう……課題がなんでこんなに残ってんだろ……」

頭をかきながら命から助かったような顔をする隆広に対して、こちらは救われていないような疲れ切った様子で机に突っ伏す里実。幹大の方も英語の教科書を閉じて海遥の肩を叩いているが、呆然とした眼で海遥は宙を見たまま動かない。消耗して尽きた2人を見てまわりも苦笑いである。

「さてと、俺らはさっさと帰らなきゃな。今夜、あれだろ？」

「……ああ、そうか」

一足先に帰り支度を終えた航大が海遥の横に立つ。航大の言葉で思い出したように背もたれに預けていた体を起こす。

「あれってなんだ？」

「ん、まあ、果那ノ海で用事があるんだ」

一樹が疑問に思って問いかけた。しかし海遥は視線を一樹から手

元のテキストに移すと曖昧に答えた。澄滯と沙月も鞆を両肩に背負って席を立つ。洋斗を除いた4人は皆二手を振って教室を出て行った。

「俺らのこと、気遣ってくれているよね」

「ああ」

いち早く支度を終えた大生が空いたままのドアを見ながら言った。一樹もゆつくりと頷いた。彼らに残された時間は三週間。果那ノ海でも着々と一樹たちには知るよしもない準備が進められているのだろう。今日のそれもきつと……。

いくら考えても仕方が無い、と頭を振って一樹はノートをバッグにしまった。

皆がそれぞれ使った机を元に戻して続々と教室を後にしていく。一樹と大生は共に階段を降りて下駄箱に向かう。とつくに見慣れた位置にある自身の靴をつまんで取り出す。無造作に床に置いて上履きから履き替える。その上履きを下駄箱に戻そうと立ち上がった時に、ふと視界の右隅に見慣れた顔が映った。

「一樹、大生、丁度良かった。一緒に帰ろ」

「お前も残ってやってたのか」

「勿論だよ。みんなで勉強するのは楽しいしね」

ニパツと笑う茉紀に一樹も微笑して頷く。地面を軽くつま先で蹴りながら大生はかかとを入れて、3人は校門を出る。緩やかな坂を下りて通りに出るとすぐ向こうは海だ。毎年見るような、見慣れた姿ではない。海は海なのに、中身がまるつきり違ってしまった、いわば人格が違うような感じを一樹は受けた。

通りの分岐点で陸側の方へ折れる。少し歩いた地点で大生と分かれた。家々の壁に退かされて固まったぬくみ雪を茉紀は蹴っ飛ばし

ながら歩く。

「テスト終わったら、もう夏休みだね」

「だな」

「そいや、みんなはおふねひきだね」

「まあな。そう考えると少し緊張してきたかも」

「もう、すっかりしろよなー」

茉紀はカラツと笑うが、一樹の内では本当に緊張を感じていた。

「でも、すっかりやらないとね。海神様を説得するんでしょ」

「うん。みんなの言葉を、想いを伝えればきつとわかってくれるはずだと思う。そうすれば、みんなも……」

一樹は空を仰ぐ。空を隠したままの雲はまだ橙色だ。ぬくみ雪が降っても、気温があり得ないくらいに下がっても、この時間帯でまだまだ明るいというだけで、夏を感じることが出来る。そんな様子を茉紀はチラツと見た後、少し俯く。

「ねえ、一樹」

茉紀の呼ぶ声に一樹は視線を下ろした。茉紀はまだ俯いたまま。

「みんな……海の人たちは、大切？」

突然の問いに少々驚きながらも、一樹は真面目に答える。

「ああ。出会って、話しておじよしさま作って。たった三ヶ月くらいしか一緒にいないのに、今じゃ大切な仲間たちだよ」

「仲間」

「やっと最近海遙も心開いてくれたし、みんなのことを少しずつ知ることができた。5人とも個性があって、辛いこともあったけど、いつも一緒だ。なんか、俺らと似たところもあるし」

「うん、そうだね」

「だからこそあいつらを、海の人たちと別れるなんて、俺は嫌なんだ。だからまた元通りになって、あいつらと一緒に笑っていたい」

「……」

先程の緊張はどこへやら転がっていき、今はまた空を見て笑っていた。一樹は願っている。彼らとの平凡な、そして楽しい毎日を。と、茉紀が立ち止まっていることに5歩先を歩いていたところで気づい

た。止まって後ろを振り向いた。茉紀は両手は下ろし、こちらを見ながら薄く、けれどどこか変に笑っていて、明らかに何かを見つけてしまったわけではないようだ。少しの間がたたずみ、一樹が声をかけようとしたときに茉紀がやつと口を開いた。

「ねえ、一樹」

「……なんだ？」

「一樹の、その大切ってどういう大切？」

「え？」

茉紀の質問の意図がまったくわからなかった。どうしてそんな質問をするのか。内容を考える前にその質問の意味を先に考えてしまった。しかし一樹は眉を曲げながらも答えようとした。先程自分が言った大切。それはそのままの意味だ。大切。どういう大切……。簡単に手放したくない、かけがえのない存在。これで伝わるだろうか、と思ったときに茉紀は重ねて問うてきた。

「その大切って、5人、それか果那ノ海全員が大切？それとも、誰かだけが大切？」

それは、見た限り平然としても、彼女にとってやはり目的のための質問に聞こえた。そして同時に、一樹の心臓を握るような、衝撃的な物でもあった。

どういふことだ、と目を見開いた。茉紀は何を考えているのだろうか。この問題は誰か一人だけじゃない。彼ら、あの5人組が……。けれど、一樹の頭によぎるのは、一部の過去の映像。

『一樹君って、やっぱり優しいよね』

どうして、どうして……。こんな時にどうして……。そして、茉紀は、なぜ知っているのか。そもそも、知っているのか。一瞬にして、茉紀の霧のような薄い笑顔が、自分の心を見通すような、小さな恐怖にさえ見えてきた。

「……ううん、やっぱりなんでもない」

突然に茉紀は話を止めて、いつも通りの純粋な笑顔に戻った。

「変なこと言っでごめんね。じゃ、また来週」

茉紀は右手を振るとすぐ近くの角を曲がって行った。少々駆け足

で角に消えていく彼女の姿は、やはり変に思えて仕方が無かった。どうにもあの問いに疑問を持つ。いったい彼女は、どんな回答を求めたのだろうか。その迷宮入り事件のごとく難解の問題は、このときの一樹には解けるはずもなく、首をかしげてながらも自分の帰路にいた。

## 第二十九話 月の下で

時刻はまもなく午後7時を迎えようとしていた。黒に近い青が空に塗りたくられ、辺りを徐々に闇で埋め尽くしていく。夏とは思えない気温が海の中でも十分伝わってくる。そんな中でも今はほとんど感じない。人が密集して各々の席に着いていた。これから果那ノ海の住民全員で宴会を行うのだ。

この日を境にして彼らは絶食する。それによつてエナが守ろうとして厚くなる。そうして眠りを起こさせるのだ。つまり冬眠前にたらふく食べておこうというものだ。

果那ノ海にある大ホールで行われる。入り口を入るとすぐに見えてくるのは外見通りの丸いホール。そこに長テーブルをいくつも置いて、座布団を敷く。この時間までに手の空いた人たち——主に主婦たち——が料理を作り、運んでいた。色とりどりの料理がテーブルを飾る。和風もあれば洋風も並べられ、裏の調理場にはまだ作つて出せるほどの食材も残っている。この日までには、ここは男性陣が集めたのだ。その他、長年ろくに使わなかったこの場所の掃除だったり道具運びだったり、大規模な宴会だけあつて準備も一苦労した。その中に海遥も参加していた。自分は宮司の息子であるが故に、といった様子でまわりから跡継ぎは安心だと喜んでいた。しかし積極的に参加したものの、結果的に課題が終わらないという苦労もする羽目になったのであった。

「よし、みんな酒持ってるか？」

皆川が立ち膝になってまわりをぐるりと見渡した。隣や向かい側の人たちと話している割合が多いが、協力して準備した甲斐あつて皆の手元には酒やジュースが行き届いている。ざわついたホール内に聞こえるよう精一杯張つた皆川の声に負けじとオーケーサインを伝える声も返ってきた。

「んじゃ、乾杯の挨拶よろしくな、和洋」

「うん、わかった」

和洋は頷くとビールが入ったグラスを持ちながら立ち上がる。 1

回喉の調子を伺ってから口を開いた。

「えー、今日はみんなたらふく食って、たらふく飲みましょう。では、乾杯」

和洋の一声で皆が一斉に「乾杯！」と半分叫んだ状態でグラスを高く突き上げる。最大の宴の始まりだ。各々真っ先にビールを飲み、箸で料理を皿に取って食べたり、話の続きをしたり。普段ゆつくりと話せない人同士とも会話できるとあって、余計に盛り上がっている。そして始まって早々に瓶ビールを空にする輩も少なくない。

「おうおう海遥よお。ちゃんと飲んでつか？」

「いやいや、俺未成年」

宴会開始から30分で既に酔いが回っている河内が海遥の横に座った。右手には瓶ビール、左手にはグラスをしっかりと握っている。

「んなこたあどうだっていいんだよ。お前さんもなあ、いつかは立派な宮司になるんだから、今のうちに飲めるようにならなきゃあ」

「そんなに焦ることはないですよ」

「いや、ここはグイツといけねえとな」

徐々に海遥のまわりに酔っ払いが集まりだしていた。彼らから溢れ出す酒気は決していいものには感じられない。海遥は苦笑いしつつ、ここから逃げ出したい思いに駆られていた。

「で、でも……」

「いつかは飲むんだから、嫌がらずにいつペン飲んでみろよ」

「そうそう。前は不味いと思っても、今はそうでもないかもしれねえぞ」

「物は試しだ。ほら」

海遥の言い分は彼らの耳には届かず、河内が近くにあったコップにビールを注いでいた。その量も大人同然の並々に注がれていて、白い泡がほんの少しだけコップを伝って落ちる。目の前に置かれたビールを海遥は目を細めながら見るが、やはりどうやっても美味そうには思えない。しかしまわりの酔っ払いたちの新歓さながらの視線に耐えきれず、ゆつくりと口に持っていく。口内に入ったその液体は瞬時



に舌によつて味の判断が下される。

「うええええ、まつず」

無論、海遥には受け付けなかった。不味さで歪んだ顔の海遥を大人たちはこれでもかと大笑いしている。その傍らで座っていた和洋は微笑みながら総菜を口に運ぶ。今見ている光景が、なんだか昔の頃のように思えてきたからだだった。妻の南波がいて、娘の海花がいて、そして海遥と自分。天真爛漫な海花を支えつつ振り回される海遥を2人で笑いながら見ていた、まだつい先日のように感じられる光景が、今と重なる。それほど海遥が元に戻った、いやしかしまた一段と大人になったからだろう。

あの日、地上にぬくみ雪が降った日に、果那ノ海はパニックとなっていた。勿論和洋はそれを知らされるや否やウロコ様のところへ駆けだしていた。彼のどこか鬱陶しそうな様子から語られたことは衝撃的だった。その場には海遥もいた。ある日を境にどんどん変わっていくのだと悟った和洋はやるせない気持ちになった。突然の現象に、気軽に思い出したくもなかった2年前の事故の記憶が頭をよぎった。不安に駆られ、行き先が真っ暗に閉ざされるその感覚は双方に共通していたからだろう。和洋は重くため息を吐いた。自分は所詮宮司であつて、ただの人間だ。天変地異を起こせるほどの力など持ち合わせていない。しかし、また、目の前で何かが消えてく。今度は自身が愛した、そして家族の思い出を作った地上との断絶、安心できるこの海の眠り。ぱらぱらと掌からこぼれ落ちていくそれらを必死にかき集めようとしても、簡単にすり抜けていくような……。

『父さん』

静寂を保った水面に一滴、ぽたりと落ちるように海遥の声が聞こえた。耳から伝わったこの感覚は、いつの日かを思わせる、そんな優しさだった。

『大丈夫だよ、多分。……なんて、随分な言い方だけど』

『……っ？』

『俺、勘違いしてた。何でもかんでも、1人で片付けようとしてた。もう俺しかいないから、父さんに変に気を遣わせないようにって、大人

ぶってたんだ』

突然の海遥の言動に最初は疑問を覚えたが、それはすぐに確信へと変わった。この日は汐帆と聡太郎の話し合いに海遥たちが見届け人としてついて行ったのだ。そこできつと、再確認できたのだろう。

『俺は一人じゃない。みんないる。そして父さんも……。だから、今度はみんなと協力して、この事態の打開策を考えようと思ってる』  
『……うん』

『まあ、きつと俺らじゃどうにもならないことだとは思う。だから、その時は頼む』

『勿論だよ。僕は宮司だけど、果那ノ海だって久里ノ上だって、大切な場所だ。それは変わらないよ』

和洋は海遥に向かって笑いかける。海遥もまた微笑んで頷く。やつと、また海遥と近づけたようだ。そして、

『いつかは、あの時宣言したみたいに、陸の学校に向いて海の素晴らしさを伝えられるような宮司になってなるよ』

そんな言葉も来たものだから、和洋は涙がこぼれ落ちるのを我慢するので精一杯だった。それが再び溢れてきそうだと和洋は2回ほど強く瞼を閉ざせる。

「ほらほら、そこら辺で止めといってくれませんか」

今だ酔っ払いたちに絡まれている海遥を助けだそうと和洋は声をかけた。

「まだ手巻き寿司余ってる？」

「はい、ありますよー」

ホール内に備えられているキッチンにひよこつとおばあさんか顔を出す。料理が皆の腹にどんどん吸い込まれていくので減りも早い。追加分を作っていた女性が高い声で返事をして大皿を両手で持って行く。

「じゃ澄滯ちゃん、これもっていくから」

「はい、お願いします！」

駆け足の音が徐々に遠のいていく。引き上げた皿たちがまだまだ積まれている。澄滯は黙々と皿洗いをしている。黄色いスポンジを握って泡を増やす。皿についた汚れを泡で浮かして落とす。先程までもう二人ほどいたが今はホール内で作業をしているのだろうか、まだ帰ってこない。

乾杯の合図からもう1時間は経っている。澄滯自身も最初はみんなと食事をしていた。案の定酔いの回りが早い河内さんを筆頭に子供たちに酒を勧めているのが見えた。それは澄滯の方にもきたが両親が柔らかく断ってくれた。そもそも澄滯は酒を口にしたことすらないが、まわりの感想として苦くて飲めた物ではないという知識だけあった。それ故酒を飲みたいという欲求は今だ微塵も沸いてこない。「……ふう」

肩の力を抜いてため息をつく。首も痛くなってきたので軽く回し、最後に背伸びをする。澄滯は小食のためにあつという間に満腹となった。両親にはもう少し食べた方がいいと言われたけれど、今日はおそらく一番沢山食べたのではないかというくらいだ。飲み物も十分飲み、近所の方たちと話を数回咲かせたところで裏方にまわったのであった。

ぼうっと宙を見る。電灯がほんのりとついていて手元を照らす。洗って水を切っている皿たちにはまだ水滴が付いていて、それが電灯の光で小さく輝く。澄滯は正直、普段あまり関わらない他の人と話してみたかった。勿論、まだ沙月としかここで話していない。しかし、自然と口が閉じてしまうのだ。彼らは、この事態に対して深く悲しいではないようだだった。全員とはいえないが、確かにそうなるのも無理はないのだ。実際ほとんど陸に上がらずに過ごしている人もいる。勿論海だけでは取れない栄養を補う必要があるのだ、地上のスーパー等で食材を買いに行く。しかしそれは主に主婦の役目なのだ。男性陣はあまり関わりが無い。漁業についてはある程度交流はあり、男たちの飲み会だつてあるが。さらに言えば、まだ小学生の子たちは陸に

出たことすらないこともある。今年から線路開通したのでそれを機に出ることもあつただろうが、あまりないのが現実だ。それに、現実味が無すぎて今日の宴会で彼らは相変わらぬのはしやぎ具合だった。

澄滯はぴくんと尿意を感じてスポンジを置いた。手をすすいでキッチンを出る。ホールを鳴るべく大きくするために、トイレはホール入り口から奥まったところにある。キッチン自体も奥にあるが、それよりも先だ。出て左に曲がって真っ直ぐ歩く。壁を挟んでも皆の大小様々な声が聞こえてくる。それはまさに降伏に包まれて、幸せを噛みしめているうようにしか感じられない。そう強くもう澄滯にとってこれは、また一步陸から遠ざかっているように思い、実際は悲しかった。

トイレから出ると、来るときは気づかなかつた階段があつた。そしてそれはすぐに上にあるベランダに続く階段だとわかつた。澄滯は徐ろに足をそちらに進める。満腹感もあつて俊敏には到底動けない。案外しつかりとした階段はひんやりと冷たくて、靴下からその温度を感じ取つた。踊り場を挟んで上に辿り着くと、右側から天井と床の間から月の光が澄滯を照らす。雲はこのとき無く、海を通つてホールに降り注いでいた。まばゆい光に誘われるようにしてベランダに近づくと、先客の姿に気づく。後ろ姿は月光で黒くて誰だかわからなかつたが、近づけば一目瞭然だった。

「……みはっちゃん」

もう見慣れたそのシルエットは海遙だった。ただただ呆然と手すりに両手をつけて月を見上げていた。澄滯も海遙の横に並ぶ。

「月、綺麗だね」

澄滯はそう呟く。海遙からは特に相づちひとつ無い。聞こえてはいるだろうと思う。

「……みんな、楽しそう。食べて、話して、笑つて。なんだか何かを祝つてるみたい」

「……」

「でもね、やっぱり私は複雑かな。私たちは陸の学校に行つてるから、

きつところ……なんだろ、複雑なんだよ。もしかしたら、って」

澄濤は手すりを握る力を強めた。

「わかんないよ、世界が凍えちゃうだなんて、なんで、そんなイジワルなことするんだらう。海神様をないがしろにしてないと思うし」

「……」

「私やつぱり怖いや。汐帆ちゃんがもう1人のおじよしさまなんて、上手くいくのかって。もうみんなと会えなくなるんじゃないかって。白風中のみんな……。里実ちゃんや茉紀ちゃん、砂奈ちゃんたちのお話は楽しかったんだ。それにあの……。あ！ダメダメ、マイナス思考にいつもなっちゃう。私のダメなところだね。昔みはっちゃんに注意されたことあったよね」

徐々に下がる視線を一旦閉じて首を振る。だが今だ海遥から返答はない。ちらりと横目で見るが、依然として空を見ている。真っ直ぐに、けれどその目はなんだか……。澄濤は一旦後ろを振り向いて、人がいないことを確認した。

「ねえ、みはっちゃん。あの時のこと、覚えてる？」

澄濤が、そしてゆつくりと語りかける。手すりから離れた両手の指同士を合わせて、三角形のようにする。

「あの時……」

そう言いかけたとき、ついに海遥が動いた。といっても明らかに正常な動きではなかった。力を失ってふらついたような、まさにそういった感じの動きだった。咄嗟に海遥自身は手すりを握ったが、危うくそのまま後頭部を打つところだった。

「だ、大丈夫……!?!」

心配になって海遥に手を伸ばした澄濤だったが、今度は異変を感じた。それは、嗅覚からだった。

「お酒臭い……。もしかして」

よくよく顔を見れば、やはり海遥の顔は赤くなっていた。月光に照らされていて気づくのが遅れたのだから。そして呼吸から感じた酒気は明らかに飲み過ぎだと思っほほどだった。

「もう、河内さんってば、飲ませすぎだよ。私たちまだ中学生だし」

酔っ払って緩んだ顔の河内が容易く想像できた。そして先程来た時の様子からして、同様に海遥にも勧めたのだろう。他の酔っぱらいたちも加わって飲まされた次第だろうと澄滯は思った。そしてこんな状態を放ってはおけないので、とりあえず水を飲まして休ませようと海遥の手を引いた。

「大丈夫、歩ける？ ゆっくりでいいか……きやあ！」

しかし彼の足取りはおぼつかず、終いにはもつれて澄滯に向かって倒れてしまった。海遥の体重を支えられるはずもなく、澄滯も巻き添えを食らって一緒に倒れてしまった。澄滯は腰の痛みを堪えて目を開けると視界の左に海遥の頭が見えた。彼自身は先程同様に咄嗟に手を突いていたようだ。膝は澄例の両足の間についていた。海遥をなんとか立たせようと両手で彼の脇あたりを持つとしたときだった。

「すみ……れ」

か細く、澄滯の肥大耳から声が聞こえた。酔いでまともに話せない故の声だった。

「どうしたの？ どっか打った？」

澄滯の落ち着いた問いかけに若干の間があった。海遥はゆっくりと体を起こして澄滯の視界にはつきりと海遥の顔が映った。その顔はいつもとかけ離れた、まるで別人に見えた。

「……だ」

「え？」

呂律がまわらない口のために聞き取れなかった。どうしていいかわからずただただ戸惑う澄滯に、今度ははつきりと、海遥は言った。

「……綺麗、だ」

澄滯の心臓が、一気にひっぱらる様な、そんな感覚を覚えた。そしてその光景を前に、立った今階段を上がったきた沙月は目を丸くして固まっていた。

### 第三十話 希望はその拳に

ホール内に今だ響き続ける人々の喋り声の五重奏。始ってからもう1時間以上はとづくに経過していた。これはあくまで自主解散というかたちのため、既に帰っている者も多くいた。まだ残っているのは主に大人の男性たちで、ほかに若かりし頃を語る男女もちらほらいた。彼らは酒を飲み交わし、総菜を食べ、そして話す。皆が笑って、楽しんでる様子を見て、沙月はどうにも違和感を覚えてホール内から出た。最初はみんなに合わせて総菜を食べつつ話に参加していたが、そのうち皆の話に相づちを打つだけになっていった。そして場を離れて澄滯の方に移動した。澄滯も沙月と同じようなことを感じていたようで、いつもよりも少しだけ暗い印象を受けた。しかしそれ故に二人の会話も普段よりも乏しいものだった。澄滯の方が先に立ってほかの場所で世間話をした後、ホールから出て行ってしまった。

「いいの、かな。こんなに楽しんで」

すぐに吹き飛ばされてしまいそうな、そんな小さな声で呟く。素足が床に着く度にペたペたと音がする。

今日をもって冬眠の日まで食を絶つことになる。そう思っただけで胸が苦しくなった。知らぬ間にこうも時は来ているのだと、沙月は感じざるをえなかった。それなのに、まわりの大半はどんちゃん騒ぎを繰り返して、それに対する違和感と少々の不愉快さもあった。「そういえば、澄滯どこいったんだろう」

ホールを出てからの澄滯の行方を知らない。といっても今の状況からして彼女はキッチンの方にいるんじゃないかと沙月は考えた。その方向へ足を進めると、目的地のキッチンから光が漏れ出していた。中に入ると若い女性が2人いるだけで、澄滯はいなかった。

「あの、すみません」

「あ、沙月ちゃん。どうしたの?」

「澄滯、見ませんでしたか?」

「あー、私さつき手巻き寿司持って行ったんだけどね、その時はまだ皿洗いしてたの。だから多分トイレとかじゃないかな」

「わかりました。ありがとうございます」

そう礼を述べてキツチンを後にした。ここよりも奥の方に確かトイレがあつたはずだと記憶を遡り、廊下を進む。そして青と赤に塗られたドアが一枚ずつ見えてきた。赤い方を開けて中を覗いてみたが、誰も使っていないかつた。静かにドアを閉める。

「どこだろう。もしかしてホールに戻ったのかな」

沙月は元来た道に戻ろうとした。その時、上から微かに何か倒れたような音がした。自分の聞き間違いかとも思ったが、トイレの近くに階段があることに気づいた。トイレの真正面にあるために来るときには見えなかったのだ。上にはベランダ等があつたことも思い出した。もしかしたらそこに澄滯もいるかもしれない……。

足裏から伝わってくる冷たさを感じながらゆっくりと階段を上がつていく。途中で踊り場に出て180度曲がつてさらに上に続いている。その踊り場に着いたとき、

「どうしたの？どこか打った？」

小さいが、確かに澄滯の声が聞こえた。やっぱりここにいるのか、と思つて少し上るスピードを速めた。そして階段を上りきつた、その光景が沙月の目の前に飛び込んできた。

月明かりを遮る天井の下。月光と陰が混ざるそのところで、人が2人重なつて倒れていた。そしてすぐに、海遥と澄滯だとわかつた。わかつたけど、わからなかつた。いったい今どういう状況なのか、沙月には突然すぎてわからなかつた。2人に何か声をかけていいかすらもためらわれた。沙月が絶句していたその最中、その言葉がぽつんと現れた。

「綺麗、だ」

綺麗。確かに、今日の月は満月で、雲も無いためくつきりと見える。誰が見ても、綺麗な月だ。しかし、海遥の目の前には月はない。澄滯がいるのだ。その澄滯に向かって、綺麗と言つたのだ。それ以外なんてない。最早ドラマでしかあり得ないような、男子が女子を押し倒している状況。これは、やはり海遥に関してならかなり大胆な行動だけれど、いやしかし、そんなことをいうものなのだろうか……。頭の中



でそれがあり得るのか否か、これは夢なのか現実なのか、沙月は頭の中で様々なものが急に出現して絡まり合って少しふらつきそうになった。でも……と、混乱の中でも這い出すようにして、出した答えがあった。つまりそうなのか。

海遥は、澄滯が好き……？

「あ。さ、さっちゃん！」

澄滯が階段近くに沙月がいることにやっと気づいた。彼女の体勢と力では海遥を押し上げることが到底できないが、それでもめげずに力一杯腕に力を込めていた。

「大変なの。みはっちゃん、河内さんに飲まされちゃって、酔っ払っちやってるの」

「……え？」

「酔っ払っちやって自分じゃ立てなくなってるの。ちよつと助けてくれない？」

我に返った沙月は現実なのか違うのか、そんな曖昧なところに止まっている浮遊感のまま澄滯たちの側まで近づく。見ると、海遥の顔が赤くなって目が虚ろになっているのがわかった。2人の力でなんとか海遥をまず澄滯から退かす。海遥は人形のように腰を突いてだらりと横になってしまった。つぎに海遥の両腕をそれぞれの肩にまわして立たせる。2人とはいえ、どちらもまだ中学生の女子だ。さらに言えば背丈は海遥の方が上であるため、立たせるだけで一苦労だった。そして階段を降りてホールまで運ぶとなると、2人は自然とため息が出た。

「人って酔っ払っちやうと、別人みたいだねえ」

やっとこさ階段を降りたとき、澄滯がそう零した。海遥にはまだ辛うじてではあるが意識はあり、よたよたしながら歩いている。普段、というかこんな海遥を澄滯も沙月も見たことはない。まさに別人だ。そう、そして先程の言葉も……。

「河内さんって自分もすぐに酔っ払うのに、他人に酒をどんどん飲ませようとするよね」

「……うん」

「みはっちゃんは優しいから、多分きっぱり断れなかつたんじやないか」

「うん」

廊下を歩いている間、澄滯は変に明るく振る舞って沙月に対して話しかけていた。しかし沙月は曖昧に返事をしつつ少し下を向いていた。天井に付けられた小さなライトの光が仄かに廊下の床に映る。それはまるで、今の自分の心を表しているような気がした。

ついにホールの入り口に辿り着いた。中に入ると先程まで行われていたお祭り騒ぎはほぼ静まっていた。集まっていた住民もだいたいなくなっていた。入り口から見て左奥に大人たちの塊があつた。2人はそこに向かって進むと、これまた知っている人物がこちらに気づいて振り返る。

「はは、お二人さん……に、酔っ払い一名追加だア」  
「航大」

タンクトップに膝が隠れる程度の半ズボン姿の航大がいた。しかし彼の顔は赤く、なんだか口調も普段とは違う。

「まさか、あんたも飲んでたの」

「まあ、当然やろ。こんな機会じゃなきや普通飲めえだろ」

「こうちゃんも、酔っ払ってるね」

「ん？ いやいや、でもなんか楽しいってゆーか、気分はいいねえ。ま、洋斗の方がひでえけどな」

航大はしゃきつとしない軟体動物みたいに笑うと、自身の後ろに目を向けた。その視線の方を2人は見た。座布団を枕にして、右腕で目を隠すようにしている洋斗がいた。彼の顔ももれなく赤くなっているため、餌食にされたようだ。

「ったくよお、1杯でこれは弱すぎるぜ、洋斗。まあ、2杯でその海遙も、まだまだかな」

「個人で体質は違うんだから、しようがないでしょ」

海遙を寝かせて頭のところに座布団を敷かせる。体の怠さからか唸りつつ寝返りをしている。その横で2人は腰を下ろした。まわりを見渡すと、近くで大の字に寝転んでいる河内を発見した。その横で

大人3人も倒れ込んでいます。

「あ、どこに行ってたんだよ」

今度は澄滯たちが入ってきた入り口とはまた違う方から和洋がよろよろと歩いてきた。彼も相当飲んでるようだと、見ただけでわかる。

「2階のベランダの方に上がってたんですよ」

「そうなのか。いやあ、すまないね」

そのまま海遥の側に座って顔をぺちぺちと叩いてみる。無論こうなってしまうばしばらく起き上がれないだろう。反応も鬱陶しそうに手で和洋の手をどけただけだった。

そしてしばらく航大と航大の父のなんともくだらない、お互いの普段ダメなところを言い合うのを2人は見ていた。時には笑い、そして呆れて首を振った。

「すみません」

3人がここにきて10分ほど経った時だった。しっかりとした、そして且つ凜とした女性の声が聞こえてきた。これはホールの正面出入り口からだった。皆の視線の先には1人の男女がこちらに歩いてくる。

「洋斗はこちらにいますか？」

女性が皆に向かって問う。ショート黒髪と鋭い目が印象的なこの女性は、洋斗の母だと皆がすぐに気づく。

「ああ、それなら」

近くにいた1人の男性が寝ている洋斗の方を見下ろした。それを見るなり、

「ほら、起きなさい」

しゃがみ込んで洋斗の額あたりを手の甲で叩いた。その衝撃と彼女の声で洋斗はびくりと体を縮こまらせる。まどろみから突然引き戻された目はすぐに驚きの目に変わった。

「いつまで寝てるの。まったく、未成年のくせに飲むんじゃないわよ。それに来週期末でしょ？だらけてるってことはちゃんと点数取れるって事なの？」

洋斗の一方的に言葉を浴びせながら洋斗の体をぐいと引つ張つて起こす。

「あの、二軒屋さん。確かに未成年飲酒はあまり良くないことですが、いくら何でも」

「洋斗はうちの子ですので、皆さんには関係ありません」

なるべく柔らかく話そうと和洋が声をかけるがぴしやりと跳ね返した。洋斗は怠そうであまり顔色も良くはないが母に捕まれているためどうにもできない。

「未沙、そろそろ行こう」

そう言つて男性は洋斗の母、未沙を顎で出入り口を指して帰宅を促した。背丈は未沙よりも少し高い位の男性は、ほぼここで見かけない顔だが、おそらく父親だろうと沙月は思った。

「では、失礼します」

「おい、まてや祐治<sup>ゆうじ</sup>」

洋斗を回収して足早に退散しようとするところを、一人の男性が呼び止めた。空になったジョッキを持つたままテーブルに寄つかかるその人物は、航大の父だった。

「お前、今日のこれ、来なかつただろう」

「ああ。なんなら、さつき来たばかりだ」

「宴をやるつてよお、割と前から通知送つておいたはずだが？」

「は、そんなの二の次に決まってるだろう。仕事が詰まっているんだよ。数週間ではどうにもならないんだ。たまたま空いたから来たが、これでもかなり無理をしているんだ」

祐治は航大の父を睨み付けるように目を細める。

「まったく、さあ来てみればいい大人が酔いつぶれて寝ている。さらには未成年まで酒を飲んで。冬眠だのなんだので変に浮かれているのか？」

「浮かれている？そんなわけないだろう。それに、お前だつて眠ることになるんだぞ」

「ははは！眠る？阿呆か。俺は明後日にでも戻るぞ。言ったはずだ、仕事が詰まつてんだ」

航大の父を、いやその場にいた者までもあざ笑うかのように顔を歪めた。澄瀨は肩を少しだけ震わせて沙月にひつつく。

「そもそも、俺は冬眠なんかしないぞ。そんなことで今まで積み上げてきた実績が下手したら無くなっちゃうなんて、ごめんだね」

沙月たちでも、洋斗の口から聞いたことがあった。彼の父親は有名な弁護士をしているのだ、と。ほとんど果那ノ海に帰ってくることはなく、全国で活躍しているらしい。

「後々に未沙と洋斗も陸に上げたいものだがね。こればかりは洋斗の意思だからここに止まらせているんだけど。でも、この二人にも冬眠はさせない方針だ」

吐き捨てるようにして航大の父を一瞥してホールを去って行った。未沙も洋斗をつれて歩き出す。その姿を睨み付けてから航大の父はテールを軽く拳で叩く。

「ったく、あの両親はどうにかならねえかな。洋斗がかawaiiそうでしたかたがねえ」

「前にも何回か言ってみたんですけどね、今と同じように言われてしまいましたよ」

和洋もため息をついて首を振った。あの2人はどちらもまわりの意見を受け付けない、頑固者として少し有名なのだという。

「俺らと同じベクトルなのに、中身がまるで違い。仕事仕事、それしか頭にないのかよ」

顔をしかめて航大がどかりと座った。

「俺らはこの異常事態をどうにかして防ぎたい、そういう思いで色々やってきたんだ。海村全員とはいかないけど、それでも俺らだけでもやるしかないんだって。でもあいつらはあくまで仕事をするというためだけに眠りたくないんだ。まわりのことはどうでもいいんだ。しかも洋斗まで引つ張ってこうとする」

「だな。昔っから頑固者で仕事中心って感じだったが、あんなことがあってから、さらに悪化したようだな」

航大の父も手を大きく広げてため息を零す。世間的にはあまり高評価とはいかない家族像を見せつけられて皆の雰囲気全体的に黒

塗りされたように重くなっていた。

「ひろちゃん、どうするんだろう」

澄濤が涙目になりながらの言葉を漏らす。

「どうするも何も、簡単に渡すわけないだろ」

澄濤と沙月の後ろから、だった。重い体を起こして海遥が言った。その背中を和洋が優しく支えた。海遥はテーブルにあったグラスに水を注いで半分ほど飲み干した。

「確かに地上で実績を上げているのは悪いことじゃない。優秀な弁護士だ、それまでに色々苦労したんだろうが、だからといって何でもかんでも勝手に決めて言い訳でもない。洋斗がここに残るとい意思をわかっていても、結局ここから出て行くこうとさせている。そこら辺、洋斗はどうしたいのかを無視している」

「ああ、まったくそうだよ」

航大が大きく頷いた。

「父親のような優秀な弁護士か、そういった人物にしたいんだろうな、多分。それは洋斗の意思なのか、それとも両親がそうさせたい、そういう息子にしたいという一方的な理想像の押しつけなのか。いずれにせよ、おふねひき前に洋斗を出させようなんてたまらねえよ」

「みんなと協力しておじよしさまだって作った。それに洋斗も当然含まれてる。あいつが欠けちやいけないんだ。それに、俺らは思いを1つにつけて、今日誓い合ったばっかだしな」

「誓い？」

航大の言葉に沙月は疑問に思っって首をかしげた。航大は自慢げに両手を腰に当てた。

「ああ、そうさ。俺らは皆と一丸になって冬眠を、地球の寒冷化、つまり人の絶滅を止める！その誓いで杯を交わしたのさ」

「ああ……」

沙月は自分の頭の中でやっと理解した。航大たちが行った誓い。そこで杯を交わした。つまりはそのための飲酒だったのだ、と。

「初めての飲酒は未知で色々馬鹿騒ぎをしたけど、本番はこれからだぜ」

「ああ。みんなは宴会でも、俺らにとってはこれは、ある意味決意の宴だ。やるんだ、俺たちで。陸のみんなも一緒に」

ゆっくりと立ち上がった海遥は右手を突き出して拳を握った。航大もニツと笑って拳を出す。

「俺たちだってよ、眠りそうになっても目ん玉開けて、おふねひきの唄を全力で歌うぜ」

航大の父も勢いよく立ち上がって拳を突き出す。まわりにいた大人たちも、青年会に属したもののばかりだ。皆が立ち上がって拳を出す。それを見て沙月と澄濤も、そして和洋も同様に拳を出す。皆の腕が1つの円を描くように向けられる。その心を、思いを、そして御霊火のように強く揺れる希望を、その円に託すように。そして、海遥たちの中では、様々な”想い”も胸に秘めて。

### 第三十一話 惹かれるもの

果那ノ海で行われた小さな誓いの宴は終わり、その日までの時間がさらに早まったようにも感じられるようだ。そしてありったけをギリギリまで頭の中に叩き込み、期末テストをやりきったのである。

期末テストが終わったのが13日の水曜日。そして夏祭り兼おふねひきの日が30日の土曜日。それまでに彼らはおふねひきの開始からの流れ、動き等々を今度は頭に入れていく。勉強とは違って、これは儀式である。動きをひとつひとつ確認していけば直に自然と覚えられていく。陸の漁協組合方たち全員は仕事合間や終わった後に歌う練習を重ねていった。一方の果那ノ海の青年会も唄の練習は欠かさなかった。

「……ぐぬぬぬぬ」

眉間にぐつと皺を寄せ、歯を食いしばって海遥はうめき声を漏らしながら自分よりも大きい旗を掲げていた。左手は上、右手は下の方を持ち、腰を少し低くして旗を斜め上を向くようにする。とはいえそこまでいってもまだ完璧には扱えていない。旗を振ってみるがどうにもバランスが途中で崩れたり、風が少し強く吹くと乱れてしまった。まだまだ練習が必要であることは明白だ。

「ほらほら、もつと腰を入れないと」

「は、はい……い！」

漁協の若手に海遥は指導を受けていた。白い雲がどこまでも広がる午後の空の下、ビール瓶のケースを上下ひっくり返して若手組合人は座っている。中学生の必死で腕を振るわせながら巨大な旗を持つ姿を見て微笑む。

「いやいや、頑張るねえ海遥は」

「当然やろ。一番遅く入ってしまった故に、ここで役目を果たせといわんばかりの全員一致だったもんなあ」

その傍らで幹大と隆広は海岸の端っこに足を投げ出して座っている。2人の手には水色の棒状アイスが握られている。シャリシャリと噛んだときの音の刹那、冷たい甘さが口の中全体に広がる。異常気



象とはいえ、アイスは食べないわけにはいかないのだ。

「お、きょうもやってんな」

2人が揃って振り向くと、そこには私服姿で自転車にまたがっている一樹が海遥の方を見ていた。

「よう一樹」

「おう。っってお前らアイス食ってんのかよ」

「まあね。俺らにちよつとした差し入れてサ。お前も貰えば？そのボックスに入ってるぞ」

「マツシゲで買う予定だったけど、まあいただくか」

漁協組合の方々に感謝して一樹もアイスを貰うことにする。フタが青で箱自体が白の保冷ボックスが近くに置いてあった。開けると一気にひんやりとした冷気が溢れ出てくる。凍らした保冷剤が3個入っていて、アイスは複数本入りの袋が6つ、きっちりと収められている。開封されているものから一樹は取り出す。2人のと同じ水色のアイスだ。

「そういえば、ほかのみんなは？」

「んー？確か、隣町に行つてんじやなかったっけ」

「そうだけ。昨日の件で、布類諸々の調達だろ」

ああ、と一樹はすぐに理解した。それはつい昨日のことだった。おふねひき当日に学生の皆が着用するはつぴを漁協の倉庫から出してきた。それらをサイズやその数量と照らし合わせた見たところ、在庫が思っていたよりも無いことに気づいた。大人たちの分は自分自身で持っているのだが、中にはこの1年で悲しくも体型の変化によりサイズ変更したい人もいて、尚且つ歴代最高人数の白風中学生徒の参加で圧倒的に足りないのだ。加えて長年使ってきたためか、ボロボロになっっているものもあった。

そこで今回、はつぴを新調しようということでもまず材料の買い出しをしよう、となった。それが今日で、車を使って大生とその父、澄濤、沙月、航大の5人が隣町に行っている。

「ああ、そう……だったね」

「なんだ、もしかしてお前も行きかけたのか？」

一樹の声のトーンが下がった様子から幹大は不思議に思った。その素朴な疑問を投げると一樹は体を反射のごとく跳ね上げた。口に溶けたアイスよりも冷たい感覚が体全体に一瞬にして広がる。心臓も氷付けになったような心地で、自分の心情が筒抜けになってしまったのかと一樹は思ってしまった。

「い、いやいや。違う違う」

「そ、そうか」

「あ、俺そろそろいくわ」

必死に首を振ってその問いを否定した。その必死さに幹大は目を丸くして驚き、アイスをかじった。そして一樹はアイスを一気にかぶりつくると自転車の方に慌てるようにしてまたがる。

「じゃあな。海遙に頑張れって言っというて」

「うい。じゃーねー」

一樹はペダルに足をおいて力を込める。タイヤと地面が擦れる音と共に加速していった。その後ろ姿を見ながら2人はゆったりと手を振った。幹大は今でも一樹の慌てぶりに首をかしげていたが、隆広はお構いなしといった様子でアイスの最後の一口を頬張った。残った木の棒は保冷ボックスの横に置いてある袋に突っ込む。そして白い空を仰ぐ。

「みんな、大変だね」

一樹は力任せに自転車をこぐ。確かに幹大の言ったことはあながち間違いいではない。今日隣町に行っているメンバーに澄澗がいる。そして、そのほかに、航大はいいとして、大生がいる。それだけで、いやしかしそれ以外なのかもしれないけれど、一樹は心の奥深いところを鋭い物で突かれたような感覚に襲われた。考えすぎだ、そう自分に言い聞かせた。けれどもしかし、覆い被せても隙間から溢れ出し、心の中をじわじわと支配していく水のようなこの想いは、そう簡単に防げそうもない。

一樹は自転車をこぐ。目指す場所、すなわち自分の父親の元へ。

時は少し巻き戻り、そして場所は海岸にそってふわりと飛び、山を越えて隣町へと移動する。果那ノ海とは雰囲気もがらりと変わり、巨大なデパートや様々な飲食店などの店が連なり、澄滞たちからして見ればかなりの大都会である。果那ノ海から出発してからしばらくは山々しか見えなかった窓の景色も、海をまたぐ橋を渡ると次第に建物が現れ始める。この場所に来たことがなかった海つ子3人はひたすらに窓の外を眺めていた。

車は大型デパートの駐車場へと辿り着いた。立体駐車場の2階に停める。上の階もあるためライトはあるが薄暗い駐車場には、ほかに多くの車が停まっている。大概が一般家庭がもつ車であるためか、彼らに乗ってきた汚れの染みついた車がやけに目立っているようにも見えた。

「よし、着いたぞ」

「そういえば、みんなはここ来るの初めてだっけ？」

「う、うん。みはっちゃんなら来たことあるけどね」

それぞれ車から降りてデパートの入り口を目指す。駐車場から専用口からエスカレーターに乗っていく。このエスカレーターでさえ3人は目を丸く輝かせながら見ていた。そして目的のフロアに着いて一行は店内をゆつくりと進む。その間も3人は異世界にでも来たかのようにあたりを見まわしながら大生たちの後ろをついて行く。

「わ、見て見てこうちゃん！おつきいぬいぐるみだよ」

「おお。こつちには文房具が沢山あるぜ……」

「……かわいいキーホルダー、いっぱい」

「まったく、賑やかだな」

3人ともあらゆる方向に興味を示しては視線を向けて、という繰り返しの様を見て大生の父は、まるで自分の子供を初めてここに連れて

きたような気持ちだった。それ故に穏やかに笑った横で大生も同じく微笑む。そうして歩いた先に目指していた店が見えてきた。着物などの布を扱っているお店だ。

「いらっしやいませ」

30代前半の女性店員が小さくも透き通った声であいさつをする。大生の父がゆっくりと店員に歩み寄って軽く会釈する。

「どうもすみません。昨日お電話させていただきました藍住と申します」

「ああ、どうもお待ちしておりました」

店員は藍住と聞くやいなや、ぱつと笑ってすぐに店のカウンターの奥へと入っていく。大生の父は自身の鞆から黒の長財布を取り出す。その間大生以外は自分らの興味に惹かれるままに店内を散策していた。

やがて店員が奥から姿を現す。彼女は紙袋が4つほど入ったカートを押している。さらに店員の腕にもそれは左右にひとつずつ掛かっている。カウンター手前にそれを止めて大生の父と改めて向き直る。大生の父は財布のポケットにしまっておいた紙を出して広げる。そこには必要なものを書き留めてあるのだ。店員が紙袋から商品を取り出してちゃんとあるかの確認を行っていく。それが終わって会計を済ませる。大生は率先して荷物のうち2つを自身の腕に掛ける。

「おーい、終わったぞ」

カートを押して澄澗たちの元に行く。各々で色とりどりの布を眺めていた。

「これからこの荷物置いてくるけど、みんなはどうする？まだ見たいか？」

「いいんですか!?!」

「今日の目的は果たしたからな。まだ時間に余裕はあるし、みんなが希望するなら」

大生の父は3人の顔を順番に見るが、表情からして全員一致のようだ。一斉に首を縦に振ると大生の父はにっこりと笑う。

「じゃあ今が3時ぐらいだから、40分くらいになったらここに帰ってこようか。2人でこれ車に戻してきたらここらへんにいるから」  
「わかりました!」

3人は店の方へ、大生と父親はエレベーターの方に向かっていった。

「ほら見て、さっちゃん」

「うん。綺麗だね」

澄濤と沙月はアクセサリーショップに来ていた。照明に照らされて輝く首飾りやイヤリングがテーブルや木製の棚に並べられている。また一角にはその人の誕生日によって決められた種類のを持つと、特殊な加護を受けるという誕生日石というものもある。

果那ノ海にもこういったアクセサリー類は売っている。貝殻等を使ったものだが、やはり陸にはかなわないところがある。それらを見ている彼女らは、まさしく乙女そのものだ。

「ねえ、そういえばあつちにかわいいグッズがたくさんあるの見たんだけど、澄濤も行く?」

「んー、私はもう少しここ見てたいな」

「うん、わかった。ここ出て右に真っ直ぐ行つたところにあるから」

そう言い残して沙月はとことと目的地向かって歩き出す。澄濤は綺麗に並べられたアクセサリーに視線を落とす。輝く石がちりばめられたブレスレットを手にとって眺めてみる。本体も艶があつて自身の顔が映る。薄茶色のブレスレットを付けた自分はどういった服を着れば似合うか、なんてことも想像したりしている。店内を歩いては目にとまったものを眺めて、手にとって、想像しながら楽しんでいる。

「わあ……」

そして店の奥の方へ進んだとき、澄濤は瞳を今日一番に輝かせた。それはガラスのショーウィンドウの中で飾られている、海のような青色の貝殻のペンダントだった。それは単調に全てが青ではなく、光の加減によつてそれは水色にも、さらにより深い青になったり。様々な

顔を持つそのペンダントに、澄滯は見とれていた。さらに、その横にもペンダントがあった。こちらは艶のある銀色の丸いフレームの中に、澄み切った空の下に広がる海のような水色の石がはめ込まれている。その透明な石は光があたりと、中にある極小の粒状のものが反射してきらきらと水色をより美しく際立たせる。この2つに、澄滯は魅了した。

「デトリタスみたいだな」

「ひゃう!？」

澄滯のすぐ横から聞こえてきた声に驚き、喉から裏返った短い悲鳴が出てきた。心臓が一瞬にして動きが過剰になっていているのがわかる。左横を見ると大生が腕を組みながら立っていた。

「な、なんだ。大生くんかあ」

「随分見とれてたな、これに」

「う、うん、とっても綺麗だったから。うん、確かにデトリタスみたい」  
澄滯は自分を落着かせようと、自分の髪を指で梳かしながらあえてペンダントを見る。

デトリタスとは、プランクトンの死骸などが分解されてできた微細な粒子のことである。海の中で写真を撮ったとき、それが雪のように白い粒に見えたことから”マリンスノー”とも呼ばれる。

「なあ、吉野川さんはデトリタス、見たことある？」

「うん。そんなしよっちゅうじゃないけどね。でも見られたらラツキーだな、っていつも思っちゃう」

「へえ、そうなんだ」

澄滯はちらちらと大生の様子を伺っていたが、大生はペンダントをずっと見ていた。澄滯も直に目は再びペンダントの方に固定してしまった。そのまま2人して黙りこくってしまった。その輝きは誰であろうと魅了させる、ある意味一種の魔力を隠し持っているのかもしれない。

「……プレゼントしたら、喜んでくれる、かな」

「ん、何か言った？」

「え？あ、いや、なんでもない!」

ぼそりと澄漚の口から漏れた言葉は大生の耳は拾えなかった。澄漚の方を向いて聞き返すが、澄漚は慌てて首を振った。なんだか自分の顔が熱くなっている、手をぱたぱたと動かしてほぼ意味がなさそうだが冷まそうと試みた。そうしたときに、大生の頭上、店の壁の角の部分に掛かった時計が見えた。間もなく約束の3時40分になろうとしていた。

「あ、そろそろ時間だね。戻ろう」

「そうだね。というか、吉野川さんを見つけに来たんだった。2人はもう戻ってきてたから」

「え、そうなの!？」

2人は少しだけ足早に店を出た。その時、ほんの少しだけ澄漚は先程のペンダントの方を振り返った。

無事全員は合流してデパートを後にする。エンジンが唸り、サイドブレーキを倒して車は動き出す。立体駐車場を出て大通りを通って橋に向かう。

「そういえば、今日って巴日なんだよな」

「ああ、そうだったそうだった。忘れてたわ」

「いや、忘れないでよね」

帰路の途中で大生が後部座席の方を向いて話しかける。それで遙か奥に眠っていた記憶が航大の脳から顔を出した。右手を握って左の掌にぼんと置いた。その様子をすぐ横で沙月はジト目で呆れた風に睨み付ける。

巴日。これは地上ではなく海中で見られる現象である。ある特定の海流によってぬくみ雪が舞い上がり、流れに乗って一定の場所が集まり、太陽の光を屈折させる。それによってそれは太陽の虚像となり、それぞれの光が重なってひとつの曲線の上に、まるで太陽が3つあるように見せる。

「巴日って、やっぱり綺麗なのか」

「そりゃあな。めったに見られないし、何だか見とれちゃうっていうか」

「ね、大生君って割と果那ノ海に興味あったりする？」

「うん、まあね」

果那ノ海でしか見られない巴日。これはおおよそのデータはとれているため、予報は出る。しかし陸の人間が興味を示すとすれば、海洋学等に詳しい人たちが多い。勿論ダイバーなども含まれるが、大生のように海洋学者でもなければダイバーでもない、ある意味一般人がこういったことに興味を持っているのはあまり多くはない。

「やっぱりね、こう身近に自分とは違った世界があると気になるんだよね。みんなみたいに俺となら変わらないのに、俺には住めない世界に住んでいる。憧れ、なのかな」

大生は語りながら窓から海を眺める。徐々に赤くなっている海は、どこまでも続いていて、果ては見えてこない。そして大生の果那ノ海に対する思いを聞いて、澄滯たちは皆微笑む。

「憧れ、か」

澄滯は大生の言葉を繰り返す。橋を渡る前から開けていた窓から同じく海を見つめる。入ってくる風は思いのほか柔らかく、澄滯の髪を撫でる。その柔らかさも、いつかは……。

大生が憧れる海の世界。陸では決して味わえない景色。今、それを知ってしまった澄滯は、なんとも言えないもどかしさ、むず痒さを感じた。



### 第三十二話 巴日

澄滯たち一行は漁協に到着した。車の後ろに積んだ物を皆で2階に運ぶ。他の人たちにお疲れ様と声をかけられ、澄滯たちが持っている分は職員がすすんで持つてくれた。

「今日はありがとう。お疲れ様」

「いえいえ、こちらこそありがとうございました」

大生の父は感謝の言葉に対して澄滯たちも笑顔でお辞儀をした。

「大生、今日は夕飯までには帰れるって母さんに伝えといてくれ」  
「了解」

大生が腕を上げて立ち去る。それに続いて澄滯たちも漁協から階段を降りて出て行く。徐々に暮れていく空の下をゆつくりと歩いていく。彼らから伸びる影は混ざり合って重なる。

「そーいや海遥は練習してるんだよな」

「うん。今もやってるか見ていこうよ」

腕を頭の後ろで組みながら航大が皆の方を向く。沙月の提案を全員一致で首を縦に振った。一行は練習場所の方へ路線変更した。

道が開けて海が見えてくる。左右に伸びた沿岸の右の方にその姿はあった。そして遠くからでもわかるほどの旗の動き。なびいて揺れながら一定の動きを繰り返す旗は、それは以前見たときよりも強く、たくましく見えた。

「おーい！」

航大が声を張り上げてこちらに注目させる。何回か呼びかけてやっと皆が振り向く。

「うっす、航大」

「おつかれさん」

幹大と隆広が同時に声をかけてきた。隆広は地面に寝そべってこちらを見ていた。澄滯たちが全員近くに集まったところで海遥は旗を下ろした。地面に先端が当たって少し鈍い音が響いた。

「海遥も練習お疲れ様」

「おう」

沙月が海遥にも声をかける。海遥も返事はするが短かった。それもそのはず、旗振りの練習で息は切れて肩が上下に動いている。顔全体から汗が噴き出していて、頬を伝って喉へ落ちていく。

「さつき遠くから見てたよ。すつごく上手くなってたよ」

「だな」

澄濤と航大が目を輝かせて先程の海遥の様子を思い出していた。初めてばかりのと今さつきのとではかなり技術の差が出ていた。

「今日で結構上達したね。あとは本番までに仕上げていけば問題ないよ」

若手の組合の人はニツと笑って海遥の評価をした。海遥も流石に少し胸を張って上機嫌になっていた。

「これは俺が片付けておくから、今日は帰りな」

「ありがとうございます」

旗を組合の人に渡し、一礼する。その後幹大たちにも手を振って風で揺らぐ海へと潜っていく。

「腕が重いな。こりや明日筋肉痛だわ」

海の中をすいすいと進んでいく。海遥は疲れですっかり重くなっってしまった両腕を振る。

「ちやんとその日のうちにマッサージとかしとかないとだめだよ？」

「ああ、わかってるよ」

澄濤の方をちらりと見て頷く。

そして一行は果那ノ海に到着した。見慣れた広場に設置されている時計は間もなく午後4時半になろうとしていた。

「さて、あとはあいつを待つだけだな」

「そうだな」

航大が短くため息をつくあたりを見回した。海遥も力を抜くようにしてベンチに腰を掛ける。

「あいつさ、昔行ったあの場所を忘れたなんて言っさ、びっくりしたわ」

「なんかひろちゃんらしいっていうか……」

「でも実は、ひとりで行くのは寂しかったりして」

沙月もベンチに座り、ふふっと笑った。航大は「かもな」と言っ  
てサッカーボールを蹴るイメージの動きをした。

そうして4人でたわいない会話を10分ほどしていると、洋斗が歩  
いてやってきた。

「よう」

「おう」

航大が手を上げると洋斗も同じ動作をする。ここで全員集合した  
わけだが、さらに盛り上がるわけではなかった。むしろ、ほんの少し  
ではあるが、空気に溶け込んだ重みとその場を包んだような気まずさ  
があった。

あの一件、宴会の後から洋斗の顔つきが今のところ良くないのだ。  
普段から無口で寝不足みたいな目つきをしているが、この場合では不  
機嫌よりも浮かない顔といった方がいだろう。1回だけおふねひ  
き当日の流れやはつぴのサイズを伝えただけで、ろくに放課後は参加  
せずに帰宅してしまっている。白風中の皆にはうまく理由を付けて  
ごまかしているあるが、海遥たちも気が気でない。

しかし今日の巴日を見ようという誘いに応じてくれたのはやはり  
素直に嬉しかった。と同時にほっとしたところもあった。

「んじゃ行くか」

海遥は両手を膝に置いて勢いよく立ち上がる。彼らの足は目指す  
場所に向けて歩き出す。

「そういえば、いつだっけか。巴日見たの」

歩き出してすぐに海遥が皆の方を向いて問いかける。

「んーっと、私たちが小学生の低学年くらい、かな」

「そのくらいかもね。私たちがまだ小さかったし」

「あの時はさ、確か洋斗は俺にはやくはやくって腕引つ張られて泣い  
てたよな」

「はあ？」

航大が歯を出してニヤニヤと笑い出す。不意に幼少期のことを言

われて洋斗は目を細めて航大を睨む。

「いや、お前があまりにも足が遅いから俺が手つかんで引つ張ったんだよ。そしたら痛い痛いつて泣き出してさ。余計に遅くなっちゃまってさ」

「ああ、あつたあつた」

洋斗の睨みなどお構いなしに航大はくくつと笑う。澄濤も思い出したように頷く。

「は、いや、泣いてねえし」

「いやいや、泣いてたつて。俺たちが覚えてたんだし」

ムキになって首を振つて訴える洋斗だったが、航大は手を振つてそれを否定する。いつまでもへらへら笑っている航大に耐えきれなくなった洋斗は、航大を足を思いつき蹴った。

「つてー！やめろつて。すまんすまん、からかいすぎたよ」

「そういうえば、あの時も洋斗に蹴られてたよな。いい加減に痛いからやめろつて、今みたいに飛び跳ねてた」

足に痛みが走つて軽く飛び上がる航大を見ながら海遥は口の片隅をつり上げて言った。澄濤と沙月は2人揃つてくすくす笑い出す。そして洋斗も眉間に寄せた皺を緩めて、半分呆れたようにも見えたが、ふつと少し笑つた。

そうしているうちに彼らは石階段前に辿り着いた。巨大な岸壁に沿つて造られているそれは海遥の家、そして渦波神社へと続く階段である。

「んで、その後はどうしたんだっけか」

「俺が航大と洋斗を離れたんだったかな」

航大は階段を上りながら首をかしげた。海遥が前方を向いたまま昔の話を思い出す。それを言うとな航大もすぐに思い出したようで、そうだそうだと右手で左手をぽんと叩いた。

「海遥が起こる洋斗を落ち着かせようとしてて、んで、無理矢理引っぱっちゃ痛いでしょつて海花に怒られて……」

航大が言いかけた途端、ひゅつと口を噤んでおどおどするように海遥の顔を伺う。その様子を見てすぐに海遥は航大が何を考えている

のかがわかった。三白眼を細め、右手で航大の肩を軽く殴る。

「なーに今更気にしてんだよ。それもやめろ」

「いや、すまん」

「まあ、俺も前までウジウジ引きずってたから言えた口じゃないけどさ。でも今は気にしねえよ」

海遥は視線を斜め上に向ける。薄い雲が水色から橙色に染まりつつある。そして階段の先が開けていることから目的地まではもうすぐだと気づく。

「うなされる夢も見なくなった。変に思い込むこともなくなった。2年かかってやっとだ。改めてだけど、みんなのおかげだよ」

階段を上りきり、すぐ横に見える渦波神社の前を通り過ぎていく。海遥が自然に出す微笑に皆も笑い返す。

「まあ、あれだよ。海花は今でも俺の、俺らの記憶の中で生き続けている。変わることはない、たったひとりの姉なんだ」

頬を指でかきながら海遥は空に向かって言葉を放つ。その姿を見て澄濤はゆつくりと頷く。

「着いた」

「すげー久しぶりだ」

木々を少しかき分けて坂を登る。そして視界が一気に開ける。その先は果那ノ海の町並みを見渡せる場所。昔、見つけた洞窟を潜った先に辿り着いた場所。結果的に渦波神社の近くだったというオチ付きの探検だったが、そこは彼らにとって大切な思い出の場所となった。海遥はたまに訪れては趣味のスケッチをしている。

「ああ、ここか」

「ふふ、やっと思い出した?」

「まあな」

洋斗は力が抜けるような声を出しながらあたりをぐるっと見まわす。手で口を隠しながら笑う澄濤に対する返答も腑抜けたものだった。

「さてと、あとは待つだけだ」

航大は近くに横たわっている太木に腰を掛ける。幹がかなり長い

ので5人横に並んで座る。木なので当然感触は堅いが我慢できないわけではない。

木に腰掛けた一行は広がる景色に見とれて自然と話さなくなった。緩やかに肌を撫でいく流れに心地よさを感じ、じわつと照らす太陽の光にうつとりとする。たまに訪れる海遥も普段とは違う雰囲気にし驚きはしたが、やはり心地よさが勝った。久しく訪れていなかった洋斗には懐かしさが込み上げてきた。他の3人も海遥ほどではないが訪れていたこの場所で、透明の布で包まれているような心地よさにゆつくりと目を閉じた。

はたしてどのくらい経っただろうか。数分か、はたまた1分にも満たなかったかもしれない。ふつと肌から感じる水の流れの変化。澄滯の三つ編みがふわりと流れによって揺れる。

「あつ」

その澄滯の短い眩きで皆の視線が斜め上に集まる。地面に溜ったぬくみ雪がふわりと舞い上がり、変わった水流に身を任せて流れていく。きらきらと光を反射して輝き、それらがすり合わさってパキパキとした音も聞こえてきた。それらは果那ノ海の町を見下ろすように進み、久里ノ上から離れた位置にある山々のあたりでさらに渦を巻くようにして集まっていく。輝きがどんどん増していき、ついには太陽のようにまばゆい光をまとった。それが2つ生成され、太陽よりしたの位置にある。満天の夜空に浮かぶ星々を線で結んで様々な動物や伝説の生き物に見立てるように、太陽とその2つの光の虚像を結び、丁度二等辺三角形になる。巴日が始まったのだ。

「わああ……」

「綺麗」

澄滯の感嘆の声と沙月の小さな声が重なる。航大はその光のようにはあつと笑顔になり、海遥は巴日を見守るように微笑んだ。洋斗は相変わらずの無表情だったが、しかし彼の目は一段と輝いていた。5人は巴日に魅了されている。空が青から赤へと変わるその狭間の空間。まどろみのような空に一際輝く3つの輝き。その光は空の表情さえも変える。空中に舞うぬくみ雪も、普段気にもとめないぬくみ雪

でさえも、宝石のような美しいものへと変えてしまう。

「海花も、見てるかな」

「見てるさ。絶対に」

「そうだね。みんなずるいって言ってるさだもん」

昔見た思い出が自然と開かれる。6人並んで見た巴日。あのときは皆同じように目を輝かせ、笑顔ではしゃいでいた。普段見ることのない自然現象に興奮して叫んでいた。

しかし、今この瞬間見ている彼らは、あの頃のような無邪気なままではない。その輝きに見とれ、魅させられ、そして様々な感情が混み上がってきた。それは決して全てがプラスのものではなかった。あの頃とは違う、葛藤する思いを、想いを叫びたくなるほど。

「……このままずっと、見ていたいな」

ゆつくりと放たれた言葉の主は洋斗だった。4人が目線を洋斗に向けた。

「このままずっと、みんなとずっと……。同じものを見て、同じように笑って、同じようにずっと友達でいたい」

洋斗が呟く言葉は、想像もしないものばかりだった。彼がそう思っていたことに驚くとともに、その思いの美しさにも心が揺さぶられた。

「そう、だよな。このままずっと、変わりたくねえよな」

短く息をついて、海遥は再び目線を巴日に向けた。最初に向けていた目とは違う、この世界を憂うような細い目をしていった。

「みんな楽しんで、笑い合える毎日をずっと過ごしていきたい。冬眠の危機なんてなくて、お祭りも楽しくやってさ。とにかくみんなと一緒に、変わらずに」

「……私も、今のままがいいって。そう思うけどさ」

巴日を見据える洋斗の言葉に、沙月は小さく頷きながらも視線を自分の膝に落とす。

「洋斗、でもさ」

航大が心配そうな顔で洋斗の肩に手を置く。洋斗は航大の方に顔を向けることなく、今度は巴日でまばゆい光を浴びているにもかかわ

らず少し顔に陰りが生まれた。

「でも、そうだと何回も思ってるけど、変わりたいことがある。いや、変わってほしいのかもしれない」

「……………」

一転、俯きがちになってぼそぼそと話す洋斗に再び驚きつつ、彼の言ってる意味がわからずに皆は黙ってしまった。

「俺は今ままでまわりに身を任せて過ごしてきた。どんなことがしたい、何が食べたい、どんな職業につきたいか……。みんなに合わせるか、それか思ってもないことを並べて逃げていた。だから、別にしたくもない勉強をさせられて、あわよくば父親と同じような弁護士を目指すことになってる。俺が何も言わないから」

ふと見えた自嘲する洋斗は、いつもの内気な洋斗どころじゃない。精神的に追い詰められているような、そんな風に見えた。

「けど、俺には大して目指すことも、なりたい職業もなかった。それに、親には逆らえなかった。怖かったし」

「…………それは、お前が悪いわけじゃ」

海遥が洋斗の顔を覗くようにして声を少し強くして言った。3人も同じ意見だった。心配する瞳を洋斗に注いでいるが、彼は首をゆっくり振った。

「悪いもクソもない。俺が何も言えないから。俺はこれがしたいっていう真っ直ぐな思いがなかったから。だから、しょうがない。……だけど、だからこそ変わりたいと思った。変わってほしいと思った」

自身の右手を強く握りしめ、口調は怒りと苦しみが混ざったような、変に力んだ様子だった。

「こんな、どうしようもない自分を変えたいと思った。他人に任せて動くしかない俺じゃなくて、例えば海遥みたいにみんなをこうやってまとめられるような、そんな人間になりたいと思った」

「洋斗……………」

握った拳をぐっと額にあてる。自分の名前が拳がったことに驚きを隠せない海遥は、ただただ洋斗の次の言葉を待つほかなかった。

「そして小さい頃に見たような、それこそみんなの親のように、自然に



笑えて楽しい雰囲気な家族に、俺の両親はそう変わってほしい」

洋斗の切実な思いに皆はかける言葉がみつからなかった。洋斗は自分が自分自身を主張しなかったから、だから親は彼らの思うままに洋斗に勉強などをやらせているのではないか。それは同時に、そういうことをしている家族を、自分の人生を決めてくるような家族を、どうにか一般的で平凡な、しかしだからこそ楽しい家族になってほしいのだ。

そんな、洋斗の思いに触れ、何をしてやれるのだろうかと自問自答する。かけがえのない友達に何を言ってもやればいいのか。何を言えば彼の荷は少しでも軽くなるのだろうか。いや、それは逆効果なのかもしれない。

「変わりたいくないけど、変わりたい。そんなもん、誰にでもあるさ」

ぽつりと発した言葉が少しの静寂を破った。海遥である。

「俺だって、変わらない生活に戻せるのなら、家族みんないたあのままがいい。あのままずっと、変わらずにいたい、そう何回も思った。それに、俺だって海花に引っぱられてるだけじゃなくて、もつと自分からみんなをまとめたい、そう思ったりもしてた」

ふっと目を細めて巴目を眺める。光は心なしか弱まっているが、まだそれは輝かしいほどだ。潮の流れで海遥の髪も少しだけなびいた。「でも、もう変わっちゃった。海花も、母さんもない。あの頃とはかけ離れた、全く別のものになった、そう思った。みんな知ってるとおり、俺はそれになんとか慣れていこうとしてもがいて、強がっていた。変に大人ぶってた。そうして、泣きべそかいてうずくまっていた自分を”変えようとしていた”。でも、俺はなんにも変わってなかった」

両隣を海遥は見て、微笑する。航大と洋斗、澄滯と沙月がいる。彼らにもきつと、小さい頃から今の海遥を比べても、きつと何も変わっていないと見えるだろう。

「俺は俺なんだ。結局は、そう。そして、家族も。海花も母さんがいなくなつた家族には父さんがいる。父さんだって、普段通りだ。いつも通り、何も変わらない。そのままなんだ。俺は間違えていた。変わらない生活を、変わってしまったと錯覚していた。だから、あのとき気

づいたんだ。

でも、洋斗。お前の家族は……まあ、今でもずっといる。父親も母親も。そしてお前は、今のお前には変わりたいという思いがしつかりとあるんだろ？ぶつちやけ、俺は絶対的な存在でもなんでもないけれど、お前の人生は全て親が決めていいだなんて、決していいものとは思えない。お前はそれを変えたいんだろ？なら、その”思い”を両親にぶつけてもいいんじゃないのかな。俺の”変わろうという思い”は、間違っていた。でも、少なくとも俺は、お前の変わろうという思いは間違っていないと思う」

「海遥……」

洋斗を射貫くように真っ直ぐと向けられた海遥の目。その目には、彼だからこそ作り出せる輝きを放っていた。そしてその光は、ほかの3人にも強く行き渡っていた。

「お前の”思い”は届くはずだ。全て通らないとしても、少なくともきつとお前の気持ちは届くはずだ。お前の”思い”が折れない限り」海遥が優しく洋斗の肩をつかむ。その手からしつかりと伝わる温度、そして気持ち。それが洋斗の全身に広がっていく。その心地よさは、巴日にも負けないほどに。

「……ありがとう、海遥。やっぱお前はすごいよ」

「何言ってるんだよ。俺はすごくなんかかない。俺は弱いんだよ。でも、みんながいるから、きつと大丈夫だって思える。これも、あのととき気づかされた」

陰りも消えて、再び現れた洋斗の微笑に皆は安堵する。海遥のみんなを”想う”気持ちも洋斗にも通じたのだ。

「”おもい”はいつか伝えようじゃダメなんだ。その”おもい”は伝えられるときに伝えなきゃ、後悔するかもしれないんだ。だから、その”おもい”を伝える相手がいるうちに。その”おもい”が消えて無くなってしまう前に。その”おもい”が、カケラでも残っているうちに」

海遥が巴日を見ながら、ふとそう呟いた。それは洋斗だけではなく、他の3人にも、いや海遥自身にも言い聞かせるものだったのだろ

う。それは巴日の光のように、青空を輝かせる太陽の光のように、それぞれ心の奥に大切にしまっておいた”おもい”を照らし、今まで以上に震え、膨張し、ひとりで急上昇した。それは強制的ではない。しかし使命感でもない。無意識に、その”おもい”自身がそう考えて動き出したのだろうか。海遥の言葉に共鳴し、絡み合い、じわりと浸透していく。それはもう、すぐそこまできている。

洋斗は、航大は、澄滯は、沙月は、今までにないつつかえた感じを覚えた。もう、次は口に出す、そうなのだ。と心の内で、そう呟いた。

今回、巴日が観測されたのが7月18日。おふねひきまで残された期間は、あと12日。

### 第三十三話 叫ぶ”おもい”

おふねひきの準備も終盤を迎えていた。購入した布を使って当日参加する人たちののはつぴ等を主婦たちの力を借りて制作している。男たちは倉庫で眠っていた船たちを洗浄して新たに塗装を施している。船がみるみる新品のような状態になっていくのを見ているだけで、特に一樹たち男子中学生からしたら底知れぬ興奮が湧き出ている。

「おおおお」

「こうして見ると、かっけえよな」

吹き出てきた汗を拭いながら幹大と一樹がクレーンでつり上げられている修理済みの船を見上げる。

7月22日。学校はもう夏休みへと移行した。それによって一樹たちも日中から作業に参加できている。それによって作業は格段に進んでいった。その結果予定よりも早くなり、おふねひきの3日前には全ての作業が終了する。大人たちも自分たちの作業量が軽くなつたおかげで、より効率が上がっているのだ。今もまたひとつ船を巨大な作業台の上に乗せている。

「みなさーん、休憩しましょうー！」

声が出た方を一樹たちが見ると、そこには白い割烹着を着た澄濤たちがトレイを持って立っている。そのトレイには海苔が巻かれた白米のおにぎりがたんまりと乗せられている。

「いよっしやあ、飯飯イ」

真っ先に雑巾を放り出して飛んできたのは隆広だった。時刻は15時を過ぎていたのでちょうど昼飯のエネルギーが切れてきたのだろう。

「あ、隆広くん。手洗いしてからだよ」

「う……、はい」

飛びかかる勢いで澄濤の前に来た隆広だったが、澄濤にトレイをひよいと隠されてジト目で注意されてしまった。さつきまでの勢いはどこへ行ったのか、もう既に人がたかっている水飲み場へと歩いて

行く。

「じゃあ、いただきます」

まず澄滯のほうの第一客は大生の父だった。澄滯は「どうぞ」と笑顔でトレイを前に出す。大生の父は積まれたおにぎりの山の頂上をひとつつかむ。一口ほおぼると彼の顔はすぐに緩んだ。

「うん、おいしい。昆布だね」

「はいー」

おいしいという感想を受けてより一層笑顔が溢れ出す。一樹も澄滯のトレイからもらい、そして続々と人が集まっておにぎりをもらっていく。澄滯だけではなく沙月と里実もトレイにおにぎりを積んで持っている。皆それぞれからおにぎりをもらっておいしそうに食べている。そんな姿を見られるだけで彼女らも満足だった。

「あれ、みはっちゃんたちは？」

澄滯はある程度おにぎりを配ると、あたりをきよろきよろと見まわし始めた。なにげに澄滯はまわりをよく見ている、知っている範囲ではあるが誰が来たかなどを数えていた。

「あー、まだ作業してんのかも。おーい！」

両手におにぎりを持って同時に食らいついていた隆広が、思い立ったように作業する船のほうに声をかける。すると作業台の陰から海遥と大生と大人数人が顔を出す。

「わりい。もう少しで終わりそうだったから」

海遥は腕で額の汗を拭いながら水飲み場へ向かう。大生たちもそれぞれ用具をおいて手を洗い始める。

「うめえよ」

「だね。力貰ったよ」

海遥と大生がおにぎりをほおぼるのを見て澄滯はうんうんと喜びながら頷いている。

そうして澄滯たちや主婦のみんなで握ったおにぎりはあつという間になくなった。残り一個になった途端に一樹と幹大と隆広のジャンケン大会が開催された。その一個に何か世界を救う力でもあるのかとツツコみを入れてしまいそうになるほど、彼は全力だった。結果

その勝者は幹大だった。大空に掲げるおにぎりは、彼の力を象徴するに値する物のごとく輝いて……いるわけではない。その横で悔しがりながら地面を叩いている2人を見てみんなが笑っていた。これもある意味エンターテインメント性があつて疲れもいくらかとれたよ  
うだ。

いい腹ごしらえにもなり、肩を回しながらそれぞれの作業に戻っていく。その後ろ姿を見ながら澄滯は手を洗っていた。

「……あれ？」

洗い終わって蛇口をひねって水を止めた時だった。体がふわりと浮かんだような感覚に襲われる。焦点が合わなくなってしまったように視界がぼやける。咄嗟に流しのところをつかんだが、後ろに重心がいつてしまつて倒れそうになった。

そこに彼女の背中に両手をおいて支えてくれた人がいた。澄滯が振り向くと、心配そうにする大生の姿があつた。

「大丈夫か？」

「あ、大生くん……ありがとう」

大生の力を借りつつ澄滯はバランスを取り戻して立つ。大丈夫アピールをしようとするが、変な作り笑いをするだけですぐに陰りが生じてしまった。

「……冬眠の兆候、らしいんだ。みはっちゃんとかこうちゃんとか、普通にさつきおにぎり食べてたけど、ほんとは今何も食べちゃいけないんだ。絶食してエナが厚くなって、そうなるといつも以上にエナが乾くのが早くなってるの」

「そうなんだ」

澄滯は大丈夫だとは言つたが、大生は一応と言つて澄滯の肩に軽く手を添えて沙月たちがいる方に歩いて行く。

「それにね、最近眠気も増してきてね、大変なんだよ。試験と被らなくてよかつたな、つて思うんだ。でもやっぱりエナの管理は気をつけなくちゃいけないのにな」

「しようがないさ」

大生は短く答えて、ただただ前を見つめる。その顔を伺うようにし

て見ていた澄滯だったが、再び顔を伏せた。

「ごめんな。その辛さ、わかってやれなくて」

「え?」

そんなときに澄滯にかけられた言葉に驚き、澄滯はぼつと顔を上げた。いつもの微笑めいた顔ではなく、目を細めて口を少しぎゅつと真一文字に結び、明らかに申し訳なさそうにしている。そんな大生の顔を見たのは初めてで、澄滯も驚きで焦りだす。

「え、え。だ、大丈夫だよ! しょうがないもん。大生くんは地上で生まれたんだし。私は果那ノ海で生まれたんだから、しょうがないよ。うん」

慌てて腕を振ってみるが、澄滯はすぐにやめてしまった。大生はこんな冗談も演技もしない。彼の本当の言葉だ。そして先日大生が語ったこと、海の世界への憧れ。そういつたことから、彼は余計に澄滯たちの身で起きていることに敏感なのかもしれない、そう澄滯は思った。

波がゆつくりと体に打ちよせ、分散してまた波がやってくる。そんな慣れた光景をただただ澄滯は顔を海面に向けて海水に浸かっている。エナが海水を含んでいるのがよくわかる。自分自身でも体が楽になる感覚だ。

「もう、ちゃんと体調管理しないとダメじゃん。エナが厚くなってるからいつも以上に気をつけないと」

「うう、すみません」

岩場に腰を掛けている澄滯に沙月は軽く頭にチョップを入れる。そのあとすぐに澄滯の頭を優しく撫でる。

「……どう頑張っても、体は冬眠しようとしてるんだよね」

「……」

沙月の掌が澄滯の髪をなぞる。藍色の髪は手入れがされているので、艶やかで綺麗だった。その髪とは対照的に澄滯は影が差したように暗かった。

沙月の言ったとおりで、今の彼らの体は確実に冬眠を向かえる”準

備期間”に入っている。大宴会のあとから海村全員は一切食事をしないというルールになつている。しかし、5人はそれを無視して給食を食べたり、さっきのようにおにぎりを食べたりしている。

そういった抵抗もむなしく、澄滯のように兆候がでている。それは他の4人も同じで、今も眠気をなんとか抑えつつ作業を続けているのだ。

ウロコ様からの話を聞いて、最初彼らは驚きよりもむしろ絶望していた。唐突に冬眠を言い渡されてもどうしていいかなんてわからないう。湧き出てくるのは、ただただ混乱だ。しかし、彼らはなんとかして眠るまで地上に仲間と一緒にいたいという道を選んだ。そして地上でも同じ問題について考えていた。そのひとつの方法として、汐帆が”もうひとりのおじよしさま”となつて船に乗り、昔のおふねひきを再現することだった。そうすることによつて、皆の”想い”をどうにかして海神様に届ける。そうすれば、地球の寒冷化も冬眠もなくなるのでは、そういう賭けをした。

そう、彼らの”おもい”は”冬眠の日まで地上のみんなと過ごしたい”から”冬眠などせず、いつも通りの日常をみんなと過ごしたい”に変わつていったのだ。

いつ目覚めるかもわからないこの現象に保証などない。冬眠から抜け出していざ出てみた地上に、眠る前まで見ていた光景が跡形もなく消えていた、そんなことを考えただけでどれだけ恐ろしいことか。

でも、彼らは立ち向かう。体が冬眠を受け入れているとしても、それでも立ち向かう。運命など変えてやろうと、半ばけんか腰であつても、堂々と正面から立ち向かうのだ。

「澄滯」

「……なに？」

澄滯は振り向いて沙月の顔を覗くようにして見る。先程の陰りは一旦引つ込んだようで、普段見せるような顔だった。

「……ううん、なんでもない」

沙月もいつも通りの笑い方で首を横に振つた。そして再び澄滯の頭を優しく、ゆつくり撫でる。



「ここで言ってもしょうがないと思ったからだ。「澄澤は”おもい”を伝えたい誰かはいろの？」なんて、気軽に言えるものではないのだ。そう言おうとしたすぐ前の自分が嫌になった。そして、その代わりに沙月は暮れる空を見ながらぼつりと云った。

「洋斗は、きつと大丈夫だよね」

「うん、ひろちゃんだもん。大丈夫だよ」

澄澤も視線を前に戻す。夕日に染められた赤い海を見て、小さく頷いた。

今、この作業場に洋斗の姿はない。彼は果那ノ海にいる。ただし、決して作業をしたくないとか、彼が勝手な言い訳をしてこの場に来ていないわけではない。彼は、きつと今も、彼の両親に彼自身の”おもい”をぶつけているのだ。

みんなが作業をして、休憩におにぎりを食べていた時より1時間前。

場所は洋斗の家の一階。いつも食事をしているリビングで洋斗は椅子に座っている。その向かいの席に両親が座って洋斗をただ見つめる。その目は自分らの息子を愛するようなものではなく、それはまるで家に悪さをした知らない子どもを見るような、一種の敵視。

「で、どうしたの。話があるって。珍しいわね」

リビングを包み込む静寂を切り裂き、母の未沙が右手で頬杖をつく。その無表情の視線から一瞬目を逸らしたが、洋斗は深く呼吸をして両親の方を向く。

「それは……この後、というか、冬眠の日までどうするかについて、だ

けど」

「それは俺ら全員でここを出るんだろうが」

たどたどしい洋斗の声を遮るようにして父の祐治はぴしやりと言った。腕を組んで椅子の背もたれに寄っかかる彼は未沙よりも一層冷たい声だった。

彼は明日2人を地上にある自宅へと移そうとして再び果那ノ海に来ていた。宴会のときにそのようなことは言っていたが、それを無しにするわけがなかったのだ。もちろんそれは事前に母から洋斗も知った。それを最初で最後のチャンスと悟った洋斗は2人揃う今日を狙って呼び出したのだ。

「それは……そう父さんは言ってるけど、でも」

「なんだ、大きい声で話せ」

この状況を作ったはいいが、洋斗にしてみればかなりの恐怖だった。普段から恐れて、言われたとおりに行動してきた。間違ったこと、自分勝手なことをすればすぐに怒られた。それを母が父に伝え、まれに帰ってきた途端にまとめて説教されたこともあった。

そんな両親を目の前にして、まさしく両親からすれば洋斗の最大の身勝手な行動について話す。膝においていた手が震え、口は驚くほどに乾燥し、声も震えて小さくなっているのがわかる。心臓の鼓動が早くなって体全体に響き渡る。これは危険信号なのだとも思えた。

けれど、ここで逃げてしまっただけはいけない。洋斗の意思がそう叫んだ。

祐治の威圧ある声に怯んで思わず視線をテーブルに落としてしまった。それでも、彼なりに声を大きくして、発言した。

「俺は、ここを離れたくない。冬眠の日だって、おふねひきがある。だから、その、それにも参加、する」

目を力一杯閉じて拳を握って、体全体を絞るように”思い”を口にした。2年前、土砂崩れが起こったあの日。この環境に問題があるとして果那ノ海を離れた家族がいくつもあった。当初、洋斗たち一家もそれに入っていたのだ。それを洋斗の止まりたい”思い”で根気よく粘り続けた結果、洋斗はここにいて海遥たちと白風中に通って、そ

して未知なる脅威に立ち向かおうと彼らと誓い合った。

だからこそ、こんなところでひとりだけ欠けてしまうなんてありえない。洋斗はここに残って、彼らと共に脅威へと立ち向かう。それが洋斗の”思い”だ。

目をゆつくりと開けて上目遣いで2人の様子を伺う。案の定、目を大きく見開いて口を半開きにしてている両親の姿があった。

「それはどういふこと!？」

未沙が頬杖していた右手でテーブルを叩いた。乗っていた箸入れや飲みかけのコップが少し揺れる。祐治は先程よりも険しい顔で洋斗を睨んでいた。

「……言葉の通り、だけど」

「おい、洋斗」

顔はそのままテーブルと両親の顔を行ったり来たりで見ていると、再び祐治が口を開く。

「お前は何を言っているんだ。ここにいたら眠ってしまうんだぞ? いつ目覚めるかわからんとところで、そんな無駄なことをしてどうする」「たしかに、いつ目覚めるかはわからないけど」

「そもそもだ。こんなところにおいても何の意味もないんだ。お前はもつと都会に出て、多くを学び、そして立派な社会人にならなければならぬ」

立派な、社会人……?」

洋斗の思考が急停止してしまったような、白熱した試合に水を差すような、急に世界が止まった感覚。小石を頭にぶつけられたのかとき腹痛たしさが洋斗の心の奥底から滲み出てきた。

「こんなド田舎じゃ不便にもほどがある。お前のためにここらへんにいられる家庭教師を探すのにどれほど手間が掛かったか。そして今までどれだけ金を払ったか。お前は知らんだろう」

祐治が眉をひそめてため息をしながら腕を大げさに上げる。

「それに、お前のまわりにいる人間はどれも大したヤツじゃない。そこから辺にでも落ちてそうな人間ばかりだ。そんなのといっても無駄だ無駄。もつと役に立つ情報を普段から取り入れられるような環境に

いるべきだ」

そんなのといても無駄？

洋斗は疑問に疑問が重なり、それは徐々に大きくなっていった。心臓の鼓動さえも聞こえない、ただ唯一祐治の声だけが嫌に耳に入ってくる。手が、震えていた。

「もう来年は高校受験を控えているんだぞ。設備や学習環境が整った場所へ行くためにもここに残る意味はない。いつまでも友達と仲良しごっこしている暇があるのなら、俺らがお前に出した金の分だけ成果を出していけ」

祐治が声を強めて洋斗に言い放った。僅かに流れの音以外聞こえない空間に彼の声は響いた。それは浸透していくようにして、再び静寂が訪れた。2人は視線を一切外さなかった。そして洋斗は、自分が震えているのがやっとわかった。振るえながらも深呼吸をした。じわじわと体全体に広がったそれは満タンになっても止まらなかつた。呼吸がいつもよりしづらい。拳をより強く握った。閉じた口の中で歯茎さえも震えていた。それを静止させるかのように歯を食いしばった。

もう、限界だった。洋斗はぱつと右手を挙げてテーブルに強く振り下ろした。握られた拳がテーブルを揺らして鈍い音がした。箸立てもコップも先程以上に揺れて、こちらは高い音をたてた。

「……いい加減にしろよ」  
「なっ……」

2人は洋斗の行動にあっけにとられ、口をぽかーんと開け放たれていた。

「たしかに、いい学校に進んでいい会社に入って、それがつまり立派な社会人だと、そう言える。悪いところなんてひとつもない、理想像だろうよ。けど、あんたのいう理想像は、俺はただのロボットだろ」  
「なんだと？」

洋斗の声は震えていた。しかし決して恐怖で振るえてなどいなかった。それは怒りだ。

「ただただ進学のためだけに学校行って、就職して……。それで構わ

ないのなら何の問題もない。でも、俺は違う。そんなのは望んでいない」

より威圧を込めて睨んだ祐治の視線を振り払うようにして洋斗は声を張って言う。

「俺はずっとみんなと一緒に学生生活を送ってきた。けっしてひとりぼっちじゃなかった。みんなが俺を友達だと、そう言ってくれろ。みんなと楽しみながらも、時には真剣に何かに取り組んで、そして達成できたときはみんなと嬉しさを分かち合える。そんなことを経験できたのは、あんたが言った、そこら辺にいるやつらなんだよ」

「だから、それがどうしたというんだ。今のお前にはそんなのは必要ないと言っているんだ！お前は社会で実績を積み重ねて、世間を見下ろせられるような地位を手に入れるんだ。そうすれば金も多く手に入る。一般人では到底手を伸ばせない物でも、何でも」

「それが気に入らねえんだよ！」

洋斗の主張を聞いて完全に苛立ちが抑えきれなくなった祐治は立ち上がる。最初の険しさを表す顔は最早激怒の仏像のごとく皺を寄せて、血走った目を洋斗に向ける。しかしそれを凌駕するような声を張り上げて洋斗も勢いよく立ち上がった。それによって椅子は背もたれから床に打ち付けられて倒れる。ゴンという衝撃でさらに両親はびくりと驚く。

「俺は、そんなものなんて望んじやいねえんだ。父さんみたいな優秀な弁護士になんて憧れてない。大金持ちになんて憧れてない！」

「ハッ、何にも夢なんて持ってないお前が、憧れなどという言葉を使うな！」

「ああ、そうだ。そうだよ、俺になりたい職業なんてこれっぽっちも思いつかない。けど、少なくともあんたの思うがままの人生を歩むつもりはさらさらない！」

父と子との言い合いに隙間を縫って入ることなど容易ではなかった。未沙は普段みせないおろおろとした顔で両者の顔を見ながら、「あ」「ねえ……」と口を開こうとしては否が応でも閉じなくてはならなくなっていた。

「ふざけるな！今更ぬるい道を選ぶなどと俺が許さん！」

「ぬるいとかあんたの勝手な基準で判断するなよ。あんたの考えた理想像が全てじゃないんだよ」

「今までお前のために使った金や家庭教師はどうするんだ！止めるのか？」

「ああ、それについては感謝しているよ。だけどな、それがあんたの理想像のためだけにしか使えないわけじゃないだろ。それに、たかが中学生なんだよ。今後の人生設計なんてモンが簡単に仕上がってたまるかよ」

祐治の発言をことごとくいなしていく洋斗に、祐治は息を荒くして鋭い目で睨み続ける。洋斗もあくまで自分を保とうと冷静を気取るが、やはり剥がれ落ちてしまうようだ。

だから、だろう。洋斗もこれは言うか否かを迷っていたことも、自然と口から滑り落ちていった。それは、流石の両親の前でもためらわれる、いわば禁句だった。それでも、きつとこれでもかと言わない限り終わらないだろう、そう頭が判断したのだろう。

「俺は、兄貴みたいにはならない。だけど、兄貴と同じ扱いをされるのはもうごめんだ」

「……!!」

祐治の顔が形相から一転、目が一番に大きく見開かれて口が開いた。未沙もそれまでの慌てぶりがピタリと止まり、代わりに顔の部位が崩れていくような様子で目頭から涙が零れ始めた。

祐治は今日一番に鬼のような顔へとすぐに変貌した。しかし鋭い言葉は飛んでこず、むき出しの歯を力一杯に噛みしめた後に目を閉じた。

「……もう、俺はお前など知らん。ここから出て行け」

「……ああ、そうだろうと思ってたよ」

場は完全に沈下した。重力がここだけ増したような重い空気が押しつけてくる感覚だ。先程ので喉を消耗したようで、普段以上に小さい声で洋斗はそう吐き捨てた。椅子は元通りに直さずにリビングを出て自室のある二階へと上がってく。

一段一段がこれまた億劫に感じる。洋斗は手すりをつかんで上る。体はかなり疲労しているのがわかる。なぜか節々が痛かった。

洋斗の、彼の内に秘めていた”思い”をありつたけ両親にぶつけた。予想通りにそれをはねよけようと彼らの反論が飛んできた。一進一退のぶつけ合い。血だらけになろうとも止まない言葉。たとえ鋭利なものでも、すでにわかつているからなんてことなかった。

そして、結果は……どうなのだろうか。祐治から先に止まったから洋斗の勝ちなのか。洋斗自身は首をかしげたが、すぐに考えるのは止めた。あの勝負に勝ち負けなどなかった。いや、勝負ですらなかったのだから。

自室にあるベッドには大きいリュックと2つほど小さい鞆が乗せられている。あらかじめこうなると予想していた洋斗は荷作りを完了させていた。机には筆記用具、横に備え付けられている棚には教科書や本など、それら見慣れたものは一切ない。必要なものは全てリュックや鞆に詰め込んだ。机の向かい側にあるベッドに再び目を向ける。いつも使っていた目覚まし時計が午後五時を指す。

ふと、網戸にしていた窓から緩やかな潮の流れによつてカーテンが揺れる。わずかに差し込んできた光の先に、棚に置いてある写真立てがあつた。それを洋斗は手に取る。

写真には4人が写っている。一番背の高い男性は父の祐治。その横にいるのが母の未沙。2人の前で堂々と両腕を腰に当てて笑っている子どもがいる。それが洋斗の兄、泰洋だ。泰洋の横でぼうっとしているのが洋斗である。

「……」

洋斗は写真を見つめる。その表情は普段通りの無表情にも見え、また懐かしむようにも見え、しかし物寂しげにも見えた。

少しほどして洋斗は写真たてを棚に戻した。その際、写真たては元通りではなく写真が見えないように倒すようにして置いた。

大きいリュックをしょって2つの鞆はまとめて左肩に掛けた。洋斗の家の玄関はリビングがすぐ横にあり、家を出るときどうしてもしビングが見えてしまう。なので洋斗はベランダからジャンプして出

ることにした。部屋を出てすぐ左にベランダへと出るドアがある。ノブを回してベランダへと出ると、空は赤と橙のグラデーションで彩られている。

洋斗はしばらく空を眺めていた。巴日を見たときのような、けれど少し違う感覚。洋斗でもうまく言い表せない。でも、もう何も、悩むべきものはひとつ終わった。そう片付けたところで洋斗は強めにドアを閉め、手すりを乗り越えて地面に着地した。

洋斗は振り返らず、ひとまず目的地を目指して歩き出した。



### 第三十四話 見えない力

「じゃあ、今日はここまでにしよう」

あちこちにいる人に聞こえるように大生の父は大声で呼びかける。学校の授業の終わりはチャイムによつて告げられるように、こういった準備の終わりはその場のリーダーによつて告げられる。

それぞれ道具を元あった場所に戻す。修復完了した船は塗装が乾くまでの間は倉庫に入れておく。そのための準備はクレーン等を使うので子どもたちの出番はない。

空はすっかり赤く染まって、今度は遠くのほうに夜が顔を出し始めている。海遥たちはみんなに一礼してからその場を後にした。

「いやー、しつかし疲れたなあ」

「まあな。でも、もうすぐであれも終わりそうだな」

海に飛び込み、すいすいと泳いで果那ノ海を目指す。夕刻の果那ノ海の町が彼らを快く迎える。

「……洋斗、どうだったのかな」

広場へと着いたときに、そう呟いたのは沙月だった。少し俯いて不安さを滲ませた声によつて他の3人も自然と真顔になる。

「も、勿論、洋斗のことだからうまく言つたつて思うけどね」

「……あいつのことだから、そうだろうけどよ」

航大は腕を頭の後ろで組みながら空を仰ぐ。

「ま、明日来て報告するつて宣言してたからな、それを待つしかないつしよ」

「……そうだね」

押し寄せてきた重い空気を取りはらうように、航大は軽い感じで付け足す。それに若干の不安さはあるものの澄滞は頷いた。

いつもの石階段を海遥は上っていく。途中で空の方、厳密に言えば陸の方から歌声が聞こえてきた。低い男性たちの歌声は、海遥でも知っているメロディーだ。

「作業の後に唄の練習ですかい。あんまり無理は禁物ですよつと」

果那ノ海にまで届く歌声に笑みを浮かべながら海遥は家の方への分岐道を進んでいく。すると……。

「うおっ！」

玄関前の右側の方に大人がぎりぎり抱えられるくらいの石が4つ転がっている。そのうちのひとつに洋斗が腕を組んで座っていたのだ。

「……………」

「び、びっくりしたあ。どうしたんだよ、こんなと……………」

控えめに手を上げる洋斗に海遥は不思議そうに近づくが、彼の隣にある大荷物を見て察した。

「……………なるほどな、そうなつちまつたわけか。それに俺の家ならだいぶ空きあるしな」

「あ、その、ワリいな」

「いや、いいんだよ。とりあえず入れよ」

海遥は両腕を腰に当ててゆっくりと首を横に振った。そして洋斗の荷物2つを持ってから玄関へと向かう。今日は父の和洋は夕飯時までにか帰るとの伝言を朝受け取っていた。ポケットから鍵を取り出して鍵穴に差し込み、反時計回りに90度回す。がらがらと引き戸を開けて中に入る。

しんとした居間の電気をつける。奥にある台所に小さい魚が一匹だけゆったり泳いでいる。

「んじや、部屋はこっちな」

居間へ入る前にふたつ長い廊下が見える。居間の反対に伸びる廊下には左手に3つ部屋がある。手前の部屋を海遥が使っている。海遥は真ん中の部屋を指さした。

その部屋のふすまを開けた。淡い緑のカーテンがかかった窓。右側に備え付けられている押し入れと本棚、木製の丸テーブルがある。

「まあ、一応こゝも定期的に掃除はしてるんだがな。気になるんだつたら今から掃除するけど」

「や、大丈夫だ」

洋斗は部屋をきよろきよろと見まわしながら入っていく。家具がろくに置かれていない部屋はリビングのようにしんとしている。しかしそれ以上に、それは時計がないせいかもしれないが、時までも止まっているような感覚に洋斗は襲われていた。

「……大丈夫、だけど」

「ああ、ちなみに海花が使ってた部屋は一番奥のだから。ここはただの空き部屋だ」

ぽつぽつと喋りながらもまだ部屋を見まわす洋斗に海遥は声をかけた。少しだけぴくぴくと肩を揺らして洋斗は後ろを振り返った。

「あ、あああ。すまん」

「いいって。気になるもんだよな」

気まずさで目を逸らしながら謝る洋斗に海遥は気にしない風で荷物を渡す。

「でも、のほほーんとしててそういうの気にしないのが洋斗だと思ってたけど。意外だったな」

「のほほーんってなんだよ」

ふつと笑う海遥にいつも通りの苦い顔でツッコむ洋斗。しかしすぐにそれは陰りが生じて視線を部屋の壁にむける。

「意外、か。……ま、意外だったな」

「え？」

「たしかに、普段の俺なら海遥が言ったまんまだろうな。具体的には、自己主張はしない、まわりにあわせて行動する、あとは真顔で授業中は寝てる、かな」

「ああ、それだ」

「何か不満があっても口に出すことはない。自分の内側で妥協してさっさと処理する。それらまとめて俺だと思ってた。それらだけが俺だと、思ってたんだ」

話しているうちに洋斗の顔が苦に満ちていくように眉をひそめ、目はなにかを睨むように開いていた。

「でも、それは間違っていた。自分の全てを知っていると、勘違いをしてたんだ」

「……」

「初めて、あんなに怒った。自分でもわけわからなくらいに苛立つて、怒りに身を任せて叫んだ。キレるとビツクリするくらいに低い声が出た。一日の、たったあの場の出来事で知らない自分がたくさん出てきた。びつくりしたし、それこそ意外だったし、でも……怖かった」

海遥が見つめるなか、洋斗は淡々と語る。彼の手は力強く握られていた。

「ずっと何も言わずに従ってた両親に、あれほど言ったのは初めてだった。前にも、ここに残るつてだこねたときはあつたけど、それとはわけが違う。俺は最初、自分の”思い”を伝えることができれば、つて簡単に考えてた。実際、家から追い出されるなんてことは予想済みだったから、それだけでよかつた」

でも、と洋斗は一旦深く息を吸つて吐いた。今にも先程の出来事がフラッシュバックして、あるとき深く焼き付けてしまった感情が蘇つて、グチャグチャになりそうだった。

「ま、これもわかりきつてたんだ、両親がすんなり俺の考えに耳を傾けるなんて。わかつてたけど、きつとどこかで、俺の気持ちをわかつてくれるとも、思つてたんだ。これでも、俺の両親だから」

視線は宙を舞い、洋斗はうつすら浮かべた自嘲ぎみの顔で海遥を見た。

海遥は、なにを言つていいかわからなかつた。

洋斗は、自分の全てを知つていると思つていた、そう言つた。他人任せで動くしかないのが自分だと、巴日の日に言つていた。だからこそ彼なりに、これも普段とは違つた”思い”を伝えようと自分から動き出した。当然、そう簡単に上手くいかないのだとわかつていた。洋斗は頭がいいから、そうであろうと海遥も思つていた。けれど、海遥にはどういふものかわかつてても、奥深い場所までは覗けない親子同士の間だからこそ、洋斗は期待していた。洋斗ではなかなかに気づけない、深い深い底にいる本当の洋斗が期待して、それが知らぬ間に出てしまつていた。

それを無意識というのか、はたまた違うなにかか。ともかくそれに

加えて、自分でも知らない自分、憤怒に満ちた自分が現れた。制御できない怒りをひたすらぶちまけたのか、その詳しい有様を海遥は知らない。よくて航大のいたずらに耐えかねて蹴りを入れる、そんな程度の姿しか見たことがなかった。そう、それもあくまで洋斗自身が認知している範囲の自分なのだ。

両親に期待していた自分。想像以上の怒りをみせた自分。きっと後者の方が大きいだろうけれど、これらが洋斗にとってはかなりのダメージだった。これらを洋斗は恐れているのだ。自分を恐れている。「おまけに、とどめは兄貴のことを口走ってた。まったくき、俺ですら思い出したくなかったものを、最早勝手にさ……」

自嘲した表情は徐々に下に落ちていく。声もそれに比例してか細くなっていく。その瞳には陰が増しているようにも見えた。

「洋斗」

海遥は洋斗の前に立って肩に手を置く。ゆっくりと上げられた洋斗の顔をしっかりと見る。

「お前はお前だ、洋斗。知らない自分が出てきても、それはあくまで今まで一度も出したことのない感情だったからだ。それは決して変わったことではない。恐れるな。それに、お前は曲がりにも自分の”思い”を伝えることができた。そうだろう？」

「……ああ」

「あれが正しかったのか、間違っていたのかなんてのもしつこく考えるな。今お前は疲れてるんだ。ゆっくり休め」

「……ああ、そうする」

「夕飯できるまで横になるといいさ。あ、俺の部屋に余った布団あるから、それ持ってくる」

僅か、であるが彼の瞳の陰が和らいだような気がした。海遥は笑みを浮かべてから自室に急いで向かい、押し入れから敷き布団と掛け布団、枕を持ってくる。洋斗の荷物は部屋の隅に置き、布団を敷いてやる。するとすぐに横になった洋斗は、まるでこの空間に溶け込んでいくように眠りに落ちていった。

「なるほど、ねえ」

半ば呆れたような様子、和洋が呟く。居間に設置されている固定電話をゆつくりと置いた。

「……どうだった？」

「うん。……そんなやつは知らん、だって」

海遥は両手を床に付けて斜め後ろに体を傾けながら和洋に聞く。それに対して力なく笑って肩をすくめた。

「そっか」

海遥はそのまま寝転んで頭の後ろで腕を枕代わりに組む。そのときふと壁に掛かった時計がちらりと見えた。時刻は午後9時ちやうどを過ぎたあたりだ。

和洋が午後7時前に帰ってきたときにすぐ洋斗の居候の件について話した。和洋は目を大きく見開いたが、すぐにいつも通りの表情に戻って海遥の話を聞いていた。とりあえず洋斗自身から話を聞きたいということ、一旦夕食にしようとなった。寝ている洋斗を起こして3人が丸テーブルを囲む。海遥と和洋はなにひとつ変わらない、いつも通りの夕食の時間を心がけた。洋斗にとってはそれこそ滅多にない一家団らんとした雰囲気、瞳を潤ませながらも食事を楽しんでいた。

その後は海遥が一番に風呂に入った。それは和洋が洋斗と話しておきたいということもあって、だ。湯船に浸かっているときはさりげなく耳を潜めていたが、居間の会話は聞こえなかった。

その後海遥と入れ替わるようにして洋斗が風呂に入っている。

「……こういう場合って、どうなんだろうね」

「んー、さっぱりだね」

「普通は親と和解するか児童相談所とかに相談なんだろうけどね」

海遥は乾きかけの髪を軽くクシヤツと触る。

「あくまで、普通はね」

少し体を起こした海遥をチラリと見てから和洋も丸テーブルの前

に座る。

海遥の言うことは間違っていない。むしろそれらが当然のようにして出てくるだろう。しかし今、果那ノ海ではそうにも行かない。

現在冬眠まで刻一刻と迫っている。数えれば8日しか残っていない。さらに、果那ノ海に児童相談所などはなく、地上にしても隣町に行かなければならない。

それ以前に、本来果那ノ海の住人は地上に出てはならないことになっている。海遥たち5人はおふねひきに参加するため特別に地上に上がっているのだ。それ以外の理由で隣町に行き、さらには彼らがここにまでやってくることになったら……。それは不可能な話だ。

「しばらくここにいいだろうね。少なくともおふねひきには出られることになったし、それを終えて……」

「冬眠をどうにか防げて、もしくはそのまま冬眠しても、どっちにしろ今後の問題だな」

むくりと海遥は立ち上がって冷蔵庫を開ける。中から取り出した2リットルペットボトルの水をコップに注いで勢いよく飲み干す。

「そうだね。余計に僕の仕事が増えそうだよ」

半分ため息交じりにそう言うと、よたよたと居間を出でいく。が、入り口の前で立ち止まった。

「さつき言ってたよ。勇気を出して”思い”を伝えられたのも、何度も自分に言葉をかけてくれるって」

顔だけこちらに向けて和洋が言う。海遥は意表を突かれたよう目で丸くしている。

「やっぱり、大人には届かない何か、大きな力になるのかもね」

ふっと優しい顔で言い終えると居間を後にする。海遥はペットボトルを冷蔵庫に入れ、コップを流しに置いた。

流しにもたれかかり、肘を縁に乗つける。ふう、と海遥は天井を見上げるようにして息を吐く。

「大きな力、か」

それはすぐに空間に溶け込んでいくような眩き。頭の中でこだまするように響く。力、その言葉は不思議で、現実的で、しかし幻想的

で。

「洋斗の方が、勇気たっぷり力、持ってんのにな」

どうしようもないもどかしさで目を細める。それはもうわかってるのに、証明できるのに、それが今日の前に現れない。何故なのだろうか、いつまでも自分に問いかける。

「でも、もう迷っている暇はないんだよな。洋斗のとは違うけど、俺だって、それに多分あいつらも」

その何故は、もうどう手を探っても出てきやしない。でも、少なくとも、海遥自身は知っている。それが存在していたことを。なら、それを自分なりに再現するしかない。ベクトルは違っても、それは立派なカタチ。そして、さらに彼らに刺激として与える。もう、いや半分もわかっていないけれど、わかっている。彼らにも、確かに”おもい”があることを。それを言葉にのせて、踏ん張って精一杯声を張って伝えるのか、そうでないのかは、結局は全て彼ら次第だけれども。

何かに一生懸命取り組んでいくときほど時間の流れは早く感じる。あれから作業も滞ることなく進み、全ての船の修理と塗装が終わり、それらを目の前にした一同が歓喜の声を上げた。

主婦たちのおかげではつびも揃えられ、さらにそれとは別で”もうひとりのおじよしさま”として出る汐帆のための衣装もまもなく完成するとのことだった。

陸の皆は今年の祭も盛り上がっていこうと既に興奮気味な様子だった。しかし一方で、特におふねひきに出るメンバーたちはより一層の緊張感を漂わせていた。



洋斗の一件の翌日、洋斗は何事も無かったかのように作業に参加していた。まわりにはそれとなく理由を作っておいたが、航大、澄濤、沙月には海遥の方から話した。皆それぞれ難しい顔をして静かに聞いていた。そして聞き終えると、予想はしていたが開口一番に航大がぶつくさ文句を言っていた。

「まったく、洋斗を連れ出そうとしていたくせに、強く反対したら追い出して他人のフリとか。クソ親だな」

「そんなことが……。洋斗は大丈夫なの？」

「まあ、昨日よりはマシってところだろうけれど。ホントのところは俺にもわからん。そこらへんはあいつ自身の問題だしな」

海遥は腕を組みながら視線を向こう側にむける。一樹たちと話す洋斗はいつ戻りに見えるけれど、しかし海遥たちには少し違和感が残る。

「……でも、よかった。んと、こんな言い方じゃダメかもしれないけど、ひろちゃんはこのにいられる。おふねひきにも参加できる。だから、よかったって」

澄濤は両手を胸元において安堵した表情をしていた。それを見て航大と沙月も少しばかり表情から陰が消える。

「ま、ひとまずそういうことだ。洋斗は何の問題もなくおふねひきに参加できる。あとは……」

海遥は腕を組んで空を見上げる。時々曇り空になってぬくみ雪が降る現象は未だ続いているが、今日は青空が広がっていた。ところどころにちりばめられた雲は白く、しかしそれはあまり夏の空とは違ったものに見えた。

「あとは、俺たちだ。俺たちの問題だ」

おふねひき。今年のそれは決して祭りの後の行事だけじゃない。陸の人間、そして海の人間。彼らの”おもい”が重なり、絡まり合い、ひとつになっていく。

海を大切にしている”おもい”。海神様を大切にしている”おもい”。そして、彼らの各々の”おもい”。それらを海神様に届ける。

決して欠けてはならないそれを、また他の、自分らが持つもどかしいそれを、はたまたさらに違う……。

海遥が言った問題、それは様々な変化を遂げる。その答えが出るのは、見えてくるのは、それはおふねひき前日だった。

### 第三十五話 前日の日常

夏を忘れたような風は吹いていない。その代わりに今日は先日と比べて幾分肌寒かった。

澄んだ青空の下で、大人たちがあちこちで鉄パイプを使って屋台を組み立てている。海の男たちがこういう作業をしていると、ちよつとした違和感が感じられる。

ともあれ、おふねひきは夜の行事であって、昼間はここでお祭りがあるのだ。それに屋台は必須である。毎年食べ物屋だつたり射的や輪投げなどで昼間っから盛り上がる。そして午後にはミニのど自慢であつたり、お笑いの舞台などが行われる。そのシメにおふねひきが控えている。

「大生、それ取ってくれ」

「はいよ」

大生と彼の父も準備に参加している。漁協の前に行くつか出店するのだ。他の職員も何人かが服装そのまま作業をしている。

「で、みんなはいつ頃来るんだ？」

「んーと、あと10分くらいかな」

パイプを固定し終えた大生の父が顔だけ大生の方に向ける。大生は左手につけている腕時計に視線を落とす。時刻は13時20分。

「そうか、ならみんな来たら案内してやれよ。俺はこの後別のところの設置もあるから」

「そんなのわかつてるよ」

父の発言に苦笑いを浮かべながら大生は地面に置いてあるのれんを持って渡す。

彼の父がいうみんな、とはつまり今回のおふねひきに参加する白風中の生徒たちのこと。彼らとしてはもう既に船の修理も終わったので、やるべきことはもうない。当日の流れの確認というのもあるが、しかし彼らは船を操作するわけではないため、大して重要じゃない。それでも彼らが呼ばれる理由は……。

「それにしても、ママがあんなにウキウキしてるの久々に見たぞ」

「母さん、変なところでスイッチ入るからね」

受け取ったのれんを脇に抱えながら苦笑いする父に、大生もまた肩をすくめた。そして大生の父がのれんを他の職員と取り付けている間に、みんながやってきた。

「大生の家に行くのは久々かなあ」

腕を真上に伸ばしながら茉紀は大生の顔を見る。約束通りに集まった一行は揃って大生の家へと向かっている。

「そうだね。もう小学校低学年以来かな」

「基本は外出で遊んでたからな」

大生の発言に一樹は腕を頭の後ろで組みながら頷く。結局家で遊ぶにしてもボードゲームくらいだ。そもそも雨の日にしかその選択肢はない。

「そうそう。でも2人が活発すぎて乙女の私たちには大変だったときもあったよ」

「あ、お前乙女だったのか」

「何それひどくない!?!」

茉紀が過去を思い出すように目を細めている。その横で一樹のさりげない一言を投げつける。

こうしたいいつも通りのやりとりをしているが、内心一樹はまだ拭えない違和感を抱えていた。それはそう、期末テストの前の金曜日。放課後みんなと残って勉強をして、茉紀と一緒に帰った。

『一樹の、その大切ってどういう大切?』

『その大切って、5人、それから果那ノ海全員が大切?それとも、誰かだけが大切?』

あのとき、結局何でもないと言ってごまかしたあの質問。あれ以来一樹は茉紀に聞こうとしたが、すぐに喉のあたりで止まってしまう。茉紀の方は何も無かったかのように振る舞っている。

茉紀がどうしてそんなことを聞いてきたのか。そして、まるで一樹の心を見透かし、揺さぶるかのような言葉に、若干のおぞましささえも感じた。

「ん、どうした？何か顔についてる？」

つい考え事に集中してしまっていたようで、一樹は茉紀の顔を見たままになっていた。慌てて首を横に振った。

海遥たち5人も大生たちの後ろについて行く。そして折れた角の左手先に大生の家が見えてきた。木造の2階建てで、玄関左横には庭がある。正面から見ただけでもそこそこの広さだとわかる。

大生が玄関のドアに手を掛ける。横に引くタイプのドアを開ける。その音に気づいて奥からぱたぱたと人が向かってくる音が聞こえてくる。

「おかえりー」

「ただいま。みんな来たよ」

「あらあら、みんなお久しぶりね。茉紀ちゃんは大きくなっちゃって」「えへへ、こんにちは」

大生の母は黒髪を後ろで留めている。その顔に笑みを浮かべながら茉紀の頭を撫でる。

「それで、こちらのみんなが果那ノ海のこと？」

「はい、どうも」

大生の母が後ろにいる海遥たちに視線を移す。海遥が挨拶すると4人も各々で軽く会釈する。

「はじめまして、大生の母です。さき、中に入って」

笑ってペこりと一礼して挨拶をすると、大生の母はみんなを家の中へと案内する。玄関も広さがあり、大生の他に8人が来ているのにもかかわらず余裕で靴を並べられる。

家の中の造りも外見と同じく和風だった。廊下の板張りに各部屋は全て畳になっている。ふすまで仕切られた部屋は、つまり全て取りはらったら横長の大部屋ということである。これは大生の母曰く、大生の父が漁協職員を呼んで飲み会などを行ったりもするようだ。

一行が案内された部屋は、十畳ほどの部屋。大きい木製のたんすが

2つ並んで置いてある。

「みんなをわざわざ呼んだのはね、これのためなの」

そう言つて大生の母はたんすの一番上の引き出しを開ける。そこから手を入れて取り出したのは丁寧にたたまれた紺色の生地の浴衣だった。女子たちは目を輝かせて一斉に浴衣の前に正座する。

「綺麗……」

「私には姉が一人いてね、そして私と一個違いの双子のいともいたの。で、みんなと同じ年の時に4人分の浴衣を買ってもらつて、夏祭りとかみんなを着てたの。それを着てもらいたくつて」

タンスから出された4着の浴衣はどれも違う色と柄だった。紺色の生地に赤と白の花がちりばめられたもの、白い生地に三原色の花がちりばめられたもの、赤の生地に白と橙色の模様が施されたもの、赤紫の生地に淡い青の線が幾重にも重なった模様があるもの。

「大生を基準にして海の子の2人の身長を聞いてたけど、やっぱり大丈夫そうね。多少の差はあるけど問題ないと思う」

改めて大生の母が女子4人をまじまじと見ると、納得した顔で頷く。そしてその4人による、「誰がどの浴衣を着るか決めよう会議」が始まった。残った男子陣は

「えつと、ちなみにサイズが一番小さいのとかはどれですか?」

「ああ、実はこの紺色のやつから大きい順になつてるのよ」

沙月がちよこつと手を上げて質問した。多少とはいえ、なんだかんだで気になつてしまうものだ。その答えとして、紺>白>赤>赤紫のようだ。

「えと……みんななどの色がいいとか、ある?」

里実が皆と顔を合わせる。それに連鎖反応したかのようにお互いがお互いと顔を見合わせる。それを何回か繰り返すと、自然と4人同時に笑い出す。

「じゃー、一番最年少つてことで私がまずいただこう」

笑い涙を指で拭いながら茉紀がひよいと身を乗り出して浴衣のひとつをつかむ。赤紫の浴衣である。

「えつと……、じゃんけんする?」

「うん、そのほうが手っ取り早いかも」

澄濤が里実の沙月の顔を伺いながら提案すると、すんなり里実が頷いた。沙月も異論はないようで右手を前に出した。3人の重なったかけ声とともに決めた手の形を出す。

勝った順に選び、澄濤が白、里実が赤紫、沙月が紺となった。

「よし、みんな決まったね。それじゃあ」

大生の母が立ち上がると4人の横を通って男子陣の前まで近づいてくる。

「君たちにはしばらく別室で待機してもらおう」

不敵な笑みを浮かべた大生の母は問答無用と言わんばかりに男子たちを無理矢理部屋から追い出した。

「少し待っててね」

大生の母はそう言い残して部屋のドアをぴしゃりと閉めた。そしてすぐに部屋の向こう側から籠った声が聞こえてくるが、細部まではあえて聞き取らずに彼らは大部屋を仕切ったうちの一室の方へ移動した。

壁に立てかけてある木製のテーブルを部屋の真ん中に置く。大生は飲み物を取ってけると言って部屋を出て行く。その間に幹大たちが身を乗り出して話し始める。

「この流れはあれしかねえよな」

「ダネダネ。つまりはあの4人の浴衣姿をいち早く見せてくれるってわけだろ」

目をキツと開いて幹大はいつもより一段期待に満ちた声を若干小さくしている。隆広も腕を組みながら大御所ばりの悟り顔で頷く。

「なあ、一樹はどう思うさ。誰が一番似合ってるか」

「ふえ!？」

不意にぽんと一樹の肩を叩いて幹大が顔を近づけてくる。一樹の口から裏返った悲鳴のような、最早人間ではない別の生物の声が出てきた。

「おいおい、そんな動揺するなよ。なあ、誰だと思う?」

「ええ、いやあ……。その、みんな似合ってそう、だけど」

「一樹イ、男なら一人に絞れよ」

逃がすまいと幹大は一樹の肩に手をまわしてくる。それでも曖昧に返す一樹に隆広がテーブルに手を突きながら一樹を真剣な目で睨み付ける。

と、ここで大生が戻ってきた。両手で持っているお盆には透明のポットに入った烏龍茶に、人数分のグラスを乗せている。

「なあなあ、大生は誰が一番浴衣が似合う女子だと思う？」

幹大がテンションそのままに大生に振る。普段からして一樹よりもそういった、つまり年頃の男子の話に入ってこない大生だけに、彼らの期待はますます膨らんでいるようだ。

大生は烏龍茶を全員に淹れ終わると手を顎に当てて少しだけ上を向いて考え始める。そして当てた手を下ろすと口を開いた。

「……吉野川さんかな」

「おおおお」

至っていつも通りの顔で澄滯に一票を加えた。隆広はパンと手を叩いてから座り直した。そして一樹には、正面から雷のようなものが体を突き抜けていったような、予想を超える衝撃が走った。咄嗟に大生の顔を見てしまった。

「なーるほどね。白の浴衣に揺れる三つ編みってか。なかなか見る目があるねえ、大生君」

隆広は再び腕を組んでこれまた大御所の解説のような雰囲気を出しながらうんうんと頷いている。

「じゃあ、今度は海勢の意見を聞こうか」

幹大が次に目を向けたのは海遥たちだった。海遥は手を後ろで突いてポーツと聞いている。航大はあぐらをかいて幾分どぎまぎしているのを隠そうとして隠せてない様子。洋斗は案の定死んだ魚の目をしていた。

「よし、航大。お前はどうか」

ぐいっよ烏龍茶を飲み干してから幹大が問う。隆広も右腕をテーブルにのせて航大を見つめる。

「え、え……………。その、里実、かな」



「ははああん」

幹大はわざとらしいニヤリ顔をする。

「さっすが、航大。自分の未来の嫁に一票出すのは当然かあ」

「はあ!？」

「え、だって、サツカーやった時から惚れてたんじやないのか」

「意味わかんねえよ!」

幹大の発言に声を荒らげて航大が机をバンと叩いた。しかしその行為、そしてあからさまに赤らめた頬からして動揺しているのは一目瞭然だった。

「自分で言っつといて今更照れんなよ」

「うっせえ。お前らが変なこと言うからだろ! ってか、み、海遥はどうなんだよ」

「ん、俺?」

自分だけに降りかかる2人のわざとらしい視線に耐えられなくなって、航大は海遥に問うた。

「そうだな……、案外大山ちゃんとかどうよ」

「ほほう、そっちを選んだか。確かに、それも良いな」

ほんの少しの間のもとに海遥は茉紀に一票を加えた。それに反応して隆広はまた大御所ご意見番のような雰囲気を作って喋り始める。ほぼためらいもなく言った海遥を、面白くないとも悔しさともとれる目で航大は睨む。そして一樹は一瞬、海遥が考えたその間のときに、こちらをチラリと見たのに気づいた。しかしそれは一樹にとっては、大して気になることはなかった。

ちなみに程度の補足で、茉紀の名字が大山。しかし茉紀の身長は決して高くなく、逆に小さい方だ。なのに名字が”大”山であるので、そういったギャップを込めて皆は大山ちゃんと呼ぶ人が多い。

「んで、一応だが、洋斗は?」

「知らん」

「デスヨネー」

勢いが若干落ちながらも、幹大は洋斗に振ってみるが、案の定の回答が返ってきた。幹大は口角が片方引きつった顔で項垂れる。

「じゃあよ、逆にお前らはどうなんだよ」

航大が右肘をテーブルにつけて頬杖をつく。他4人の視線も一気に幹大と隆広に集まる。すると待ってましたと言わんばかりにキメた顔を作った幹大が口を開いた。

「俺はなあ、今ひとりで出てこなかった北島だと思っただ」

「理由を聞こうか、幹大君」

航大は先程自分にやってきたようなわざとらしい笑い方をしながら幹大に続きを促す。しかしそれに気にすることなく幹大は堂々とした様子で再び語り出す。

「俺的にさ、浴衣に似合う髪型があるんだよね。勿論長い髪を結ってちよつとしたアクセントでかんざしをつける。普段長い髪をそのままにしている女子がそうしてきたら、まあ全然印象が違う姿を見てグツとくるものがある。わかる。しかし、だ」

「しかし……？」

幹大の語りに食いつくような目で航大は見つめる。先程より前のめりになっている。

「肩にかかるくらいの髪型、つまり北島のようなボブカットみたいなのが浴衣に一番似合う。そう俺は思う。ええ、何故かと言われたらね、俺の完全な好みっているので終わりそうだけだよ」

「な、なるほど。そういう観点か」

「いじり倒してやろうとか思ってたんじゃないのか」

幹大の熱弁にやられたのか、航大がすごく納得した様子で深く頷いていた。咄嗟に海遥がツツコんだ。

「そしてラスト、隆広は？」

「……ふっふっふ。とうとう俺の出番か」

不敵な笑みを浮かべながら隆広が組んだ腕をほどいてウーロン茶を半分ほど飲む。先程の大御所ばりの雰囲気そのままの隆広から、幹大よりもはるかに濃い熱弁が飛び出してくると、そう皆は悟った。

「まずは結論だな。俺は」

「おまたせー」

そんな雰囲気はばつさり斬るかのように大生の母がふすまを開け

て出てきた。しかもこの後浴衣ショーだと完全に思っていたのだが、先程と変わらない私服姿の女子4人がいた。

「いやー、とりあえずみんなよく似合ってたよ。後は明日に髪の方もアレンジしてあげるわよ」

「あ、あれ？待っててって言ってたから、てつきり4人の浴衣姿を……」

「なーに言ってるの。それは明日のお楽しみじゃない。ただ4人に浴衣の着方とか教えるために待っててって言っただけ」

先程の大御所は何処へ行ったのだろうか……。隆広が呆然とした様子で大生の母に確認を取ったが、それはただの勘違いだったようだ。一気に幹大と隆広は絶望に飲まれるように脱力したため息をついた。その様子があまりにも面白くて全員で笑った。

その笑いのさなかで、海遥は笑い涙を拭きながら大生の母に質問を投げた。

「なら、俺たちはなんで呼ばれたんですか？なにか他にやることがあるんですか？」

「ええ、そうよ。って、教えてなかったの、大生」

ひとしきり笑ってから大生の母は答えた。そして思い出したかのように大生に確認を取るが、その本人も今まで忘れていたようだ。そして思い出した時の顔が似ていた。さすが親子だ。

「あ、いうの忘れてた」

「んだよ。で、なんだ？やることって」

一樹が大生の横顔を見て首をかしげた。そして大生は答えた。ここも何故影響を受けたのかわからないが、先程の幹大たちのように、ドヤ顔だった。

「花火観覧場所の縄張り、屋台組み立てできない人の手伝い、外部から来る人のための誘導看板の設置、事前に持ってきてある分の屋台に使う食材や道具等の運搬」

大生によって伝えられた、明らかにもつと早く言ってほしかったと不満が出る間際の仕事を終わらせ、皆はそれぞれの帰路についた。

「案外人足りてないの実感したわな」

「もうヘトヘト」

疲れ切っていくらか縮んだ航大と澄滯が力ない声を出す。

「それにしても、大生くんの家でどんな内容のこと話してたの」

「だから、それはだ……ムググ」

沙月が海遥の顔を少しのぞき込むようにして聞く。それに答えようとすると海遥だったが、途中で必死になって航大に口を押さえられる。

「なんか余計に気になるんですけど」

その様子を呆れた目で見ながら沙月はそう呟く。

「おい離せよ。別に大丈夫だって。お前が……グハツ」

へばりつく航大をなんとか海遥は剥がすが、ぽろつと零れてしまうのさえ航大にとっては防がなくてはいけない対象なので、すかさず海遥に蹴りを食らわせる。

「ほらほら、やめてって。わかったもう聞かないから」

怒濤の暴力でなんとしても海遥が言わないように攻撃し続ける航大を沙月が止めたところで、いつもの広場に到着する。

「それじゃあ、また明日な、沙月」

「……うん。また明日ね」

沙月と別れる場所で海遥が沙月の顔をしっかりと見て手を振った。無邪気に航大と戯れながらいた雰囲気とは違い、気合いの入った、そして緊張感も漂わせる、そんな声。それに引き立てられるようにして3人も声を出して手を振った。決心した顔、または少し心配を漂わせた顔。見分けられそうな2つの表情だけれども、それらを両方感じられる、そんな面持ちで沙月は帰って行く。

間もなくして、航大とも別れる。もう既に力の入った声でじゃあ

な、と手を振ってから歩いて行った。あれだけ働いて疲れをモロ顔に出していたにもかかわらず、普段通りの元気がまだ残っていた。ただのバカとも思えたが、しかし、彼らしいと海遥は思った。航大がいるからこそ、まわりが元気になれる、そう考えていたからだ。

そして澄滯と別れる道にさしかかる途中で、海遥が突然立ち止まった。

「……あ」

「どうしたの、みはっちゃん」

「俺そういえば帰りに青年会寄つてかなきやいけなかったわ」

今まですっかり忘れていたようで、髪を指に巻き付けるようにしながら少し苦い顔をした。

「そんなに遅くならないって言っちゃまってたわ。まさかあれだけの仕事するとは思わなかったしな。すまん、先返つててくれ」

ポケットから家の鍵を取り出して洋斗に渡す。

「おう、わかった」

「じゃあ、また明日ね、みはっちゃん。ひろちゃん」

海遥は手を軽く振ってからそそくさと青年会のある方向へと小走りで行く。残った澄滯と洋斗も挨拶を交わして歩いて行った。

「よし、明日。明日だ。大丈夫、大丈夫だから……」

2人と別れてから少し歩いたところで、自分の握った手をもう片方の手で包んで胸に当てる。まだ前日だということにもう緊張やらで澄滯の心拍数が上がっているようだ。それを深呼吸して落ち着かせようと息を吸ったとき、

「きゃっ!？」

肩に突然誰かの手が触れた感覚が伝わってきた。息を吸った直後だったために変な声が出てしまった。慌てて澄滯はその場をぴよんと前に跳ねて後ろを確かめる。

「……あれ?」

そこにいた人物は、海遥だった。先程青年会のところへ行ったはずの、海遥だったのだ。

「え、青年会行くんじゃない……」

「なあ、少し時間、いいか？」

「……え？」

なぜここにいるのか、自分自身の今最大の疑問を彼に投げかける前に、海遥が口を開いた。

「話したいことがあるんだ。いいか？」

「ほう、そうか。そこら辺のはもう終わったのじゃな」

ゆらりゆらり、部屋の左右の壁にそって御霊火を置いて僅かであるが光源としている。その奥でウロコ様は杯などが置かれている棚に寄っかかりながら宙を見つめる。

「そうじゃのう。特にお主のところなんかは、大変じゃろう。こここの輩よりもワガママなヤツがいて。……ん？ああ、まあ、うちのも似たようなものか。この冬眠に抗おうとする姿勢は、な」

ウロコ様はふつと水面からゆつくり浮かび上がってくるように笑うと、腕を頭の後ろで組んだ。

「ああ、それにおふねひきも、お主のところと似ておる。生身の人を立てるなどと、流石に笑えてくる」

そして、ウロコ様はその微笑を沈めるようにして、真顔になる。その海でさえ切り裂くような細い目を、閉じた。

「なあに、わかっとなる。ワシも、お主も、そこのお主らも、海神のウロコじゃからな」

### 第三十六話 待つて

その日は、あくまで1年というループの中のひとつであるのだが、しかし他とまったく違ったものに感じられる。

それはきつと、彼らが待ち望んでいた、けれど来てほしくなかったとも思える、運命の日だからだろう。その空はどこまでも澄んだ青空が広がる。雲はここ最近と比べると少なく、久しぶりに季節が戻ってきたよう。

優しく包まれるような潮の流れを肌で感じながら海遥はドアを開ける。後ろから洋斗も靴を履いて外へ出る。

「じゃあ、また夜にな」

「おう。ちゃんとサポートしてくれよ」

「はは、わかってるよ」

玄関のところで和洋に声をかけられる。海遥は柔らかな微笑を浮かべて拳を和洋に向かって突き出す。それに合わせて和洋も拳を突き出す。

2人はいつも以上にゆっくりとした歩調で階段を降りていく。朝の光は白いヴェールのようで、直に浴びているだけで既に心地よい。祭当日といっても、果那ノ海の朝には決して活気づかせるものではない。

祭があるのはあくまで陸。海ではもう冬眠の準備は終わっている。それが、今日なのだから。

小さい子どもに關しては、エナの成長が早いために冬眠の日を待たずに眠ってしまった。当然海遥たちも普段よりも異常なほどに眠気が襲ってきていた。大人たちも例外なく眠そうにしているのを幾度なく見た。

しかしそれも、今日のおふねひき次第で全てがわかる。海遥たち海の人間と、一樹たち陸の人間。両者の”おもい”が届くのか、それで冬眠を回避できるのか。真実は神のみぞ知る。

普段と変わりなく、姿見の前に立つ。すぐ横の机に置かれている櫛を手にとつて胸元あたりまで伸びた髪を梳かす。

澄澪は慣れた手つきで髪を三つ編みに結つていく。口にくわえていた愛用のゴムでとめてから右肩に垂れるようにする。そして前と後ろを鏡に映しながら髪型と服装をチェックする。昼間は大生の家で浴衣に着替えるのだが、おふねひきではそういうわけにはいかない。ので女子は制服を着ることになっていた。つまり朝は制服を着ている。

「よし」

小さく呟くと澄澪は財布などの最低限の荷物を入れた小さいバッグを肩にかけて、自室を出た。

リビングを通ると両親がテーブルに座っていた。澄澪に気づくとその顔はふわつと緩んだが、明らかに無理をしているように見えた。海村の住民は皆宴会以降何も食べていない。しかし澄澪たちは度々おふねひきの作業の合間に昼休憩や午後休憩で食事をしていた。その分だけエナの進行のズレがあるために、澄澪たちはある程度眠気が落ち着いている。

「いつてきます。お父さん、お母さん」

「ああ。祭は楽しんでこいよ。おふねひきは父さんも頑張るから、澄澪も頑張れよ」

「無理しちゃダメだからね。気をつけて」

澄澪の母は席を立つと澄澪に近づいて、そつと両手で澄澪の手を包むように握った。

「もし……もし、海神様に気持ちが届かなかつたら、ちゃんと陸のみんなに挨拶をして、戻ってきてね」

「うん、わかってるよ、お母さん」

澄澪の母は微笑を保ちつつも、今にも涙が零れそうな目をしていった。澄澪はいつものように笑つて、元気に頷いた。



5人はいつもの広場に集まった。心地よい朝の木漏れ日の下で互いに挨拶を交わす。楽しみもあり、緊張もあり、でもどの顔にも迷いは見られなかった。

「よっしゃ、行こうぜ」

航大を先頭にして果那ノ海から離れていく。肌を撫でる流れを感じながら海面を目指す。日差しを徐々に感じながら顔を出す。埠頭に上がってエナが海水を吸い取るまで少しだけ待つ。

「晴れてよかった」

「だな。祭日和だ」

広がる青空を見上げながら沙月が深呼吸する。航大も空をぐるりと見まわす。そして服が乾いたところで一行はまず大生の家に向かった。道順に関しては問題なく、漁協から近かったためにすぐ覚えられた。

大生の家の前に来ると、玄関の脇に見覚えのある自転車がとまっていた。これは隆広の使っているものだ。

「いらっしやい。もうみんな来てるわよ」

中に入るとすぐに大生の母が出迎えた。前回と同じようにして大部屋を襖で隔てた一室に通すと、一樹たちが木製テーブルを囲んで座っていた。皆それぞれ挨拶を交わした。

「よし、これで全員集合ね」

大生の母が皆の顔を一通り見る。大家族の母親が子どもたちを見るような、温かい瞳で見まわしてからパンと手を叩いた。

「じゃあ、女子たちはこっちにいらっしやい。私の姉さんも今日いるからおめかしを手伝ってくれるわよ」

そう言って後ろを振り向くともう1人の女性が顔を出して挨拶をする。髪はショートであるが、黒髪で目元などが大生の母とそっくりだ。

女子4人は2人に連れられて部屋を出て行く。その途端に隆広はテーブルに両手をおいて立ち膝になる。

「じゃあ、昨日はタイミングが悪くて言いそびれてたけど、俺が一番浴衣が似合うのは誰かを発表しよう」

「そうだったけ」

「ああ、確かいう前に終わったんだっけか」

昨日と同じように燃えるようなテンションで隆広がしゃべり出すが、他は今この瞬間まで忘れていたようだった。

「ああ、そうだぜ。俺だけ未発表だったのだよ。さて、語らせていただくぜ。俺独自の観点からあらゆる要素をまとめた結果、浴衣が一番似合うのは……」

「里実だろ」

「ああ!？」

高らかに宣言しようと若干の間を開けたときに大生がポンと里実の名前を出した。唐突な事態に隆広の口から裏返った驚きの声が出てきた。

「え、あ、なんで」

「だって、お前好きなんだろ、里実が」

「は、はふええ」

「あれ、なんか小学5、6年のときに言ってなかったっけ」

「ああは、ふあふあふあ……」

驚きと焦りと様々な感情が隆広の顔を幾度も変えていく。それにはお構いなしに大生がカミングアウトした瞬間、隆広はオーバーヒートを起こしたように煙を出して倒れてしまった。

「大生の攻撃、容赦ねえな」

「まあ、どうせ変わってないと思っちゃってねえ。いやあ、しかしどうせ言うくせにこんなに恥ずかしがるとは、彼もまだまだですなあ」

しゅうしゅう煙が出る隆広を若干引きつった顔で幹大は見下ろす。そして大生は昨日の隆広のマネをして喋ると一気に笑いに包まれた。きつとこの重なった笑い声も澄滞たちにも届いているだろう。

その中で、笑っているようで少し陰りのある表情をする航大を、海

遙は見逃さなかった。

「どうじゃー、男子たちー！」

少し経って、準備が終わったようで今度は男子たちがいる部屋の隣から大生の母が出てきた。そして姉と2人がゆつくり襖を開けると浴衣に身を包んだ4人がいた。

澄滯は白の浴衣に深緑の帯を締めている。普段の三つ編みではなく、頭の後ろで結んだ髪をねじってピンでまとめた髪型になっている。一輪の黄色の花がついたかんざしも付いていて、普段からは窺えない大人びた澄滯に感じられた。

沙月は紺色の浴衣に白の帯。髪を右の方を編み込みにして小さな花がついた髪飾りをつけている。こちらも少し違った髪型になるだけで驚くほどに印象が違う。

里実は赤紫の浴衣に黄色の帯を巻いて、ポニーテールから後ろで複雑に編まれてできた髪型に変わっていた。

茉紀は赤の浴衣に水色の帯、沙月とは逆の左を編み込みにしている。赤い薔薇の髪飾りをつけている。

「おおお……」

男子たちはその場で固まり、誰かが漏らした小さい声を残して黙ってしまった。それほどに、みんなが見とれていたので。

「……ねえ、何か言っつてよ。なんか、恥ずかしい」

無言で送られてくる皆の視線に耐えきれなくなった里実はすかさず感想を求めた。頬を少しだけ赤らめた里実を見て、特に航大と隆広がビクツと反応するが、彼らも頬を赤らめて何を言っつていいかわからずにいると、

「うん、4人とも似合っつてるよ」

大生が4人を見て一言。それで4人は別々の反応を示したが、いく

らか安心したようで笑みがこぼれた。

「さつすが大生君。さりげない言葉、ポイント高いねえ」

「そういうのを言えないタカボーはポイント低いな」

「うっ……！」

大生をおだてるようにして肩を叩く隆広だったが、幹大の不意打ちを食らって地に伏した。効果はばつぐんだったようだ。

「さてさて、祭ももう始まっているから、楽しんでらっしゃい。花火見終わったあたりからおふねひきの準備にとりかかるから、そのタイミングで4人はこっちに来てね」

大生の母による最後の確認事項を済ませて、一行は屋台などがあるスペースへと移動を始めた。移動中はやっといつも通りの会話が始まった。最初はどこからまわるのだとか、こういうイベントがあるからそこへ行きたいのだとか、昼は何を食べるのだとか。すべて、当たり障りない平凡な祭を楽しむ少年少女の会話だ。

「たしか、このあたりで神輿が通るんだってさ」

「そうだったね。今年は小林と手塚が神輿担ぐんだってさ」

「マジかよ！2人の勇姿を見ようぜ」

ここで一樹の思わぬ情報を受けて一行は神輿を見ることとなった。みんなのクラスの一員である小林と手塚は一樹たちにはそれなりの仲だったがしかし、海遥たちは特にこれといった絡みはなかった。クラスの中でも明るい生徒の部類に属しているその2人の知らない一面を見られるだけあって、海遥たちも楽しみだった。

「おおおお、来たぞー！」

「あいつらどこにいる？」

「あ、いたよ！小林君が一番前にいる」

「手塚は後ろの方だな」

時刻ももうすぐで昼を迎えようとしている。人は既に長蛇の列を成していて、それがまた神輿が進む道をも作り出していた。それをかき分けながら隆広が顔を出すと、ちょうど神輿が登場した。男性たちの野太い声が重なって町中に響き渡るようだった。その集団の中には小学生、中学生もいて、彼らが探していた小林と手塚もいた。

隆広たちが大声を出して手を振ったり名前を何度も叫んでいた。それに2人は気づいたのかどうなのか、後方にいた海遥たちにはわからなかったが、神輿を担ぐ人たちとまわりの人たちの一体感をびりびりと感じ取った。

それを見終わったあとはみんなで屋台巡りをしていった。ここは地元の人たちの他に外部からの人もそこそこいる。そのためにある程度の人数が利用できるテーブルと椅子が置かれるスペースがあったという間に埋まってしまう。そのために先に昼飯を済ませようという行はまず席取りをした。

「じゃあ、何人かで焼きそばとか買ってこようぜ」

「じゃんけんとかする？」

「ああ、俺が買ってくるよ」

合計で11人のグループではあるがテーブルを2つ確保できた。何人かは席に腰を下ろしたところで幹大が提案をする。ここで数人がまとめて買ってくるのは無難な流れで、とりあえずでの公平を期してのじゃんけんが始まるのだが、海遥が手を小さく上げて立ち上がった。

「え、いいのか」

「ああ、ただ俺1人だとあれだから……、よし航大」

「え、ああ、わかった」

「とりあえず焼きそばと飲み物買ってくるわ。みんな何飲みたい？」

11人分は流石にひとりでは抱えきれないのでヘルプを求めた。くるりと見まわして目が合った航大を連れて、飲み物のリクエストを聞き終えてから屋台の方へ歩き出した。

その様子を半ばあつけにとられながら皆は見送った。

「さりげなく自分が率先して買い出しへ行く。ほう、ポイントが高いな」

「お前はそのポイント制どうにかならないのか」

顎に手を置きながらふむふむと頷き始める隆広を一樹が呆れた目で見ると、その近くで、今は遠く人混みに揉まれていく2人の後ろ姿を澄澤は見つめていた。その目は普段とさして変わらないように見え

るが、しかし幾分さらに温かさを含んだ優しい雰囲気が見えた。口元も若干の違和感を感じる程度に緩んでいた。

「……澄滯？」

「え、あ、うん。なに、さっちゃん」

その様子を不思議に思っただけで沙月が声をかけるが、引き戻したかのようには元の明るい表情に戻ってしまった。

「澄滯、あんたになにかあった？」

「え……、いや、なにもないよ」

沙月が慎重に迫るように聞くと、澄滯は小刻みに首を横に振った。そして「焼きそばまだかなあ」と視線を逸らして呟き始めた。

明らかに様子がおかしかったが、沙月は深く言及はしなかった。確かに様々な過去の要因が引っかけりもしたが、こんな時に追及するのは躊躇った。

昼飯を終えたあと、一行はひたすら屋台の出し物で遊び尽くした。輪投げや射的、金魚すくいなどは当然で、そのほかにもスイカの種を口で飛ばし、距離に応じて景品がもらえるところもあった。さらには出張のど自慢のような企画も行っていた。歌はあらかじめCDがあるものだけに限られていたが、ノリで参加した幹大が見事な歌声で演歌を歌ったときには、会場中がどよめいた。

そのほかにもおやつ時には再び屋台のお世話になった。たこ焼きやチョコバナナ、杏飴などをそれぞれ買っては食べるを繰り返している。特に澄滯がその格好からは予想もできない食べっぷりを見せていた。あくまで甘い食べものに限るが……。本人曰く、甘い物は別腹だそうだ。

そんな、一夏の光景。

少年少女の在り来たりな日常。しかしそれが儂く、美しく、思い出の一部となっていく。

こんな生活が、笑いの絶えない日々が永遠には続かない。だから、

この一瞬一瞬を楽しみ、噛みしめる。

躊躇はいらぬ。今だからこそできることだつてある。感じるこ  
とができるものがある。そして、言えることがある。

足踏みしてはいらぬ。いつこの日々が終わるなんて誰にもわ  
からない。だから……。

「むむー、当たらないなあ」

「狙ってるはずなんだけどなあ」

とある射的の屋台で澄濤と沙月が獲物を捕えるような顔でコルク  
銃を構える。人差し指で引いた引き金、それと同時に発射されるコル  
クの弾。しかしそれはむなしくも狙った的の横を通り過ぎる。それ  
を繰り返していた。

「ほらほら、嬢ちゃんたち。むやみに打つても当たらないぜ」

「むむむー」

屋台の横で丸いすに座っているおじさんが笑いながら眼鏡をタオ  
ルで拭いている。ここで遊んでいく人々を端で見る、当たらなかつた  
ら残念で当たつたらおめでどう、そんな光景を楽しんでいる様子だつ  
た。

なおも澄濤が再び構えると、

「お、こんなところにいたのか」

海遥が右手にペットボトルを持って近づいてくる。声に反応して  
澄濤が顔をそちらに向けるが、先に声をかけたのは沙月だった。

「あ、海遥。射的ぜんぜん当たらなくてさ」

「んあ？あー、貸してみ」

持っていたペットボトルをコルク弾の入った皿の近くに置き、沙月  
から銃を受け取る。急に手を伸ばしてきたために沙月はビクツとし  
て一步下がってしまう。

「……大丈夫か？」

「あ、大丈夫」

咄嗟の反応に沙月は頬を赤らめながらも、それを無理矢理隠そうと海遙に銃をさつと渡すと視線を逸らしてしまう。

その間に海遙はコルク銃に弾を入れる、そのままにレバーを引いた。

「たしか弾入れる前にこれ引いた方がいいってテレビでやってたな。空気圧とかなんとか」

海遙は自分の記憶をゆっくり引き出すようにして準備を完了させ、銃を構える。狙いを定めて引き金を引くと、パンと音がして弾が飛ぶ。それはしつかりと景品のひとつにあたって倒した。

「うっしや」

「わあ、すごいよ、みはっちゃん」

横で見ていた澄滯は目をまん丸にして飛び跳ねていた。おじさんはニッコリ笑って景品を海遙に渡した。するとすぐにそれを沙月に渡す。小さな猫のフィギュアだった。

「え、いいの?」

「おう。もともと沙月のでやったからな。それに、そういうの好きで集めてた、だろ?」

貴重品をいただくようにゆっくりと手に取るフィギュアと海遙とを交互に見る沙月。海遙は微笑んで両手を腰にあてている。

「うん。ありがとう」

「おう」

「ね、ね、みはっちゃん。私も欲しいのあるの!」

「ほう。どれだどれだ」

服の裾を引っぱられて澄滯の依頼を請け負った海遙は再びコルク銃を構えている。パンと乾いた音がしたあとすぐに景品が倒れて落ちる音がする。これでもかと澄滯ははねて喜んでいた。

沙月は視線を再びフィギュアにおとす。座っている猫であるが、表情がどちらかといえばリアルよりキャラクターの方に寄っていて、柔らかな閉じられた目に3を横にした口。それが愛らしく、沙月もまたふっと笑った。



射的をひとしきり打ち終わり、移動する。

「あ、私トイレ行ってくるね」

「おう。あっちのベンチの方に一樹たちがいるから、俺らもそっちに  
いる」

「りよーかい」

澄濤は右手で敬礼をするとはたはたとトイレがある方に向かって  
いった。その時に、これも微妙かではあるが、沙月は海遥の表情の変化  
に気づいた。勘違いかもしれない、だけれど、少しだけ違うような感  
覚が体を包み込んでくる。そしてなんだか怖くなってくる。

あの日、宴会の会場の2階で見ってしまった瞬間が沙月の頭をよぎっ  
た。

そして今日の2人の雰囲気。微かな違和感。それが沙月の心臓を  
握ってくるようで、バグバグ鼓動をたてている。自然と手が胸のあた  
りに行っている。額からじんわりと汗がにじんできた。

沙月はあたりを見まわす。今は海遥と二人きりである。だから、だ  
からこそなのか……、沙月は聞いてしまおうと頭が判断してしまっ  
たのだ。

「ねえ、海遥ってさ、なんかきょう……」

しかしそれは途中で途切れる。はっと我に返って口を噤んだので  
はなく、目の前がゆらりと揺れたのだ。地震ではなく、自分だけが揺  
れて、前に倒れてしまいそうになった。

「お、おい。大丈夫か」

それを海遥は支えてくれた。一瞬の沙月の異変に気づいて両手を  
伸ばした。肩をつかんで体勢を保とうとする。

「もしかして、エナが乾いたか。よし、とりあえずこっちに」

海遥は沙月の腕を肩にまわして歩き出し、道から逸れていく。沙月  
は頭がまわらないためにただただ歩くことしかできなかった。

古びた木製のベンチに腰を掛けて、下駄を脱いだ足をバケツに入れ

る。中に入っているのは塩水だ。これは陸に住んでいる海の人間の  
ために用意されている。まさに、こういった場合に用いられる。

「ありがとう、ごめんね」

「かまわねえよ」

沙月の横に海遥が座る。後ろの方でがやがやとした人々の声が薄  
らいでこちらにまで届く。木々があつていくらか暗いが、逆に落ち着  
くことができる。

「実際エナ厚くなってるからな。それに、そろそろこれ浴びた方が良  
いんじゃないかって航大たちにも言おうとしてたところだったし」  
「うん」

海遥は腕を後ろに組んで背もたれに寄つかかる。沙月は足を少し  
だけ動かして塩水の水面を揺らす。ちゃぽんと音を立てて雫が垂れ  
る。

「つとき、さつき何か俺に聞こうとしてた？」

「え!? あ、いや、なんでもない」

「そうか? 遠慮はいらんべ」

ふと振り向いた海遥にまた咄嗟に沙月は視線を逸らしてしまった。  
海遥は軽く肩をすくめるとまた顔を前に向ける。さらにここを奥に  
進むと海が見える。そこからわずかにくる潮風が肌を撫でる。

沙月は膝に置いた手をギュツと握った。

なぜか、なぜかもどかしかった。悔しさもあふれる。ここで立ち止  
まって、足踏みをして、躊躇する自分に喝を入れたくなる。唇を噛ん  
で目を細めた。

自分の気持ちはわかっている。これほどかというほどにわかりや  
すいこの”想い”は、すぐにでも両手で取り出せる。でも、その手が  
出せない。震えて、前に伸ばせない。なぜなのかと自分に問いかける  
が、返ってはこない。

でも、なんとなくわかる。自分だからわかる。

怖いのだ。言ってしまう怖さで動けない。意思よりも前に来てし  
まう恐怖でどうしようもなくなる。でも……。

「俺は航大たちにも一応行ってくるわ。もう大丈夫ならあのホット

ドッグのお店に塩水返しておけばいいから」

そういつて海遥が立ち上がってその場を去ろうとする。それに沙月は強く反応して、そして心臓が破裂するほどに痛みを感じた。

行ってしまう、そう感じた。もう二度と近づけないほどに、もう会えないのだと思えてしまうほどに。

——その”おもい”は伝えられるときに伝えなきや、後悔するかもしれないんだ。

——その”おもい”を伝える相手がいるうちに。

それは、巴日のときに海遥が言っていた言葉。それは洋斗に言ったのだろうか、しかし沙月自信にも刺さるものがあつた。伝えられる時に伝えなきや後悔する、それが今になって頭の中で幾度も反響する。

沙月は怖かつた。自分の”想い”を伝えてみんなとの関係性を崩してしまわないか、そんな不安と恐怖があつた。でも、言わずに後悔してしまうのは、言うことが出来なくなつて後悔するのが、もっと怖いと感じた。だから……。

「待つてー！」

沙月は立ち上がり、塩水の入ったバケツを半ば倒しながら海遥に飛びつく。海遥の背中から体温を感じる。そして突然の行動に海遥も驚く。

「え、さ」

「待つて。行かないで……」

海遥の背中に頭を埋めるようにして、ぎゅつと海遥を抱きしめる。海遥は動揺そのままに声をかけようとするが沙月の声にかき消される。

「待つて、海遥」

「いや、わかつたから。ちゃんとここにいるからさ……」

徐々に弱々しくなる声に海遥は驚きと不安で焦りながらもゆつくりと沙月の腕をほどく。その場で後ろを振り向くと、そこには大粒の涙が瞳からこぼれ落ちる沙月がいた。

「沙月……?」

「海遥、あのね」

もう沙月の声は嗚咽混じりに変わっていた。ぽろぽろと零れる涙は顎を伝って地面に落ちる。潤んだ目はしつかりと海遥を捕えている。だから、海遥は目を逸らすことができない。

「海遥にね、伝えたいことがあるの」

「……………うん」

海遥は、だから沙月の言葉をすべて聞き取ると決意をする。沙月が涙ながらに語るということは、彼女が自分の気持ちを言葉にするという決意をしたからだからだとわかる。ならばそれに耳を傾けないはずがない。

「私はね……………」

ぐっと沙月は手に力を込めた。もうあとは口に出すだけだと沙月は涙を拭い一つ一呼吸置く。

胸の底からふっと現れた、知っている感覚。それはいつの日か、海遥を止めて言おうとしてしまった、あの感覚。でも、今は言える。沙月は口を開いた。

「私は、海遥が好き」

「……………!!」

沙月の想いは何の嘘偽りもなく、ひとつのカタチとなって海遥の前に現れた。海遥はびっくりしているようで、目が見開かれる。

「その……………、どう言っているかわからなくて、うまく言葉にできなくて……………。でも、これだけは言えるの。私は海遥が好き。幼なじみの好きよりも、ずっと好きなの」

沙月は、自分の中の想いは放たれた。言うか否かを迷い、まわりを氣遣っていた辛さやもどかしさも、すべて取りはらった。だからだろう、彼女の最後の言葉は、優しい笑顔で口にした。

それを聞き遂げて、海遥は少しだけ目を閉じてから真一文字に結んだ口をほどいた。

「……………俺は、やっぱり、すぐに返事をパツとは出せない」

「……………!」

「自分と向き合って考えたいんだ。むやみに答えは出しちゃうのは、きつと沙月には失礼だから。沙月には、ちゃんとした答えを言いた

い

「……うん、わかった」

海遥も腕に力が入っていた。今すぐに内側から破裂してしまいそうな体をなんとか押さえようと、落ち着かせようとしてゆっくりと話す。一言一言大切に、丁寧に沙月に届ける。そしてちゃんと届けられた。沙月も、もう涙は止まっていつもの笑顔に戻った。

日は少しずつ傾き、青空から茜色へと変わり始めようとしていた。心地よい風が包み込むようにして2人の横を駆け抜けていく。

### 第三十七話 おふねひき

日は落ちていき、茜色が徐々に紺色となっていく。空からの光が薄くなる。町のいたるところに取り付けられている灯籠に明かりを灯す。それは空間が黒く黒く、自然の明かりが無くなるほど存在感を増し、まるで生きているかのように橙色の光をあたりに滲ませる。その光に人は照らされて、時に違った雰囲気をも作り出す。

人々はもう充分に遊び尽くしたようで、そろそろと移動を始めている。向かうはこれから行われる打ち上げ花火を見られる場所だ。といっても確保されているスペースは小さいが複数ある。また場所を探せば立ったまま見られるので、皆は思い思いの場所を探して歩きまわる。しかし一行はこのあとにさらに待っているおふねひきのこともあり、造船所および大生の家に近い場所を選ぶ。幸いそこが設けられたスペースだったため、あらかじめビニールシートを置いてある。「さて、そろそろ花火見る場所に行こうか」

一樹の言葉に皆が頷いてベンチから立ち上がる。澄澄は未だに綿菓子をおいしそうに頬張っている。彼女の別腹とはなんなんだ、とみんなが苦笑いで見つめる。

ゆつたりと歩いて行くと様々な光景が目映る。屋台の食べ物をおいしそうに食べる家族。両者とも微笑みながら歩いて行くカップル。久しい友に会ったようで声大きく喋っている男性たち五人。

皆がぼんやりとした明かりに照らされて、その独特な雰囲気にかまねながら存在している。普段からない空間だからこそ現実から離れた非現実さも出てくる。人々はそれにとろけるようにして一体となり、祭を楽しむ。それが終わるまで、そのヴェールが剥がされるまで。

流れる人の波をかき分けながら進むと屋台のない、開けた場所へつく。一行が出てきた場所からずっと前方に若干弧を描くようにしてスペースがある。同じようにレジャーシートを引いている人がいるが、数はぜんぜんいない。これから集まり出すのだろう。一行は足下に気をつけながら自分らのスペースを指す。

「お、あったあった」

「横取りされてなくて良かったな」

「流石に大丈夫だろうけど、たまに起こりそうだからな」

11人が全員入れるほどの大きさのものはなかったため、レジャーシートを3つ持ってきて繋げている。そして飛ばされたり、航大が言ったようなことへの対策として鞆等を置いておいた。

「花火開始まであと20分か」

大生が付いている腕時計で時刻を確認した。時計は18時10分を示していた。

「んじや今のうちにトイレ行ってくる」

「ああ、俺も行くわ」

一樹を先頭に続々と立ち上がっていく。一樹と大生と隆広、澄滯と沙月が一旦離脱した。他の残ったメンバーたちから自然と会話が始まる。

「そういうやお前らは花火見る時ってどこで見るの？陸に上がってくる？」

「いや、普通に果那ノ海で見るぞ」

「ああ。わざわざ上がらなくても海の底だからどこでも見られる」

幹大が唐突に浮かび上がった疑問をふっかける。それに航大が常識を聞かれて答えるような真顔で答えた。海遥も肩をすくめて若干優越さを滲ませながら幹大の顔を見る。

「へえ、すげえな。ってかそういうのは便利なんだな」

「まあ場所によっては寝っ転がって見ないと首が痛くなってくるけどな」

「ああ、そうか。ほぼ真上だもんね」

航大の言葉に里実がポンと手を叩いて頷いた。確かに海からはどこでも花火は見られる。けれど、花火は海上から打ち上がるため、その下にある果那ノ海からはほぼ真上を向いて見ることになる。

「けど、やっぱり海からだと言がどうしても小さくなるんだよな。だから地上で見るのが一番だよ」

航大はうんと手を真上に伸ばしながら呟いた。その横顔を見ながら海遥は穏やかな笑顔になる。

「ほほう、さっすが花火師目指している人が言うどひと味違うねえ」  
「ちよ、バカ！」

「え、え!?航大君って花火師目指してるの!？」

海遥がさらつと出した航大の将来像を真つ先に食いついたのは里実だった。手を前について航大の顔ギリギリにまで里実が顔を近づけたために、航大は慌てて顔を逸らす。

「……え、まあ、うん」

「そういうのって何かきっかけとかあるの？」

それを逃がすまいといわんばかりに幹大が反対方向から近寄ってくる。それに観念した様子で航大は話し出す。

「俺らがまだ小さいとき、小学校低学年くらいかな、俺らは地上でおふねひき見たんだよ。そのとき丁度早めに出てきてたから花火も間近で見れたんだ。そのときが多分初めて海から出て見たんだけど、それがすつごく綺麗だった。音の迫力も、花火ひとつひとつの光も、沸き起る観客の声も、何もかも覚えてる。んで、俺もこんな花火を打ち上げてみたいって思ったんだ」

「へえ、そうだったんだ」

「澄滯はおふねひきの唄のところが入ってるらしいけどな。俺はもうその花火でお腹いっぱいって感じで……。まあ、今のところなれたらいいなって感じだけだね」

「いいねいいね、そういうの。かっけえよ」

最初は若干控えめではあったものの、航大は幼い頃の記憶を引き出しながら語る。その顔はまさに純粋な少年を思わせる、夜空を見据える微笑を浮かべていた。それを横で微笑みながら聞く里実に、腕を組んで何度も強く頷く幹大。

「俺はさ、家の関係で将来は決まっちゃってんのさ。色々自分の道を考えて進みたいって思えるのは羨ましいわ」

「そっか、幹大の家は漁師だったもんね。って、そういう私もなんだかんだ、スーパ―続けてそうだけど」

幹大は体から力を抜くようにしてレジャーシートに寝っ転がる。漁師の家に生まれた幹大だからこそその羨ましいという気持ちがかげだ



るげな顔に表れている。

「お前んところは自分からやりたくてやってるだろ。俺はやりたくねえよ、漁師」

「そう言わずにやってみろよ。今どんな感じでやってるのか俺はわからないけど、そういう生まれだからこそ学べることだってあるしさ。それに、将来大人になって果那ノ海と漁協との交流もあんだろ」

「ああ、そうか。海遥は宮司だったか。そうだよな、将来大人になって小中から見知ったやつと仕事するってのもアリかもな」

「そう。そうなりやゲリラでお前が船で出てきてるときに海に引きずり落とせるイタズラできるもん」

「それはシャレにならねえよ……」

幹大の泣き目混じりのツツコミで一同から笑いが生まれた。海遥の言葉はもちろん冗談も含まれていたが、確かに真面目な部分もあった。

自分の今いる環境だからこそできることはある。それはその環境が特別であるが故に、その時にしかできない経験があるのだ。逆にその環境に立てない人には味わうことができない経験だ。それを良いものと捉えるかどうでもいいものと捉えるかは人次第だが、自ずとその答えは成長して行くにつれて痛感するだろう。

「それで、洋斗……君ってなにか将来の夢ってある？洋斗君ならこのまま大学行っていいところ就職しそうだけど」

「ああ、それわかるわ」

里実がひよこつと頭を前に傾けて幹大で隠れていた洋斗に話しかける。幹大も頷いて洋斗の方に向き直る。今いるメンバーで唯一将来について話していなかった洋斗。2人が気になってもしようがない。けれど……。

「いや……それは」

「ああ、洋斗はまだ決まってるないんだろ？むしろ俺らみたいに将来おおよそ決まっていたり、幼い頃の夢を持ち続けているのは少数派だろ」

「まあ、そうだね。ごめんね、洋斗君」

話を振られた途端に洋斗の顔色がふっと暗くなり、言葉が詰まって

しまう。それを見て瞬時に海遥がカバーに入った。それも急に用意した嘘ではなく、それも領けるもの。中学二年生の時点で将来が既に決まっている、または希望職が具体的にあるなんてどれほどいるだろうか。大半はまだぼんやりとしていて、それ以前にまだ見据える先にはよくて高校生活だろう。

里実に謝られるが、洋斗は曖昧に領いて視線を外側に逸らしてしまった。その反応に違和感を持った里実は首をかしげてさらに顔を前に出して洋斗の顔をのぞき込もうとするが、洋斗はそれに気づいて勢いよく立ち上がってしまった。

「……飲み物買ってくる」

「おい、洋斗」

「待ってくれよ、まあ俺も一応将来決まってる組だからさ、話し合っ  
て共感しようぜ」

「お前はさっさと家業を継げ」

スタスタとその場を去る洋斗に幹大はタコのように腕を肩にまわしてついていった。その後ろ姿を先程より不安そうな面持ちで見ている里実に海遥は浅いため息をついてから話しかける。

「まあ、あいつは怒ってるわけじゃないから心配するな。でも、洋斗も色々と悩んでるんだよな」

里実を安心させるように告げると海遥も洋斗たちの後を追うようにして歩いて行く。

里実は海遥が見えなくなるまで見続け、陰が消えると視線を膝元に落とす。

「……なんか、海の人って大変だよな」

「え？」

一瞬の間を置いてから里実が呟いた。それに航大は目を開いて里実の顔を見る。

「やっぱり一番にそう思ったのは、汐帆さんの件でさ。結局は無事解決したけど、普通はあならないんでしょ。海村から追放されちゃうって……。あるとき出会った人と恋に落ちて、結ばれる。そんなのが当然だって、そんなのは地上じゃ何の問題もないのに、海は違った。

それだけじゃない。海遥君は母親とお姉さんを亡くしてる。陸にトラウマがあつたけど、今はもう立ち直ってる。沙月ちゃんは、もう既に退院してたみたいだけど、おばあちゃんが倒れて入院してた。学校ですごく心配な顔してたんだよ。で、っていうわけじゃないかもしれないけど、私が今まで生きてきた中では経験したことない辛さを、海の人は知ってるなって」

「……」

「今回だって、もう地球規模の問題だけど、海村が冬眠に入っちゃうんでしょ。そんな状況でも航大君たちは必死になつて抵抗しようとしてる。私たちだってできるかぎり手助けしてるつもりだよ。でも、怖いのは航大君たちなんだよね。自分らが眠ってしまったらいつ目覚めるかわからない、これが怖くないはずなのに。私のお父さんは県外に単身赴任でここにいないけど、連絡はしようと思えばいつでもできる。でもみんなは、眠ってしまったら起きるまで会えない。そして目覚めても、他のみんなが起きているとも、そしていくつの年が経っているかも……」

「お、俺はー」

里実の消えてしまいそうな声を吹き飛ばすように航大が口を開いた。突発的に声を出したために里実が驚いて肩がビクツと上がった。「俺は、その、別に大変な人生は今のところ歩んでないぞ！親父とお袋はいるし、何不自由なく生活できてる。……そりゃ、海花が死んじまったのは辛かったけど、海遥の方がもっと辛かったんだ。でも、言つてそれくらいだ。白風中に来て初日のあれも、振り返ればむしろいい思い出だ。俺は元気が取り柄だからな、ニカツと笑つてたまに馬鹿なこと言つて、みんなという。俺はそれだけでも充分に幸せなんだ」

「……！」

「それに冬眠なんて怖くねえよ。なんたって、それを防ぐために俺らは今日沙帆ちゃんも乗せていくんだからよ。俺たちは決して海神様を忘れてなんかいないって気づいてもらうんだ。だから……」

航大の言葉は自信を纏っていた。彼が断言していた、彼の取り柄が

元気だからこそ、そして仲間を大切に思っただけ信じているからこそ、彼はそう言えるのだ。

航大は一旦視線を外してから、再び里実の顔を見る。

「何も心配することはない。そんな暗い顔しないでさ、いつも通りに笑ってろよ」

「……うん、わかった」

航大の言葉を受け取り、ゆつくりと体全体に溶け込ませるように頷いた。そして曇りのない暖かさのある笑顔を浮かべた。

ああ、そうだ、と航大はまさに感じた。

航大は自分の内なる”おもい”を見つめる。それは目の前にあるわけではなく、心の内側にひっそりと置かれている。それが生き物のように、少しだけ揺れ動いたような感じがした。いや、そうなのだろうとすぐに訂正した。

今みたいなの、見てるだけでほっとするような暖かい笑顔に惹かれたのだ。里実の笑顔をもっと見ていたい、そうとも思った。今でもなにひとつ変わらない。その瞬間からずっと変わらず、確かな存在として心の中にある。ひとたび傷つければ消えてしまいそうなの、その”想い”を今、解き放つべきなのではと直感的にそう結論づけた。

どうしてかは航大自身もわからない。けれど、そうするべきだと、まるでもうひとりの自分に言われたかのようだった。でもだからこそ、それを信じられる気がした。

ふと、記憶の一部からあの日の出来事がふわりと溢れ出してくる。

——その”おもい”は伝えられるときに伝え無きや、後悔するかもしれないんだ。

——その”おもい”が消えて無くなってしまいう前に。

あの日、巴日で海遥が言っていた言葉だ。航大は、その言葉は洋斗に対して言っていたのかと思っていた。しかし、頭の中で反芻しているうちに、洋斗だけではなく自分にも当てはまることだったとやっと理解した。自分の心の中でしまっていた、この”想い”はいつか放たなくてはいけないのだ、と。ささいなこと傷が付かないように、里実への想いを勝手に大切に保とうとしていた。でも、それは永遠に置

いておくようなものではないのだ。

なにもしなければ、大切にしまっておけば傷つかない。でも、どこかできつと後悔する。言えないまま残ったそれを見て、心残り以外にどうたえようか。言えないままもし壊れてしまったら、もつと早くに出すべきだったと嘆くだろう。その残骸を見て、哀れ以外にどうたえようか。

今日は店番してるかな、今日は作業中にさりげなく話せるかな、なんて考えていたちよつと前の自分を思いっきり笑ってやろう、航大は決意した。

「なあ、里実」

「うん？」

前は恥ずかしがっていたはずの、彼女の名前を航大は口に出す。視線は真っ直ぐ遠くに広がる海に向けている。里実は再び航大の顔を見る。

「無理かもしれないけど、あまり派手に驚かないでほしいんだけど」  
先程里実を元気づけた時とは打って変わって真面目な顔の航大を見て、里実は曖昧に頷いた。

航大にだけは見えた。それが心から飛び出していく様を。

「俺は、里実が好きなんだ。ただ友達とかじゃなくて、ひとりの女の子として」

「……へ!?!」

里実は航大からの告白を受けて一気に顔が赤く染まったまま固まってしまった。そのため裏返った声が転がるようにして出てきた。

航大もさすがに耐えきれずに頬を赤らめて少々言葉を詰まらせながらも続ける。

「あ、あー、別に今すぐ返事をしろとかじゃない。ただ、その……伝えておかなきゃって思ったんだ。後回しにしていたら、後悔する気がして」

「……」

「まあ、もし答えを出してくれるなら、俺にちゃんと行ってほしい」  
「……わ、わかった」

航大が大切に守っていた想いは解き放たれた。それは当然だが傷ついたものではなく、ただひとつのヒビもない綺麗で、純粹な想い。磨かれた輝きそのままに里実へと渡った。そしてそれをどう受け取るか、里実は航大をどう見るか、それは彼女自身で考えて自分を見つめ、そして答えを出すのだろう。頬は赤らめたまま航大に向けていたままだった視線を再び膝に落とす。

そして訪れる無言の間。まわりではちらほらと集まりだした人々が持参したレジャーシートを敷いたり、誰かと待ち合わせしていたり。徐々にざわつき始めるが、しかしこの誓い距離ではそれらをもつとしても気まずさは埋められない。

「そ、そういえば、みんな帰ってこないな。海遥たちならまだしも、先に出た一樹たちとか遅くね？」

「あ、そうだね。誰も帰ってきてないし、それに……」

航大が断ち切るようにして話しかける。この間にも誰か帰ってきてあのやりとりを見られるのでは、と今更航大はハッと気づいて体が沸騰する感覚に襲われる。里実は自身が身につけていた腕時計に目をやる。その長針は既に6を示していた。

刹那、2人の目の前から光が溢れ出す。一瞬の、鼓膜を揺らす音と共に現れた巨大な花。それは見事に、2人を見入らせてしまった。

それはあまりにも突然で、目を疑ってしまうような非現実さで、しかしそれは必然性さえも思わせるほどにそこに存在している。これは、やはり当然かと、一種のあきらめがつくほどにその光景は広がっていた。

それは一樹らがトイレへと向かったそのあと。一樹とほぼ同時に

出た隆広がついでに飲み物を買に行くと言つてぱたぱたと駆けていった。それを見送ると、2人よりも先に出た大生を探そうと辺りを見まわしてみるが、その姿は見つけられない。

「もう戻ったのかな」

徐々に彼らがシートを敷いた場所に人が流れていく。トイレは相変わらずの混みようだったが、あちらも混み出すのは時間の問題だった。もう一回見渡してから一樹は先程の場所へ戻ろうとした。

普段はきつと気にも留めないであろう、左の隅にある小道に目が行った。草木の隙間を縫うような小道が、なぜだか一樹を誘うようにして口を開いている感じがした。それを受け入れるようにして進んでいく。初めて通る道は靴を履いた足からでも感じる、不思議な感触。歩いている今でも、この先に待ち構えるものがないものであるのか悪い者であるのか、少量の期待と不安が入り交じった変な心地。

ちよつと入ったところから開けた場所が見える。そしてそこに感じる気配。立ち止まって、今度は足音を立てないようにして木々に隠れつつ数メートル先を見てみる。すると……。

ああ、と一樹は薄い声を出した。今一樹の目の前に存在する光景が、彼にとつて驚きであり衝撃であり、また悲しみもあり苦しみもあり憎しみもあり、しかしそれを納得してしまえる、ありとあらゆる感情が同時に飛び出してひとつの塊となった。それが一樹から放たれた今、彼の内側には一時的にであろうが、空白だけが残った。体に力が入らなくなったのを一樹は感じた。

そこには2人いた。片方は大生、もう片方は澄滯だった。2人は開けた場所でお互い向き合つて立っている。なにかを話しているのが見えるが、ここからでは後ろから溢れ出す人々の喧噪とある程度の距離で聞き取れない。しかし……。

澄滯が目を閉じながらなにかを言っている。その顔は、遠目ではあるが決心をしたかのような必死さが窺えた。そして大生の方から言葉をかけられたのか、ぱつと目を開く。さつきとは違って意外そうな表情をしている。そして少しの間のあと、普段のような笑顔を見せていた。大生の方も安心したような、どこか柔らかな表情をしている。

そしていくらか大生が話している。

また、ああ、とため息交じりに出た。一樹は動けなかった。今すぐにも足を動かして、きびすを返して戻りたかった。でも、できなかった。目を動かすことすら叶わず、2人の無音の会話を見届けてしまった。そして澄滞と大生の様子。2人だけの空間。真剣な顔。ほころんだ笑顔。柔らかい表情……。ああ。

一樹はやつと戻ってきた感覚をゆっくり確認すると、くるりと元の道へと戻る。そして去り際に、

「お似合いじゃねえかよ」

そう捨てるように言った。その重ったるい、そして諦めた言葉はしかし、背後から繰り出された音と光にかき消された。

結局は全てではないが花火を全員で見ることができた。幹大と隆広が大声で「たーまやー!」と何回も叫んでいたが、まわりもそういった雰囲気のために彼ら全員で叫んで、笑って、楽しんだ。赤、青、緑、橙など色とりどりの刹那の花が咲き、散る。ときにはハートやとあるキャラクターを表した特殊なものも上がっていた。

黄金の滝のような怒濤のラッシュで花火の終了を告げる。それぞれは興奮した様子で花火の感想を言い合い、誰からともなくシートを片して、いよいよ準備に取りかかろうとする。

女子たちは駐車場にいる大生の父と聡太郎の車に乗り込む。女子たちの着替えも大生の家ではなく埠頭近くの建物に持ってきてきてあるそう。一行はそこを目指して車を走らせる。

大した長距離ではないのですがすぐに到着する。女子たちは制服に、男子たちははっぴへと着替える。見れば大人たちはやる気満々のようで、まさに男というより漢だった。その彼らがいる横にはおふねひき



仕様に多くの旗をつけた船がずらりと横に並んでいる。一番中央にある船には、みんなで作ったおじよしまが船の前部分に置かれている。ここまでの船が横並びになるだけでより壮大なものに映る。

しかしその間も、一樹は魂が半分抜けたような浮遊感を感じ、ときより視界に映る大生を目で追っていた。あれ以降澄濤個人との接触はなく、大人たちと話したり海遥などと話したりしている。至って普通の大生だった。しかし、しかし……。

「よっしや、集まれ」

大生の父のかけ声で一氣に全員が集まる。

「今年のおふねひきは今までとは違う。今日で彼ら海村の子たちは冬眠についてしまう。俺ら全員の気持ちも海神様に届ける。それが届けばきつとこれからの地球の寒冷化も収まり、こいつらは眠らなくていい。だから、こいつらの、そして俺らのために、海神様に届ける、全力で。……成功させるぞ！」

『おうー！』

両隣の人の手と手を繋いでひとつの円を作った。大人数故の円陣だ。大生の父の力の入った声に負けないよう、全員が声を重ねる。

それぞれが指定された船に乗る。海遥は若い漁協組合の人に大旗をもらう。ずっしりとした重みを直に感じ、海遥も決心した表情を浮かべる。

「みはっちゃん」

後ろから声をかけられる。振り向くと澄濤が海遥をしっかりと見つめて立っている。

「頑張つて。旗、しっかり振つてね！そうすれば、誰も迷わない。気持ちも全て、海神様に届くよ！」

「……おう。まかせとけ」

澄濤の言葉を意外に思つてか海遥は一瞬驚いたが、すぐに笑みを浮かべる。

「そうよ。海遥、頼んだわよ」

「ああ。汐帆ちゃんも、頼むぜ。なんだかんだ、超重要ポジションだからな」

「ふふふ、そうね」

この日のために作った青と白の衣装を身に纏った汐帆ともお互いの健闘を祈った。汐帆の笑みからも緊張と決意どちらも窺える。

そして、おふねひきは始まった。時刻は20時丁度。

がたいのいい男性が太鼓を叩き始める。それを合図に海岸沿いに置かれた松明に火を付ける。それがいくつも灯り、闇夜に佇む一本線となる。灯火はゆらゆらとたゆたう海に映り、幻影の火を作る。和楽器隊による演奏も始まった。和を感じさせる笛と太鼓と琴の音が重なり合い、絶妙な音を奏でる。

船は2列に並び、前列の船にいる海遥が呼吸を整えてから大旗を振り上げる。それと同時に船は動き始める。真つ直ぐ2列だった船は一隻一隻違う速度で動き始め、ひとつの円を作る。その円の中央を陣取るようにおじよしさまと汐帆が乗った二隻が来る。

「よし、始めよう。ウロコ様」

それは地上ではなく、海の底から。渦波神社のまわりに和洋たち青年会、協力してくれた男性たちがしつかりと船が進んでいる場所を見上げる。

ウロコ様は静かに頷いて、手に持っている杖を振り上げて、下ろした。青い布で付けられた鈴が透き通るように鳴る。その刹那、町中の光となっていた御霊火が消え、船が進む道をなぞるようにして再び現れた。それと共に和洋たちが”おふねひきの唄”を歌い始めると、それがそのままゆがめられることなくウロコ様の力で地上へと届けられている。

混沌の海から現れた輝かしい青の光。そしてしつかりとした歌声。それはおふねひきを見に来た人たちを驚かせるには充分だった。そして海遥たちも動揺に驚き、そして安心感を得た。

「すげえ……」

「これが、海の……!」

宝石のごとく輝く青の光を見つめて幹大たちも思わず見とれる。大生も、自身の憧れであるからこそ、余計に目を大きく開いてこの光景を焼き付けている。

陸からも負けじと全力の歌声を響かせる。陸と海がひとつになり、ともに歩んでいる。海の灯火に導かれ、彼らは進む。あてのない、けれど確かな”おもい”を乗せて。

果たして、海神様はこれを見ているのだろうか。彼らひとりひとりでは無力に等しい存在かもしれない。海の広大さからすればもはやそうであろう。

けれど、彼らはひとりではない。みんな助け合い、声を掛け合い、ときにはぶつかり合いもするが、でも等しく生きている。心から大切に思える人たちと、ずっと。

だからこそ彼らは抗う。それが既に決まっていたのだとしても、運命だと言いつ渡されたとしても。彼らはその人たちと共に、並んで手を繋いで、生きたいのだ。

それが彼らの願い。彼らの繋がりを引き裂くものなら、どんなことをしてでもつなぎ止める。その厚い絆で結ばれた彼らは、海神様が求める世界の在り方とは違うのか。

どうか、どうか、聞いてあげてはくれないだろうか。彼らの、ちっぽけな人たちの集まった”おもい”。そのカケラだけでも拾ってくれると信じている。そう、信じていた。

『※※※※※※※※※※※※※※※※』

「……………え？」

微かな、しかし囁いたようではない、そんな声を海遥は拾った。振り向くが、運転している大生の父は不思議そうに顔をしかめた。

海遥もすぐになにかの聞き間違いだろうと結論づけた。エンジン音や歌声が重なってそう聞こえたのだろうか、と。

『※※※※※※※※※※※※※※※※！』

「……………!!!」

違うと海遥はそう思った。いや、感じた。明らかにこれは、海遥の耳がしっかりと拾った声だ。最初のよりも少しだけ近く、感情がほんの少しだけ伝わってきた。

ぱつと海遥は両サイドの船に目をやる。そこにいた航大と澄濤も、

目を開いて驚いた顔をしている。しかし、陸の人たちは何も聞こえていない様子で船を操作している。

海遥は察した。急に体温を奪われていくような、ぞっとした感覚。鳥肌がたち、そして勢いよく後ろを振り返る。

「今すぐ止まれ!!引き返せ!!」

緊迫した様子の海遥を見て面食らった様子の大生の父。彼が理由を聞こうとしたときだった。

前方の海がさらに輝きだし、黒々とした海が水色になっている。それは御霊火の色ではなかった。そして徐々に海が荒れ始め、いくつもの口が姿を現した。巨大な渦だ。

「な!?!」

「これは、まさか!!」

「海神様が、本当に……」

目の前に起きている現象に全員が驚き、目を見開いている。荒波により船は止まらざるをえなくなった。しかし……。

「きやああ!!」

「……っ、汐帆ちゃん!」

予想外の揺れにバランスを崩した汐帆が海に放り出される。澄滯はとっさに海に飛び込む。さらに荒波は多数発生して数名が海に放り出される。それを助けようと海つ子たち全員が海に入った。

「おい、みんな船にしがみついとけ!絶対に渦に巻き込まれないように操縦しろ!」

大生の父は喉がちぎれるほどに大声で叫びながら指示を出す。渦は7つ。しかも発生した場所が橋の近くのために、渦に飲み込まれるのと橋の支柱に接触することの2つの危険があった。各々が慎重に操縦しながら近くの海岸へと目指して進む。

「汐帆ちゃん!!」

渦によってどんどん底へと引きずり込まれていく汐帆を澄滯が追う。しかし渦も異常なスピードで汐帆を引き込むため、なかなか追

つかない。

「……ダメ！ダメなの！」

澄濤の力一杯込めた力でなんとか汐帆をつかむ。しかしこれだけは終わらない。未知なる力との引き合いは追いつく以上の困難さだった。

「ダメなんです！汐帆ちゃんは、辛くて痛くて泣いても、自分の思いをしつかりと持って、やっとそれが叶ったんです！汐帆ちゃんは、地上にいる人の大切な人になったんです！だから、それを引き裂かないで！誰かの好きを、みんなの好きを、壊さないでよおおお!!」

『※※※※※※※※※※※※※※※※！』

「みんなの”おもい”を……みんなが叫んだ言葉を、気持ちを、無しになんてできないんだから!!!だから……やめて……」

『※※※※※※※※※※※※※※※※！』

「……どうしても、どうしてもみんなの”おもい”を、好きを引き裂くのなら……」

徐々に汐帆ごと海の底へと沈んでいく澄濤。いくら叫んでも、喚いても、海神様は変わらない。いくらみんなの”おもい”があっても、何も変わらなかった。なら……と、あふれる涙を振り払い、澄濤は決意した。

「……私を、汐帆ちゃんの代わりにしてください」

「せえーのー！」

海遥たちが海に落ちた人たちの救援をしている。力を合わせて落ちた人を船に引き上げる。まわりは大パニック故に誰がまだ海にいるのかがわからない。しかし目の前にある命を優先するのは至極もつともな判断だ。

「あとは?」

「わっかんねえけど、汐帆ちゃんが上がってきてんのかわからん。でも息はできるから……、あークソ、見てくる!!」

海遥の言葉に半ば逆ギレのような返しで航大が海に再び飛び込む。洋斗も続けて飛び込んでいった。

「てか、この人息ある？」

「ああ、大丈夫だ」

船にいた男性が心臓マッサージをすると、すぐに水を拭きだして意識を取り戻した。

「うし、よか……」

1人の命が吹き返したことに一安心した、その時だった。突如として押し寄せてきた大波に船が大きく揺らされる。立っていた人は危うく船に落とされそうだった。しかし、危険はもう一つ、支柱との接触があった。

「沙月イ!!」

大波の力によって船が押されて支柱と正面衝突をしそうになる。そしてその接触面に一番近い場所に、恐怖で引きつった顔の沙月がいた。海遥は咄嗟に不安定な地面を蹴った。

必死に伸ばした手は沙月の腕をつかみ、勢いよく接触面とは反対側の方に沙月の体を引っ張る。駆け巡る展開に追いつけない沙月はそのまま船の床にたたきつけられる。

しかし、海遥はその勢いを殺すことはできない。沙月と位置が反転したのだ。そして体は振り投げたために支柱を背にしていた。

「……ガッ!!」

受け身を取ることもままならず、船の一部と共に海遥は支柱に激突した。味わったことのない衝撃が海遥の頭を襲い、一瞬にして海遥の体の力を奪い去った。為す術なく、海遥は頭部からの出血を支柱に擦りつけるようにして海に落ちた。

「いや……いやああああ、海遥!!」

沙月は狂喜乱舞のような叫び声を上げて海へと飛び込む。

「おい、待て嬢ちゃん!また波が……チクシヨウ!そつちに波行くぞおおおおお!!」

沙月を止めようとしたが間に合わず、さらに追い打ちをかけるようにして大波が襲いかかってきた。男性はなんとか操縦して避けたが、

その波は勢いそのままに近くの船へと牙をむいた。そこには、一樹と隆広がいた。

「クソ、避けきれない。2人とも、こっちだ!!」

「……………うおおお!!」

男性が大声で2人を呼ぶ。しかしタイミング的にそれは無理だと、一樹は判断したのだ。一樹は咄嗟に隆広の体を押した。巨大な手で覆い被せてくるような波は船の前方部分だけを襲った。ギリギリ一樹によって避けられた隆広だったが、今さっきまでいた一樹が見当たらない。

「あ、あああ、一樹いいいい!!」

「待って……………待って!行かないで!」

沙月は必死に海の底へと落ちていく海遥を追う。足が痛くなるほど振って下へ、下へと向かうにもかかわらず、海遥との距離は縮まらない。彼の頭部から流れ出す血液が時折沙月の顔をかすめていく。その血が、黒々とした青に混ざる赤が、沙月の心を余計に痛めつける。「まだ、まだ聞いてない……………。海遥の答えを、まだ……………」

溢れ出てくる涙は止めどなく出てきては海と混ざり合っていく。伸ばした手にはただただ海水があたる。海遥の足にさえ触れられない。届かない。

「待って……………」

今日の、あのととき。海遥がどこかへ行ってしまうような、心臓が破裂するほどの不安と恐怖が再び姿を見せる。それは、もしかしたら今この瞬間を予言していたのだろうか。そんな運命の悲痛さを嘆いても、沙月はやはり海遥には届かない。

そして、黒々とした渦の闇へと海遥が潜ってしまった。もう海遥の姿は見えない。彼の顔も、体も、体温も、声も。すべて奪われてしまった壮絶さと痛みに沙月は顔を歪ませて叫んだ。しかし突如として襲ってきた不規則な渦の波に叩きつけられ、彼女もまた意識を手放し

てしまった。

ああ、動けない。

そんな薄っぺらい言葉しか思いつかない一樹は、渦の中にいた。きつと大抵の人間は知るよしもない渦の中の水圧に体は動くことすら許してはくれない。

情けない。そうも思えた。それは一樹にとって様々な感情を含めた、そんな言葉。それを捨てるようにしてぼやける視界をなんとか巡らしてみる。

すると、それは果那ノ海の町であろう風景が見えた。ぼやけているものの、きつとそうだろうとわかるシルエツト。昔見たテレビなどの記憶が瞬時に蘇り、視界との照合させた。間違いなく、果那ノ海だ。息ももう続かない。吐きだしてしまいたいもどかしさに勝てずに、息を吐いた。酸素を求めてもあるのは海水。ぼやけていた視界が遠のいていく。そして最後に見えたのは、誰か2人がこちらに近づいてくる光景だった。

「洋斗！早く行くぞ！」

「わかってるよ！」

航大と洋斗で一樹の両サイドをつかんで引き上げる。ひとりよりも2人の方が格段に早く上がることができる。そう、それだけなら。渦の中で目まぐるしく荒れている流れ。それに2人は煽られてなかなか上に行けない。

「クソが！進まねえ」

「早くしないと、一樹が」

もてあます力などないくらいに足を振っていくが、やはり左右、さ



らには下に押されてしまう。そうこうしているうちに、一樹のタイムリミットは刻一刻と迫っているのだ。

と、ここで航大が、

「なあ、なんか2人に増えたのに1人で上げてたときより流れが強くないか？」

「ああ!？」

急に航大が疑問に思ったことを口にする。洋斗はこんな状況で、と航大を睨もうとしたが、彼自身もどこか感じる違和感があった。

「そうかも、しれないけど!今そんな……」

洋斗が言いかけたときに一段強い真上からの流れに2人は怯んでしまう。海で生きてきた2人でさえも苦痛に感じる流れ。知っている海なのに、知らない海にしか感じられなかった。

「もしかしたら、海神様は……」

航大が目を見開いてそう呟いた瞬間、再び襲いかかる強烈な流れ。それが2人に浴びせるようにして当たり、勢いに負けて航大が一樹の左肩から離れてしまった。

「航大!!」

「構うな!行け!一樹を死なせるな!!」

航大はみるみる海の底へと押し込められていく。洋斗は何度も航大の名前を叫ぶが、それに答えてくれる彼の声は、聞こえなかった。

「なんだ、こりゃ……」

果那ノ海では、誰かのかすれた声が転がる。目の前にあるのは御霊火の道でも、彼らの力強い歌声でもない。いくつもの渦。ぐるぐると回り続けるそれは猛獣の牙のようにして海を喰らう。誰もが口を開いてその光景を呆然として見ることでできなかつた。

「おい、ウロコ様、こいつあいつたい……」

そう誰かが振り向いてウロコ様に問いかけた途端、その男性の顔を覆うようにして青白い球のような膜が現れ、気を失ってしまった。それが疑問から驚愕に変わる前に次々と男性たちが意識を刈り取られていく。迫り来るそれに和洋は咄嗟に体勢を低くしてその場を回転して離れる。

「ほう、流石じやの、和洋。やんちゃしてばかりの昔の姿を思い起こされるぞ」

「ウロコ様、あなたは……!」

和洋が顔を上げてウロコ様を睨み付ける頃には、他の全員が倒れてしまっていた。その彼らを悲しみのような細い目で見ながらウロコ様は口を開いた。

「のう、和洋よ。ワシは誰だか知っておるか?」

「は?」

この場からは明らかに外れた質問が来たため、和洋でも顔を歪めてウロコ様を睨み付ける。

「ワシは、ウロコ。じやる?あくまで、ワシは海神のウロコなんじやよ」

普段とは変わらない口調に、どこか諦めた感情を和洋が感じ取った頃には、彼もまた青白い膜に覆われてしまっていた。

「……ゆるせ、和洋。そして子どもたちよ」

最後の1人の眠りを見届けると、ウロコ様は自信の杖をひと振りし、鈴を鳴らした。それは雫が水面に落ちたように瞬時に広がっていった。海でさえも揺らすその音色は町中に届き、そしてそれは光輝く膜となり、町を覆う。それと同時に渦はひとつとなり、膜以上の輝きを放って姿を変えていく。

それを、僅かに意識を取り戻した海遥は見ていた。

「一樹いいいいいい!!」

「待て！お前が行ってどうなるんだ!？」

涙は止めどなく流れ、狂喜乱舞のごとく叫んで海へ飛び込もうとする茉紀を大生が必死に抑える。

おふねひきは当然中止。もはや災害と化したそれは人々を興奮から一気に絶望へと引きずり込んでしまった。沈没してしまった何隻かを除いて全てが埠頭へ帰還した。怪我人もでている。そして、行方不明者も。

「どうしてそんな落ち着いてられるの！大生は心配じゃないの!？」

「心配だからこそ、俺らが喚いてもしょうがないだろ！」

怒鳴り散らす茉紀を必死に抑えようとする大生を助けるように里実も駆けつける。

「汐帆ちゃんは海の人だけど、一樹は陸の人なんだよ！エナもないのに呼吸なんてできないよ!!」

「だから落ち着けて！今みんなが探しているんだ。彼らに任せるしかないんだ」

現在、汐帆が海岸近くに浮かんできた。それをいち早く駆けつけて確認してみたが、気を失っているだけのようだった。しかしそれがただ本当に気を失っているのか、眠ってしまったのかはまだわからない。

「もし……もし一樹が……」

「おい、誰か上がってくるぞ！ライトこっちに向ける!!」

茉紀が泣き崩れたとき、一人の男性が叫んだ。他の人を大きくて招いてライトを動かさせる。そこには確かに誰かが浮かんでくるのが見える。それも二人。

「ふはあ……!」

顔を出したのは洋斗。そして力なく目を閉じている一樹だ。

「早く上げる上げる!!」

船がすぐに出て二人を引き上げる。そこに茉紀たちも乗船して二人に駆け寄る。大生の父が手早く一樹の右横に膝を突いて両手を合わせて心臓マッサージを開始する。その横で息が完全に上がって倒れ込む洋斗を大生と里実が看病をする。海の人間でさえここまで疲労困憊となつている姿を見て、海の中で起こっていた惨劇が想像できる。

「……はあ、はあっ！……みんな、なは？」

息が切れながらも洋斗は体を震えさせながら顔を上げる。彼の視界に映る里実は、涙を流しながらわなわなと震える姿だった。そしてゆっくりと左手を水平にあげてから指を指す。

それとほぼ同時に一樹が息を吹き返す。水を吐き出して微かに開いた目には、きつと茉紀の泣きじやくる姿が映っているだろう。茉紀の叫びには目を向けず、洋斗は里実の示した方角に顔を向けた。

「……え？」

洋斗は、理解できなかった。今日の前にあるものが、果たして現実なのか、夢なのか、判断ができなかった。もしかしたら幻想なのかとも考えた。しかし、里実の顔を再び見るが、表情は変わらない。そこには、やはり彼女も感じていた、この世の物とは思えないという思いが表れていた。

ゆっくりと、また洋斗はそれを見る。現実ではないと、なにかの間違いだと、誰かにそう言ってほしかった。

そこには、闇に浮かぶ月に照らされた、巨大な氷の山があったのだ。

### 第三十八話 降り積もった時。止まってしまった時。

時というのは人によって感じ方が違う。ある一日は短く感じた人もいれば、長く感じた人もいる。

しかし時はどっちにしろ、流れていくのだ。日が昇り、いつかは沈んで夜が来る。月は現れてもいつかは消えて、再び日が昇る。小さい頃から知っているその循環は止まることはない。一日一日が繰り返され、時を刻んでいく。その中で人は身体的にも精神的にも成長していく。1年前と比べて着る服のサイズが変わったり、食べる量が変わったり。学生なら学ぶ難易度が変わったり、時期的には進学もする。考え方ももしかした変わっているかもしれない。

つまり、時は止まらない。それによつて人も止まらず、人それぞれのペースで進んでいく。

しかし、これは全員が体験するわけではないのだが、時が止まることがある。それは上記のことをいきなり否定するわけではない。無論、時は進んでいる。日が永遠に昇っているわけではない。しかしながら、止まるのだ。それは、彼らの中で。

日本にある海村14箇所すべてが冬眠に入っている。そしてどこから誰か目覚めたという報告もない。政府は14箇所全てが冬眠に入った年からこのまか不思議な現象の調査に乗り出したのだが、海村の近くで交流があった地域すべてから、調査拒否の言葉がでた。それはいうまでもなく、眠っている彼らを起こさないでほしい、そっとしておいてほしいというものだった。

しかしそれで簡単に終わるはずがなかった。

その14箇所の中で特に注目を浴びていたのが果那ノ海だった。それは当然、彼らの冬眠と同時に氷山が現れたのだから。これは果那ノ海だけ。その異常現象の中の異常現象に専門家はこぞつて久里ノ上へと足を伸ばした。

当然久里ノ上の皆はどかどかと部外者が入ってきて調査やらなんやら始められても、いい気分がするはずがない。彼らは、あの日の惨劇をこの目で見てしまったのだから……。

しばらく双方の対立があった。しかし専門家たちが久里ノ上で連日の調査のためと言って近くの宿を無償か低料金で部屋を貸せという、明らかな暴挙などが多数寄せられ、このままいけば裁判沙汰になるところまでいった。それだけは避けたいと、苦い顔をして彼らは退去していった。そして今後そういったものがないように、ここ久里ノ上へと辿り着くための大きな橋の通行を規制したのだ。この方法が功を奏したのか、これ以降無遠慮な専門家などは近寄ってこなくなった。

テレビでは連日それらについての報道はあった。久里ノ上でも度々上空からヘリコプターが飛んでいたのを住人が目撃している。そして誰もが、それをいい目で見てはいなかった。

おふねひきから、もう5年が経っていた。しかしそれを感じさせるように、いくつかの店が潰れ、いくつかの世帯が引越したり、そして”おふねひき”自体も行われなくなった。それは確かに、死人まで出かかった災害になってしまったのだから行われなくなるのも当然だろう。しかし、あくまでその言い分は表向きだ。彼らの本音はきつと、もう見たくないのだろう。あの光景を、あの悲劇を、あの悲鳴を、あの涙を、あの海を……。

澄んだ空の下で1台のトラックが橋の上を爽快に駆け抜けていく。エンジン音を響かせながら道路を蹴るスピードは風を切るほど。

もう年月が経ったために規制はもうない。しかし元々この通りが少ないため、そして久里ノ上の過疎が徐々に進んでいるために今日もガラガラに空いている。

運転手は慣れた手つきでハンドルを操作して橋を降りて一般車道へと移る。開けた窓から入ってくる風は、やはり7月下旬とは思えない冷たさだ。鎌で肌を撫でられるような心地で運転手はぶるつと体を震わせる。

トラックがついに辿り着いたのは一件の店。古びた看板は5年前よりかはペンキがはげてしまっているが、文字はちゃんと読める。緑の横長の看板に書かれた白の文字は”スーパー・マツシゲ”とある。

閑散とした場所にトラックが来たとなれば、ひとときわエンジン音が目立つ。故に店の人が気づくのは当然だった。

「あ、どうもお疲れ様です」

店からひとりの女性が出す。長い髪を後ろでひとつに結んだ彼女は大人びた様子だが、自然に出る笑みがなんとも可愛らしい。そんな彼女でもこの店長をしているのだから驚きだ。

「どうも。仕入れ品ですよ……委員長」

「え、あ、隆広君!?!」

目を丸くして口元を手で隠す彼女、里実の前に現れたのは隆広だった。彼は5年前と比べて身長もかなり伸びた。里実と同じくらいだったのだが、今では10センチほど違う。

「へへ、やつとこっちの担当を任せられたんだよね。ここの出身つても理由のひとつだし」

「やったじゃん!最近隆広君見てなかったから何か新鮮だな」

へへへ、と隆広はでこをかきながら照れ笑いをする。

「最初は大変だったけど、もう慣れてきたんだ。それで、早くここの担当になりたかった」

「……うん」

隆広は照れ笑いから徐々に微笑へと変わっていく。そして合わせ

たわけでもなく、2人してとある方向を向く。海風がそれとなく流れ  
てくる、風いだ海の方へ。

静かな間を置いてから、里実が口を開く。

「実はね、今週末に返ってくるんだよ、あの2人が」

「マジ!? あいつらひっさしぶりだわ。俺も休みだから戻ってくるよ」

「うん、待ってる」

隆広はぱあつと広がるような笑顔を見せて頷いた。里実はニツと  
笑ってから、2人で協力して商品を下ろし始める。その途中から汐帆  
も参加した。久しぶりに見る隆広をひとしきりなで回していた。恥  
ずかしがる隆広を見て里実と汐帆は笑っていた。

それでも、こんな在り来たりな光景があっても、止まっている。時  
は、彼らの中で。あの日のあの夜、あの瞬間から、ずっと。



### 第三十九話 時を刻んでいく故郷

それは、まるで耳元で雫が水面に落ちているような、心地よい音。波紋を生みだして揺れる先には、延々と闇が広がっている。

ここはどこだ？俺はなにをしているんだろう。どうやっても思い出せない……。

周りを見渡しても闇、闇、闇。足下には広がる水面。足を動かす度に揺れて広がる波。しかしその底までもが闇に覆われている。ただ、その水は青々と輝いている。

なんなんだ。ここは、いったい……。

——ねえ、こつちだよ。

「……」

耳元で囁かれた声にはつとすると、もう闇は消えていて、かわりに自分の知っている景色に変わっていた。

「……なんで」

俺は、教室にいた。ここは、俺が通っていた白風中学の教室だ。窓は開けられてカーテンが優雅に踊る。そこから差し込む夕日がどこか眩しくて、そして美しくて。

肌を優しく撫でる風はけっしてぬるくなく、むしろ少し冷たい。黒板の前で突っ立っている俺はふと窓の方に顔を向けた。

「ねえ、こつちだつてば」

また、聞こえた。ほつとする明るさと若干の幼さを感じる、そんな声。俺はこの声を聞いて鳥肌がたった。俺は、この声を聞きたかった。もう一度聞きたかった。それをずっと望んでいた。

声が出た方に振り返る。五列の真ん中、一番後ろの机に、彼女は座っていた。

「あ、やつとこつち見てくれた」

彼女は俺と目が合うとより一層目を開いて笑った。俺の知っている、俺の記憶そのままの笑顔だ。

「なん、で」

「んー、わかんないや。でもね、多分これはお知らせなんだよ」  
「え？」

彼女の言っていることがわからなくて首をかしげた。彼女はがらつと音をたてて椅子を引いて立ち上がる。

「お知らせ。私たちからの、みんなへのお知らせ。ずっと待たしちやっつてごめんなさいってことだと思う」

彼女は手を使って自分の考えを述べた。手のひらを自分の胸元によせてからこちらに伸ばした。そして申し訳なさそうに笑った。

「だから、そのときはよろしくね。前みたいに、みんなの輪に入れてあげてね」

「え、そのときって？」

彼女はそう言い終わると微笑を残して俺の言葉を聞く前に去ろうとする。

「あ、待ってー！」

俺はその場から駆けだそうとした。でも、足がまるで言うことをきいてくれない。足の裏が地面に張り付いているかのように。

それでも、俺は手を前に出すほかなかった。

「待ってー！」

俺は叫んだ。あのととき、俺はなにもできなかった。何も言うことができなかった。なにも助けられなかった。その後悔とむなしさと自分への怒りと失望と、あてようもないやるせなさが入り交じる。俺は、俺は……。

彼女は教室後方のドアを開ける前に、こう言った。

「ごめんね。私は、まだ先みたいだから」

その声はついさつき聞いたような明るさはなく、悲しさを押し込めながらのものに聞こえた。それも、無理矢理作ったような笑顔と一緒に。揺れる藍色の長い髪はついに俺の視界から消えてしまった。

そして、言えなかった。最後まで俺は、彼女の名前を言えなかった。

あのととき先生に連れられて自己紹介をしていたときに聞いた、あのととき黒板消しで消されていった、そして俺の頭から消えずに残り続け

ている、吉野川澄滯という名前を。

「……っああああ!!」

いつの間にか大声を出していた。手を真っ直ぐ伸ばしていつの間にか乱れていた呼吸のまま、目を見開いていた。

そう、目を開いた。視界にはもう夕暮れに染まった教室はない。見えるのは白い天井。その近くには丸い形状のライトが備わっている。ゆっくり手を下ろす。先ほどのは全て夢だった。自分の記憶が作り出してしまうどうしようもない駄作。どうあがいても繰り返される悪夢。何回も何回も夢に出てきた一人の少女。けれど、今日のそれは今までのものとは違ったように思えた。教室の雰囲気、香り、色、そして彼女の言葉。それら全てに妙なりアリティがあった。

手を額に当てる。ぬるりとした感触は間違いなく汗だ。力なく手のひらが額から頬へと落ちる。

「……おい、大丈夫か?」

異様な夢を見てしまったせいか少しだけ浮いているような感覚に陥り、意識はあるがぼうつとしたまま動けないでいた。だから、自分の中から聞こえてきた親友の声への反応が遅れてしまった。

「うなされてみたいけど、大丈夫か?」

今いるベッドの下を覗くところを見上げている人物。普段からポーカーフェイス気味ではあるが、長いつきあいのため感情の変化は充分わかる。いや、訂正しておこうか。人間の本当の気持ちなんて隅々まで、なにもかも全てわかるはずがないか。そうであったとしても、彼が親友であることは変わりないけれど。

「いや、ちよつと変な夢を見たんだ」

俺——里浦一樹は一呼吸置いて、少し心配そうにしている親友——藍住大生に言った。

一樹と大生は現在大学一年生だ。必死こいて受験勉強し、二人は久里ノ上から遠く離れた大学で寮生活している。そして二人揃って海洋学を専攻している。

大生は確かに、昔から海について関心があった。ただただ海を見ているだけではなく、その海の中でどんなことが起きているのか、どんなことがわかるのか、などを子どもながらに分厚い本を読んでいたりもしていた。そしていつしか、海のなかで生活する人々にある種の羨望の眼差しで見ている。

一樹の場合も、けっして彼について行くためとかいう幼稚な理由じゃない。彼と同じ海について興味関心があった。けれど、それだけではない。

海の中に住む人たち、海村についても多くを知りたかった。それは羨望ではなく、もつとほかの……。

今までならこの分野はさほど人気は無かっただろう。けれど、あの出来事を境にして世間の目は変わった、と言ってもいい。

14箇所海村は全て冬眠に入り、未だなんの動きも見せていない。その調査で騒動になったりもした。そして冬眠を境にして寒冷化も進み始め、今年あたりでは夏期の最高気温が通例の十一月〜十二月の最高気温とほぼ変わらないというところまで来ている。

それゆえもう七月下旬だというのに半袖で外を出歩いている人を見たことがない。分厚い掛け布団もバリバリ現役ということだ。むしろ休みがない。

前期のテストも終わり、すべての課題を終わらせた人たちから夏休みへと移行する。大学生の夏休みは高校で経験したものよりも長い。それをどう過ごすかは人それぞれだが、思いつく物と言えばキャンプなりバカンスなりと、外でのアクティビティだろう。けれど、この季節のおかげで海は候補から消えてしまう。こんなときに海に飛び込んでもしたら、氷付けだ。

俺らはそんな遊びまくるといいうキウキな夏休みは予定していない。所属している研究室の面々で独自の海村の調査を行うことになった。といっても大がかりなものではなく、少数の三班に分かれて向かうのだ。俺と大生が久里ノ上にある海村、果那ノ海へ行く。2つ目、3つ目の班もその学生の出身地へ向かうことになっている。

過去の事件として研究者たちがどかどかと海村に一番近い土地に入ってきて、なおかつ殿様気分接待しろなどという態度に出た。それを繰り返してしまうのはさすがに避けたい。なら、過去に海村と接点があった人物が調査に出たほうが荒事にならないという結論が出た。

他のふたつの班はどちらも学生はひとりだ。そのうちの一人がいた場所では、偶然にも果那ノ海と同じような状況で海村の生徒たちが陸の学校に来て、七月に入ってからだけという短い時期であるが共に過ごしたという。その彼の見た感じの雰囲気が大生に似ている。ポーカーフェイスという点ではほぼ同類だけれど、大生と長いつきあいであることを差し引いても彼はなにを考えているかわからない。透明な瞳はしっかりとしたなにかを表しているようで、彼はのちに最前線で活躍するような学者になりそうだと、勝手に想像している。

その彼は既に教授とともに目的地へと向かっていた。今ごろ機材を前に2人して黙々と作業しているに違いない。

一樹と大生は今日、寮を出て久里ノ上に帰る予定となっている。朝日が差し込む共同部屋で二人は朝食を取る。一樹は寮生活が始まってから二人で決めた朝食当番で初めて自炊を試みたが、大変苦労していた。大生はある程度経験があったので一樹に教えていった。今ではそつなくこなせる。

備え付けの小さなテレビから聞こえてくるニュースを聞きつつパンをかじる。

「あっちのほうも天気はよさそうだ」

「だな。そうじゃなきゃ、あれが見られない」

微妙に口元を緩ませながら大生はスープをすすする。

「まあな。……まさか、地上でも見られる日が来るなんてね」

一樹は視線を宙にさまよわせる。そこに映るのは夢で繰り返される悪夢でも、一人の少女でもない。本や過去の映像でしか見たことがない特殊な現象、つまり巴日だ。

巴日は通常海の中でしか観測することはできない。けれど、この異常気象によってできた海面を覆う氷がプリズムとなってぬくみ雪の輝きを集める。それが像を結び、虚像の太陽となって現れるという。しかも今回は太陽ではなく、夜に浮かぶ月で起こるようだ。言い方を改めるなら、巴月か。

「映像よりも、自分の目で見たほうが、綺麗なんだろうな」

ぼそつと、大生がそう呟いた。それには期待というよりかは、なぜか悲しそうな声音だった。

大型のリュックサックとスーツケースを持って駅まで来た。大生と、その後ろで立っているのは今回一樹たちの班に同行する教授、徳島拓人だ。短髪に背は平均的で、若干睨みをきかせているような細かい目をしている四十台後半の男性だ。けれど本人としてはまったく怒ってなくて、むしろ穏やかな人ということだから驚きだ。

「んじや僕は機材を乗せて車で行くから。前に決めた場所に時間通りいってくれよ」

「はい、わかりました」

徳島は二人に軽く手を振って自分の車に乗った。二人も顔を見合わせて駅に入った。

新幹線や私鉄などを乗り継いでいく。都会の景色からすぐに緑が顔を覗かせて、そしていつしか慣れた風景へと変わっている。けれど、やはりそれは一樹たちの知っている「夏」の景色ではない。

青い空の下には似つかわしくない白い世界。氷付けになった水面には波はもちろん、自然というなの生命すら感じられない。そして溶けることのない冰山。存在ですら冷たく、下界と断裂したかのような

孤高の山。すべてが止まってしまったかのようだ。

二人は思い出深い駅へと降り立つ。白い看板に書かれた文字。長年雨風に晒されてところどころ擦れているが、ちゃんと読むことができる。久里ノ上だ。

改札を出てすぐに、視界にひとりの人物が映り、近寄ってきた。パシヤリと音がした。

「やっと帰ってきたね。もう、待ちくたびれたよ」

二人の前に立つのは茉紀だ。クリーム色のショートカットの髪は相変わらずで、身長も中学生のころからあまり伸びていない。それは茉紀自身ではかなり気にしているようだ。

彼女は現在高校生。だが来年で卒業し、その後は父親と同じカメラマンという道を進むつもりである。世界を駆けまわるような段階にはまだまだ至ってはいないが、学校行事であつたり、広告の写真等を撮っていたりと、すでに仕事をもらえるようになっていた。在学中に父親の仕事を手伝っていたりして、そこからの繋がりも持てたという。加えて大事な点は、前からずっとカメラで写真を撮っていたという経験値が、今の彼女を物語っていることだ。

「やっとって……。今日帰るって連絡はしておいただろ」

「そうは言ってもさ、二人が三ヶ月以上ここからいなくなっただけで変な感じだったんだよ」

「まあ、高校生になっても顔合わせる機会はかなりあつたしね。それさえもなくなると、違和感があるか……」

大生が両腕を腰に当てて頷いていると、彼らに気づかせるように強い風が吹いた。肌に針が突き刺さるような冷たさ。それが体の内側にまで潜り込み、触らなくていいものまでひっくり返す。

風が吹いてきた場所、そして“ここからいなくなつた”という言葉が重なってしまったからだろう。五年経つた今でも姿を見せないあの四人を思い出してしまった。それは一樹だけではなくて、大生も茉紀も同じだろう。和やかなムードは風と共に流され、沈黙のまま皆同じ方向を向いていた。

## 第四十話 月夜の囁き

二人は懐かしむ目であたりを見まわしながらそれぞれの家に戻った。

「そういえばね、みんなで巴日を見ようって、漁協に集まってるんだ。はやく行こうよ」という茉紀の提案で、一樹たちは一旦家に荷物を置くことにした。

たった数ヶ月経っただけなのに家のドアが少しだけ懐かしく見える。家には母親がいて、笑って出迎えてくれた。それに申し訳なさを感じたが、すぐにみんなのところに集まると告げた。

「そっか。うん、みんなも会いたがってるだろうし、行つてきな」

しよげる様子もなく、ばんと背中を叩いてきた。一樹は痛がる素振りだけしてから荷物を自室に置き、家を出た。

一樹の母は、自分のことはいいからと言う意味で背中を叩く。そのときの力は、やはり五年前よりも、弱かった。

大生の家に行つて合流し、二人は漁協についた。ここはいつのまにかなにかしらで集まる集会所と化していた。それは五年前からそうだった。そう、あの決断も、ここで。

「おー、久しぶりだなア、一樹に大生！」

「隆広も元気そうで何よりだ」

二人に一番に速く駆け寄ってきたのは隆広だった。彼は中学卒業後、高校には通わずバイトをいくつか始め、後に免許を取って運送業関連の仕事に就いた。最近あたりからスーパー・マツシゲに野菜や総菜等を運ぶようになったという。一樹が高校に入ってからにはなかなか顔を合わせていなかったもので、まったく変わらない姿に安堵した。「ただ帰ってきたってわけじゃなくて、研究のためっていうのが、いかにもエリート大学生って感じだな」

「ふふ、そうだね。私たちもなんだか誇らしいよ」

二人を見て幹大と里実も懐かしむように微笑んでいる。幹大は家業を継いでいる。けれどこの異常気象のためにここから遠く離れた地点で漁をしたりと、苦勞をしているらしい。



里実は、一樹たちの予想通りといったかんじで、祖父の後を継いでスーパー・マツシゲで働いている。そこには汐帆も店員としている。近々感じる過疎によって売り上げが伸び悩んでいるのだという。

大生はそこにいた父親と話をしている。ふたりとも笑っている様子から、こちらも和んだ空気が変わっていくのがわかる。

そして、ふと一樹は部屋の中を見まわしてしまった。その視線が探すものを、里実はいち早く察した。

「……あ、洋斗、いないよ」

里実の一言で、場が一気に静かになっていくのがわかった。

「ちゃんと事前に言っておいたんだけどね、やっぱりこないみたい」「そう……なんだ」

里実は言葉を並べるうちに、徐々に萎んでいくように声が小さくなる。それを見て一樹は顔を背けるように呟いた。

一樹も、里実も、この場にいる全員はすでに知っている。知らないはずがなかった。今の洋斗は、五年前の四月のように、いやそれ以上に一樹たちから距離を置いていた。もう、底が見えぬ深い谷を挟んでたっているような、圧倒的な距離。誰もが、どうにか解決したくてもできない、そんなもどかしい状態。

そうなってしまった原因は、明確ではないけれど、おそらくあの……。

「あー、あー、えっと、とりあえずみんな揃ったんだし、そろそろ移動しません？大生の家で早めの夕飯を食べようってなってるはずで」

「そう、だったな。うん、そろそろ行こうか」

「俺と一樹は教授を迎えに行かないと」

またしても静まりかえった場を断ち切るかのように茉紀が口を開く。それに付いていくかのように一樹もうなずき、大生とともに徳島と落ち合う場所へと向かう。残りは大生の家に向かった。

徳島の車を目視できたのは集合場所に二人が着いてから十分後くらいだ。乗り込んで道案内をして漁協まで案内をする。残っていた大生の父たちと挨拶や調査手順などを話し、機材運搬のために大きめのソリをのせた軽トラも一緒に海まで目指す。

分厚い水面の、薄い部分を探し出し、海中の流れを測る装置を入れたりするために穴を開けてある。その近くに臨時調査所という体のテントを立てる。ソリに乗つけた機材を並べ、一段落する。このあと巴日の観測がてら、調査を開始することとなっている。

手伝ってくれた漁協組合の人に感謝の言葉を述べ、そこでわかれる。一樹たちは大生の家へと向かった。

いつの間にか日は傾き始めている。午後六時頃に夕食会が開かれた。この異常気象は気温だけが下がっているので、日の長さは普通の夏と変わらないのだ。

二人が帰ってきたというだけあってかなり豪華な食材が使われている。中でも鍋は沢山の具材が入っていて、染みた味とアツアツさが体の内側に浸透していくのがわかった。

夕食をさらに彩ったのは、やはりこの中では少数派という大学生活についてだった。大学は大きくて綺麗なのだとか、授業はどういったかんじなのだとか、研究はどういったのをやっているのかだとか、綺麗な女の子はいないのかだとか、狙っている女の子はいないのかだとか、主に幹大と隆広が女の子情報をほしがった。相変わらずだなど一樹は笑い飛ばしながら、そんな出会いは起きないと一刀両断した。

逆に一樹と大生の知らないみんなの三ヶ月の出来事を聞いた。幹大が船の上で朝食を取ることが増えてきたとか、自分で魚の捌くのは朝飯前になったとか、隆広が四苦八苦した隣町のバイトの話だとか、茉紀の出会った面白い小学生の話だとか、これもまた様々で場が盛り上がった。おまけに徳島の教授に就くまでの人生を聞くこともできた。

夕食を終えて、一行はテントを張った場所に戻ってきた。余分に長いすは持つてきてあるので、みんなが来ても冷たい表面に直で座ることとは免れた。

月下に照らされる氷山。そこから伸びる影が一樹たちをいつかは飲み込んでしまいそうに感じる。

いよいよだね、と茉紀たちが巴日について期待を膨らましているとき、なんとなく一樹は今朝見た夢の内容を大生に話した。二人ですつ

かり空気で冷やされた機械にビツクリしながら自然と小声になりながら話す。

「お知らせ……そのときはよろしく、か」

大生は慎重に言葉を並べるように反復する。

「今までは、その、おふねひきの夢を見ていたんだよな。前にも言っていたら」

「ああ。だけど、今日のは違う感じだった。あんな、教室が出てきたりとかなかったんだ」

一樹は今でも今朝の夢の内容を鮮明に思い出せた。寝るときに見る夢なんて、ほとんどは起きるときに内容を忘れてしまっていて、なにか面白いことや怖いことだったのに、とそれくらいしか残っていない。よほど衝撃的なことじゃないと覚えていない。

まあ、と少しの間をおいてから大生がぼつりと言った。

「今日がたまたま巴日が地上で観測できる日で、それが海の中でしか見れない現象で且つ吉野川と連想してしまったがゆえに、そういうた夢を見たのかもな」

「……」

そうかもな、とは思ったが口にはしなかった。確かに、そう頭が関連づけてしまっているのかもしれない。けれど、やはりこれはただの夢ではないと、一樹はそう思っている。これは、どういう方法かは見当もつかないが、澄濤が一樹にこれから起こるなにかを伝えようとしてきたのではないか。

それを大生は感じ取ったかのように続けていった。

「でも、俺もなんか感じるんだよな。一樹みたいに夢は見えてないけど、なにかが起こる」

俺の見た意味深な夢と、大生の感じたなにか。これが、大生が提示した頭が関連づけて見せた幻想などということではなく、まさに第六感とも表されるべきものだったと痛感するのに、そう時間はかからなかった。

「……、これはー」

徳島が操作していたパソコンで見ていた潮の流れを数値化、色別に表したグラフに、変化があった。

「皆さん、始めますよ」

徳島が後ろを振り返ってみんなに巴日の始まりを告げる。それを聞いてより一層歓声を上げた。それとなく場の空気が徐々に変わっていくのもわかった。引き締まっていくような、温度を奪っていくような、なにかが動くような。

それは、彼らの下の、深い深い海の中。キリキリと擦れ合う音がして、まるでビー玉のように光の欠片が集まって球体を成す。凍った水面が宝石のように輝く。そして虚像がふたつ、彼らの空に姿を現した。それが透き通った夜空を照らす満月の下に並び、線で結べば三角形になる。月の虚像からでる光が虹色に輝いて、月をも覆い隠す円のシルエットのように伸びる。これが、地上で観測できる最初の巴日だ。

「綺麗……」

「これが、巴日か」

始まる前に沸いていた歓声も消え、みんなじつと巴日を見つめる。その目には巴日から放たれるオーラを浴び、巴日に魅了されている。ぽつぽつとでる巴日への言葉も、その力を物語るには充分だ。茉紀は巴日を見つめながらも自身のカメラを操作し、シャッターを切る。

「……ん？」

巴日が現れてからすぐ、徳島がパソコンに映し出されたデータをみて目を細めた。

「なんなんですか、急に潮の流れが……」

「これは……いや、エラーが出てる。どうして」

大生が徳島のパソコンを覗いて、驚いた顔になる。一樹も慌てて椅子から立ち上がり、パソコンの画面をのぞき込んだ、そのときだった。

——一樹君。

「……!!!」

一樹は体温が一気に抜かれ、肌をざらざらとした指で撫でられるような、けれど彼の耳が受け取った暖かい声と重なって、ただただ驚く

しかなかった。一樹はぼつと顔を上げてまわりを見まわす。その行動に茉紀たちは不思議がり、「一樹？」と声をかけてくる。

けれどそれは一樹の耳には入ってきていない。それよりも、今聞こえたこれは……。

——一樹君。こつちだよ。

「……吉野川さん」

「え？」

再び聞こえてた声。やはり間違いない。あの頃、五年前の日常で聞こえてきた彼女の声。今朝見た夢で聞こえてきた彼女の声。聞き間違えるはずがない。

「どこだ、どこにいるんだ！」

「おい、一樹！」

「どうしたの」

あたりを見まわして、五年前に冬眠に入った澄滂を呼ぶ一樹を心配し、皆が駆け寄ってくる。茉紀は一樹の体を揺する。

「一樹……まさか」

「まさかって、大生はなにか知ってるのか」

その光景を見ていた大生はハツとなって目を見開く。徳島はパソコンと大生を交互に見ながら説明を求めた。

——一樹君。こつちだよ。こつちにいるの。

「……そつちか」

今度は、一樹は聞き逃さなかった。いや、どこから聞こえてくるのかわかるはずが無いけれど、あの方向からすると直感で判断した。

みんなの静止を気にもせず、走り出した。それを大生たちが追いかける。

「……はあ、はあ」

息が切れる。ろくに運動してこなかった上に、大学に入ってから体育すら疎遠となった。それでも、彼女の声を聞いたことで一樹の体を動かし続ける。そして今一樹が走っている方向にあるのは、かつておふねひきの最中に巨大な渦がいくつも発生した、まさにそのポイントだということは、一樹は気づいていない。

「おい、待てよ一樹！」

日頃の労働で体力がついていた幹大が追いつき、一樹の肩をつかんだ。そして徳島一人をテント前に残して皆が追いつく。彼らとしては、突然澄滯の名前を出す一樹が心配でたまらなかった。この巴日が彼の心の奥にしまつてあつた辛い記憶を開けてしまったのではないかとも考えてしまった。

「いきなりどうしたんだよ！急に吉野川さんって、おまえ」

「幹大には聞こえないのか!?吉野川さんの声が……」

肩で息をしながら幹大に向かって言葉を投げつけようとしたとき、凍った水面が一層輝きを増した。それは彼らの立っている場所を中心に、急激に広がり始める。目を隠さずにはいられない光量に一行は怯んだ。

その輝きは一瞬にして落ち着きを取り戻した。目から腕を離す。なにが起きたんだと皆が顔を合わせていた。すると……。

「!! ねえ、あれ！」

里実がわなわな震えながらある方向を指さす。その先を皆の視線が動いた。そして、目を疑った。

そこには、人が二人、倒れていた。二人とも衣服はなにも身につけていなかった。体格からして、中学生くらいだ。そして髪型、髪色を確認した。間違いない。

「航大君、沙月ちゃんだよ！」

里実が叫ぶ。大生と茉紀が駆けだしそれぞれ着ていたジャケットを被せた。

「……ああ、こんなことが」

「二人とも、五年前と、なにも……」

彼らの前にいる二人は、五年という期間が経っているのにもかかわらず、なにもかも中学二年の頃のままだ。突然の出来事になかなか頭が追いつかない。

「おい、とりあえず二人を運んで」

大生が航大を抱えようとしたとき、航大の瞼がピクツと動いた。それに気づいたのもつかの間、若干震えながらもその瞼が開き、瞳が現

れた。

「……あ、ああああ！」

まどろんだ目は急に意識をはつきりと持ち、航大が大声を上げながら体を起こす。

「一樹は！洋斗は！」

「大丈夫だ、一樹は大丈夫だ」

「ああ、俺はここにいるぞ」

両手を動かしてばたつく航大を落ち着かせようと大生はゆっくりと話しかけた。一樹もしゃがんで航大の顔をしっかりと見る。

けれど、少し落ち着いた航大の目には、それはいかにも目の前の人物が誰なのかつかみきれていないような、もやもやとしたものがあった。

「おまえ……一樹なのか？」

「!!」

「……海遥！海遥!!」

航大に気を取られていたが、沙月も目が覚めたようだ。航大と同じように勢いよく起き上がり、海遥の名前を呼んだ。目には真珠のような涙がいくつも零れ始めて、退化してしまったかのように四つん這いで動こうとする。

「待って、待ってください、沙月先輩！」

「沙月ちゃん！」

茉紀と里実が沙月を手で押さえ、抱きしめた。沙月は今いる状況がいまいちつかめず、焦点がうまくあわない。それでも、視界に航大が映ったときだけは、意識もはつきりとしたようだ。

「航大……」

「俺は……俺らはいったい」

航大はゆっくりとあたりを見まわし始める。やはりその目は未知なる世界に迷い込んだ、いわば恐怖に怯える目だ。そして、沙月とほぼ同時にあるものをとらえた。

「なん、なんだよ。あれ」

「ねえ、ここ、地上……なの？」

夢かうつつか、その狭間で浮かぶような二人は、ある一点を見て動かなくなってしまった。その先にあるのは、言うまでも無く、巴日と氷山だ。

航大には、沙月には、自分らが冬眠している間に起きた、彼らの知らない現象は、どう見えているだろうか。一樹たちは、どう見えているだろうか。二人の目から落ちる涙は、美しくもあり、心を削るほどの鋭さもあつたように思えた。いや、二人を同情することも、気持ちをそばで寄り添って考えることすら、断罪されることなのかもしれない。

止まった時が、軋みながらも動き出した。その軋みは、現在との差で起こるのだとしたら、このさきにあるのは、破滅だろうか。



## 第四十一話 世界との差

静寂さを引き連れて、輝きと魅了で人々を包んだ巴日はもう消え去った。夜空に残るのは星々の光だけである。

そんな夜が慌ただしく動くのはいつぶりのことだろうか。

一行は航大と沙月の体が冷えないようにとコートや毛布を包ませ、ひとまず大生の家に連れてきていた。広さ等を考えるなら漁協の方がいいかもしれないが、誰か人がいるという点については欠けている。冬眠から目覚めた二人を安心させるなら、やはり広さと人、とくに二人を知っている人物のいる大生の家がベストだ。

慌てて帰ってきて事情を説明された大生の両親はかなり驚いていたが、冷静に行動を開始した。ふすまを仕切つて部屋をつくり、大生の父はすぐさま病院の方に連絡を入れた。

十数分後に駆けつけた医師は男女二人、そのどちらとも久里ノ上病院に長く努めている。その二人が冬眠から目覚めた者を受診するのは、当たり前だが初めてだ。電話越しでも多少の驚きが窺っていた。

病人ならまだしも、こういう異例のケースとなると、入院が必要なかどうかという話が出てくる。二人が診察を受ける部屋から離れた居間で、一行は医師たちの結果待ちをしていた。

皆、神妙な面持ちで座り、時間が経つほどに口数は減った。壁に掛けられた時計の音だけが部屋に響く。

しばらくして、足音が聞こえてくる。二人の医師が居間を訪れた。

「先生、二人は……」

真つ先に一樹が立ち上がつて診察結果を問うた。

「冬眠から目覚めた直後ということもあつてか、五年という長い期間のズレにかなり困惑していた様子だったけれど、記憶障害もありませんでした。やつと落ち着いたというところでしょう」

一樹の問いに男性医師が答えた。それを聞いて皆は揃つてふっと息をついて安堵した。

「けれど、病院の設備で詳しい検査をしないと、二人の体の内部に全くの異常が無いとは言えないの。だから明日か、少し間を開けて一週間

以内に病院での検査をしたいと思えます」

続いて女性医師は少し難しそうな顔で皆に伝える。

「ひとまず我々は引き上げますので、なにか異常があればお電話ください。あとは、彼らの調子に合わせて食事を取らせてあげてください。水分だけはしっかりと」

「わかりました。夜遅くにありがとうございました」

大生の父は深々と礼をして、医師たちを玄関まで送った。その背中を見るように一樹たちも礼を述べた。

「二人に白湯をあげてくるわ」

大生の母は台所に戻るとポットに入っている白湯をコップに注ぐ。それをお盆にのせていそいそと奥の部屋へと歩いて行った。

「……………どうする？」

「いや、どうするってたって……………」

再び訪れた静寂に耐えきれなくなって、幹大は皆の目を順に見るようにならざら口を開く。

しかし、今この時点で一樹たちがなにか行動を起こしたところで、どうにもならない。そもそも、航大と沙月が眠りから覚めた、というのが今日の出来事であり、むしろ喜びたいことなのだ。もしかしたら一樹たちが生涯を閉じるまで彼らは眠りから戻ってこないという可能性もあつたのだから。

けれど、いざ現状を目の当たりにして、一樹たちの中で言い表せないなにかが心臓をつかんで揺らすような、不快感というより一層はつきりとした動揺がすべてを飲み込もうとしていた。それが彼らの口をふさぎ、または小さく何度もため息が零れ出てしまう。

「なあ、一樹」

と、ここで声を出したのは隆広だった。テーブルに片肘を突き、その手を頬にあてている。普段から明るく、おちやらけた彼の声音とは違い、皆を飲み込む動揺から唯一抜け出してきたような冷静さがあつた。そして隆広の目線の先には、一樹がいた。

「お前、あの二人が姿を現す前に言ってたよな。吉野川さん、って」「え、あ。ああ……………」

突然振られた質問に一樹は曖昧な返事しかできなかつた。それでも隆広の視線は映る気配はない。

「どこにいるんだ、とか、そこか、とか。……まるで吉野川さんがあの場において、一樹にしか見えていなかった様だつた」

「……」

「そして一樹は走り出した。幹大が止めた時、なぜかまわりが輝きだした。そして二人が現れた。それも眠りから覚める直前の状態だつた」

「た、タカボー?」

普段と様子の違う隆広を見て、幹大が少し動揺した声をかける。が、それでも視線は一樹を貫いている。

「なあ、一樹。二人を見つけた場所。おおざっぱだけどき、五年前のおふねひきで、あの四人が海に吞まれていった場所つて、あのあたりなんだよ」

「……!」

「あのとき、一番生命の危機に瀕してたのが一樹なんだよ。それとは関係ないかもしれない。だけど、もし一樹に未知なるなにかが宿つたのだとしたら、お前は否定するか?それとも、なにか心当たりがあるか?」

隆広の淡々とした喋りに皆があっけにとられていたが、彼の問いから間があいてしまうと、皆の視線が徐々に一樹の方へと集まり出す。いつの間にか大生の父も今に戻ってきていて、ドア近くの壁にもたれ掛かっていた。

一樹は一通り視線をまわすと、ゆっくり息を吐き出す。一樹はけつして隆広の言う、未知なるなにかを否定するつもりはない。むしろ当たっているのだ。思わぬ隆広の勘の鋭さに目を見張りつつ、一樹は今朝見た夢の内容を話し始めた。

「……なるほどね」

ここでやっと隆広はついていた肘を上げ、両手を頭の後ろで組むと視線を天井に向ける。

「これを……そうだな、予兆と捉えるべきか」

「そうだね、大生の言うとおりだ」

「つまり、吉野川さんがテレパシー的な感じで一樹に今日のこれを伝えてきたって言うのか!？」

「でも、澄滯先輩も冬眠してるん、ですよね？そんなことできるのかな」

居間は再び議論の飛び交う場となった。しかし出る言葉は全てなにかきつけかけをつかむことも、手がかりになるようなことも出てこない。ただ思ったことを共有するだけの無駄な会議だ。

わからないことをどうしようとしても、なにもできない。そのどうにかしようとするのがわからないのだから。それだけが結局わかる。

「あとは、あの二人に聞けることがあればいいかな。俺たちの踏み入れることのできない海の中で、なにがあったのかを」

隆広が言いながらドアのほうを見たとき、ちようどお盆を両手で抱え持つてきた大生の母が入ってくる。

「二応二人はもう寝たわ。明日は私たちが病院の方に連れていくから、もしなにかあればみんなにも伝えるわ」

「ああ、そうだな。とりあえず今日はもう帰りなさい。夜も深い」

腕を組んだままの大生の父は壁に掛かった時計を見る。時刻はまもなく十一時になるうとしていた。ここにいても今のところ、何も進まない。各々立ち上がったって、二人を起こさないようにしながら大生の家を後にした。

「そういえば教授、もう明日から？」

「ああ、そうだな。我らは調査のために来てる。その目的と同時に、こちら側からわかるなにかがあるかもしれない。十時に調査テント前に集まろう」

「わかりました」

一樹はそうして大生の家を出た。教授と大生を横目で見ながら軽く礼をして、そして空を見上げた。もう巴日も消えた空は、今日だけは質素に見えた。

雲が地平線の彼方へと吸い込まれていくような、澄み切った快晴だ。

一樹は必要な荷物をまとめて家を出た。少しだけ懐かしさを醸し出す道路や木々、家々が並ぶ風景を、きつとゆつくり見ながら調査テントへと向かうのだろうと、思っていた。

けれど一樹の歩調は速めで、地面を蹴る音が耳まで届く。時より踏みならすぬくみ雪も、やがては溶けて水となって、消えていく。

海村の冬眠の調査のためが、予想外の事態が起きてしまった。拳に自然と力が入る。これは大きな一歩となるかもしれない。

でも……と、一樹はその足を止めてしまう。

これが、確かに海村の人々の冬眠についての手がかりをつかめる、数少ないチャンスだ。だけれど、それが本当に、彼らのためになるのか。彼らを起こすことが、すべてなのだろうか。

昨日の航大と沙月の顔を思い出す。未知の世界に迷い込んだような、怯えた顔。思わず目を逸らしたくなるような、心が痛くなる顔だ。彼らのついさっきは、もうこの世界では五年前なのだ。その現実を彼らに突きつけるのが、果たして本当に必要なのか。同じ学生生活をした仲間が、大人に近づいている姿を見させること、それが正しいことなのか。

「……落ち着け」

一樹は両頬を二度手ではたく。今は自分に出来ることをするだけだ。彼らの思いに勝手に同情して、痛みを共有することが、今すべきことではない。

一樹は再び足を動かす。少しだけ走らないと遅刻してしまうから。

「……うん。体も異常はなさそうですね」

「そうですか。いやあ、よかった」

病院の一室で大生の両親はほっと胸をなで下ろした。対面に座るのは昨日の夜に来た男性医師。

今日は航大と沙月を病院に連れてきて様々な検査をした。しかし異常は無し。五年という長期間が開いたことによる内面的な筋肉量の変化等も見られないという。つまり、五年前の体のまま保存されていた、ということになる。

「二人自身の気分や体調に合わせて、徐々に日常生活に戻れるようにサポートしていくのが大切です。もちろんこちらでも手を貸しますよ」

「それは助かります。ありがとうございます」

「いえいえ。……でも、彼ら自身が一番大変でしょうね」

カルテを整理しながらぼつりと出た医師の言葉が、病室全体に染み込んでいくようだった。大生の両親も、先ほどの喜びから難しそうな顔へと変わってしまった。

航大と沙月を車に乗せて病院を後にする。大生の家からはもの五分ほどで辿り着く。その間、右から左へと寂れた景色が流れていくのを、航大は車窓から眺めていた。

沙月は膝に両手を乗せて、ただただ俯いていた。その表情はミラーで確認できなかったが、けっして明るい表情をしていないことだけはわかる。

大生の両親はちらりと目だけを合わせ、母は目を閉じて小さくため息をついた。父は今通っている場所から話の話題にして後ろの二人に振った。

「ああ、そうだ。二人はなにか食べたいものあるか？そろそろ昼だし」  
時刻は十二時を過ぎていた。検査のために家を出たのが十時過ぎ

だったため、そろそろ二人も腹が空いてくる。またもうすぐ過ぎる道を曲がればスーパー・マツシゲが見えてくるので、希望が出れば買い物もついでにできる。

二人の今朝の朝食は、大生の母が作ったおかゆだったのだが、二人とも健康体そのものであつという間に食べ終えてしまった。検査の結果からも異常なしと出ているため、普通の食事をして大丈夫だろうと大生の両親は思った。

「……」

しかし、航大は聞こえているのかいないのか、はたまた無視しているのか、顔を車窓に向けたまま動かない。凧いだ海のような静かな間はずっともじやないが居心地が悪い。べつとりと肌に張り付く不快感、そして普段とはかけ離れた航大の様子を気にしながらも沙月が答えた。

「あ、えつと……焼きそば、とかどうかな？」

沙月は控えめな口調で、なおかつ横にいる航大の同意を求めるような形をとった。沙月は横目で航大の様子を伺うが、やはり顔は逸らしたままだった。けれど小さな声で、俺もそれでいい、とだけ口にした。

車は慣れるように道を曲がり抜け、すぐにスーパー・マツシゲへと辿り着く。車を止めて大生の両親は外へと出る。しかし後部座席からは沙月だけしか降りようとはしなかった。それをあえて大生の両親は声をかけて車から出そうとはしなかった。

「いらつしやいませ」

店のレジカウンターから出てきたのは汐帆だった。五年経った現在、彼女はここで正社員として働いている。夫の聡太郎は、こちらも漁協の職員として働いている。

「こんにちは、汐帆さん」

「こんにちは。……ああ、沙月ちゃんだ！」

大生の母が穏やかな笑顔を見せるなか、汐帆もにこやかに挨拶を返しつつ、彼女の視界に沙月が現れると一目散に飛びついてきた。

「本当に、本当に沙月ちゃんだ」

「はい。そうです、沙月ちゃんです。ふふふ」

両手でぎゅっと抱きしめてくる汐帆に対して沙月は少しからかうようにして笑う。汐帆の目には少しだけ輝く涙があった。

満足するだけ抱きしめた汐帆は沙月を解放しても、まだ彼女の顔には安堵した笑顔が残る。けれど、ふと動き出した視線の意味を大生の父がくみ取ってしまった。

「……すまないな。航大君は車にいるんだけど、出てきたくないみたいなんだ。多分……」

「そっか。そうですね。でも、もし会えるようになったらいつでも来てねって、伝えておいてください」

汐帆はすつと足下に目線を落とすが、すぐに明るい雰囲気に戻る。

「そういえば里実ちゃんは？」

「今ちよつと裏で作業してますけど……」

「そうか。ならいいんだ」

大生の父は軽く頷くと買い物かごを持ち、今日の昼と夜の分の買い物を済ませる。なにせ大生と徳島の分まで作らなくてはいけない。いつもよりも多めの買い物となった。

会計を済ませ、店から出て行く彼らを、里実は店の奥側の出入り口からこっそりと見ていた。

一行の車は自宅へと進む。車窓からの景色は、見慣れているように見慣れない景色。つい昨日まで見ていた光景が、ほんの少しだったりかなり大きく変わっている。間違い探しのような時間。

「なあ、どう、だった？」

「……なにが？」

前の席に座る二人には聞こえないほどの声で航大が言った。自信の爪を見ながら沙月は質問を返す。

「汐帆ちゃん、どうだった」

「……うん、そうだなあ。髪は伸びてた、かな。でもあんまり変わってない」

「……汐帆ちゃん、だけか？」

「里実ちゃんもいたらしけど、作業してるらしくて見てない」

「……そっか」



最後の航大の言葉に、沙月は引つかかりを覚える。視線を航大に移すが、今も変わらず車窓に顔を向けていた。そこに映し出しているのは、いったい何なのだろうか。

航大と沙月にとって僅かな差。けれどこの世界では当たり前のごとく時は流れていた。五年という、彼らにとっては長い年月が。

航大は、目を細めていた。なにかを堪えるように。溢れ出てしまうなにかをせき止めるように。その姿を見て、いつものような元気に溢れた航大からかけ離れた姿を見て、そして先ほどの言葉で、沙月はなにかを察してしまった。

でもこれは、彼女だから気づけたのかもしれない。自分らとこの世界との差に立たされているからこそ、そして、自分が想いを寄せる人との差を恐れているからこそ。

## 第四十二話 風化

「んー……。ダメだなこりゃ」

徳島がのけぞって疲れ果てた顔を空に向けた。目を擦りながら保温ポッドからコーヒーをカップに注いで一口すすする。

巴日が地上で観測された日、そして航大と沙月が冬眠から目覚めた日から四日が経とうとしていた。徳島と一樹と大生は欠かすことなく自分らの目的である現場調査を行っているが、難航していた。といっても正確にはなにひとつわかっていないわけではない。

大学から持ってきた機器を使って今現在この氷床の下で起こっている海流のデータを取って分析している。その得られたデータによると、だいたいの場所では周期的な動きをしているのだが、ある一定の地点からは急激に変化しているのだ。通例では考えられないもので、大きさに言うなら、水族館で使われるような強化ガラスで仕切られているような変容ぶりなのである。

彼らは氷床の下に広がる果那ノ海の状態の把握も目的のひとつだった。が、こんなわけで持ち込んできた海中カメラレンズを搭載した小型無人探査機が使えない。下手に使っても果那ノ海周辺に到達できないどころか海流にもまれて破損の危険性もあった。

なるべく果那ノ海から近いポイントを狙って氷床に穴を開ける案も考えられたが、すぐに却下された。それは考えずとも見ればわかった。忌々しい姿で立ちふさがる、あの氷山を。

あれは果那ノ海を中心からは逸れているものの、山の中心に向かって氷の角度が上がっていつている。それは緩やかだがかなり広く、盛り上がった分だけ氷の幅も大きい。ベースキャンプ地とした場所はもちろん強度は万全だが比較的氷の厚くない場所にある。探査機を入水させるための穴も開けることができたが、果那ノ海に近づこうとすればするほど難易度は上がるだろう。

そもそも、今現在のようないかなる異常な季候になったのは今年から急にはではない。じりじりと右肩下がりで平均気温が下がっていった。つまり、まだ半袖半ズボンと水着の出番もあったわけである。そう、そ

れだけの気温はあった。にもかかわらず、あの氷山は溶けなかったのである。海水浴ができるほどの気温があつても、規模が小さくなることさえなかった。そして年を重ねると海まで凍り付いた。

彼らの目的のひとつは、季候の影響をまったく受けないこの特殊な氷の材質調査も含まれている。

「教授、そろそろ変えてみますか」

「ああ、だな。頼む」

一樹が立ち上がると大生も続いて立ち上がる。

彼らがこれだけで調査を終え、さきつと大学に戻るはずがない。今考えられる最適な方法はただひとつ、小さな抜け道を探すことだ。

荒くねった海流でも僅かに生じる比較的穏やかな場所。それを必死に探し出そうとしている。機器を調整してそのありかを見つけ出すのが当面の彼らの仕事だ。

そして、そこをかいくぐって果那ノ海へと入ることが出来れば、かなりの進展と言えよう。けれど、この案に無人探査機は使えないのは変わらなかつた。激流の穴を見つけたとしても、単純な一本道ではないだろう。入り組んだところをくぐらせるのは、やはり無理がある。

ではどうするか？この答えは、自然と出てしまった。あまりにも偶然で、しかしそれがある意味目的でもあつて、そしてあまりにも身勝手な答えだ。これを引き受けてくれるかは、彼ら次第なのだ。

この感覚はいつぶりだろうか。そう思ってしまうのはおかしい。おかしいはずなのに自然とそうさせるのはきつと、自分たちの知らない時の流れであるのだと、何回も同じ疑問と回答を沙月は頭の中で繰り返していた。

玄関から大生の両親が持ってきたスリッパに履き替えて廊下を歩く。足のサイズと合わないスリッパがパタパタと音を鳴らす。気温

だけでなく、場の雰囲気や人気のなさがより肌を切るような冷たさを漂わせていた。

二人が冬眠から目覚めて一週間になった。昼時を過ぎた頃にそろって白風中学校に訪れていた。

大生の父が職員室の前に立ってドアをノックする。ドアを開けて顔だけの中に入れるとすぐに目的の人物を見つけたようだ。

その人物はまもなく現れた。大生の父と少し会話して、沙月と航大に顔を向けた。

ぼさぼさにはねた髪には白髪がまざり、ひげはより濃くなっていたが黒縁めがねは変わっていないかった。二人の目の前に立つのは、当時担任をしていた大塚だった。

「ああ、お前ら……。本当によかった」

五年の月日を感じさせる小皺を見せながら大塚は安堵したような笑顔を見せた。それは沙月は以前見たことがあった。汐帆と再会したときと同じだ。

二人のもとにゆつくりと歩み寄り、そして両手でそれぞれの頭を優しく撫でる。その大きな手のひらから伝わる温かさが伝わってくる。そのぬくもりと、大人に頭を撫でられることが滅多にないため、沙月はなんだかもどかしく、そして照れた。

ふと目だけ航大を見た。彼もまた大塚の安堵した様子を見てか、安心させるかのように、自分は大丈夫だと示すような微笑を浮かべていた。それは航大が今までしてこなかった顔だ。

夏休みとあって閑散とした教室に入った。ここは二年生にあてられた教室。沙月と航大もここで三ヶ月、学生生活を過ごしていたのだ。

しかしその光景そのままを残してあるはずがなかった。教室内の老朽化はとくに目立つものがなかったが、明らかに自分らの知っている机の数と違う。減っているのだ。

「お前らが冬眠してからな、徐々に減ってるんだよ、生徒の数がさ」

沙月の考えを見透かすように大塚が言った。まさにその通りなのだろう。久里ノ上の景色を見ればおのずと理解はできる。

後ろの机から減らされているようだ。まるで過去の記憶が少しずつ、少しずつ消えていくように。もう、沙月と航大が座っていた位置に机はなかった。

適当に大塚が椅子をひいて教室の後ろに向けさせて座った。そして彼の前にある机に沙月と航大に座るよう促す。

「二応、夏休みに入ってから二人の義務教育が止まっている。だから、この夏休み明けから再びここの生徒になるんだ」

大塚は指を組ませて二人を交互に見ながら言った。

「目覚めてから一週間。たったそれだけの期間でいつも通りの生活に戻れなんて言わない。もちろんみんなからもそう言われてるだろう。だから、ゆつくりでいい。きつと俺にはああだこうだいう権利はないけど、二学期から学生生活をまた始めてほしい」

大塚の声はとても穏やかで、優しく、ついうっかり涙をこぼしてしまいそうだった。

大塚の考えていることはある程度察せる。言うまでもないこの五年で、一樹たちはもう先へと進んでしまっている。それは当然で、むしろ不思議に考える必要がない。

けれど沙月と航大は、止まっている。中学二年生の一学期が終了した時点で止まっているのだ。それから五年が開いて今、再び前に進む。当然、二人は五年進んだ現在と交わって生きていくことになる。二人にとって三ヶ月前に味わった、転校生のような気分、緊張、不安。そう身構えることではないかもしれないそれと寄り添う。

自分と五歳下の男女だったのが、今では同い年。そのほかでも、気にしてしまうことは多々あるかもしれない。それでも、ここは久里ノ上で、海の中で冬眠をしている海村は果那ノ海で。大塚は今も白風中学校の教員をしている。

過ぎてしまった時間は戻ってこなくても、二人が再び人生を歩み出す時間と場所はちゃんとある。そして変わらないものもある。だから、

「おこ」

短くとも、沙月はそう返事をした。その一步を踏み出そうと、震え

る足をなんとかして踏み出そうとして。

大塚の視線は航大に移った。

「航大は、大丈夫か？」

その声音は、やはり不安や心配が滲み出ている。いつもの、彼らが見てきた航大は元気で、頼りない部分もあるけれど、いざ決めたことは曲げずに通す。そんな彼が、その元気を奪われたかのように背中を丸くさせて俯いていた。それを心配するなど言えるだろうか。三ヶ月とはいえ担任を持った教師なら、なおさらのことほっとけるわけがない。

これは沙月にしか見えなかった。机の下で左手をぎゅっと握りしめていた。そして、

「はい、大丈夫です」

顔を上げて、そう言った。絞り出して、ようやく出た一言だった。

海岸線にそって作られた道を歩く。横にある車道には、もう掠れている白い線が一定間隔で引かれている。その道を走る車は、前からも後ろからも走ってくる様子はない。

すっかり寂れてしまった地面を踏みながら、沙月は自分の少し前を歩く航大の背中を見た。小さい頃からずっと見てきた背中。小学生、中学生と成長するに従って大きくなる背中。

それが今、とても頼りない風に見えてしかたがない。

「航大」

沙月はひとり呟くのではなく、小説で心にとまるような一文を読むような声でもなく、ただ目の前の幼なじみを呼んだ。けれど彼は振り向きもせずに歩き続ける。

大生の両親には「少し散歩してから帰る」と言って学校でいったん別れた。これは沙月ではなく、航大が提案した。

大生の両親は少し驚いたような顔をして互いを見合ったが、頷いてくれた。それに沙月もついていく形となって、航大の行くがままに沙月も歩いていく。

「ねえ、航大」

もう一度、名前を呼んだ。

昼間の青々とした空は徐々に薄れている。やがては溶けるように白くなり、夕日が橙色に染めて、最後は黒くなる。

航大の背中が、そんな晴れた空ではなかった。蒸して、気だるくなつて、陰鬱になる曇り空のようだ。

二人は学校からの帰り道をいつも以上にゆっくりと歩き、里実の実家であるスーパーのある周辺への道を過ぎて、やがて航大は立ち止まった。そこは、五人揃って白風中学校へ登校するために使っていた小さな埠頭。海岸に沿って伸びている塀が途切れ、少し降りた階段がある。海に伸びるようにあるそこにむかって、航大が降りていく。

登校時には海からここによじ登り、下校時にはここから海に飛び込む。なんてことないその日常の一部だった。それも今では氷が一面に張られ、飛び込んでも尻餅について痛みを感じるだけ。

小石が混じった埠頭に航大は腰をかける。少し間を開けて沙月も座った。ひんやりとした冷たさが伝わってくる。氷床から少し遠く、足をぶらつかせる。

少しの間、会話はなかった。ただ目の前を見つめる。まるで冬眠中の自分らのように、時が止まってしまったように思えた。そして、航大が口を開いた。

「……怖く、ないのか?」

「え?」

沙月が横を見る頃には、航大は俯いていた。太ももに腕を乗せてうずくまったまま彼は続けた。

「沙月はさ、怖くないのか?」

「怖い、って?」

「久里ノ上が、いやこの世界が、俺らの知らないうちに時が経って、同い年だった他のみんなが俺らよりも年上になつて」

「違う、違うんだよ。私たちが、止まってただけなんだ。この世界はなんにも変わることなく、時を刻んでいってるんだよ」

「でも、五年前と今とじゃ、変わったんだよ」

いらつきを押しさえるようにして言った言葉に、沙月はなんにも返せなかった。

「時が経つから、変わるんだよ。町も、人間も。でも、その変化を、時の流れとともに進んでいくから、その変化を受け入れられる。俺らはどうだ？ たった一日を境にして五年分の変化を受け入れろっていうのか？ ふざけんじゃねえよ！」

教室で見たときと同じように拳を握りしめて、航大は叫んだ。怒りだけじゃない、どこにはき出していいかわからない悲壮さが混ざり合って、崩壊している。

「巴日が地上に出てて。みんなが大生の家に俺らを送ってくれた。そこにいたみんな、成長してた。もう俺らと同じ中学生じゃなかった。俺らは、置いていかれたんだ」

「だから違うよ！ 確かに、みんなは私たちと五年分の差がある。でも、みんなはみんななんだよ。それぞれ自分の進む道を決めて、頑張ってるんだよ。私たちはただ、胞衣を持ってたから、ちよつと休憩してただけ。みんな、私たちより大人に近づいているのだとしても、みんなに変わりはないんだよ」

「……それは、考えもか？」

こんな航大は見たくなかった。すべてがマイナスに包まれた航大など、少なくとも沙月の中で航大とは認められない。立ち上がって、そのマイナスを吹き飛ばすように沙月も声を大きくした。手を振って、航大に目を向けて訴えかけるようにした。

でも、航大の返答は、沙月には予想外で言葉が止まった。やつけになつていた頭の回転が止まり、言葉の意図をとることができない。

「今のみんなは、俺らの知っているみんなだと、考え方も抱えているおもしろいも、同じなのか」

「なにを、言ってる」

腕が力なく下がった。ただただ立ち尽くす沙月に、未だ航大は目を



合わせてはくれない。そんな彼が何を言おうとしているのか、わからないかった。いや、わかっていたのかもしれない。けれど、間もなく聞こえてきた彼の言葉は、頭を打たれるような衝撃を沙月に与えた。「俺、あの祭の時、花火が上がる前に言ったんだ。里実に。好きだ、つて」

「……！」

「すぐに返事を出さなくていいって付け加えてな。ずっと留めておいたままじゃダメなんだって、思ったから。そのおもいが消えて無くなってしまう前に、つて海遥が言ってた。だから、伝えようつて。言えなくなつて後悔するのは嫌だって、思ったから」

沙月は呆然としたまま、ゆつくり崩れるように座った。真横から見えた彼の顔は、自嘲気味に口角を上げていた。

「それが今じゃこの有様だ。俺は理想通りの答えを絶対にはしがつていたんじゃない。自分の純粋な想いを伝えて、そしてそれを受け取つた里実の、純粋なおもいを聞きたかった。おふねひきが終わったすぐ後でも、三年生になつてからでも。でも、でもさ……。その想いを知つたすぐ後に里実の前からいなくなつて、五年経つてやつと戻つてきた。そんな俺の想いを里実は、忘れず考え続け、出した回答を今も持ち続けて、そして俺に伝えてくれると思うか？」

やつと、航大は沙月のほうを向いた。自嘲的な笑み、そして彼の目は潤んでいた。

沙月の視界全体がぼやける。いつの間にか、沙月は涙を流していた。自然で、なんの前触れもなく、涙が出た。

「俺は、ビビってたんだ。自分が好きだと言つた相手を信じられてすらない。いや、信じるとか勝手に希望を抱いてなすりつけてんのかもな……。でもやつぱり、怖いんだ。里実なりにまとめて結論づけた答えを、俺は求めていたんだ。でも、返答を求めたいと言つて勝手に消えて、五年経つて現れてその返答を聞かせてくれ、なんてよ。返答の中身は、わかりきつてるような気がする。里実と交流してたのはたった数ヶ月だ。ただ、その理由が彼女の純粋なカタチじゃなくて、ずれた時の流れで風化したからだつて、それが理由だったなら、それがす

げー悔しくて、辛くて、むかついて、怖い。聞くことが、会うことすらも、怖いんだ」

くしゃりと無理に笑った航大の目から涙が零れた。指で、手で拭おうともせずに涙を流して、また俯いてしまった。涙は雫となって氷床にぽとりと落ちた。

沙月もまた、涙が止まらないままだった。それはもちろん、航大の心の内を聞いたからであった。

彼が里実に対してなにかを秘めていたこと、もしくはそれに近いなにかができて始めているとはなんとなくだが感じ取っていた。でも、彼はもう伝えていた。その言葉を、航大が出したありったけの真実の言葉を。

その結果、嘘偽りのない自分の想いで、自分を苦しめていた。なにも間違っていないはずなのだ。おもいを伝えることは何も間違っていない。そんなに思い詰める必要もない。きつと里実なら……。

沙月は、しかし航大になにも言えなかった。言おうとしても、言葉にならない。沙月は改めて思い知った。思い切り打たれて、彼女もわかったのだ。

沙月の、海遥に対する想い。これをやつとこのことで伝えた。しかし、今彼女のそばに海遥はいない。五年経った今、やつと沙月と航大だけ冬眠から目覚めた。海村の、十四箇所の中のひとつの果那ノ海は小さな海村だけれど、数百人くらいいる。その彼らが、全員がいつ、目覚めるのだろうか。

そして沙月も恐怖に取り囲まれそうになる。沙月の結論出したこの想いを、海遥が目覚めるまでずっと持ち続けられるだろうか。どんな傷を負っても、削られても、なにひとつ変わらず残せるのだろうか。いや、変わらない。変わるはずがない。沙月は歯を食いしばった。食いしばっても、なぜだか、心臓の鼓動が早くなり、不安がぞろりと迫ってくるような気がした。

今日まできつと、こんな恐怖を覚えないようにわざと一定の距離を置いていた。でも、航大の本音を吐露したこの瞬間から、航大とまったく同じでなくても、冬眠が生んだ時間の差、世界の差、そしておも

いの風化を恐れるようになってしまった。

彼らの流した涙が、頬をつたって氷床に落ちる。一滴、一滴、また一滴。

『大丈夫だよ。泣かないで。こうちゃん、さつちゃん』

ここは深い海の底。全てが暗く閉じた、冷たい場所。

それとは真反対の、温かくて優しいその声は、誰の耳にも届かない。

## 第四十三話 拭えぬ苛立ち

なにか、夢を見ていた気がする。それがいったいどういうものなのか、誰か出てきたのか、目が覚めたらもうわからなくなっていた。すべての感覚をシャットアウトされた状態から解放されたように意識がふわりと浮かび上がる。ゆっくりと目を開いたら、そこには蛍光灯がぶら下がった木造の天井があった。

左に寝返ると、枕元に置いてある水色の四角い時計が八時半を指し示していた。

時計の秒針が時を刻む音、髪の毛が枕と擦れる音、掛け布団を握る音、そして自分が呼吸する音。ふすまで仕切られて設けられた自分の部屋にはそれだけしか音は聞こえない。二度寝するような気分でもない。けれど、まるで海の中でゆらりゆらりとたゆたうような感覚がして、もうしばらくこのままでもいい。

遠く、けれど大して距離もないほうから別の音が聞こえてきた。人が生活する音。食べ物を食べて、誰かと喋って、見ているテレビから流れる音と重なり合って。それらを聞く度に海から顔を出したように意識が現実の型におさまる。

たとえ自分のために用意してくれたのだとしても、たとえ心地よい枕と毛布があったとしても、この場所はやはりまだ慣れない。

廊下を歩いて居間のある場所を目指す。すぐ側までくると朝食の味噌汁の匂いがした。それ以上に、平凡な日常を感じた。

「おはよう、航大君」

大生の母がちょうど台所から顔を覗かせたときだった。こちらもなんとなく返事をしてテーブルの前に座る。

その右横には沙月がもういて、まもなく朝食を食べ終わりそうだ。

「おはよう」

茶碗を持ったまま沙月がこちらを見る。

「ああ、おはよう」

「なんか眠そうだね。寝られなかった？」

「いや、別に。変な夢を見た、んだと思う。忘れちゃった」

大生の母が航大の前に朝食をお盆で持ってきてくれる。ぺこりと首を下げながら「ご飯やおかずをもらおう。」

「あー、よくあるよね。どんな感じかは覚えてるけど、内容は曖昧で」  
「そうそう」

沙月は頷きながら皿にのった目玉焼きを箸で切って口に運ぶ。

「思い出せないけど、その夢を見てたとき、きつと俺はそれを夢とはわかってないんだよな」

「そんなもんだよ。でも、ひとによつては夢の中を自分の意思で動けるとか、そういうのもあるらしいよ」

「まじかよ」

「でも航大がそんなことできちやうと、いつまでも夢の中に居座って寝坊しそう」

「んだよそれ」

航大は呆れ笑いをしながら手を合わせてから箸をとる。ほどよい焼き加減の目玉焼きに塩をかけてひとくちサイズに切って、口に入れた。咀嚼し、舌で味を感じる。

うん、かけた塩もちょうどよく、目玉焼き自体も黄身が半熟だ。そう、そうなのだ。

味噌汁をすすする。小さく切った豆腐とわかめが入っている。そう、普通の味噌汁。

ちゃんと味を感じる。なのに、舌が、脳が、朝食の味とおいしいを直結してくれない。わけがわからない。

沙月は目玉焼きに醤油をかけていた。俺は塩をかけた。俺が起きてきた頃には沙月は服を着替えていた。これは里実や茉紀のお下がりで、俺は一樹や大生ののをもらっている。けれど今起きてきたばかりで、パジャマのままだ。

なんなのだろう、この感覚は。どうにも言葉に表しがたいなにかが航大の頭の中を占領しているようで、不快だった。

朝食を無理矢理口の中に詰め込み、皿を流しに置く。洗面台で歯磨きをする。鏡に映る自分は、どこからどう見ても自分そのもので、そ

れ以外の何者でもない。なのに、冬眠を挟んで以前と今とで、別人のように思えてならない。それは、やはり……。

今日は一樹のお下がりの服を着た。厚手のズボンをはき、長袖のシャツの上からジャンパーを羽織って玄関に向かう。

「あれ、どうしたの？」

沙月が声をかけてきたが、振り向きはせずに答えた。

「散歩」

ここ一週間ほどでより一層久里ノ上の土地勘をつかめたと航大は思っている。以前……航大にとっての一週間ちよつと前まで、この世界の五年前ではよくて大生の父が運転する車から見たり、漁協に訪れるくらいだった。

暑くない夏の午前、家々からテレビの音が聞こえるが、人通りはほぼない。たったそれだけで廃れて忘れ去られた町を歩いている気分になりそうだった。

汚れた石壁、手入れされずに残された庭、植物の根に覆われる家。ところどころに残るぬくみ雪。くすんだミラー。掠れて読みづらい道路の文字。しばらくぐだぐだと歩き回っていると錆ついたブランコなどの遊具がある小さな公園が右手に見えてくる。その中で壊れて穴の開いた屋根の下にベンチがあった。

座ったときに軋む音がしたが問題はないだろう。航大はそのまま背もたれに身を預け、穴から空を見た。

毎年見ていたような青空。眩しくて、心にまで浸透してくるような青。それなのに、むせかえる暑さも無ければ潮の匂いもあまりしない。

口から息を吐き出す。それが白くなって視界の隅に現れて、そして溶けるように空気中に消える。それを何度も繰り返していた。着てきたジャンパーでも寒さは完全に防げない。手はポケットに突っ込ませていても無駄だった。頬はたまに吹いてくる風ですっかり冷やされた。けれどそれが、心地よく思えた。背もたれに寄りかかり、くりぬかれた空を見上げる。体を包んでくれるような風。その冷たさ。

それらがまるで、海の中で浮いているような、そんな……。  
カシヤ

海の底へと沈んでいく思考が一気に取りはらわれ、航大はしっかりと目を見開く。そして機械音のした方向に顔だけ向けると、こちらにカメラのレンズを向けている茉紀の姿があった。

「おはようございます、吉成先輩」

「……ああ」

あまり予想していなかった人物が目の前に現れた。そもそも誰かに出会ってなにか話すなどと考えてすらいなかったが。

「朝から空を見上げて、どしたんですか」

「散歩、の休憩」

「はあ、そうなんです。隣いいですか」

「……ああ、まあ」

首をかしげながら質問をしてきた茉紀に対して、航大は曖昧な返事しか返せなかった。航大の正面をすぎてある程度の間隔を開けて右隣に座った。

ちらりと横目で茉紀の様子を伺ったが、自前のカメラを操作している。航大には何をしているのかはわからなかった。ゆえに自然と視線は戻り、空に向けられた。

「昔は、ここで遊んだんですよ」

唐突に茉紀が話し出す。

「一樹と大生と里実ちゃん。日によっては人数が増えたりしましたが、でも四人でいるのが結構多くて。サッカーボールで遊んだり、地面に絵を描いたり、花火セット買ってきたりもしたなあ。それこそ、ここに座っているんな話もしました」

急にどうしたのだろうか。再び目だけを茉紀に向けると、彼女はカメラを膝に置いたまま真っ直ぐ正面を見ていた。もちろんその先になにかあるわけでもない。誰か子どもたちが遊び回っているわけでもない。住宅とを隔てるように石壁があるだけ。

「たまに高くボールを蹴り上げすぎて、隣の家の庭に入っちゃったりしたんですよ。その度にインターホン鳴らして謝りに行って」

「……」

「今じゃあサッカーなんてしませんけど、でも花火とかはやるんですよ。高校生の時、白風のメンバーも集まって、そりやどんちゃん騒ぎのって」

「なんだよ、何が言いたい」

自分の横に座っている茉紀が何を言おうとしているのか。自分一人だけで海に浮かぶような心地でいたのを邪魔された——茉紀にとってはそんな意図はないだろうが——のがあつてか、その口調に多少の苛立ちが混じる。

けれどそれで怯むことなく茉紀は、

「私は、覚えてます。全部をちゃんと、というにはいけませんけどね。年を重ねるにつれて小さい頃のこととは思いつづらくなる。それでも、今はみんなで過ごした日々を忘れてない。その日々が存在したことを忘れてない。忘れるはずがない」

航大の言葉を気にすることなく言葉を紡ぐ。それは自分に言い聞かせるように、そして航大にも言い聞かせるように。

「吉成先輩たちと過ごしたあの日々も、私には大切なものなんです。なにも変わることのない、かけがえのない……」

「変わることはない」。航大の耳から入り、その言葉が脳の中を縦横無尽に駆け回り何度も反射する。その度に揺れ、響き、水滴が水面に落ちたように広がっていく。それが非常に不快だった。

「吉成先輩にだってあるはずですよ。平凡で退屈、けれどかけがえのない、忘れられない日々。自分が今できるなにかを見つけることができる日々。それを、また始めれば……」

「俺はもう、先輩じゃないんだよ」

「……え？」

指先でカメラを撫でながら話していた茉紀を航大が遮った。先ほどよりも低く、歯を食いしばるような声に少し驚き、茉紀は航大のほうを見やる。

「小学校のときはそんな呼び方じゃなかったのによ、中学になった途端に上の学年のことを先輩つけて呼び始める。縦社会の一環として先



輩に対しては基本は敬語を使って、その先輩は後輩に対してタメ口はもちろん、性格がクソなやつなら自分のためにこき使う。それは生まれてきた年代が違うだけで生まれる差があるからだ」

空を見上げていた目は自分の足下に向けられていた。昔を思い出すような少年の目ではなく、暗闇をひたすらに怯えながら、迷いながら、けれどどこか諦めているような淀んだ目だ。突然話し出す航大に、今度は茉紀が困惑の表情を浮かべる。

「俺らが先に生まれてきたから、お前は俺を先輩と呼ぶ。けど、もう違う。冬眠していた俺らは五年間、止まっていた。お前らはちゃんとそのまま人生を歩み続け、今がある。その差が、確実に存在する。先輩は、自分よりも先に人生を歩んできた輩と言える」

「なっ」

「だから俺はお前に先輩と呼ばれる必要も義務もない。むしろお前が先輩なんだよ」

「そ、そんなことはないです！私にとってはずっとあなたは吉成先輩なんです。それは変わらない」

「だから違うって言うてんだろ！」

己の内に限界まで溜ったなにかを吐き出すように、航大の声が乾いた空に響き広がった。歯を噛みしめ、苛立った目は鋭くなり、それを向けられた茉紀は怯んだ。先ほどとは一転して狂気めいた航大の様子に困惑し、そして恐怖が混じり合う。

そんな茉紀の顔を見るや否や、航大は歯を砕かんとするほどにより一層噛みしめ、渦めき制御しきれない自分の感情に苛立つように髪をかきむしる。

「なんだよ、なんなんだよ。どうして、こう……こうなるんだよ。わかんねえよ、わかんねえよ。変わるとか変わらないとか、またいつも通りとかまた始めるとか。もう勘弁してくれよ……」

「あ……、その」

「耐えられねえんだよ。変わっちゃまったんだよ。もう元に戻せないんだ。わかってる、でもわかんねえ。自分がどうしていいかわからねえよ。変わっちゃまったもんを受け入れられない。もう、見たくもない。」

辛いんだよ」

どんどん溢れ出てくる。止め処なく出てくる航大の本音が押さええでも指の間からどろどろと流れていく。それは綺麗で、けれど汚くて。純粹で、けれど数多の感情が混じっていて。航大の肩は、声は、震えていた。

「……わりいな」

ひとしきり吐ききって訪れた少しばかりの静寂の後、航大はぼそりと言い残してベンチから立ち上がった。どこへ行くでもなく、冥界を彷徨うようにゆらゆらと公園から出て行く。それをどうするすべもなく茉紀は見ているしかなかった。

「……余計なこと、しちゃったかな」

航大の姿が見えなくなると茉紀はため息をついて背もたれに身を委ねる。唇を噛み、航大が見上げていた屋根の穴に視線を移す。そこから見える空は、けれど航大が見ていた空とは違うのだと、茉紀は痛感していた。

それから先は記憶が曖昧で、さらに下ばかりを見ていたからか、微かに覚えているのはアスファルトの道路かぬくみ雪ぐらいしかない。腕時計など持っていないためどのくらい歩いていたのかもわからない。公園を出るときに確認すればよかったのだが。

航大自身の中でうごめくなにかが鬱陶しくて、もどかしくて、気分転換に外に出たというのに、予想外なことになってしまった。自分が吐き出したのはただのひねくれた我儘だ。今さらになって後悔の念が航大を襲い、余計に苛立つ。

足の疲れも少し見え始めた頃合いで大生の家に戻った。玄関の扉はいつも鍵が開いている。無意識に靴を脱いで上がろうとしたとき、いつもと違う感覚に襲われた。

玄関に並んでいる靴の量が多い。大生の家の玄関の左横にある靴箱には小さな時計が置かれている。もう十一時になろうとしている。

「これ、一樹と大生と、あの大学の先生……」

何回か彼らがここを出入りしているのを見ているためか、誰がどの靴かをすぐに見分けることができた。いや、それはたいして問題ではない。彼らは今現在この久里ノ上にいるのは調査のためだ。ここ数日、大生と徳島は航大が起きるよりも先に家を出ている。そして昼休憩のため一旦帰ってくるのだが、それにしても早すぎる。十二時は過ぎた頃にいつも帰ってきているのに……。

そして大広間を襖で仕切った部屋——航大や沙月が使っているのもそこで——の奥にある居間から話し声が聞こえる。それも普段とは違う、なにか興奮冷めきれないといった様子だ。

どうしたのだろうかといった感じで航大が靴を脱いだところで居間から沙月が出てきた。

「あ、やっぱり帰ってきてたんだ」

「ああ。なあ沙月、これって」

「うん。とにかく、早く来て」

彼女の真剣な瞳からも、なにかが起こっているのだとすぐにわかった。手招きをするとすぐ居間に引っ込んだ沙月の後を追いかけて、居間に入った。沙月が座布団の上に座り、丸テーブルを挟むようにして一樹と大生と徳島がいた。丸テーブルには朝見た朝食の匂いはなく、代わりに久里ノ上と果那ノ海一帯がある海を切り取った地図、そしてタブレット端末などが置いてある。

一樹と大生の視線が航大のとぶつかった。そしてすぐに航大は先ほどの茉紀とのやり取りを思い出してしまい、すぐに視線を逸らす。それに気づいてか気づいていないか、大生は航大が沙月の隣に座ると説明を始めた。

「俺たちはずっと氷床下で起きている超常現象的な海流の調査をしていたんだ。結果から言うと、今朝の調査でやっとそれをくぐり抜け、果那ノ海へ行けるルートを見つけた」

「……え？」

「激流が全くない果那ノ海へ行けるルートを探していたんだけど、それは無理だとわかった。だからある程度穏やかな流れを横切つていけないかなって。これを見て」

大生が見せてきたのはタブレット端末。そこには氷床と化した海と一樹たちが立てた調査所、果那ノ海がある地点が映っていた。調査所がある場所は赤丸がついていて、果那ノ海周辺にはいろいろな矢印が表示されている。これがその海流らしい。

「色が赤ければ流れが強いつてことなんだ。けれど、俺らが設けた入水ポイントからかなり遠回りになるけど、この地点周辺の海流だけは少し穏やかなんだ」

「……まあ、色が違うな」

大生が入水ポイントと示された黒丸印から指をなぞってそのルートを説明する。確かにそれは果那ノ海に行くには遠回りで、そしてあたりをほびこる猛獣のような激流とは違う、オレンジ色になっている海流がある。

「ここを通過できればあとはここを辿って果那ノ海に到達できるはずだ。だから……」

「で？結局、俺たちに何が言いたい」

航大は大生の言葉を遮るように口を開いた。その声は先ほど茉紀に対してのほどではないけれど、また苛立ちが窺える。彼らは彼らが行いたい、達成したい目的があるからここで調査をしている。それはきつとすごい大変なもので、中学生レベルでは到底及ばない知識と気力があるだろう。

けれどそれをわざわざ言いに来る。それも詳細に説明をしてくる。まるでこれは、調査に参加してくれと言っているようなものではないか。

「ある程度穏やか、とはいえ揉まれるような海流だ。くわえて、ルート途中で飛び出た岩などがそこら中にある。うちの大学から持ってきた探査機ではやはり無理がある。だから……」

ああ、やつぱり。

「二人に、行ってほしいんだ。果那ノ海に」

大生の言葉を受け取るようにして一樹が言った。一瞬だけ航大が目線をタブレット端末から一樹に向ける。その目はあまりにも真剣で、けれどもがくように苦しんでいるようにも見えた。

## 第四十四話 自分にできること

「俺らが……果那ノ海に」

航大は予想していた言葉であるにもかかわらず、それが心の奥に重くのしかかるのを感じた。

「こちらから、地上からだけじゃあ果那ノ海の村の状況は当然わからないんだ。突き出てる氷山の下はどうなっているのか、それは村自体にも損害をもたらしているのか、などね。それらを調査するにはやっぱり直接見てくるしかないんだ」

徳島はその見た目に反してゆっくり、航大と沙月に丁寧に語りかける。

「それと大学から持ってきた小型機材を果那ノ海にも設置したい。果那ノ海内での潮の流れや塩分濃度の詳細がわかるものなんだ。これも地上からじゃ観測できないから」

「……」

大生も二人に説明をする。彼のしつかりとした眼差し。それに航大はまた目を逸らすようにタブレットに顔を向ける。けれどそれを見たって説明してくれたこと以外に何にもわからない。そもそも、見ても見ていないような、心がどこかへゆるりと身体を抜けて彷徨っているような……。

「私は、行きます」

それが瞬時に体に戻ったのは、沙月がそう言ったからだ。

「私にできることがあるなら、私はやりたい」

できること。航大の頭の中でその言葉が何の抵抗もなく入ってきた。

けれど、と航大はきびすを返すように、進むのを諦めるように、その言葉を押しとどめる。

果那ノ海に行く。おそらく今まで手を伸ばせなかった。それが可能だとわかった。そのために俺らの助けが必要。そうだろう。そうなるだろう。

見つけたルートは、しかし容易なものではない。地上に上がった海

の人たちはいる。汐帆がそうなのだから、彼女に協力を仰いでもよかつたのではないだろうか。

それに、きつと果那ノ海も時間と共に存在しているのだ。時間が流れ、潮も流れ、俺らが見ていた果那ノ海の像も流れていく。五年経つた果那ノ海は俺らの知らない果那ノ海。

村の人たちは全員冬眠に入っている。誰もが眠っている。ゆえの静けさが容易に想像できる。そんなものを見るなんて……。

ああ、だめだ。航大は嫌な息を吐く。ずぶずぶと底なし沼に足が入っていくような感覚。もう抜け出せない常闇へと誘われるようだ。もうなにもかもだめだ。すべてが息苦しい。辛い。怖い。もうこんな自分にできることなど……。

「それに、果那ノ海に行けばみんなどうしてるのかとかもわかると思うの。どうしてるって寝てるに決まってるだろうけど。けど、気になっちゃう。海遥たちがちゃんといるかどうか、気になっちゃうの」「……！」

ああ、あああ！

そうだ、と航大は沙月の横顔を見る。果那ノ海に行けば海遥たちを探しに行くことができる。航大は、少なくとも洋斗と一樹を最後に見て冬眠に入った、というより引きずり込まれた。ならば洋斗がどうなっているのか、航大と同じように海に引き戻されて果那ノ海にいるのか、そもそもあの渦は彼らを果那ノ海にちゃんと戻して冬眠させたのか。そう思考を巡らせていくと確かめたいという衝動がわき上がってきた。

さらに沙月から冬眠から覚めていくらか経った時に聞いた。海遥もおふねひきの日に現れた巨大な渦に巻き込まれていったらしい。澄滞に関してはおわからないが、汐帆を助けに海に潜ってから上がってきたのを確認していない。

「航大は、どうする？」

視線に気づいたのか、沙月が航大に顔を向ける。おのずと一樹たちも航大を見ることになる。

沙月は意思表示をした。彼らの調査に参加するということに同意

した。なら、航大は？

沙月の視線とぶつかり、けれど逸らすことはできなかつた。逸らせなかつた。そしてまた、あの言葉が脳内を反芻する。

できること。自分にできること。

『でもやれることはやってみるべき、ですね』

これはいつの日だっただろうか。……ああ、そうだ。これは洋斗の言葉。漁協に集まって、陸でももう冬眠の話は伝わっていて。それをなんとか回避しようと昔話に沿ったおふねひきをしようということになっていた。その案に航大たち皆が同意した。

『俺たちはやってやるんだ！海神様に俺らのことをちゃんと見てもらって、大丈夫だってわかってもらえて、それで冬眠も回避して、万々歳だぜ！』

こんな張り上げた声で酒の入ったグラスを掲げるのは、他の誰でもなく、航大だ。これはそう、おふねひき前の宴会のときだ。

『おうおう、まだまだガキンちよのくせに威勢はいいな！だが凄まじく俺のガキの頃と同じだ。さすが俺の息子だぜ』

航大の父親がげらげらと笑いながらグラスをくいと上げて酒を一気飲みする。

『ああ、そうなってくれるように頑張らないといけない。そりやそうなんだが……』

『だからってよ、酒呑む必要あんのかこれ』

航大の横にいるのは海遥、そしてその隣に洋斗もいる。二人とも片手には並々一杯の酒が入ったグラスを持っている。しかし飲酒に抵抗を感じているようだ。

『あるんだよ！俺らは男だぜ？ならやることはひとつ！目の前にある壁をぶち破る！どんな壁でもな。そのための気合を入れる！気合を入れるためには男同士で杯を交わすんだよ』

航大はいつにもまして力強い声で二人に熱く語る。彼は既に父親とちよくちよく呑んでいたのだ。それもあつてだろう。

『……はあ。まあいいか。それも悪くない』

『おい、海遥。マジでこれ』

『俺はもう河内さんに少しだけ調教された』

『ほらほら洋斗！お前も男なら酒の一杯ぐらいは平気で飲み干すんだよ』

そんな航大の様子を見て海遥はいつものように呆れながらも見せる微笑をした。げんなりとした洋斗に航大が近寄って背中を強めに叩く。

『よっしゃ、そうなりや航大、洋斗。立て立て！改めて乾杯だ。俺らが絶対におふねひきを成功させるために。そしてみんな一丸になって海神様に思いを伝える。その誓いの乾杯さ』

『おお、いいねいいね！』

『へへ、いいじゃねえの、次期宮司さんよ。おい、てめえらも来い』

航大と航大の父親も立ち上がった。彼は仲間の青年会メンバーを呼んだ。十数人が集まった場で洋斗はもう降参状態だった。

『俺らは俺らのできることを、果たすべきことをする。俺らはひとつだ。ここにいない陸の人たちも、みんな！』

海遥も河内に吞まされた分だけ少し酔っているのか、けれどいざとなったときに見せる勇姿が、海遥に見て取れた。

『どんなことがあっても俺らはみんな仲間。俺らはみんなひとつ！』

『つまりは最強！この誓いに……乾杯ッ！』

『乾杯！』

海遥の言葉に航大が乗っかるようにしてグラスを天高く掲げた。乾杯の合図でみんな一斉に声をそろえて各々グラスを掲げ、そして胃に酒を流し込む。

航大は一気に飲み干し、海遥はつかえつかえではあるものの酒を飲んでいた。洋斗は小さなひとくちで顔が歪んでいた。

ああ、そうだ。そうだよ。航大は目を閉じ、頷くように何度も心の中で呟いた。

結果は、止められなかった。一樹たちと時間の差が生まれてしまっ



た。それで今に至る。それでも、航大はここにいる。いることができる。それは、航大が、いや航大は、沙月はもちろん、一樹と大生の仲間だから。思いをひとつにした仲間だから。

『だから、ゆっくりでいい。きつと俺にはああだこうだいう権利はないけど、二学期から学生生活をまた始めてほしい』

『自分ができるなにかを見つけることができる日々。それを、また始めれば……』

そうなんだよな。大塚と茉紀の言った言葉も浮かんできた。航大はひとりじゃない。仲間がいるから、自分をまたあの日々と変わらぬ生徒として向かえてくれる先生も、大切な思い出として覚えていてくれて、おまけに心配までしてくれる後輩もいる。なら、航大は……。「む、無理はしなくていいんだ」

再び目を開けて視線を移動させると、今にも泣き出すのではと思えるような面持ちでこちらを見る一樹がいた。

「一樹？」

「これは別に強制じゃない。こちらが一方的にお願いしているだけなんだ。そう、だから航大には拒否権がある。航大だけじゃない、いや北島さんにもあるんだ」

「一樹、急になにを」

一樹の突然変わった様子、そしてその発言の裏にある感情をはかりかねて大生は一樹の肩に手を置く。それでも彼の顔は航大と沙月に向けられていた。

「二人は冬眠で、それは俺たちが止めようとして止められなかったことで。それで、こんな成長の差が出てしまった。……ああ、でも俺の勝手な考えだけど、やっぱり自分の知らないうちに時が進んでいるのって、怖いなって。怖くて、目を逸らしたくて。その、俺が言うのもなんだけど、まわりにいる人たちの年齢だけが進んで、見た目も変わってたらって、俺が当事者ならそれだけで気が滅入ると思うんだ」

「一樹、おまえは……」

航大は驚いていた。自分が悩んで苦しくもがいていたことと同じような事を考えていたのだから。一樹は大学生で、航大たちよりも年

上になって、それでもつてすごい研究をしている人物なのに、彼の目の先にあったのは航大たちと同じ景色だった。

「きつと果那ノ海は二人の記憶とは異なっている。あの氷山がどれだけ影響しているかわからない。そもそも、北島さんが言ったような、冬眠に入った海村の、あの二人を加えた人たちを探し出してもどう目を覚ませるかなんてわからない。覚まさせていいのかもわからない。だから……、ああもう。言いたいことがこんがらがって、なんだろう。俺もうまく言えなくて。その、ごめん！」

一樹は必死だった、航大たちのためになにかを言いたいのだと、そういう風には見ええない。テーブルに出していた手は強く握られ、ついには髪の毛をぐちゃぐちゃにしている。そして頭を下げて最後に口から出たのが、ごめん。三文字の言葉が、また航大の記憶の箱を揺らした。響いた。嫌な音ではなく、なんだか無性に懐かしい。

『そ、その……。えっと、ごめん！』

これは、白風中に来て一ヶ月も経ってない頃。澄濤が座っている列が教室掃除の当番で、女子たちが澄濤の胞衣に興味を持った。それを見ていた幹大がつい澄濤の腕をつねってしまった。胞衣というものなんて陸の人たちになじみはないから、肌にくつつく膜でも思っただろう。それを航大がまた澄濤をいじめているのだと思っただけに詰め寄った。

そのときに間に入って誤解を解いたのが一樹だった。当時も、やっぱり必死になっていた。

「……く、くくく」

「……航大？」

急に笑いかみ殺すようにする航大。それを見て沙月はすこし驚いている。

「ははははははー！」

ついに耐えきれずに航大は大笑いを始めた。黙り込んでいた時とはまるで相反する様だった。一樹たちがあつけにとられていても、航

大は笑いを止めなかった。

滲み出た笑い涙は、しかし嬉し涙でもあった。

それでも、大きな声で笑うその姿は、紛れもなく、みんなが知っている航大だった。沙月もおもわず感極まりそうになる。それをごまかすように、でもそれを表すように彼女も笑顔を見せる。

「一樹、お前ってヤツはさ、変わんねえな」

「……航大！」

「おう。やるさ。やってやるさ。俺らはどんなことがあっても仲間なんだからよ。お前らの頼みならもちろん引き受けるぜ」

航大はニツと笑いながら拳を突き出した。それを見て一樹は安堵したのか、へにやりと姿勢を崩して「よかった」と呟いていた。

「じゃあ、そういうことで。二人には明日……」

「その前に」

大生もひとつ頷いてから今後の話をしようとしたところで沙月が待ったを入れた。

「一樹君が言つてたところで気になったんだけど。気のせいかな。冬眠に入った海村の、あの二人を加えた人たちをって言つてたとおもうんだけど。私たち五人のうち私と航大が冬眠から目覚めた。五人全員が冬眠、というかあの渦に飲まれた。なら、そこは三人を加えた、つてなるはずなんだけど。あれ、私こそ変なことを言つて……」

「いや、それは間違つてない」

徐々におどおどし始める沙月に肯定を示したのは大生だった。その横で一樹の表情はさつきとはすぐに変わって真剣、加えて若干の動揺もあった。

「今言わなかったとしても、いつかは言うことになるんだ。後々にならないうちに話しておいた方が良さだろう」

一樹の言いたいことをくみ取ったのか、ちらりと横目で一樹を見てから首を振った。そして再び航大たちに向けたのは、普段無表情の彼でも変化がわかるほど、深刻そうな目。

「実は、洋斗だけが冬眠を免れて地上にいるんだ」

「はあ?」

「一樹があゝの時の大渦に飲み込まれたとき、洋斗と一緒に助けに来てたんだろ？で、航大は大渦に飲まれたけど洋斗は一樹と一緒に海に出てきたんだ。それから地上で生活している」

「で、今はどこにいるの？」

沙月がテーブルに手を突いて食いかかるように大生に問うた。しかし、大生の目は一層深刻さを訴えるように細められて、

「今は、久里ノ上駅を挟んだ向こう側で生活してる。交流もないんだ。俺らを避けるように」

「え……」

一樹も黙り込んで下を向いていた。現状を知らされているのだろうか、徳島も難しい顔をして腕を組んでいた。

「それこそ、ごめん。黙っているつもりはなかった。けれど、どう話しているかわからなくて、タイミングもつかめなくて」

「いや、謝らなくていい」

そう言ったのは航大だ。

「大生がそんな顔をするんだ。よっぽどのことがあったんだろうな、洋斗には。それを今すぐ問いただしたいところだが、俺は海遥みたく要領が良くなくてさ。すべきことをいくつも抱えらんねえ」

航大は頭をかいてため息をつくが、ふと上げた顔に陰りはない。

「まずは果那ノ海に行く。その、調査のための機械を設置してついでに海遥と澄滯を探してみる。話はそこからだ」

その声に迷いもなく、不安もなく、ただそれは頼りがいのある、安心できる真つ直ぐな強さがあった。

「わかった。ごめん」

「だーかーら、謝るなって。んで、行くのは明日だな？」

「う、うん。それでね……」

航大は呆れ笑いをしながら明日行われる調査についての説明を促す。沙月も多少のショックを受け止めつつも説明に耳を傾ける。

何件かの留守番電話が入っていた。その宛名はどれも同じ人物だ。『もしもし、私です。里実です。——』

窓から闇夜に浮かぶ月の光が入ってきて、暗がりの部屋に影絵を作り出す。その月光が体に染み込んでくる。心地いいのかと言われたら、違う。この光は思い出してしまふ。あの日のことを、あの日に起きたことを。

一番古い留守電の内容を聞いてから、洋斗はこう呟いた。

「ついに、か」

## 第四十五話 五年後の果那ノ海

「で、これを立てた後にこれをはめ込む。そして電源ボタンを入れれば、こういう風にランプが赤く点滅する」

「ほうほう、馬鹿な俺でもわかりやすい設計だな」

果那ノ海に行けることを話した次の日。空には雲がまばらに浮いていて、この氷床と化した海のように。

一樹たち研究チームの拠点であるテントの近くに掘った穴の前で、一樹は航大に設置してもらおう機械の説明をしていた。それを終えると肩掛けバッグに入れて航大に託す。

「こっちの機械から位置情報をタブレットに常時送ってるから、これを頼りにして進んでくれ。もし何かあったらここを長押しして。緊急用のもので、通知はこっちですぐ受信する」

「わかった。航大がそれしよってるから、私が持つてる」

沙月は大生からタブレットを受け取る。

「その機械が作動したら自動でこっちに作動確認できるから」

「ああ。んでよ、設置した後は俺らで自由に果那ノ海を散策していいんだよな？」

「それは構わないけど」

航大の問いに一樹は返答したものの、ちらりと横目で大生や徳島の顔を見る。徳島はそれに答えるように軽く頷いた。

「そうだな、それは問題ない。けど時間制限をつけておこうか。2箇所を設置してもらおうから、2つ目の機械を設置してから1時間。あくまで保険だ。君たちの体のことを考慮してね。あと、ずっと闇雲に探索し続けてもらちがあかないはずだ。場所を絞って探すといい」

「1時間。うん、果那ノ海にさえ行けりゃ、今後いつでも探しに行ける」

「だね」

航大と沙月が互いに目を合わせてから改めて一樹たちの方を振り返る。

「それじゃ、行ってくるぜ」

「頼んだぞ」

一樹のその言葉には、様々な意味が込められているのが航大でもわかった。穴に入る直前、この場に茉紀がいるのが見えた。単に興味本位で来たのか、それとも一樹たちの研究の活動録を写真に収めようとしているのか。

航大と目が合ったとき、若干気まずそうな表情を浮かべた。それはそのはずで、つい昨日航大と公園であんな会話をしてしまったからである。

それは終わった。もういいんだ、忘れてくれ。俺は大丈夫だ。そういう思いで航大は笑顔を見せた。するとそれを察した茉紀もまた、笑って頷いた。

航大と沙月の足下に口を開く穴。中は薄暗く、奥に行けば行くほど闇が覆い被さってくる。もしここに氷床なんてなければ、もっと綺麗であるはずなのに。

どちらかが指示したわけでもなく、航大から先に入った。後から沙月も飛び込む。足から一気に全身へと伝わる水の冷たさ。空気の泡が晴れて、包み込まれるように体がゆっくりと浮遊する。あたりは暗く、時刻は午前を示すのにまるで夜に浸かった海だ。

「一応ライトはあるぞ」

「それは助かる。それじゃ、行こっか」

これも一樹から受け取った小型携帯ライトを付ける。沙月はタブレットを見つつ水中を蹴る。並んで航大も進み始める。

海の中を泳ぐ感覚。頬を海水が滑っていく。髪も揺れ、きつと空では鳥のように自由自在に進んでいく。

「なんだか、懐かしいな」

「うん、それわかる。一週間ちよつと陸で生活しているだけで、こんなに海が懐かしく思えるなんてね」

「ああ。この感覚をずっと、何年も手放して生活するなんて、俺には考えられない」

「航大は好きなんだね、海が」

「そうだぜ。生まれ育ったこの海が。でも」

航大は一旦そこで句切つてまわりを見渡す。ここは久里ノ上の海で、果那ノ海のある海でもある。ここは自分の庭のように知っているのに、まるで別世界に見えた。泳いでいる魚などの生き物は確かにいるが、圧倒的に数が少ない。それどころか、不気味なほどの静寂があった。

これが五年の月日が経った海。自分の知らない海なのだ。

「もうちよつとしたら例の流れの強い場所だよ」

しばらく進んでいたとき沙月がタブレットを確認した。これ自身に取り付けられた位置情報を、地上の一樹たちが持ってきたものを介して反映している。進んでいる方向に二等辺三角形の先が向いている。そしてまもなく昨日と今日説明された不可解な潮の流れがあるポイントを通過するのだ。

入ってしばらくは海藻などの緑が見えたが、もうこの地帯では氷床の間から入ってくる日光で岩陰が照らされるくらいで、見ていてつまらない。あの穴から入ったとしても、もう果那ノ海にはとづくに着いている頃合いだから、やはりかなりの遠回りをしているのが実感できる。

「着たことない場所だけど、だいたい渦波神社付近に向かって回り込んで行つてる感じか」

「そうだね。……つと、このすぐ先」

泳ぐ体勢を変えて水の抵抗を受けて沙月が止まる。航大も同時に止まって先を見つめると、確かに海水の動きが妙だとわかった。

「これをつつ切つて、どのくらいだよ？」

「わっかんない。でも、ここをまっすぐ乗り切ればすぐ果那ノ海が見えてくるはずだよ」

そう言うとき沙月はタブレットを持ってきた小さい鞆に入れ込む。

「さすがに両手ふさがつたらキツイからね」

「もし流されていきそうになったら手、つかんでやるよ」

「……そういうことを言う相手は、好きな人だけにしたら？」

「お前さあ、こんなときに茶々入れるなよ。……それは追々俺がきつちりけりを付ける。行くぜ！」



体勢を戻して、足に力を思いっきり込める。沙月も一緒になって潮の流れに立ち向かう。これを実際に体感してわかる。これはあまりにも異常すぎる。

「なんなんだよこれ、俺らでもちよつとキツイぞ」

「これより激しいのぼつかりなんて言うから、ゾツとするよね」

右から左へと延々に続く激しい流れ。それに負けじと右へ右へと向きを修正しながら二人は進む。今度は手も使っていないとあつという間に流れに持って行かれる。

「気持ち悪い。不自然すぎるよ」

「ああ。明らかに俺たちを歓迎してない。むしろ追い返してんだろ、これ……！」

ある一定地点で起きている潮の流れ。これは沙月の言うとおりの自然。この場所で起きるはずもなく、そもそもある場所だけ激しい流れが起きるなんて明らかにおかしい。その”おかしい”感覚を、ふと航大は思い出した。

「この変な感じ。不自然だ。だから自然じゃない、意図的に誰かが作り出した流れ……。これ、おふねひきで起きた渦に似てる」

「！」

「これを生みだしてるのは、まさか海神!？」

泡が弾けるようにそれは終わった。航大が記憶を遡り、あの日起きた出来事とそれに関連するなにか。それに辿り着いたのかもしれない。脳内で浮かんで沈む様々なものがひとつに結合した。そんな感覚と同時に潮の流れが終わったのだ。

「抜けたのか」

「うん、そうみたい」

二人は投げ出されるような状態から体勢を立て直す。再び穏やかな地点へと来たのだ。沙月はタブレットを取り出して現在地点を確認する。

「よかった。少しばかり左に逸れたけど、おおむね予定通りのコースを進めてたみたい」

「うっし。じゃあ果那ノ海はどこなんだ？」

「えっと、これが私たちだから果那ノ海は右の、方に」

「右？……え？」

自身の位置を示す二等辺三角形と果那ノ海的位置を確認して、二人とも右の方に顔を向ける。しかし、その先には巨大な氷のドームのような壁が広がっていた。それはあくまで海の中まで氷が及んでいて、底へ近づくとつれてより広範囲が凍っているのだと、そう思ったかった。でも、違ったのだ。

近づいていくとこれが現実だとわかった。うつすらと氷の先に果那ノ海の町が見えた。家々が並んでいる。宴会を行ったホールも遠くにある。見慣れた景色が、氷の中にあつた。

「おいおい、マジかよ」

「凍ってる……んじやなくて、氷で覆われてる？」

航大は右手で氷の壁を触ってみる。瞬時に皮膚へと伝わる冷たさ、間違ひなく氷だった。拳にして叩いてみるが、音や感触だけでかなりの厚さがあるようだ。

沙月はその場を少し離れながら氷の壁に沿って見上げる。するとそこにあるのは……。

「航大、見てー！」

「ああー！」

航大も壁から離れて沙月が指さす方向に目を向ける。氷の壁は確かにドームのように町を囲んでいるように見える。けれど天井からは上へと一直線に巨大な氷の柱が伸びていた。その先端はここから確認することはできない。なぜならば、そこから先は氷床があるからである。

「この馬鹿デカイやつ先の先つちよが、地上にある氷山っていうことか」「うん。この地図からしてそうだと思う」

「……とりあえず、どこか入れる隙間かなにか探さない」と

航大は地面を蹴って氷の壁に沿って搜索を始める。沙月も後に続いて見てみるが、航大とは違ってこの氷の性質、どうやって作られたかなどを考えていた。すると、気づいた点があつた。

「ねえ、ちよつと見て」

「なんだ？」

沙月が止まってまた指さす方を航大が見てみる。そこは氷の壁が岩盤と密着しているところ。けれど航大には観察して不明な点や不可解なものは見当たらない。

「これが、どうしたんだ」

「これね、よく見ると氷が岩盤に突き刺さってるようなの。だから氷は地下から生えてきたんじゃないやなくてどこからか現れたものがここに突き刺さった」

「現れたんなら、いや、どつちにしろあの馬鹿デカいのが怪しいだろうな」

「うん。あそこから町全体を覆ってる。でも、距離からして」

「渦潮神社に近いな。つたく、余計に海神様とかウロコ様が怪しいぜ」

この後もまわりに沿って進んでいくが、いつしか巨大な岸壁が天高くそびえ立ち、氷壁とびったりくつつき合っている。町を覆う氷壁が、運悪くこの岸壁とかみ合ってしまったのだ。まるで木材建築の職人芸のように岸壁の凹凸部分にきつちりと氷が食い込んでいる。「マジかよ……。こつから先ずつと岸壁だぞ」

「どうしよう、これじゃ搜索どころか町に入れない」

二人が目の当たりにする状況がぐるりと一周しているのならば、氷に隙間が無い限り果那ノ海に一步も入れずじまいだ。二人は一樹たちの研究機材設置という名目でここまで来たが、やはり気になるのが海遙と澄滂だ。二人を探すことも機械を設置することもできない。途方に暮れ、苛立ちも焦りも滲み出る。

「なんかこう、この壁ぶつ壊せないかな」

「無理だよ、こんな堅いのなんて」

「だよな……。クソツ、ここまで来たのに！」

航大は苛立ちと悔しきで氷壁に拳を叩きつける。しかしそこに傷ひとつつくことなく、逆に航大の拳に痛みが残るだけだった。崩れるように航大は前傾姿勢になって額を氷壁につける。額からも感じる氷壁の冷たさ。それは二人を果那ノ海から突き放す、二人から希望を奪うような、絶対的な絶望を見せる冷徹さだ。

それでも、航大は諦めなかった。冷やされた脳をフル回転させ、なにか突破口を考える。その言葉通り、この氷壁をどうにかしてくぐり抜けて果那ノ海に入れる。現時点でそんな方法は思いつかない。それでも、それでも、と頭は諦めない。

なにか、なにかないのか？この壁を突破する方法が。ダイナマイト？そんなものは使えない。ここは海だ。ドリル？それをどこから、どうやってここに持つてくる。

強引に壁を突破できなくてもいい。どこかないのだろうか。例えば地下から地上に出られるような通路かなにか……？

『※※※※※※※※※※※※※※※※』

「……あつた」

「んえ？」

航大の眩きを岸壁と氷との境目を必死に見ていた沙月が聞き取った。つま先立ちしたまま顔だけを航大に向けると、彼の目にはハッキリとわかるほどに希望の光に満ちていた。

「あつたぞ、果那ノ海に行ける唯一の場所が」

「え!?!どこにあるの」

「この岸壁の場所です壁の範囲ギリギリだとしたら、あそこにはきつと壁はない！行くぞ」

航大は先ほどの絶望を蹴り飛ばすように目的の場所へ動き出す。沙月をそのまま通り越してさらに突き進んでいく。慌てて沙月も後を追う。

やっと見つけ出した突破口。それが逃げるはずもないのに、岸壁に沿いながら航大は全速力で泳ぐ。まわりの景色を見ながら、自分の記憶とすりあわせていく。そうだ、それは最初からあつたのだ。

「……ねえ、もしかして」

「ああ。そうだよ。俺たちはもうその道を知ってたんだ！」

少しして見えてきたのは海藻が生い茂る場所。そこをくぐって辿り着いたところで、航大は止まる。

「やっぱり、ここは大丈夫みたいだ」

彼の先にあるのは岸壁に開いたひとつの穴。横幅は人二人ほどで

高さは航大の身長より少しだけ低い、問題は無いだろう。そしてここは、海花がまだ生きていた頃、六人で探検隊ごっこで奥へ入ったことがあった。この穴は航大が見つけた。結果、出口から見えたのは渦波神社のすぐ近くだった。

「途中で氷が邪魔してなきやいいんだがな」

「でも、あの岸壁との接合面からして、町を囲むように氷を張っているけど中の通路にまで貫通してるとは思えない」

「ま、行ってみなきや始まらねえ」

航大は再び小型ライトを取り出して穴の中へと入っていく。少しだけ屈むようにして歩く道のりは、やはり懐かしさがあった。たかだか数年前は普通に歩いていたのだから、自分の体の成長を改めて知ることができた。

ここを使う人などほとんどいないだろう。だからだろうか、ここだけは時間が進んでいない、あの頃のままに思えた。

曲がりくねってはいるが分かれ道はない。砂利を踏む音が洞窟内に響く。二人は足早に前へ前へと進み、言葉は交わさなかった。そしてまたひとつ曲がった先に光が差し込んでいた。二人は同時に駆けだし、ついに外へと出た。

「これが……」

「今の、果那ノ海」

洞窟から出た途端にさらに体感温度が下がった。目の前に広がるのは果那ノ海の景色。けれど町から先に見えるのは氷壁だけで、巨大な空間に町を作ったような何とも言い難い圧迫感があった。

「あの氷の柱は……って、えええ!？」

航大はその場から氷の柱を指して左に歩いていくと、方向からして渦波神社があるのだ。しかし、

「神社が、潰れてる」

ゴツゴツとした氷塊がちょうど神社に乗っかるようにあった。そんなものを支えられるはずもなく、神社は無残な姿になっていた。

「嘘、でしょ」

「神社がない。じゃあウロコ様はどこにいるんだ?」

二人は恐ろしい現実にある果那ノ海に驚き、困惑しつつも当初の目的を果たすことにした。今出てきた場所にひとつ、そして一樹たちの観測場所から一番近い場所にひとつ、持ってきた機械を設置した。後者は航大たちがいつも白風中に通うときに集まっていた広場だった。どちらも赤いランプが点滅しているのを確認して、時刻を確認する。時刻はまもなく午後一時になろうとしていた。

「結構時間食ったな」

「まあね。潮の流れをくぐったり、穴を見つけて登ってきたりしたし」「うん。それよか、あの馬鹿デカいのところに行つて……」

「ねえ、航大」

視線はもう巨大な氷柱にある航大は、腰に手を当てながら沙月の方を見る。その声にはある種の緊張があつて、それが気になった。

「その前にさ、自分たちの家に行つてみない？」

「……あ」

「その、別に航大はあのところに行つてもいいんだけどさ。私は、その、様子だけでも見たくて。お父さんとお母さん、おばあちゃんの顔が見たいんだ」

確かにそうかもしれないと、航大は目を細めた。自分らの物差しで考えてはいけない。この世界は五年も年月が経っている。それまでずっと自分たちも冬眠に入っていて、そして他の人たちは今も眠っている。ちゃんとリラックスした状態で眠っているのか、また青年会の人たちはおふねひきで唄を歌っていたはずだ。そこに航大の父もいた。あの後どうしているのか。考えれば様々なことが浮かんできて、不安になった。

「俺も、やっぱり家に帰るわ」

「うん。じゃあ、時間とかどうする？」

航大はバッグから海中用の小型時計を取り出す。これもまた一樹が持たせてくれた。とても用心深いやつだと、航大は改めて思う。

「そうだな……。三十分後にまたここに集まろう」

「了解」

そう言うと沙月はふつと歩き出す。その方向とは逆の道を航大は

歩き出す。一週間ちよつとしか経ってない、けれど五年も経ってしまつたそれぞれの家を目指して。

## 第四十六話 眠りの町

「ただいま」

その言葉は薄く溶け込んでいき、潮の流れに揉まれるように消えてなくなった。いつもなら返ってくる「おかえり」は見つからない。

見慣れた玄関を上がってすぐ右手前のリビングを見る。しんとした場所には、いたるところにぬくみ雪が積もっている。沙月が一步、踏み出すと床にあつたぬくみ雪が舞う。微弱な光が窓から差し込み、ぬくみ雪に当たってきらきらと光る。

階段を上り、両親の寝室へ向かった。クラゲを思わせるライトが乗った小さなテーブル。それを挟んで二つ並べられたベッドに両親はいた。おふねひきで父親は合唱隊にいたから、家に戻ることができなかったのではと心配だった。きつとウロコ様が運んでくれたのだろう。

ぐっすりと眠っていて、しかし胸部当りが上下に動かないのがとつさに気になり、二人の口元にそつと手をかぎす。大丈夫、かすかに息はしていた。そして微かに積もつたぬくみ雪が、両親に化粧をしているみたいだった。

ひとつ隣の部屋に、沙月の祖母はいた。敷き布団の上で仰向けになり、祖母は満足そうな微笑を浮かべているように見えた。病院に入院したときもかなりショックを受け、日々心配してばかりだった。そして、この冬眠ときた。祖母は、

『こんな弱つちい体で幾年も寝てられるのかしらねえ。寝たままあの世に行きそうだわ』

『もう、おばあちゃん！縁起でもないこと言わないで！』

こんな会話をしていた。そして沙月たちでおふねひきを昔のように行つて、冬眠をなくしてもらおうよう海神様へ伝えるのだと言った。それを祖母はうんうんと笑顔で頷きながらお茶をすすっていた。

『みんなと一緒になら、できるかもしれないねえ。うん、頑張つてきなね』



優しく、温かい言葉をいつも沙月にくれた。だからこそ、この結果になってしまったことに沙月は悔しさを覚えた。

「ごめんね、おばあちゃん。海神様には届かなかったみたい」

部屋を見渡す。祖母は編み物を趣味としていて、小さい頃の沙月にセーターやニット帽などを編んでくれた。裁縫セットが棚の一角に置いてある。その側に揺り椅子があり、祖母はいつもそこに座って編み物を楽しんでいた。沙月は薄く積もったぬくみ雪を手ではらい、座ってみる。

少しだけ軋んだが、体重移動でそれは前後に揺れる。

ああ、そうだ。沙月は思い出す。小さい頃は祖母が編み物をしているときに、膝の上にまたがるように乗っていた。当時の自分からして見れば、祖母の慣れた手つきで糸が編み込まれていくのが魔法みたいで、ずっと見ていられた。

沙月は立ち上がると、祖母の右横あたりで正座する。祖母の顔をのぞき込むようにして沙月はひとり、喋り始める。

「おばあちゃん」

無論、返事はない。

「私ね、ちゃんと伝えたよ。自分の想いを、面と向かって」

沙月は思い出す。一ヶ月も経っていないのに、手の届かない遙か遠い昔のことのようにさえ感じてしまう。それはきつと、渦に飲まれる海遥に届かなかったからだろう。

「やっぱり、驚いてたよ。そりゃ、そうだよ。だから……、ううん、だとしても答えを出すのは待つてほしいって」

沙月は自身の手のひらを見つめてから、祈るように組む。

「たったひとつの言葉を口にするのに、ここまで時間がかかって、こんなに怖く感じるなんて……。びっくりだよ。でも伝えることができたら、言葉にできたら、心が軽くなったというか、安心したんだ」

組んだ両手を胸元までもってくる。忘れない、忘れたくないぬくもり。どこかに行ってしまうような背中を無我夢中でつかんだ、この両手。

わけがわからないほどに落ちていく涙。これから自分の、精一杯の

気持ち、想いを伝える。単純に怖かったのかもしれない。でもこれが、自分の気持ちを抑え込んでいた鎖だったのかと、そうも思える。「海遥はまだ起きてこないみたい。それがいつになるかわからない。怖いよ、正直。だって、私が目を覚ましたら五年も月日が経ってた。海は凍って、ここだって氷に覆われてる。変わりすぎて怖い」

あの日、目を覚まして二人が沙月をしつかりと抱きしめてくれた。声も知っている。なのに視界に映る二人の姿は沙月の知っているのと少し違う。同年代、茉紀はひとつ下だったのに、もう覆せない時の差が生まれていた。そして自分たちがいるのは海の上。凍った海の上において、航大も目覚めた直後で。二人がまもなく目にしたのは、地上で見られるはずのない巴日。

「五年経っただけで、色々と変わってた。昨日のことなのに世界は五年も前の話になる。航大は、とっても怖がってた。あいつは、あいつだからこそその恐怖があったんだ。でも、吹っ切れたみたい」

学校からの帰り道。大生の両親とわかれて海岸沿いを歩いていた。そして航大が吐露したのは、自分と世界とで口を開いた時間差、それ故に生じる変化だった。航大は里実が好きで、でもその「好き」に対する「答え」が、この時間差で変化して、最悪消えてしまうのではと、ずっと怯えていた。あんな航大は初めて見た。

「海遥もいつ目覚めるかわからない。でも、私はこの想いを忘れたりほしくない。怖いよ、自分で保っているつもりでも、徐々に薄くなっちゃうのかって……。それでも、離したりはほしくない。消えさせない」

祈りの両手をより強く握りしめる。  
「澄滯もまだ起きてこない。それにお母さんもお父さんも、おばあちゃんも。でもきつとすぐに目が覚めるよ。だからそれまで待つてる」

祈りをほどこいて両手を床につき、立ち上がる。

「それとね、洋斗は冬眠から免れてみたい。でもね、私たちが眠っている間になにかあったみたいなの。それも解決しなくっちゃねって、航大は真剣だった」

——よっぼどのことがあったんだろうな、洋斗には。

吹っ切れた航大の顔にはいつもの調子が見られ、かつ驚きの状況を聞かされて真剣な顔をしていた。いつも明るくムードメーカーとしている航大だからこそ見せる真剣さは、本物だ。

「私も頑張るから、いろんなことを。また来るね、おばあちゃん」

そうして祖母の部屋を出て、両親にも言葉を語りかけてから沙月は家を出た。

白化粧につつまれた道を歩く。自分が家に戻ったときにできた足跡を見ながら広場まで来ると、隅にあるベンチで航大が座っていた。けれど両親に腕を乗せて、俯いていた。

「航大？ごめん、時間過ぎちゃってたかな」

「……ああ？いや、むしろ時間内だぜ」

声をかけられてから航大はむくりと顔だけを上げる。その顔は、しかし深刻さを物語っている。

「なにか、あったの？」

沙月にはその理由を導き出すものが限定されていて、もしや冬眠中の航大の両親に異変が見つかったのか、と思ってしまう。自然と声が震えていた。

「いや、ぜんぜん。二人ともぐっすり寝てたよ」

「そうなんだ、よかった……」

「ただな」

航大の言葉に沙月は安心したのもつかの間、航大は声を少しだけ小さくするようにして続けた。

「家が近いからさ、俺行っただよ。澄滯の家に」

「う、うん」

「どの家も鍵なんてかかってなかったからさ、中に入ってみたんだよ。ほら、俺ら渦にもみくちやにされただろ？俺の親父も、たしか沙月んところも合唱隊だろ？で家に戻ってきてんなら、澄滯もそうだろうって」

ぽつぽつと話す航大。その言葉の先が、いったい何を言いたのか、それが沙月にもわかってしまった。小刻みに震える手が口を覆い、声もまた震えていた。

「もしかして」

「ああ、いなかった。そうだ、そうだよ！俺らは同時に目を覚ましたからわからないけど、でも親父は家に戻されてた。あのウロコがそうしたんだろうって、なんか安心してたんだよ。もしかしたら……って！」

航大は悔しそうに頭をかきむしっていた。確かにあの渦が親切心を持っていたなどはひとかけらも思っていなかった。ただ、疑惑はありながらもウロコ様がどうか家に帰してくれていると、そうどこかで信じていた。

だが、それは違った。間違いだった。

航大の言葉を最後まで聞くことなく沙月は走り出していた。航大は急に立ち上がって足がもつれそうになりながらも、沙月の後を追う。向かう先は言うまでもなく、海遥の家だ。

引き戸式の玄関をすばやくぐり抜け、居間とは反対側の廊下に出る。一番手前が海遥の部屋だ。

「海遥ー」

沙月は勢いよくドアを開ける。しかし、そこに海遥の姿は見当たらず、ドアを開けた音だけが嫌に響いて消えていくだけだった。

すでに追いついていた航大も沙月の後ろから部屋を覗くが、もう彼は察していた分、驚きは沙月よりもまだ。

「やつぱり、か」

「じゃあ、あの二人はどこにるの？」

ゆるりと振り返って沙月は航大の衣服をつかんだ。どうしていいかわからない小さな子どもが親に助けを乞うような声で、何度も衣服をつかんだ手を揺する。航大は自身の戸惑った顔を深呼吸して押し

戻す。そして口を開いた。

「確証はない。でも、可能性のひとつとしてあるなら、あのでっかい氷の柱しかない」

「！」

「あれがもつとも怪しい。果那ノ海全体を覆っている氷があそこから生み出されたのだとしたら、尚更だ。ウロコがないのもあれだが、俺らが見なくちゃいけないのはどっちみちあれだ。時間はまだある」

「……うん。そうだね、行こう」

取り乱してしまった沙月は目を閉じて深呼吸をする。大丈夫、落ち着いて、と言いついて聞かせてから航大を見る。互いに頷いてから、海遥の家を出た。

石階段を駆け下りて氷柱がずっしりと佇む場所を目指す。見慣れた道を進み、曲がり、階段や坂道を駆け上がって。その度に積もったぬくみ雪がギュツと鳴るのが聞こえる。

そしてその音は、次第に変わっていく。これはぬくみ雪ではなく、小さな氷の粒を踏みつぶしている音だ。それはそれで、もう遠くに見えていた氷柱を見上げる距離まで近づいてきたからだろう。

「ここって、案外続いてたんだな」

「うん。とくに何かあるわけじゃないし、そもそもこうして道が続いているのも知らなかった」

生まれ育ってきた町なのに、自分たちの知らない道があることに驚きながらも足は止めない。

やがて岩陰の目立つ場所にやってきた。駆け抜けてきた道は町の中だからこそ舗装されているが、もう道とは言えなくなっている。ごつごつとした足場に気をつけながら進む。

氷柱はずっと根元部分が見えなかった。町の建物に隠れているのかと思っていたが、岩陰にすら匿われている。まだ時間はあつたはずなのに、どんどん時の針は進んでいく。こんなにも入り組んだ場所に

あるとは予想外だった。遠く見える建物に近づこうとしても、案外距離が離れている。つまりそれを体感しているのだ。

二人の努力をたたえるように、細い道がやっとな開ける。息を切らした航大が真っ先に出てみるが、達成感に包まれようとしていた顔が急変する。それは沙月も同じだった。

「こ、これって」

息が詰まりそうだった。その光景は、例えるなら”最期”だろうか。腕が折れ、胴体が折れ、または装飾が剥がれてちぎれて。何体、何十体、いやそれ以上の木製のおじよしさまの残骸が地面を覆っていた。

「今までずっと行ってきたおふねひきで作ったおじよしさまは、ここに流れ落ちてきてた、ってこと？」

「ああ、そういうことになる」

航大は、そして目先を奥へ奥へと動かす。ついに捉えた氷柱の根元があった。それはまさしく”根元”で、巨大な一本の木のようになんにも根を伸ばしている。それは間もなくして地面にめり込んでいるのがわかった。

改めてこの氷柱を見ると、不覚にも見とれてしまう。果那ノ海を覆っていた氷の壁もそうだが、これだけの規模、大きさや厚さがあるにもかかわらず、硝子製品と間違えてもおかしくないくらい透明度が高い。二人は多少気まずそうにおじよしさまの上を泳いで氷柱に近づいていく。遠くから見てもわかったのだから言うまでもなく巨大だ。それなのに氷柱の向こう側も透けて見える。向こう側にもおじよしさまの残骸があった。

と、航大の視線が氷柱の向こう側から内側、氷柱の中に見えたなにかに注がれる。

温度が低い果那ノ海。それをも超える冷風が体を覆ってきたような感覚。全身が鳥肌だった。

「お、おい。あれ」

声はうわずついている。口はわなわなと震えながらも右手の人差し指は氷柱の中を指し示す。沙月は航大が見ている場所に目をこらし

た。刹那、引き締めるような悲鳴を上げて両手で口元を覆う。

「す、澄滯！」

おじよしさまの残骸を蹴散らし、二人は走り出す。氷柱の根元に辿り着き、根っこによじ登って額をくつつけながら航大は氷柱を叩く。そして叫ぶ。

「おい、澄滯！澄滯！！」

その氷柱の中に、澄滯はいた。これは明らかにまわりの岩肌と違って、人工的に造られたものである。人の両手の形をした岩。その両手は外見とは正反対で、優しく水面から水をすくい取るように、柔らかに包むような形状になっている。そこに澄滯は横にうずくまっていた。ところどころ裂けたり汚れているものの、着ていた制服は残っていた。

「どうして、どうしてこんなところに」

「知るかよ、んなこと！」

航大は力の限り氷柱を叩いてひたすら澄滯、澄滯と叫ぶ。しかし当の澄滯はぴくりともせず、二人が見てきたように冬眠状態にあった。

眠る澄滯の顔は穏やかでもなく、苦しそうでもなく、ただただ無表情だった。氷柱の中だけあってか航大が表面を叩いたことによる震動が伝わり、ほんの僅かだけ澄滯の制服がゆらりと踊る。

「くそつ、なんで。なんでこんな」

「これじゃあ、澄滯がまるでおじよしさまだよ」

沙月は動揺を隠せず、航大が叩き続ける氷柱の表面をそつと触る。果那ノ海を覆う氷の壁よりも冷たく感じた。そしてその低温は、自分たちを拒絶しているのではと思ってしまうほどだ。

「澄滯が、あの昔話みたいな生け贄？おかしい、そんなのは絶対に……」

「なんじゃ、まったく騒がしいのう」

叩いても叩いても傷ひとつつくことはない。悔しきで航大は歯ぎしりし、一発より強く氷柱を叩いて項垂れる。こんなことがあったまるか。遠い遠い昔話のような、本当の人間が生け贄になってしまうようなことなどあったまるか、と。

そのとき、二人の後ろから声がかけられる。驚いて同時に後ろを振り向くと、若干の逆光で表情は窺えないが、聞いたことのある声だった。

「う、ウロコ様!？」

「海の守人だからやっぱり眠ってなかったか。なあ、おい。果那ノ海を覆ってる氷も、澄濤を閉じ込めてるこの氷柱も、全部海神様の仕業か？それともウロコ、お前の仕業か!？」

航大が獣のように吠え掛かって地面を蹴った。おじよしさまなど見てもおらず踏みつけて近づいていく。けれど沙月はある違和感に気づいて、慌てて航大を止めに行く。

「待って航大!」

「なんでだよ!」

「この人、本当にウロコ様なの?」

沙月の言葉に航大は眉をひそめながら改めて目の前にいる人物を見る。「どう見てもウロコだろうが」と言い返そうとしたが、まじまじと見てみると、航大にも疑問が生まれ始めた。

近づいたからこそわかった。顔立ち、そして毛色と膝まである長い髪の毛。鋭い目つきに、あの聞き慣れた声。けれど、服装がまるで違う。裾がボロボロになっている衣服を着崩した、なんとも神様とはいえない恰好。それがウロコ様だった。なのに二人の目の前にいる人物は、清らかな濃い青の着物を羽織っていて、内側の白と紫の着物もこれほどまでと言わんばかりに綺麗だ。なにより、額に金色の飾り物をしている。そして、首筋にまで水色のウロコが見える。

「ふむ、ウロコ。ウロコねえ。そう名乗るのは当然じゃな」

「まさか」

沙月は目を見開き、首を振りながら後退する。違和感確信に変わった。航大も意表を突かれた顔をして動けなくなっている。

「あんた、海神様、なのか」

「そうじゃ、小童よ。そして我が子孫たちよ。儂は海神。海を守り、海のすべてを司る神じゃ」

二人は、絶句だった。もう遙か昔を生きた海神が、目の前にこうし



ているのだから。

「な、冗談はよしてくれよ。だって海神様は」

「そうじゃな。とうに儂は死に、今ある御霊火としてお主らを見てきた」

「！」

「だがこういう事態になったのは必然。どうにもこうにも、避けられないもの」

どうにかしてウロコ様の茶番だと、そうであると言つてほしかった。けれど、それはかなわない。目の前にいるのは、やはり海神だった。

「ここまで辿り着いたこと、褒めてやろう。しかし、変えられぬものは変えられぬ。お主らの求めるものがその娘なら、このまま帰つてもらおう」

「そんな！ 私たちは……」

「冬眠からいち早く目覚めたところで、お主らは海の者に変わりはない。しかし、お主らの”おもい”は儂には届かない」

海神の声は、あの氷柱を触れたときのように冷たく、今日の前にいるのに遠く離れているようだった。彼もまた、二人を拒絶しているのか。

「ぎっけん！ 俺たちはなあ、みんなを早く冬眠から」

「二度も神に喋らせるな」

海神の目が一層細くなり、声音が強くなる。航大を刃物で突き刺すように言い放った。

そして海神がひとたび右腕をはらうと、たちまち二人の足下が揺れ、渦が形成される。

「無理は言わん。諦めろ」

「くそつ、なんでだよ！」

「やめて、やめてよお！」

二人の意思など蹴散らすように渦は二人を持ち上げていく。氷の天井の一部がずれて、穴が開いた。そこから投げ出すつもりだ。

悔しさ混じりに航大は海神を睨む。そんなものさえ届かぬぞと、そ

ういった顔で航大を見ている。その顔には、感情ひとつ読み取ること  
はできなかつた。

## 第四十七話 氷の狭間で

「あれ、もう二人は海の中に入っちゃった？」

モニターを必死に見つめ、内蔵されたGPSが指示したとおりのルートを通っているのか、目が離せなかった。そんな緊迫さを蹴飛ばしてしまふような、のんきな声が後ろから聞こえてきた。

「隆広、それに里実も」

一樹が振り向けば二人がゆったりとこちらに近づいてきていた。ダウンジャケットを羽織った隆広はにこやかに手を振る。里実は両手で抱えるサイズのバッグを持っていた。

「体を温めるために作ってきたの。生姜紅茶。二人も帰ってきたら冷えてるだろうし。もちろん、みんなのものもあるよ」

「気が利くな。ありがとう」

里実がテント前に置かれた長いすに座り、バッグからスチール製のコップを三つ取り出す。茉紀の分は別にコップを用意していた。これはもともと一樹たちが大学から持ってきたものだが、「ただ水ですすぐだけじゃだめだよ」と里実が洗ってくれていた。

水筒から紅茶とともに湯気と香りが溢れ出す。それぞれにコップを渡すと、待ってましたと言わんばかりに四人同時にひとくちつける。

「うん、おいしいね」

「ふう、あつたまるね」

徳島はおもわず笑みをこぼす。茉紀は癒やされるように笑い、二人もおいしいと言いつつも、やはりモニターから完全に目を離すことはできない。

「この、赤いのが航大と沙月がいる場所か」

「そう。今のところ順調だけど、もうちよつとで例の潮の流れにぶつかる」

後ろからのぞき込むように隆広が顔を出す。大生が領いて指でルートをなぞるように説明する。

「……あ、入ったよ」

「大丈夫だとは思いますが、頑張ってくださいよ……」

徳島が紅茶をすすりながら細い目をさらに細める。一樹たちも真剣そうにモニターを見つめ、ついに潮の流れを突破するまでは誰も口を開けなかった。

そして二人の居場所を示す赤い矢印は果那ノ海を目の前にして止まった。そのまま動きが見られない。

「機材の不具合か？」

「いや、今も正常なはず」

一樹の疑問に大生が答えた。すぐ横に置いてあるパソコンをチエックするが、機材の故障等ではない。まもなくして少しだけ動いたが、再び止まったままになってしまった。

「まさか、入れないのか？」

徳島は空のコップを置いて片手で顔を覆う。あくまで二人に持たせてるのは位置情報提供のみのデバイスであるため、直接こことやりとりはできない。そのもどかしさに一樹が頭をかいた。

すると耳鳴りのようで、けれど違う感覚に襲われる。そしてこれを、一樹は知っていた。

『昔、こうちゃんが見つけた洞窟の道を使って』

『!!』

一樹は飛び上がり、折りたたみ式椅子を後ろに倒した。

「一樹、どうした急に」

「聞こえ、たんだ。また」

「聞こえたって、まさか澄滯先輩の!?!」

はっとした表情で茉紀が一樹に問うと、ゆっくりと頷いた。

「昔、こうちゃんが見つけた洞窟の道を使って、って言った」

「こうちゃん……。澄滯ちゃんが航大くんのことを呼ぶあだ名」

「っ、動いたぞ」

大生がモニターに食いつく。一樹も見ると、二人が果那ノ海を回り込むように動いているのがわかった。そして次に赤い矢印が表示したのは、果那ノ海の中だった。ほどなくして二つ目の機材作動の通知が来た。

「なんとか、入れたみたいだね」

「よかったあ。ここまで来て入れなかつたらと思つたら……」

安心した様子で徳島が伸びをして、里実が安堵の息をはいていると他のみんなの様子が違うことに気づく。それはすぐに里実も理解した。

「一樹が聞いた声。巴日のとときと同じ、吉野川さんの声か」

いつもらしくない隆広の真剣な表情。腕を組んで見つめる先に一樹が椅子に座って俯いていた。同時に右手で頭を軽くおさえていた。

「二人が止まつたのは、やっぱり普通の道では果那ノ海に入れなかった。それを吉野川さんは、さっきの一樹みたいに語りかけて、違う道を示した。俺らには聞こえない、特殊な方法で」

「私らには聞こえなくて、でも一樹には聞こえる。つまりテレパシー？」

「そんな感じだろうけどね」

隆広は肩をすくめる。前にもこの澄滞の声についてふれたとき、隆広は真剣に話を進めた。それが皆には疑問に思えてならなかった。

「俺も、いやおそらく結論はそうなるだろう。この氷床問題と同じくらしいの不可解な点だから俺らも気にはなっていたが、なんだか妙にお前はこだわるよな、隆広」

この疑問を開封したのは大生だった。すると隆広は隠す風でもなく息をはき、哀しさを滲ましたような笑みを浮かべる。

「俺に限らず、こんなエスパーみたいなことがあつたら誰でも注目するでしょ。……でも、その理由みたいなのはひとつ心当たりがある」  
「え？」

隆広の顔からは、ついに笑みが消えた。

「おふねひきの日だよ。あのととき、巨大な渦がいくつも発生して、んで一樹はそれに飲まれた」

「え、それだけ？渦とはいわないけど、海に落ちた大人はいっぱいいたよ」

「その差だよ。俺の知ってる限りじゃ、一樹だけ渦に飲まれた。それを航大と洋斗が必死になって助けてくれた。航大は途中で離ればな

れになって、そのまま冬眠しちまったけど」

隆広は澄んだ空を見上げる。そこにはこれといったなにかはないけれど。けれど彼には見えた。過去の記憶が鮮明に映し出される。

「もともと、俺がモタモタしてたから、庇った一樹が波にさらわれて渦に入っちゃったんだよな」

映し出されたのは、目の前に迫る巨大な波。荒れた海はたまに見たことがあった。テレビでも、実際にも。

けれどそれを見ていたのは安全な場所からだ。船の上で、しかも自分を喰らうように迫り来る波に、隆広は怖くなって、腰が引けて、動けなかった。そして不意にブレる視界。同時に聞こえたのは一樹の声。けれどその声がした方向には、通り過ぎた波の後だけだった。

「隆広、それは」

それは違う、と一樹は言いたかった。その前に隆広が手を出して止める。ゆっくり首を振ると隆広は話を続けた。

「あのとき発生した渦は自然のものじゃない。信じられないけど、海神様の仕業と言ってもいいだろうな。海と発生した渦はそこで分類できて、その渦のひとつに一樹と洋斗と航大がいた。そしてもしかしたら、その渦に吉野川さんも飲み込まれていたのかもしれない」

神妙な面持ちで語る隆広の言葉を逃さないように皆が聞き入る。

「つまり、同じ渦に入った者同士は、それ以外には聞こえない声で意思疎通がとれるということか」

「そういうこと。初めて一樹が聞いたときも、そんな感じだっただろ？」

「ちゃんと俺の声に反応していたかはわからないけどね。それ以前に、俺はどうやって口に出さない声を出すかさえわからない」

「それに、もしこの考えが本当なら、洋斗にも同じことが言える」  
「！」

徳島を除く、この場にいた誰もが息をのむ。里実は手元にあるコップをより一層強く握った。

「ま、とりあえずは上がってきた航大たちに話を聞こう」

隆広が話を終えると、ちょうど二つ目の機材作動の通知がパソコン

に表示された。

「よし、これから一時間。二人がちゃんと上がってくるまで、とりあえず休憩だ」

安堵に満ちた声音で徳島がそう言うと、気を紛らわすように明るく努めて里実は持つてきたバッグから大きめの箱を取り出す。中には様々な具材で作られたサンドイッチが商品のよういきっちり並んでいる。

「お腹すいたでしょ？足りないかもしれないけど、お昼にしようよ。二人の分は別に分けてあるから」

サンドイッチを頬張り終わり、ゆったりとした時間が流れる。体の内側から温まる紅茶をひとくち付けると、一樹は空を眺める。

広がる夏の空。青々としたそれはどこまで行っても澄み切っていて、けれど視界に入る白い息が重なって、正常と異常が混ざり合う情景に目を細める。

そして現時点で自分にしか聞こえない澄滞の声について思考を巡らした。隆広が言っていたことが本当かどうかはわからない。けれど声は聞こえる。確かにはつきりと、これは幻聴ではないとわかる。原理はわからなくても、これだけは事実なのだ。

ふと、その思考がさらに深く、伸びるように脳内を巡る。

現在すべての海村が冬眠に入っている。しかし他の場所はどうなのか情報足らずで判断できないが、航大と沙月のように目を覚ました者もいる。二人とも巴日が地上で観測される日に現れた。不可解な現象、そして一樹が聞いた澄滞の声とともに。

他の住民はまだ眠っているのか、姿は見せない。逆に見せるほどでもない、わざわざ地上に上がらなくてもいいのだろう。

では、なぜ航大と沙月は目覚めたのか。もともと地球に訪れる寒冷から身を守るためではなかったのか。冬眠が始まってから五年。されど五年だ。着実に気候変化は牙を剥いているが、地上の人類が壊滅

的被害を受けているほどでもない。

なぜ、目覚めたのか。いや、なぜ目覚めさせたのかとも言える。そして澄滯はいまどういった状態にいるのか。もし隆広の考え通りなら、澄滯の声が聞こえるのは……。

ああ、やつぱりだめだ。なにもかもが憶測を超えない。一樹は頭を振って思考を止めた。紅茶の残りを飲み干して、ふうと息をつく。今はとりあえず二人を待つしかない。空のコップの底になにげなく視線を落とした。

『二人とも、そんなに慌てないで。落ち着いて』

ひゅつ、と喉の奥から言葉にもならない声が出た。コップが手から滑り落ち、氷床とぶつかる。

「一樹？」

里実は心配そうに顔を覗くが、誰もが彼の異変の意味を察していた。

「慌てないで？ 落ち着いて……？ 今、二人が接触している？」

「なんだと!？」

大生は目を大きく見開くと、すぐさまパソコンを確認した。徳島も同時に動き出し、現在のGPSの位置を果那ノ海内で見つける。

「ずいぶんと町の中心から離れてる。こんな場所にどうして」

大生と徳島が画面を睨み付けている間も、一樹は動けずにいた。椅子に腰掛け、やや前傾姿勢で膝に肘をのせていた。コップを持っていた手はいまだその形を残したまま。ただ一樹の目だけが、動揺によりゆれていた。

手を自身の心臓あたりにもっていく。鼓動が早い。なぜだろうか、急に呼吸が浅くなり始めたのだ。そして、

『だめ。いけないで』

「いけないで……？」

一樹が口にする言葉が出る度に驚き、戸惑い、けれど一樹を見続けるしかない。その中で大生はちらちらと一樹を見ながら彼の発した言葉、そして彼の様子を簡単にメモしていた。

胸に当てた手が服を強くつかんだ。鼓動がより一層強くなった。



いや、それだけじゃない。なにかが訴えかけてくる。なにかが伝わってくる。言葉に表そうとしても、それはなかなかかわない。一樹は押さえつけるように息を整えようとして、やっと感じるなにかがわかった気がした。

そのときであった。

『やめて!!』

「ぐっ?!」

頭部にハンマーを思いっきりぶつけられたような衝撃が走った。声が今までで一番大きく、そして彼女の感情をまもって一樹の頭に響く。まるで耳元で狂った機械のハウリングを聞かされているようで、まわりにいる皆の声が聞こえない。ただ澄滯の叫びが今もなお響いている。

激しい頭痛によって姿勢はそのまま前に向かい、氷床に倒れ込む。両手は反射的に頭を抱えるようにおさえる。それでなにも解決はないが。

「一樹!」

「おい、しっかりしろ」

茉紀と隆広が駆け寄るが、一樹はうめき声をあげたままその場を転がり続ける。とても「大丈夫だ」などとと言える状況ではない。

澄滯の叫び声が何度も何度も反芻する。

『やめて!こうちちゃんとさっちゃんに乱暴しないで!』

「なにが……起きてッ!」

一樹は脳内に飛び込んでくる澄滯の言葉の意味を理解しようとするが、どうにもかなわない。消える気配のない痛みをただただ耐えるだけだった。

そのとき、設置しているパソコンから甲高いアラート音が鳴り響く。

「と、徳島教授!」

「なっ!? 潮の流れが急激に変化している。それもこれは尋常じゃ……」

モニターに駆け寄る大生と徳島。その二人が同時に目を見開き、互

いを見やる。それまでデータ通りの動きをしていた潮の流れが一変していた。弱いほど青く、強いほど赤い。潮の流れの強さを表す色なのだが、今のモニターには赤が画面全体の約半分を覆い尽くしていた。そしてもう半分は、黒。これは測定不能、つまり赤より上ということである。

同時に、皆がいる氷床が少しずつ揺れ始める。機材たちが小刻みに揺れて小さくぶつかり、ハイテンポな狂騒曲を奏でる。氷床もそれに合わせるようにして軋む音をこの一帯に広げている。

「オイオイオイ、まさか足場が砕けるってことないだろうな?」

「そんなはずはない。でも、なんで」

右往左往しながら隆広は大生の左肩をつかんで揺らす。それをふりほどくようにして大生は否定するが、彼自身も予想外の出来事に動揺していた。

氷床の揺れが一層ひどくなってきたときに、澄濤の叫びがまたひとつ、一樹に届いた。これは叫び声ではなかった。いままで聞いたことのない、彼女の泣きそうな声。そして……。

『行かないで……一人にしないで』

『あやつらは帰すだけじゃ。ここには不要というだけ。そして、儂がいる。儂ら二人だけでいい』

「!!」

痛みの中で一樹は目を見開いた。今もなお響く澄濤の”感情”という名の叫びが支配する中、ここで初めて澄濤以外の人物の声が聞こえてきた。けっして衰えているわけでもない、むしろ若さがまだある。けれど一人称が儂、という珍しい組み合わせだ。

その声が聞こえたと同時に、氷床の揺れが頂点を迎えた。もうきしみの段階は超え、ついに砕けて割れた。その方向はまさに小さな氷山がある場所、目視の限りではその数百メートル手前。巨大な獣が口を開いたがごとく氷床がギザギザに割れて、海水が勢いよく吹き出してきた。そこから悲鳴を上げながら人が海水に押されて出てきた。勢いそのまま氷床に軽く叩きつけられながら転がってくる彼らは、航大と沙月だ。

「うお！なんであそこから」

「とりあえず助けなきゃ！」

驚きの連続で慌てふためく隆広を横目に里実は二人のもとへ駆けだす。すぐさま隆広は後を追う。

「待て、氷床の崩壊がどこまで広がるか」

「いや、違う」

大生の懸念はこれ以上に氷床の崩壊の拡大するかもしれない、というものだった。けれどそれは徳島が言ったとおり、違う形を見せた。ゆつくりと大生の横に立ちながら、しかし手はとつきにつかみ取ったビデオカメラを操作して、レンズを氷床の口に向けている。

再び氷床が軋みだす。それに動揺せずカメラをまわす徳島の視線を大生が追うと、先ほどまで開いていた氷床の口が動いていた。それは拡大するのでもなく、また新たに海水を吐き出すのでもなく、その口を閉じようと動いていたのだ。目の前で起こる超常現象の連続に、ただただ見ているしか大生にはできなかつた。

一方、航大と沙月が地上に出てきたとき、一樹は呼吸を忘れていた。体全体は震えて氷床の上で頭を抱えながら縮こまっていた。澄滯以外の誰か。そのわからない誰かが澄滯と一緒にいる。そこに航大と沙月が現れた。だから、あの言葉たちが出てきたのだろうか。

依然として脳は今自分に起きている状況を把握し、整理しようとする回転しているはずなのに、傍らで「ねえ、一樹」と手を握りながら心配してくれている茉紀への返答をどうしたらいいのかがわからない。考えることにすべてが費やされているのか？

けれど、澄滯から伝わってきたのであろう。感情が、なぜこれまでに悲しさを帯びているのか。航大と沙月が離れていってしまったことに対する悲しみの他にもうひとつ。それはその二人を引き離れた、名前の知らない誰か。その誰かが澄滯と一緒にいる。自らが「二人だけがいい」と言った。

海村が今どうなっているかなんてわからない。そもそも行ったことすらない。澄滯たちの人脈なんてそれこそだ。

それでも、いつも明るくて、天然で頑張り屋で、自分の大切な人  
ちやんと大切に作る澄澤をここまで悲しませる、悲痛の叫びをさせる  
ような人物がすぐ側にいる。

それが、許せなかった。だから、

「お前は、誰なんだ」

そう、一樹は問うた。

『貴様には関係ない。地上の民ごときが、喋りかけるな』

「……………」

自分が口にした言葉に対して、返答があつた。先ほど隆広たちと話  
していた仮説。それは正しかった。けれどそれを嬉しがることなど  
なかった。名前の知らない誰かの返答は、凍えるほど冷たい声音で、  
ナイフのように鋭く一樹に突き刺さつた。同時に一樹の魂を身体か  
ら押し出すような感覚があつた。それがただの思い過ごしか、はたま  
た海の中で起こる未知なる現象の新たななるピースなのか、それを考え  
る暇もなく一樹の意識はそこで途絶えた。

## 第四十八話 助けてあげたいけれど

「ありがとうございます」

汐帆はいつも通りはつらつとした声でお客に礼をする。いつもここで買い物をする高齢の女性にはこやかに「ありがとね」と言ってお店を出て行った。もう八十歳を超えているだろうに、なんのそのという足取りは高齢者とは思えないほど軽い。

夕日が充分に久里ノ上に注がれる。家々にぶつかると陰となり、硝子にぶつかると抜けて淡く広がっていく。通りの道が夕焼け色に染まり、店の入り口に置いてある金属製のかごが夕日を反射している。太陽を直視すると目が開けられないけれど、夕日は直視できる。まるで人が変わったように。

今日、果那ノ海に航大と沙月が向かった。詳しくは教えてもらっていないが、村全体は氷で覆われているらしい。そこへ入ることができないのも現時点で一箇所しかない。そして、また声が聞こえたようだ。澄濤の声が。

倒れた一樹は実家へ、航大と沙月は大生の家へ。後者の二人は地上へ出てきたときに体を軽く撲つた程度のようにだが、一樹は別のようだ。今のところ目を覚ましたという報告はない。自然と唇を噛んでいた。なにも手伝えない、助けられない悔しさだろうか。刹那、汐帆は首を振る。今の自分にはどうすることもできない。それに……。

両手でそつと、自身の腹部に当てる。つい最近、妊娠していることがわかった。ついに自分が母親になる時が来たのだ。そんな自分が無理をしてはいけない。今優先すべきは、遠くない未来に産まれてくるこの子なのだから。

と、自動ドアがスライドして取り付けてある鈴が鳴った。汐帆は顔を上げる。「いらつしやい……」

そこで言葉が止まった。途切れてしまった。まさしく動揺した、というのが本音だった。

店内に入ってきたのは、洋斗だった。古びたジャケット、生地に厚みがあるズボンといった出で立ちだ。入り口のすぐ側にあるかごを

つかみ、つかつかと歩き出す。汐帆にはなにも声をかけず、陳列された商品をぐるりと見て素早くかごに放り込んでいく。

間もなくしてレジにかごを置いた。洋斗は右ポケットから財布を取り出していた。なのに汐帆はまだかごの中の商品をとることすらしていない。それほどに目の前の人物の登場に驚いていた。

「会計、お願いします」

「え、ああ」

ようやく汐帆は我に返る。スキャンして、または打ち込んで、商品をレジ袋に入れていく。レジスターに合計金額が表示される。おおよそ計算してあったのか、洋斗は財布から千円札を三枚出していった。金額を打ち込んでお釣りを取り出す。すつと差しのばされた洋斗の左手にレシートとともに渡す、その直前で止まった。

「久しぶり、だね」

「ああ。今日は偶然いつも使ってるよ、休みだったから」

「そう……。ねえ、聞いてるよね。航大と沙月のこと」

「まあな」

洋斗は小さな声でぶつきらぼうに答える。

「巴日のことから、詳しく教えてくれたさ」

洋斗は手のひらを見せていた左手で天井を指さす。別に天井が喋ったわけではない。この店、もつとということこの店の店主である里実が洋斗に伝えているのだろう。

「驚いたな。あれだけ大事になつてたのに五年で目覚めるとは。しかも体は成長せずとは、ね」

驚いた、そう洋斗は言ったが表情や口ぶりからそのようには見えな。新聞でどこの誰かが事故に遭った、という小さい見出しを読んでいるようだった。視線は汐帆から遠く外れ、店の壁に貼ってある新商品のポスターに向けられている。きつと、それに興味を示していない。

「会って、あげないの？」

振り絞るように汐帆は言った。これは言葉にしているのだろうか。直前まで迷っていた。そして言った直後、言わなければよかったとい

う後悔が浮かんだ。

まるで汐帆と洋斗の間に時間のズレがあるようだった。少しの間があつてから視線を汐帆に戻した。

「俺が？この状態の俺が？」

汐帆の心にグサリと釘を打つような口調だった。汐帆は洋斗の言葉を飲み込むまで、息が止まっていた。深い吐息がでる。当人の洋斗は笑っていた。けれど、それは単なる笑いではなくて、自嘲気味だった。

「あの二人はどこまで知ってるの？」

「わからない。けど……」

「まあ、別に会ってあげてもいいけどさ」

洋斗は左であたまをかく。汐帆の言葉を遮るようにして口を開く。それもまた、本当に洋斗がそう思っている言葉には聞こえなかった。

「あいつらにとっては、俺と会わない方がいいと思うんだけどね」

そう言うとき洋斗は十分に膨らんだビニール袋を右手で雑につかむと、きびすを返す。とことごと出入口口に向かつていく。

「あ、洋斗」

「釣りはいらん。募金と思つていい」

「そうじゃなくて！」

追いかけるように汐帆はレジカウンターを出る。自動ドアが開いたところで洋斗の左肩をつかむ。

「ちゃんと、二人に会うなら、ちゃんと向き合つて。洋斗のいろんなことと、面と向かつて」

「うるせえな。まだお姉ちゃんぶってんのかよ」

洋斗が顔だけ振り返り、鋭い右目が刺さる。汐帆は言葉に詰まる。お姉ちゃんぶる。ああ、今ではこんなにも溝があるのか。汐帆は金槌で撃たれる感覚を味わった。

なにも言葉が出てこない。それでも洋斗の左手をとつてお釣りとレシートを握らせる。

洋斗はもうなにも言つてこない。視線を左手に落とすと、そのまま足を進める。夕日が差し込む方向とは逆の道を歩いていく。その背

中をただ見ているしかなかった。

彼らが小さい頃からずっと見てきた。その通り彼らのお姉さんとして。でも、今は、”お姉ちゃんぶる”。言い方がすべてを物語っていた。立場が、距離が、変わっていた。夕日に染まる洋斗の背中に違和感があった。まるで人が変わったような。

涙がにじんできて、とっさに顔を両手で押さえた。

「なんでだろう。私、助けてもらったのに、助けられないんだ」

彼女の嘆きは、むなしく夕暮れの空気に溶けていく。

ゆっくりと意識が覚醒するのがわかった。瞼を開けると見慣れた天井が一番に見えた。木目が複雑な模様となっている。部屋の電気が付いている。円形の蛍光灯が二重になっているもので、長らく変えてなかったからか内側の光量が落ちていく。

ふと、微弱な機械音が聞こえた。自分が今横になっている布団のすぐ側に誰かがいるのもわかった。確認しようとして首を動かすと茉紀の背中が見えた。そのときになって額になにかが乗っているのがわかった。

「あ、一樹！具合はどう？」

茉紀もまた一樹が目を覚ましたことに気づいた。手に持っていたカメラを置いて見下ろすように顔を覗かせる。

大丈夫だ、と体を動かそうとして、やっと自分の今の状態に気がついた。体全体が怠い。鉛を至るところにつけているように重く、頭がくらくらする。

「だめだって。凄い熱なんだから」

体を起こそうとした一樹をゆっくりと布団に戻す。濡れタオルを額に乗せ直した。

「ねえ、覚えてる？今日の午後、航大先輩と沙月先輩が果那ノ海に入っ



たの。そのときに一樹、また澄滯先輩の声が聞こえたって言った。でも頭痛が酷いみたいで。澄滯先輩もなにか大変なことに巻き込まれてるみたいな、そんな声を聞いてたんでしょ？それで二人が地上に出てきたときに、気絶しちゃったの」

染み渡るように一樹の記憶が蘇ってくる。それはまさしく今日の出来事だ。

「ああ、わかる。覚えてる。……で、二人は」

「大生の家だよ。いきなり氷が割れて二人が飛び出してきたんだよ。ビックリしちゃった。でも、二人は大した怪我してないみたい」

「そうか」

ひとつひとつ言葉を声に出すだけで疲れる。それほどまでにこの体は弱っているということだ。その原因は、やはりあれだろうか。

『貴様には関係ない。地上の民ごときに、喋りかけるな』

あの声の主が何らかに関わっているのは間違いない。声の主についてはわからない。けれどあの声は、澄滯のすぐ近くにいたはずだ。澄滯自身だつて、二人と会っていたような様子だった。それについて一樹が聞いた澄滯と誰かの声についてをすりあわせれば、またなにかわかるはずだ。

「はやく、二人と……。吉野川さんに、なにがあつたかを」

「だから、一樹は高熱が引くまで休んで！それにもう夜だし」

目線を茉紀から、近くにある目覚まし時計に移す。午後九時を回っていた。

「茉紀は、帰らなくていいの？」

「うん……。パパ、今は海外に出てるから誰もいないんだ」

茉紀が少し寂しそうにするのを見て、一樹は思い出す。

茉紀の両親は離婚していた。父親がカメラマンで且つ国内外問わず仕事をしている。そのため家を空けることが多かった。それが夫婦のすれ違いを生んでいった、そう茉紀は考えていた。

「でも、一樹が目を覚ましたから帰るよ。安心したし」

「……安心？」

「そりゃ、今にも死にそうなくらいもがき苦しんで気絶しちゃったん

だから、もう心配するに決まってるじゃん」

熱のせいかもしれないが、一樹の能天気な反応に茉紀はムツとした顔をする。でもすぐに破顔して、また「もう起きたから、安心できたんだよ」と言う。

一樹は、あの時は自分にしか聞こえてこない声を聞き取るだけで精一杯でまわりが見えていなかった。見る余裕も今回ばかりはなかった。

みんなには迷惑をかけてしまった。

「ごめん」

「ううん、謝らないで。そうだ、一樹ママに報告しなきゃ」

茉紀は立ち上がる。仰向けの一樹の視界から茉紀が消える。

一樹はぼうつとする頭の中でも、無理矢理にでも脳を働かせようとする。あの声の主は誰なのか。これは、おそらく、以前に航大たちから聞いたことがあるウロコ様なのかもしれない。そうならばある程度納得できる。けれど、そうなると思った口調とウロコ様の人物像と繋がらない。いや、それは普段のウロコ様を彼らから聞いたただけであって……。

「ねえ、一樹」

ふと、顔を少し移動させると部屋の入り口に茉紀がいた。壁に寄りかかってこちらを見ている。その顔は、普段からは見られない、まるで別人のような微笑。

「一樹にとってさ、海の人たちはどんな存在？」

急に茉紀が問いかけてきた。こんな状態ですぐに答えは返せなかったが、なぜだか脳がピリピリとした感覚に襲われる。脳が記憶を遡っていく。

『みんな……海の人たちは、大切？』

ああ、そういえば、

「それ、五年前にも似たようなこと言ってたよな」

「そうだった。よく覚えてるね、凄い」

茉紀は両手で小さく拍手しているが、これが演技だとすぐにわかった。

「なんで、そんなことを？」

「ん、なんとなく」

かしげる茉紀を見て、一旦天井に視線を移す。五年前に言われたことを瞬間的に思い出したのは、確かに自分でも凄いとと思った。けれどそれよりも、どういう風に答えただろうか。……ああ、大切な仲間だと答えたんだ。それで？

『その大切って、5人、それか果那ノ海全員が大切？それとも、誰かだけが大切？』

こう、また問いかけてきたのだ。これには動揺して、うまく答えられなかったはずだ。一樹は、澄滯への気持ちを見透かされていたのかと動揺して、焦って、茉紀は何を考えているのかって余計に動揺して。

今は、いや今でも変わっていない。彼らのように。

「俺は、俺にとっては、大切な仲間だ」

変わらない答え。自分の心に正しく沿った回答だ。視線を茉紀に戻す。その表情は、なんだか困ったようだった。

「変わらないね」

「んだよ、結局覚えてんのかよ」

苦笑いが零れた。けれど茉紀の方は徐々に真面目な顔に変わっていく。

「じゃあ、一樹の中では、澄滯先輩が一番の大切？それとも、みんな平等に大切？」

やっぱり、見透かされているのだと、そう一樹は確信へと至った。体は怠く、今こうして喋っているのも割と無理をしている。思考を巡らすのは余計に、だ。

それでも、俺は脳内で、心の中でのみ置いておくのはもう止めようと思った。だから、口にしたんだ。

「そう、吉野川さんが一番の大切、なんだ。俺の中で」

しん、と静けさが漂う。目覚まし時計の秒針だけがチクタクと働く。夜風もなく、鳥の声もない。一階で母が見ているテレビの音もほぼないに等しい。

だから、茉紀の少し震える呼吸がはっきりと聞こえたんだ。

「そう。うん、なら一層頑張らないとね。果那ノ海から、助けてあげな  
きゃ」

そう言つて茉紀は今度こそ一樹の母親を呼びに行つた。階段を降りていく音がリズムカルに聞こえてくる。

改めて天井を見る。随分と違ふところで頑張つてしまった。眠気よりも怠さが増した。どんとより重い鉛を乗せられたような頭にふとなにかがよぎつた。それは言うならば、後悔なのかもしれない。茉紀の前で、澄滯が一番大切であると言葉にしたことに対する、後悔だ。

『ねえ、誰か、聞こえる?..』

冷たい、冷たい海の中で声は響く。

『..』は、..?..』

その声に反応する者は、誰もいない。

## 第四十九話 助言

朝日がゆつくり顔を撫でてくる。心地よい目覚めとともにひとつ、深い呼吸をする。自室の天井をぼうつと見ていると、誰かが階段を上ってくる音が聞こえる。

「どう、調子は」

一樹の母はお盆を持って部屋に入ってくる。適度に温められたスपोर्टドリンクと小ぶりな鍋で作ったおかゆをお盆に乗せたまま一樹の枕近くに置く。

「うん、もうなんともない」

起き上がると軽く腕を伸ばした。一樹の母は手をそつと一樹の額にあてる。

「そうだね、熱もないみたい。なんだったんだらうね」

「さ、さあ……」

安堵の表情を見せる母の前で、一樹は曖昧に返すことしかできない。

すつきりとした脳内ではすぐに思い起こすことができた、昨日の出来事。航大と沙月が海に潜り、無事に観測装置を置くことができた。そして彼らは結果的に澄濤に出会うことができた、のだらう。同時に澄濤以外にも一人、名前も知らない誰かがいたのだ。その人物は確かに一樹に向けて話しかけてきた。といつても、それは一方的な警告のようだった。

言葉から、いや言葉じゃなくても一樹の脳内にかんがんと響き渡る彼女の叫び。感情という名の叫びだ。それはあまりにも悲しくて、辛い。

いつの間にか一樹の右手は自身の胸のあたりでぎゅつと衣服を握りしめていた。その様子をあえ深掘りせず一樹の母は作ってきたおかゆを勧める。

「食欲はある？」

「うん、おなかすいちやつたな」

小皿におかゆを移し、容器に入った塩を振りかけた。スプーンです

くつて口に運ぶ。広がる味は、とても懐かしかった。

「そういえば、茉紀は？」

「一樹が目を覚ましたって降りてきて、そのまま帰っちゃった。久しぶりに泊まっていてもよかったのにね」

母の言葉で一樹はスプーンを持つ手を止めた。脳をかすめる昨日の記憶。

『そう。うん、なら一層頑張らないとね。果那ノ海から、助けてあげなきゃ』

そう言つて一階に降りていった。彼女がいることが一樹の思考を支えていたのだろうか、その後はあまり覚えてない。でも心に拭えないなにか。あの感情が残つて、今も考えると脳を刺激されるようで、なんとももどかしい。

「一樹、大丈夫？ やっぱりまだ寝てた方が」

「あ、もう平気だよ。食欲もばっちりあるし」

手を振り、一樹はもくもくとおかゆを食べていった。

食べ終えて皿を置くとさつそく口が開く。

「ねえ、大生たちはどうしてるか知ってる？ 今日も観測場所にいるとか何とか、聞いてない？」

「ううん、なんとも。一樹にはゆっくり休むようには言われたけど……。つてあんたまさか」

「昨日俺にあったことを、みんなに共有しないと。それに、航大たちになにがあったのかも知りたい。それをふまえて今後どうしていくかちゃんと検討しないと」

まくしたてるように喋り続ける一樹を見て、一樹の母は溜息をこぼす。

「今日はゆっくり休めばいいのに」

「その一日が惜しいんだ」

「……なら、気をつけてね」

「うん」

「なんだか無理してでも頑張るって、やっぱりお父さん似ね。あ、なら今日お父さん泊まり込みだから、お弁当はお母さんがやつとくから」

「ごめん、ありがとう」

そうして一樹は身支度をしたのち、家を出た。

一樹の父はこの町の奥にある山の発電所で働いてる。朝早く家を出て、夜遅くに帰ってくる。もともと人数は多くはなかったが現在も問題視される人口減少で社員数も減っている。以前もあつたが、泊まり込みでの勤務は年々増えている。そのためお弁当をつくって持って行っているのだ。一樹が中学生、高校生時代は彼の役目だったが、大学に入ってから寮生活のため当然母が務めていた。帰省中は一樹がやろうと言っていたのだが、これは母にただただ感謝とともに謝罪の念しかない。

一樹はまず観測場所へ向かった。大生の家よりこちらの方が若干遠いが、昨日のことがあつたのなら、すぐさまこちらで作業をしているに違いないと思つたからだ。

駆け足気味で道路沿いの道を進み、視界が開ける。全面に広がる氷床にぽつりとテントがひとつ。まわりに機材が置かれているのが見える。けれど……。

「あれ？」

そこに人影は一人のみ。その一人は、しかし大生でも徳島でもないようだった。テントにも、観測機械にも近づかずただそれらを眺めているだけのように見える。

海岸に沿って続く塀が途切れ、顔を出す階段を降りる。テントに近づくとつれて、その人物が誰なのかがわかった。

ただ、なぜここにいるのかがわからなかった。

「なに、してるんだ？」

「ん、ああ。ちよつとね」

ゆつくりとこちらに振り返つたのは、洋斗だった。厚手のズボンにブルゾンを身にまとっている。ぼさぼさの髪から見える瞳には、海の人間とは思えない、曇りきつたものを感じた。

「どうせここにいるんだろうと思つてただけど、誰もいなくてね。でも、よかつた」

「なにがだ」

自分自身でも不思議だった。声が自然と一步距離を置くようで、固くなっている。

「一樹、お前に会っておきたかったんだ」

「俺に？」

なぜだろう、と考える間もなく洋斗は右ポケットから何かを取り出した。手のひらほどの物は薄く晴れている空の光さえも逃さず反射させている。氷だった。菱形に近い形をしている。だが、それはただの氷じゃない。

「これって」

「そう、この氷床からとったもんだ」

そう言っただけで洋斗は笑った。その笑い方はとても自然な笑みではなくて、無理矢理口角を上げた、いびつな笑い方。

「なんで、それを。何のために持つてるんだ？」

「ん？これはな、もらったんだよ」

一樹の問いに対して、洋斗はもったいぶるようにゆったりと答える。菱形の氷を両手の中で転がしながら視線を一樹から空、広がる氷床へとところどころ移す。

話が見えてこなかった。一樹の中でくすぶるような苛立ちが生まれていた。

「そうなんだな。で、洋斗。お前はなにがしたいんだ。俺に用があるんだろ？それはなんだ」

「まあまあ、そう慌てんなよ」

ヘラヘラとする洋斗に一樹はもどかしさで体がかゆくなってくる。なんのために俺を探していた？その持っている氷とどう関係がある？

洋斗は急に真顔になり、こう言った。

「だめ。いかないで。やめて。乱暴しないで」

「！」

喉がひゅつと鳴る。一瞬呼吸ができなくなった。

「その反応からすると、やっぱり聞こえてたんだな」  
「えっ」



「俺もな、聞いていたよ。全部じゃないけどさ」

洋斗の視線は最終的に持っている氷に注がれていた。

「これは、実を言おうと氷じゃないんだ」

「……？」

洋斗にも聞こえていた。あの声が、澄濤の声だ。それだけで一樹の脳はパンク寸前なのに、洋斗はさらに不可解なことを発する。

「正確に言えば、これはただの氷とは違う氷じゃなく、氷に見えて全く別の物なんだよ」

余計にわからない。今日の前に洋斗が握るのは氷。氷にしか見えない。それに二人が立っている場所も海が凍ってできた氷床だ。凍ったのだ。そこから削り出した——貰ったと言っていたので方法は定かではないが——ものが氷ではないのなら、いったい……。

「いわば、感情の結晶体」

「感情の……？」

そう言いかけて、一樹ははつと思ひ出す。昨日、自分が感じ取ったもの。それはなんだったか。聞こえてきた澄濤ともう一人の謎の人物の声だけではなかったはずだ。それはそう、澄濤の悲壮の波。

「誰かの声、感情を伝達できるような代物なんだとき。俺にはさっぱりだけど、あいつが言うんだから間違いはないはずだ。その声と聞く側との距離が離れていると、声や感情の強さがないと響かないらしい」

「……待ってくれ」

ただ洋斗の説明を聞いているだけでどうにかかなりそうだった。洋斗が手に持っているのも、今立っている場所も、そんな次元を超えた神秘たる物なのか。だが、それではおかしい。

混乱する中、やつとのことを手を出して洋斗を止める。

「だとしたら、昨日、俺以外にも大生たちがいた。それもこの氷床も同じものなら、彼らにも聞こえているはずだ」

「ふん、そう考えるのは当然だよな」

洋斗は雑に頷くと話を続ける。

「だが違う。これはこの氷床からガシガシ削り出したものではない。

声や感情を伝達する力だけを結晶化させたもの。そしてこの氷床はその力が海にまんべんなく浸透し、氷のようになっていて。つまりは力だけが固まった純粋な物か、力が海水と混ざりあい限りなく薄くなった物か、そういう違いだ」

少しずつ、洋斗の言うことが理解できてきた。理屈はなんとなくわかった。それでも、根本的な問題が残る。

「じゃあ、俺はどうなんだ？俺はそんなもの持ってないし、吉野川さんの声が聞こえたのはこの氷床にいたときだけだぞ」

洋斗が言うには、つまりこの氷床にいても誰もが、今のところ二人分だけだが、それを聞くことはできない。そうであるのなら大生たちが聞こえないのはわかった。だが一樹についての説明にはならない。「なあ、一樹。海がこんななんになっちまったきつかけは、わかるか？」唐突に切り出した洋斗の問いに、少々一樹は間抜けした。洋斗はその氷をポケットにしまうと、こちらに目を向ける。こんな海が凍り付くようなことになったのは、誰もが知っている。当事者ならなおさらだ。

「おふねひき」

「そう。それで、そのおふねひは伝統に倣って行なわれた。だが予期せぬ出来事が起きた。それはなんだったか」

「謎の渦が多数発生した」

「そうだ。で、だ。お前は渦が発生したとき、どうなった」

それは……。ごくり、と唾を飲み込む。今でも思い出すだけで息苦しくなってしまう。脳内では限りなく滅多にないイレギュラーによるものだと判断しているようで、海自体にトラウマを生み出さないのは幸いだ。だが、それが何か関係しているのか？

「海に落ちて、運悪く渦に飲まれた。けど、気を失ってたから後から聞いて知ったけど、航大と洋斗に助けてもらったって」

「そう、正解だ。その渦が、ポイントだ」

首をかしげていると洋斗は一樹を指さした。正確には、一樹の腹部当りを指さした。

「お前は地上の人だ。当然エナはない。だから海の中で呼吸はできな

い。だから必然的にどうなるか。海水を飲み込んだ」

「ま、まあ。そうだな」

「その飲み込んだ海水、それがただの海水でなかったとしたら？」  
「なっ！」

ここで一樹は大まかであるが、この不思議な現象について理解に至った気がした。落雷を受けたように全身がびりびりとする。

「あの渦はただ偶然起きたものではない。海神が発生させたものだ」  
「う、海神様が」

「その海神が発生させた渦は意思を持って海に落ちた俺ら海の人たちを引きずり落とそうとした。それは、この声や感情を伝達させる力のもとももある、海神の持つ力ということだ」

このとき、一樹は昨日のことが脳裏に浮かんだ。渦に巻き込まれたか否か。それについて隆広が言及していた。あれは間違いではなかったと言うことだ。

「海神の力そのものである海水を飲み込んだお前は、まさに俺の持つ結晶と同じようなものになってしまった。それが答えだ」

澄濤の声が聞こえる謎。それが解明された。それはそれでよかった。だが、別の問題が浮き上がる。

「どうして、洋斗が知っているんだ？」

「それは今すぐ大生の家に向かえばわかる」

そういうと洋斗はきびすを返して道路沿いの道とは違う方向へ歩き始める。

「おい、どこいくんだよ」

「なに、散歩だよ」

振り返らず、雑に手を振りながら洋斗はどんどん一樹との距離を広げる。

彼については未だわからない。彼が誰からこんな知識を、そしてあんな氷……ではなく摩訶不思議な結晶を手に入れたのか。そして何より、なぜ一樹たちと距離をおくのか。

今はただ、洋斗が残した助言に従って、大生の家に向かって走り出した。

## 第五十話 意外な人物

大生は手に持つペンをボードから離すと、一息つく。彼の自宅に事前に持ち込んでいた小型のホワイトボードに様々なメモや地図、それらをまとめた箇条書きがいくつも並んでいた。

「海神様、か」

「本当にそう言ったんだろ？」

午前中にもかかわらず、昨日の一連の出来事を体験し、その目で見えていた者たち全員が大生の家に集まっていた。一樹を除いて。

「そうだ、ハッキリとな」

隆広の問いに航大が答えた。その声と少し歪ませた口元からは苛立ちが窺える。

「遙か昔に死んだんだよね？本当に海神様なの」

「今だってあのウロコの馬鹿げた遊びだと思いたい……が、やっぱり違う」

「うん。言葉じゃ伝わりにくいんだけど、服装はもちろん威圧というか、全然違う感じがしたの」

誰もがどうしても疑問に思ってしまうことを里実が言うが、海に潜り、直に見た二人は同じように頷く。

「あの小冰山……。歴代のおじよしまが流れ着く場所に巨大な氷柱があつて、その頂上だった。そしてその氷柱の中に」

そう言葉を句切つて大生は貼り付けた地図に目を向けた。果那ノ海全体の地図に氷柱があつただろう場所にばつ印をうつてある。

「吉野川がいる、か」

室内に重い空気が漂う。皆が黙り、俯き、ボードにある文字を睨むしかなかった。

航大と沙月が地上に出てきたとき、海が凍つてできたはずの氷床が一部ずれた。それは偶然起きた地震によるものではなく、これは海神様によるものだった。これは地上で徳島がとっさに録画したビデオと二人が地上に出されるときに見た光景と合致している。

「果那ノ海の入出口はたったひとつ。その町の中で唯一活動してい

るのはその海神様だけ。その海神様は海の水も、氷床も思うがままに操ることができる。これは、参ったね」

徳島が腕を組みながら顔を歪ませる。目の前に置かれたコーヒーにすら手を伸ばさない。

「一度こんなことになってしまつては、次以降、果那ノ海に入れることができるのか……」

航大と沙月がわざわざ荒い海流を越えて果那ノ海へ来た理由を海神様は知っている。なら、再び来るようならすぐにまた追い出されるだろう。それどころか、氷床さえも動かせるなら、あの場所にいることも危険とも言える。

「蔵本海遙くんだけはわからないな。航大くんたちのように早期の段階で目覚めるのだとしても、町のどこかにいるはずと見るのが妥当なのだがね。そして、吉野川澄滯さん。彼女については、一樹からの言葉も聞いておきたい」

全ての始まりである巴日から昨日の二回、澄滯の声を一樹は聞いている。特に昨日なにを聞いたのかを知りたかった。ただ……。

「突破口になるかは、わかりませんけどね」

大生はボードにペンをひつつける。マグネット式のそれがかちんと音がする。それがやけにくつきり聞こえるほど、部屋が静かになっていた。

再び重い静寂につつまれていたとき、玄関が少し荒く開かれる音がした。そして閉まるとすぐに真っ直ぐに伸びる廊下を早歩きで進んでくる足音がひとり。まもなく皆がいた襖の開いた部屋に顔を出したのは一樹だった。

「一樹、お前大丈夫なのか!？」

航大が立ち上がって声をかけるが、一樹は曖昧に頷いて部屋の中をせわしなく見まわしている。

「どう、したの?」

「え、いや、その……今日誰か来てるか?」

昨日はうづくまって気絶したというのに、今日はなんともなかったように現れた。それだけで皆が驚くには充分だが、彼の曖昧な質問で

すぐに不安が込み上げてくる。

「お前、まだやつぱり休んでいた方がいいんじゃないか？」

「きつとまだ昨日のが抜けきってなくて」

「いやいや、違うって」

隆広と里実を手で制して首を振る。そして改めてここに来た理由を言葉にする。

「朝みんなどうしてるのかなって、んで大生と教授は観測所にいるのかと思っただけ行ったら、洋斗がいたんだ」

「えっ」

里実が真っ先に反応した目をまん丸にして一樹を見る。

「そしたら……」

一樹が洋斗が話していた一連のことを伝えた。言葉や感情を伝達させる菱形の氷の塊。洋斗曰く”感情の結晶体”だ。これはなんなのか、そしてなぜ自分が澄滯の声を聞いたのか、加えて昨日聞いた澄滯とそれ以外の誰かの言葉、その人物とは一回だけが会話ができたということ。そして結晶体などあれこれ洋斗に入れ知恵した人物はここに向かったと言われたこと。

一通り話すと、皆の注目はやはり結晶体に注がれる。

「そんなもので、海神の力を宿せるものなのか」

「洋斗も、やつぱり私たちが気にしてるのかな……」

そんな中、沙月はひとり一樹が探していた人物を口にした。

「たぶん、洋斗が言っていたのはウロコ様、だよな」

「ウロコ様……」

それは五年前、澄滯も海遥もちゃんといた当時に彼らから話は聞いていた。海神様が死んだ後、海に溶け込んでいったウロコの一部。それでも海神様であったことに間違いはないわけで、それぞれある海村に各々海神様とおなじ面相で海村を守っていると。そのひとりが果那ノ海にいて、それが地上に出てきて洋斗に接触した。何故だ？

「ほう、洋斗め、案外あっさりと言ったのか」

一樹のすぐ横から聞こえてきたのは、聞き覚えのある声。それも……。

ぱつと振り向けばそこにいたのは一人の男性。長い銀髪は座った状態だと床に広がるほどあり、赤い菱形麻呂眉にキリツとした目つきが特徴的。そう、ウロコ様である。のんきに皆とちやぶ台を囲むようにあぐらをかいていた。

「うおおお!?!」

「きやああ!?!」

一樹のすぐ近くにいた隆広と茉紀は飛び上がった。それぞれ航大と一樹を半ば強引に引っぱって縦のようにして隠れる。

「いつからいたんだよウロコ!」

航大も充分驚いていて目をひんむいていた。ウロコ様に指を向けると、どこから持ってきたのか、のりせんべえを袋から取り出してひとくち。それからさし指を払うように手を振る。

「神を指さすでない、呪うぞ。……という冗談をしにきたわけではない。洋斗は放つといて、面子は揃うたわけじゃない」

航大の問いは完全に無視され、のそりと立ち上がってホワイトボードのところまで来た。

「さて、お主らが今頭を抱えている問題についてじゃが……」

「てめえ、質問に答え」

「あなた、は」

再度、やや語気強めに航大が指を指して喋るのを遮るように一樹が立ち上がった。ウロコ様はやはり航大にはめもくれず、かわりに一樹をじつと見た。一樹の声は震えながらも、そこには確かな小さい猜疑心が混ざっていた。

「本当に、ウロコ様なんですよね」

「そうじゃ。ハッ、お主がそう勘ぐるのは致し方ないよ。里浦一樹」

鋭い目つきがより鋭くなった。だがそこに敵意は感じられなかった。同時に名前を教えたわけでもないのに知っていたことに驚き、言葉の続きがでなくなった。

「儂はおふねひき以降ずっとこの地上にいた。時々洋斗の家に入ってはみたがすぐに追い出されるのが常だったかな」

「……！そのときに洋斗に話したのか」

航大の問いに今度はようやく反応し、肯定の意で首を縦に振る。

「儂はウロコ。航大と沙月、お主らなら耳にたこができるほど聞いただろうが、儂は海神様のウロコじゃ。元々海神様の一部だった。だが一部でもあつたからこそわかるのじゃ。……あれは、お主らが危惧しているのは本物の海神そのものではない。いや、海神様ではあるがむしろ、儂と同じ海神様の一部じゃな」

ウロコ様の言葉に、皆が驚き、言葉が出なかった。というよりも、混乱に近かった。

「まずは色々話そう。前にもやったような昔話も挟んでな。そしてお主らに儂の作戦を聞いてもらおう。無論、参加前提のな」

悪巧みをするようにウロコ様の口角があがった。

「作戦って」

沙月がウロコ様をまじまじと見る。ウロコ様は今から答えてしんぜようとばかりに一度目を閉じる。

「儂もこの状況にはどうしても見過ごせないのじゃ。たとえ海神様の意向であろうとも。こんな町も水面も氷付けはここ果那ノ海だけじゃぞ」

ウロコ様は、そして鋭い目を開いてこう言った。

「海神様と名乗る信念の一部が、果那ノ海を占領している。それを根底から崩してやろうというものじゃ」